孟子

梁恵王上

孟子、見、梁、恵王。

王、曰。

「叟、不、遠、千里、而、来。

亦、将、有、以、利、吾国、乎?」

孟子、対、曰。

「王。何、必、曰、利?

亦、有、仁義、而已、矣。

王、曰。『何、以、利、吾国?』。

大夫、曰。『何、以、利、吾家?』。

士、庶人、曰。『何、以、利、吾身?』。

上、下、交、征、利、而、国、危、矣。

万乗之国、弑、其君、者、必、千乗之家。

千乗之国、弑、其君、者、必、百乗之家。

万、取、千、焉、千、取、百、焉、不、為、不、多、矣。

苟、為、後、義、而、先、利、不、奪、不、饜。

未、有、仁、而、遺、其親、者、也。

未、有、義、而、後、其君、者、也。

王、亦、曰、仁義、而已、矣。

何、必、曰、利?」

孟子 先生は梁という国の恵王に会った。

恵王が言った。

「孟子 先生は、千里を遠いとしないで、来てくれました。
私、恵王の国に利益をもたらす知恵が孟子 先生には有るのですね？」

孟子 先生は答えて言った。

「王が、なぜ利益について言う必要が有りますか？
『仁義』、『思いやりと、正義』だけが有るべきです。
王は言います。『どうしたら自分の国に利益をもたらせるのか？』と。
上級の役人は言います。『どうしたら自分の家に利益をもたらせるのか？』
と。
下級の役人と、庶民は言います。『どうしたら自分の肉体に利益をもたらせ
るのか？』と。
上位者と下位者がいりまじって利益を奪い取れば、国に危機を招(まね)いてしまい
ます。
戦車が一万台ある大国で、自分の上司である君主を殺す者は必ず、戦車が千
台ある有力な家の者なのです。
戦車が千台ある大国で、自分の上司である君主を殺す者は必ず、戦車が百台
ある有力な家の者なのです。
（給料として全体の）一万のうち千を取得しているのは、（給料として全体の）
千のうち百を取得しているのは、多く取得していると見なせます。

しかし、仮に、正義を後回しにして、利益を優先してしまえば、飽きるまで奪う事でしょう。
『仁者』、『思いやり深い知者』で、自分の親を捨てる者は未だいません。
『義人』、『正しい人』で、自分の上司である君主の事を後回しにする者は未だいません。
恵王もまた『仁義』、『思いやりと、正義』だけを口(くち)にしてください。
なぜ利益について言う必要が有りますか？」

孟子、見(あう)、梁、恵王。

王、立、於、沼、上、顧、「鴻雁」、「麋鹿」、曰。「賢者、亦、楽、此、乎？」

孟子、対(こたえる)、曰。
「賢者、而、後、楽、此。
不、賢者、雖(いえども)、有、此、不、楽、也。
『詩』、云。
『経始、霊台、経、之(これ)、営、之(これ)、庶民、攻、之(これ)、不、日、成、之(これ)。
経始、勿(なかれ)、亟(はやい)。庶民、子、来。
王、在、霊囿、麀(メジカ)、鹿、攸(ゆったりと)、伏。
麀(メジカ)、鹿、濯濯。

白鳥、鶴鶴。
王、在、霊沼、於(ああっ)、物(みちている)、魚、躍』。
文王、以、民、力、為(つくる)、台、為(つくる)、沼。
而、民、歓楽、之(これ)。
謂、其(その)台、曰、霊台。
謂、其(その)沼、曰、霊沼。
楽、其(その)、有、麋鹿、魚、鱉(すっぽん)。
古之人、与(と)、民、偕(ともに)、楽。故、能、楽、也。
『湯誓』、曰。
『時(げんざいの)、日、害(↓曷(いつ))、喪(ほろびる)?（「孟子」では「害」だが「書経」の「湯
誓」では「曷」だそうです。）
予、及(と)、女(なんじ)、偕(ともに)、亡(ほろびる)』。
民、欲、与(と)、之(これ)、偕(ともに)、亡(ほろびる)、雖(いえども)、有、台、池、鳥獣、豈(どうして)、能、独、楽、
哉?」

孟子 先生は梁の恵王に会った。
恵王が池の上に立って大小の雁(ガン)と大小の鹿を顧(かえり)みて言った。「賢者もまた、
このような(景色と動植物を見聞きする)事を楽しみますか?」
孟子 先生は答えて言った。
「賢者に成った後で、このような事を楽しみます。
賢者ではなければ、このような事が有っても、楽しめません。

『詩経』で言われています。

『(周王朝の文王が)霊台という天文台兼公園の土地を測量させて工事に着手させ始めて、工事をさせていると、庶民達は協力して何日間かで完成させた。

(文王は、)工事を速くする事なかれ、と言っていたが、庶民達は、(文王の)子であるかのように集まって来てくれた。

文王が霊囿という公園にいると、雌雄の鹿がゆったりと伏せた。

雌雄の鹿は濯濯と艶艶(つやつや)と肥えていた。

白鳥も鶴鶴と白く艶艶(つやつや)と肥えていた。

文王が霊沼という池の公園にいると、ああっ、池に満ちている魚が活発に動いた』と。

文王は、庶民達の協力によって、天文台兼公園を作りましたし、池の公園を作りました。

そして、庶民達も、これらを喜び楽しむ事ができました。

その天文台兼公園を『霊台』と言います。

その池の公園を『霊沼』と言います。

それらに、大小の鹿、魚、鱉(すっぽん)がいるのを庶民達は楽しむ事ができました。

文王などの古代人の権力者達は庶民と共に楽しみました。そのため、(本当に)楽しむ事ができました。

『書経』の『湯誓』で言われています。

『今の太陽(である夏王朝の桀という暴君)は、いつ滅びるのか？

滅ぼせるならば、私は、お前(、夏王朝の桀という暴君)と共に滅びてもよい』と。

庶民が最高権力者と共に滅びてもよいと欲したならば、天文台や池の公園や鳥獣が有っても、どうして最高権力者は独りだけで(本当に心から)楽しむ事ができるだろうか？　いいえ！」

梁、恵王、曰。
「寡人、之(の)、於、国、也、尽、心、焉、耳(のみ)、矣。
河内、凶、則(すなわち)、移、其(その)民、於、河東、移、其粟(そのこくもつ)、於、河内。
河東、凶、亦、然。
察、隣国之政、無(ない)、如(のよう)、寡人之用心、者(もの)。
隣国之民、不、加、少。
寡人之民、不、加、多。
何、也？」

孟子、対(こたえる)、曰。
「王、好、戦、請、以、戦、喩。
『填然』、鼓(たいこをうつ)、之(これ)。
兵(ぶき)、刃、既、接。
棄、甲、曳、兵(ぶき)、而、走。
或(ある)、百歩、而、後、止。
或(ある)、五十歩、而、後、止。
以、五十歩、笑、百歩、則(すなわち)、何如(いかん)？」

曰。

「不、可。

直(ただ)、不、百歩、耳(のみ)、是(これ)、亦、走、也」

曰。

「王。

如(もし)、知、此、則(すなわち)、無(なかれ)、望、民、之(の)、多、於(よりも)、隣国、也。

不、違、農、時、穀、不、可、勝(すべて)、食、也。

数罟(目の細かい網)、不、入、洿池(ため池)、魚、鼈(すっぽん)、不、可、勝(すべて)、食、也。

斧斤(おの)、以、時、入、山林、材木、不、可、勝(すべて)、用、也。

穀、与(と)、魚、鼈(すっぽん)、不、可、勝(すべて)、食、材木、不、可、勝(すべて)、用、是(これ)、使(させる)、民、

養、生、喪、死、無(ない)、憾(うらむ)、也。

養、生、喪、死、無(ない)、憾(うらむ)、王道之始、也。

五畝之宅、樹(うえる)、之(これ)、以、桑(クワ)、五十、者(もの)、可、以、衣(きる)、帛(きぬ)、矣。(一畝は約一アールの面積。)

鶏(ニワトリ)、豚、狗(イヌ)、彘(イノシシ)之畜、無(ない)、失、其(その)時、七十、者(もの)、可、以、食、肉、矣。

百畝之田、勿(ない)、奪、其(その)時、数口之家、可、以、無、饑(うえる)、矣。

謹、庠序(学校)之教、申(くりかえす)、之(これ)、以、孝悌之義、頒白(半白)、者(もの)、不、負戴、於、道路、矣。

七十、者(もの)、衣(きる)、帛(きぬ)、食、肉、黎民、不、饑(うえる)、不、寒。然、而、不、王、者(もの)、未、之(これ)、有、也。

狗(イヌ)、彘(イノシシ)、食、人、食、而、不、知、検(とりしまる)。塗(みち)、有、餓(うえる)、莩(がし)、而、不、知、発(あきらかにする)、人、死、則(すなわち)、曰。『非、我、也。歳(しゅうかく)、也』。

是、何、異、於、刺、人、而、殺、之、曰、『非、我、也。兵、也』？
王、無、罪、歳、斯天下之民、至、焉」

梁の恵王が言った。
「私、恵王は国に対して心を尽くしています。
『河内』で凶作に成れば、『河内』の国民を『河東』に移したり、『河東』
の穀物を『河内』に移したりします。
『河東』で凶作に成れば、また同様にします。
隣国の政治を観察すると、私、恵王のように心を用いる者はいません。
しかし、隣国の国民の減少は加速していません。
私、恵王の国民の増加も加速していません。
どうしてでしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。
「恵王は戦争を好むので戦争で例える許可を請います。
さて、『填然』と音が盛んに太鼓が打ち鳴らされています。
双方の武器の刃は既に接しています。
そして、装甲を捨てて武器を引きずって逃走する兵達がいました。
ある兵は百歩後退して止まりました。
別の兵は五十歩後退して止まりました。
ある兵が、『五十歩しか逃げなかった』という理由で、百歩逃げた別の兵を
笑いものにしたら、恵王は、どう思いますか？」

恵王が言った。

「『善くない』と思います。

百歩ではないだけで、この兵もまた逃走しています」

孟子 先生は言った。

「恵王よ。

それが分かっているならば、隣国よりも国民の数が多く成る事を望むなかれ。

農業に従事させるべき適切な時期を間違えなければ、穀物は全てを食べきれないほどに成ります。

(法律で禁止して)目の細かい網をため池に入れさせなければ、魚や鼈(すっぽん)は全てを食べきれないほどに成ります。

斧を持って適切な時期に山林に入れさせれば、材木は全てを使用しきれないほどに成ります。

穀物と魚や鼈(すっぽん)が全て食べきれないほどで、材木が全てを使用しきれないほどであれば、国民に、生きている家族を養わせる事ができ、死んだ家族の葬儀をさせる事ができて、怨ませる事が無く成ります。

国民に、生きている家族を養わせる事ができ、死んだ家族の葬儀をさせる事ができて、怨ませる事が無く成るのは、『王道』、『善政』の開始に成ります。

『五畝』、『約五アールの面積』の家の庭に、(蚕の餌にも成る)桑(クワ)の木を植えれば、五十歳の者も、絹の衣服を着る事ができます。

鶏(ニワトリ)、豚、犬、猪(イノシシ)の畜産で、繁殖に適切な時期に失敗しなければ、七十歳の者も、肉を食べる事ができます。

『百畝』、『約百アールの面積』の田畑で、農業に適切な時期に権力者が労働力を奪わなければ、数人の家であれば、飢える事が無いはずである。
慎重に、学校での教育で、『孝悌』、『目上の人達を敬う事』の『義』、『正しさ』について、くり返せば、半分、白髪が混じるほどの高齢者が、道路で、荷物を頭に載せて運ぶ事が無く成るであろう。
七十歳の者も絹の衣服を着て肉を食べる事ができるならば、庶民は飢える事が無いし、寒さに震える事も無い。そうであるのに、王でいられない者は未だいないです。
犬と猪（イノシシ）が人の食べ物を食べてしまっても、権力者は取り締まる事を知らない。道に餓死者の死体が有っても、権力者は人々が死んでいく本当の原因を明らかにする事を知らないで、言う。『私、権力者のせいではない。収穫が悪いせいである』と。
こう言うのは、他人を武器で刺して殺しておいて『私のせいではない。武器のせいである』と言う事と、何が異なるであろうか？　いいえ！　同様である！
王が収穫のせいにしないのであれば、この天下の人々は、その王の国へ到来してくれるであろう」

梁、恵王、曰。「寡人、願、安、承、教」
孟子、対（こたえる）、曰。「殺、人、以、梃（ぼう）、与（と）、刃、有、以、異、乎？」

曰。「無、以、異、也」

「以、刃、与(と)、政、有、以、異、乎?」

曰。「無、以、異、也」

曰。

「庖(だいどころ)、有、肥肉。廐、有、肥馬。民、有、饑、色。野、有、餓、莩(がししゃ)。
此(これ)、率、獣、而、食、人、也。
獣、相、食、且(かつ)、人、悪(けんおする)、之(これ)。
為(なる)、民、父母、行、政、不、免、於、率、獣、而、食、人。悪(どうして)、在、其(その)、
為(なる)、民、父母、也?
仲尼(=孔子)、曰。
『始、作、俑、者(もの)、其(それ)、無(ない)、後、乎』。
為(ため)、其(その)、象(かたどる)、人、而、用、之(これ)、也。
如之何(これ、いかん)、其(それ)、使(させる)、斯(この)民、饑、而、死、也?」

梁の恵王が言った。「私、恵王は、願わくば、安(やす)んじて甘(あま)んじて、(孟子先生の)教えを受けたいです」

孟子先生は答えて言った。「棒(といった鈍器)で人を殺す事と、刃物で人を殺す事に、(人を殺すという意味において何か)違いは有るでしょうか?」

恵王が言った。「違いは無いです」

(孟子 先生は言った。)「刃物で人を殺す事と、(重税で国民を死に追い込むといった)政治で人を殺す事に、(人を殺すという意味において何か)違いは有るでしょうか?」

恵王が言った。「違いは無いです」

孟子 先生は言った。

「あなた、恵王の台所には分厚い肉が有るし、あなた、恵王の馬の厩舎には肥えた馬がいるが、国民には飢えている『気色』、『様子』が有るし、野には餓死者の死体が有る。

これは、あなた、恵王が獣を率いて人を食べさせているような物なのである。

獣同士が相互に食い合う事すら人は嫌悪します。

国民の父母である王と成って政治を行っていながら、獣を率いて人を食べさせるような事態を免れない、回避できないようでは、どうして、その国民の父母である王と成っていて善いであろうか? いいえ! 善くない!

孔子 先生は言いました。

『初めて、死者と共に埋葬する人型の副葬品を作った者は、後の幸福は無いであろう』と。

人を象(かたど)った副葬品を利用したからです。

それでは、(人型の副葬品ではなく実際の人である)国民を飢えさせて死なせている、あなた、恵王は、どうなるでしょうか？　さらに後の幸福は無いであろう！」

梁、恵王、曰。

「晋国、天下、莫(ない)、強、焉(これ)、叟、之(の)、所、知、也。
及、寡人之身、東、敗、於、斉、長子、死、焉。
西、喪(うしなう)、地、於、秦、七百里。
南、辱、於、楚。
寡人、恥、之(これ)。
願、比(ころ)、死、者(とき)、一、洒(そそぐ)、之(これ)。
如之何(これ、いかん)、則(すなわち)、可？」

孟子、対(こたえる)、曰。

「地、方、百里、而、可、以、王。
王、如(もし)、施、仁、政、於、民、
省、刑罰、
薄、『税斂』、
深、耕、易、耨、
壮者、以、暇日、修、其(その)孝悌忠信、
入、以、事(つかえる)、其(その)父兄、

出、以、事、其長上、
可、使、制、梃、以、撻、秦、楚之堅甲利兵、矣。
彼、奪、其民、時、使、不、得、『耕耨』、以、養、其父母。父母、凍、餓。
兄弟、妻子、離散。
彼、『陥溺』、其民。
王、往、而、征、之、夫、誰、与、王、敵？
故、曰。
『仁者、無、敵』。
王、請、勿、疑」

梁の恵王が言った。

「(梁という国の前身である)晋という国よりも強い国が天下には無かったのは、(孟子)先生も知っている所でしょう。

私、恵王の身、代に及んでからは、東では斉という国に敗れてしまって長男が死んでしまいました。

西では秦という国に奪われて土地を七百里も喪失してしまいました。

南では楚という国のせいで恥辱を受けてしまっています。

私、恵王は、これらの事を恥じています。

願わくば、私、恵王が死ぬ頃までには、一度でも、これらの恥をそそぎたいです。

どのようにすれば、そうする事が可能でしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。

「土地が百里四方の小ささでも(強い)王でいる事は可能なのです。
王が、もし、『仁政』、『思いやり深く知的な政治』を国民に施し、
刑罰を減らしたり無くしたり簡潔にしたりし、
減税し、
壮年期の国民の者が暇な日に『孝悌』、『目上の人を敬う事』と『忠信』、『誠実さ』を修行できるようにさせ、
(国民が)深く農業に専念できるようにさせ、
家に入ったら自分の父兄に仕えるようにさせ、
家を出たら目上の人に仕えるようにさせれば、
国民に、棒を造らせて、秦や楚という国の堅固な甲冑と鋭利な武器を装備した兵士を(棒で)殴らせる事が可能なはずです。
なぜなら、秦や楚という国の暗君どもは、自国民の時間を奪ってしまって、国民が農業によって自分の父母を養う事ができ得なくさせてしまっています。
そのため、国民の父母は凍えて苦しんだり、飢えで苦しんだりしてしまっています。
また、国民の兄弟、妻子は離散してしまっています。
秦や楚という国の暗君どもは、国民を窮地に陥れてしまっています。
このため、王が、この秦や楚という国に行って征服させようとすれば、(国民のうち)誰が王と敵対するでしょうか？　いいえ！　敵対しない！
だから、言われているのです。
『思いやり深い者には敵がいない』と。
恵王よ、請い願わくば、疑うなかれ」

孟子、見(あう)、梁、襄王。

出、語、人、曰。

「望、之(これ)、不、似、人、君。

就(なす)、之(これ)、而、不、見、所、畏、焉。

卒然、問、曰。『天下、悪(どこに)、乎、定?』。

吾(われ)、対(こたえる)、曰。『定、於、一』。

『孰(だれが)、能、一、之(これ)?』。

対(こたえる)、曰。『不、嗜(このむ)、殺人、者(もの)、能、一、之(これ)』。

『孰(だれが)、能、与(くみする)、之(これ)?』。

対(こたえる)、曰。

『天下、莫(いない)、不、与(くみする)、也。

王、知、夫(かの)苗、乎?

七、八月之間、旱、則(すなわち)、苗、槁(かれる)、矣。

天、油然、作、雲、沛然、下、雨、則(すなわち)、苗、浡然、興、之(これ)、矣。

其(それ)、如是(このよう)、孰(だれが)、能、御(ふせぐ)、之(これ)?

今、夫(それ)、天下之人牧、未、有、不、嗜(このむ)、殺人、者(もの)、也。

如(もし)、有、不、嗜(このむ)、殺人、者(もの)、則(すなわち)、天下之民、皆、引、領(うなじ)、而、望、之(これ)、矣。

誠、如是(このよう)、也、民、帰、之(これ)、由(ちょうど)、水、之(の)、就(なる)、下、沛然。

誰(だれが)、能、御(ふせぐ)、之(これ)?』」

孟子 先生は梁という国の襄王に会った。

孟子 先生は、(襄王の所から)退出すると、ある人に語って言った。

「あの襄王は、見た所、人々の王に相応(ふさわ)しくない。

あの襄王には、話してみても、畏敬するべき所が見つからなかった。

襄王が突然、私、孟子に質問して言いました。『天下は、どこの国の物と成る事に決定するであろうか?』と。

私、孟子は答えて言いました。『(天下は、)ある一国の物と成る事に決定するでしょう』と。

襄王が言いました。『どの国が天下を統一可能であろうか?』と。

私、孟子は答えて言いました。『殺人を好まない者が天下を統一可能でしょう』と。

襄王が言いました。『(殺人を好まない者なんかに)誰が味方するというのか?』と。

私、孟子は答えて言いました。

『天下には(殺人を好まない者に)味方しない人はいないでしょう。

襄王よ、あの苗について知っていますか?

七月から八月の間に(雨が降らず水不足に成ってしまう)旱魃(かんばつ)が起きてしまうと、苗は枯れてしまいます。

天に雲が油然と盛んにわき起こって、雨が沛然と盛んに降れば、苗は浡然と、すぐに盛んに元気に成ります。

さて、このようであれば、誰が、これを妨害可能でしょうか? いいえ!

妨害不可能です!

今、天下の人々を養って統治する統治者のうち、殺人を好まない者は未だいない有様(ありさま)です。
もし、(統治者のうち)殺人を好まない者がいれば、天下の人々は皆、その者を、うなじを引いて仰ぎ見て、望むでしょう。
まことに、このようであれば、天下の人々が、その者に帰属するのは、ちょうど(雨の)水が沛然と盛んに下へ降るように成るでしょう。
誰が、それを妨害可能でしょうか？　いいえ！　妨害不可能です！』と」

斉、宣王、問、曰。「斉、桓、晋、文之事、可、得、聞、乎？」

孟子、対(こたえる)、曰。
「仲尼(＝孔子)之徒、無(いない)、道(いう)、桓、文之事、者(もの)。是(これ)、以、後世、無、伝、焉。
臣(わたし)、未、之(これ)、聞、也。
無(ない)、以(手段)、則(すなわち)、王、乎？」

曰。「徳、何如(どうであれば)、則(すなわち)、可、以、王、矣？」

曰。「保、民、而、王、莫(ない)、之(これ)、能、禦(ふせぐ)、也」

曰。「若(のような)、寡人、者(もの)、可、以、保、民、乎、哉？」

曰。「可」

曰。「何、由、知、吾、可、也？」

曰。「臣、聞、之、胡齕。曰」

王、坐、於、堂、上。有、牽、牛、而、過、堂、下、者。

王、見、之、曰。「牛、何、之？」

対、曰。「将、以、釁、鐘」

王、曰。「舍、之。吾、不、忍、其觳觫、若、無、罪、而、就、死地」

対、曰。「然、則、廃、釁、鐘、与？」

曰。「何、可、廃、也？以、羊、易、之」

「不、識。有、諸？」

曰。「有、之」

曰。

「是心、足、以、王、矣。

百姓、皆、以、王、為(なす)、愛(ものおしみする)、也。臣(わたし)、固(もとより)、知、王、之(の)、不、忍、也」

王、曰。

「然。

誠、有、百姓、者(もの)。

斉、国、雖(いえども)、褊(せまい)、小、吾(われ)、何(どうして)、愛(ものおしみする)、一、牛?

即、不、忍、其(その)『觳觫』(のよう)、若、無(ない)、罪、而、就、死地。

故、以、羊、易(かえる)、之、也」

曰。

「王。

無(なかれ)、異(あやしむ)、於、百姓、之(の)、以、王、為(なす)、愛(ものおしみする)、也。

以、小、易(かえる)、大。彼、悪(どうして)、知、之(これ)?

王、若(もし)、隠、其(その)、無、罪、而、就、死地、則(すなわち)、牛、羊、何、択(えらぶ)、焉?」

王、笑、曰。

「是(これ)、誠、何、心、哉?

我(われ)、非、愛(ものおしみする)、其(その)財。

而、易(かえる)、之(これ)、以、羊、也。

宜(とうぜんである)、乎、百姓、之(の)、謂、我、愛(ものおしみする)、也」

曰。

「無(なかれ)、傷(いたむ)、也。

是(これ)、乃(すなわち)、仁、術、也。

見、牛、未、見、羊、也。
君子、之、於、禽獣、也、見、其生、不、忍、見、其死。
聞、其声、不、忍、食、其肉。
是、以、君子、遠、庖厨、也」

斉という国の宣王が孟子 先生に質問して言った。「斉という国の桓公と、晋という国の文公の事について聞く事はでき得ますか？」

孟子 先生は答えて言った。

「孔子の(教えの)学徒で、桓公と文公の事について話す者はいません。このため、(桓公と文公の事については)後世に伝わっていません。私、孟子も、この桓公と文公の事については未だ聞いた事がありません。仕方が無いので、王について話しても良いでしょうか？」

宣王が言った。「『徳』、『善行』が、どうであれば、王であっても良いのでしょうか？」

孟子 先生は言った。「国民を保護して養う王であれば、この王を妨害するのは不可能です」

宣王が言った。「私、宣王のような者でも、国民を保護して養うのは可能でしょうか？」

孟子 先生は言った。「可能です」

宣王が言った。「どんな理由で『私、宣王には可能である』と知っているのでしょうか？」

孟子 先生は言った。「私、孟子は、胡齕という人から、ある事を聞いた事が有るからです。胡齕は、次のように言っていました」

宣王が堂の上に座っている時に、牛を牽引（けんいん）して堂の下を通り過ぎる者がいた。

宣王が、これを見て、言った。「牛をどこに連れて行くのか？」

牛を牽引していた者が答えて言った。「(人が勝手に考案した神の祭り方で生贄の)牛の血を鐘に塗ろうとしている所です」

宣王が言った。「この牛を置いていきなさい。罪が無いのに死地に到着したかのように、牛が殺されるのを恐れる様子に、私、宣王は、かわいそうで我慢できない」

牛を牽引していた者が答えて言った。「そうすると、生贄の血を鐘に塗る(人が勝手に考案した)神の祭り方を廃止するのでしょうか？」

宣王が言った。「どうして廃止するであろうか？　いいえ！　廃止しない！　この牛の代わりに、羊を生贄にするように変えなさい」

(孟子 先生は言った。)「私、孟子は知りませんでしたが、このような事が有りましたか？」

宣王が言った。「このような事が有りました」

孟子 先生は言った。
「このような(思いやりの)心だけで王であるのに足りるのです。
人々は皆、『宣王が物惜しみをしたのである』と見なしてしまいましたが、
私、孟子は本(もと)から『宣王は牛が気の毒で我慢できなかったのである』と知っています」

宣王が言った。
「その通りです。
まことに、『宣王が物惜しみをしたのである』と見なした者どもがいました。
斉という国が狭い土地の小国といえども、私、宣王が、どうして物惜しみして一頭の牛を惜しむでしょうか？　いいえ！
罪が無いのに死地に到着したかのように、牛が殺されるのを恐れる様子に、
私、宣王は、かわいそうで我慢できなかったのです。
だから、その牛の代わりに、羊を生贄にするように変えさせたのです」

孟子 先生は言った。

「宣王よ。
人々が『宣王が物惜しみをしたのである』と見なしてしまったのを不思議に思うなかれ。
大きい生贄である牛を、小さい生贄である羊に変えただけだからなのです。
そのため、人々が、どうして、『宣王は牛が気の毒で我慢できなかったのである』と、そう知る事ができるでしょうか？　いいえ！
宣王よ、もし、牛が罪が無いのに死地に到着したのが気の毒で我慢できなかったのであれば、どうして『生贄には、牛は気の毒であるが、羊は気の毒ではない』と選択できるでしょうか？　いいえ！」

宣王は笑いながら言った。
「私、宣王が、そうしてしまったのは、まことに、私、宣王は、どんな心境であったのか？
私、宣王は、(牛という)自分の財産を物惜しみした訳ではないのだが。
しかし、私、宣王は、その牛の代わりに、羊を生贄にするように変えさせてしまった。
人々が『私、宣王が物惜しみをしたのである』と言ってしまっても、当然ですね」

孟子 先生は言った。
「気に病むなかれ。
そうしてしまったのも、『仁』、『思いやり』へ至るための手段と成るのです。

あなた、宣王が、(生贄にされそうな)牛を見たが、(生贄にされそうな)羊を未だ見ていなかったからだけなのです。
王者は、『禽獣』、『鳥や獣』に対して、それらの生き物が生きているのを見たら、それらの生き物が死ぬのが気の毒で我慢できない物なのです。
それらの生き物の鳴き声を聞いたら、それらの生き物の肉を食べるのが気の毒に成る物なのです。
このため、王者は台所から遠ざかる物なのです」

王、説(よろこぶ)、曰。
「『詩』、云。
『他人、有、心。予、忖度(そんたく)、之(これ)』。
夫子(=孟子)、之(の)、謂、也。
夫(それ)、我、乃(すなわち)、行、之(これ)。
反、而、求、之(これ)、不、得、吾(わが)心。
夫子、言、之(これ)。
於、我(わが)心、有、『戚戚焉』。
此(この)心、之(の)、所以、合、於、王、者(もの)、何、也?」

曰。
「有、復(ほうこくする)、於、王、者(もの)、曰。
『吾(わが)力、足(たりる)、以、挙、百鈞、而、不足、以、挙、一、羽。

明、足(たりる)、以、察、秋毫之末、而、不、見、輿薪』。
則(すなわち)、王、許、之(これ)、乎?」

曰。「否」

「今、恩、足(たりる)、以、及、禽獣、而、功、不、至、於、百姓、者(もの)、独、何、与(か)?
然、則(すなわち)、一、羽、之(の)、不、挙、為(ため)、不、用、力、焉。
輿薪、之(の)、不、見、為(ため)、不、用、明、焉。
百姓、之(の)、不、見、保、為(ため)、不、用、恩、焉。
故、王、之(の)、不、王、不、為(なす)、也。非、不能、也」

曰。「不、為(なす)、者(もの)、与(と)、不能、者(もの)、之(の)、形、何、以、異?」

曰。
「挟、太山(=泰山)、以、超、北海(=渤海)、語、人、曰。『我、不能』。
是(これ)、誠、不能、也。
為(ため)、長者、折、枝(↓肢)、語、人、曰。『我、不能』。
是(これ)、不、為(なす)、也。非、不能、也。
故、王、之(の)、不、王、非、挟、太山(=泰山)、以、超、北海(=渤海)、之(の)、類(たぐい)、也。
王、之(の)、不、王、是(これ)、折、枝(↓肢)、之(の)、類(たぐい)、也。
老、吾(わが)老、以、及、人之老。
幼、吾(わが)幼、以、及、人之幼。

天下、可、運、於、掌。
『詩』、云。
『刑、於、寡妻。
至、於、兄弟。
以、御、於、家、邦』。
言、挙、斯(この)心、加(くわえる)、諸(これ)、彼、而已(のみ)。
故、推、恩、足(たりる)、以、保、四海。
不、推、恩、無(ない)、以、保、妻子。
古之人、所以、大、過、人、者(もの)、無(ない)、他、焉。
善(よく)、推、其(その)、所、為(なす)、而已(のみ)、矣。
今、恩、足(たりる)、以、及、禽獣、而、功、不、至、於、百姓、者(もの)、独、何、与(か)?
権(はかる)、然、後、知、軽重。
度(はかる)、然、後、知、長短。
物、皆、然。
心、為(なす)、甚。
王、請、度、之(これ)」

宣王が喜んで言った。
「『詩経』で言われています。
『他人には心が有る。私は、それを推察する』と。
孟子先生のような者の事を言っているのですね。
私、宣王が、それを行いました。

それを反芻してみて探求してみても、自分の心を理解する事ができ得ませんでした。
孟子 先生は、それを言って(教えて)くれました。
そのおかげで、私、宣王の心において『戚戚焉』と深い感銘を覚えました。
さて、この(思いやりの)心が、王への相応しさに適合する理由は何なのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「あなた、宣王に報告する者がいて、このように言ったとします。
『私の力は、百鈞の重さの物を挙げるのには足りますが、一枚の羽を挙げるのには不足しています。
(私の、)物を明らかに見れる力は、秋に生え変わる鳥獣の細い毛先の末端は観察できますが、車いっぱいの薪といった大きい物を見る事はできません』と。
宣王よ、あなたは、この言葉が論理的に正しいと認めますか？」

宣王が言った。「いいえ」

(孟子 先生は言った。)

「今、(宣王の思いやりの)恩恵は鳥獣に及ぼすのに足りるのに、(宣王の政治的な)功績は全ての人々にとって至らない代物であるのは、ただ、なぜなのでしょうか？
さて、一枚の羽を挙げる事ができないのは、力を用いないためです。

大きい物を見る事ができないのは、物を明らかに見れる力を用いないためです。

全ての人々が保護されて養われている様子を見る事ができないのは、(宣王が思いやりの)恩恵を適用しないためです。

宣王が、(真の)王らしくないのは、(思いやりによる政治を)しないからだけなのです。宣王は、できない訳ではないのです」

　宣王が言った。「しない者と、できない者は、色形において、どのように異なりますか?」

　孟子 先生は言った。

「泰山を挟(はさ)み持ち渤海を飛び超えようとして、このように他人に言ったとします。『私には、できません』と。

これは、まことに、できないのです。

目上の人のために四肢を折り曲げて敬礼しようとして、このように他人に言ったとします。『私には、できません』と。

これは、しないだけなのです。できない訳ではないのです。

そのため、宣王が(真の)王らしくしないのは、泰山を挟(はさ)み持ち渤海を飛び超える類(たぐい)の事ができないのとは、違うのです。

宣王が(真の)王らしくしないのは、四肢を折り曲げて敬礼しない類の事と、同じなのです。

(自分の家族ではない)老人を自分の家族の老人のように見なして(思いやりを)他人の家族の老人にまで及ぼす。

(自分の家族ではない)幼子を自分の家族の幼子のように見なして(思いやりを)他人の家族の幼子にまで及ぼす。

こうすれば、天下を手のひらの上で運ぶようにできます。

『詩経』で言われています。

『(思いやりによって)自分の妻を法に則して大事にする。

(思いやりを)兄弟にまで至らしめる。

そのようにして、家と国家を制御して統治している』と。

(この『詩経』の言葉は、)この(思いやりの)心を他人にまで、もたらす事を言っているだけなのです。

そのため、(思いやりの)恩恵を推し進める事によって、四海の天下の人々を保護して養うのです。

(思いやりの)恩恵を推し進めなければ、妻子を保護して養う事すらも、できないのです。

古代人達が、現代人を大いに通り過ぎて超越している者であった理由は、この(思いやりを推し進める事の)他には無いのです。

(古代人達のように、)善く、自分に、できる事を推し進めるだけなのです。

今、(宣王の思いやりの)恩恵は鳥獣にまで及ぼすのに足りるのに、(宣王の政治的な)功績は全ての人々にとって至らない代物であるのは、ただ、なぜなのでしょうか?

天秤で、はかった後で、軽重を知る事ができます。

ものさしで、はかった後で長短を知る事ができます。

万物は皆、そうなのです。

『心は、とても大事である』とします。

宣王よ、請い願わくば、その心を、(思いやりや正義という、)ものさしで、
おしはかってください」

「抑(それとも)、王、興、甲兵、
危、『士臣』、
構、怨、於、諸侯、
然、後、快、於、心、与(か)?」

王、曰。
「否。
吾(われ)、何、快、於、是(これ)?
将、以、求、吾(わが)、所、大、欲、也」
曰。「王、之(の)、所、大、欲、可、得、聞、与(か)?」

王、笑、而、不、言。

曰。
「為(ため)、『肥甘(美味な食べ物)』、不足、於、口、与(か)?
軽、暖、不足、於、体、与(か)?
抑(それとも)、為(ため)、『采色(美しい色彩)』、不足、視、於、目、与(か)?

声、音、不足、聴、於、耳、与（か）？
『便嬖（君主からの寵愛）』、不足、『使令（召使い）』、於、前、与（か）？
王之諸臣、皆、足（たらせている）、以、供、之（これ）。
而、王、豈、為（ため）、是（これ）、哉？」

曰。「否。吾（われ）、不、為（ため）、是（これ）、也」

曰。
「然、則（すなわち）、王之大欲、可、知、已（のみ）。
欲、闢（ひらく）、土地、朝、秦、楚、莅（とうちする）、中国、而、撫（おさえる）、四夷、也。
以、若（このよう）、所、為（なす）、求、若（このよう）、所、欲、猶（ちょうど〜のよう）、縁（よって）、木、而、求、魚、也」

王、曰。「若（のよう）、是（この）、其（それ）、甚、与（か）？」

曰。
「殆（ほとんど）、有（さらに）、甚、焉。
縁（よって）、木、求、魚、雖（いえども）、不、得、魚、無（ない）、後、災。
以、若（このよう）、所、為（なす）、求、若（このよう）、所、欲、尽、心、力、而、為（なす）、之（これ）、後、必、
有（ある）、災」

曰。「可、得、聞、与（か）？」

曰。「鄒、人、与（と）、楚、人、戦、則（すなわち）、王、以、為（なす）、孰（どちらが）、勝？」

曰。「楚、人、勝」

曰。

「然、則、

小、固、不、可、以、敵、大。

寡、固、不、可、以、敵、衆。

弱、固、不、可、以、敵、強。

海内之地、方、千里、者、九。

斉、集、有　、其一。

以、一、服、八、何、以、異、於、鄒、敵、楚、哉？

蓋　、亦、反、其本、矣？！」

（孟子 先生は言った。）

「それとも、宣王は、甲冑で武装した兵士達を成立させて、

臣下達を危険にさせて、

諸侯との間に怨みを構えて、

そうした後で、心において気持ち良くいられるのでしょうか？」

宣王が言った。

「いいえ。

そうしておいて、私、宣王は、どうして気持ち良くいられるであろうか？

いいえ！

しかし、まさに、そうしているのは、私、宣王が大いに欲している物を求めているためなのです」

孟子 先生は言った。「宣王が、大いに欲している物について、聞く事ができ得ますか？」

宣王は笑って言わなかった。

孟子 先生は言った。

「口（くち）において美味な食べ物が不足しているためでしょうか？体において軽い暖かい衣服が不足しているためでしょうか？それとも、目において美しい色彩を見る事が不足しているためでしょうか？耳において美しい音声を聴く事が不足しているためでしょうか？面前において寵愛している召使いが不足しているためでしょうか？宣王の諸々の臣下は皆、これらを(宣王に)提供して(宣王が満ち)足りるようにしてくれています。それなのに、宣王は、なぜ、これらを大いに欲しているでしょうか？　いいえ！」

宣王が言った。「いいえ、ですね。私、宣王は、これらを大いに欲してないません」

孟子 先生は言った。

「それなら、宣王が大いに欲している物を知るべきだけです。

(宣王は、)土地を開拓し、秦という国と、楚という国をひれ伏せさせ、中国を統治し、中国の四方の外国を抑制したいと(大いに)欲しているのですね。(宣王が、強い軍の成立といった、)そのような事をしていて、(中国統一といった、)そのような事を(大いに)欲して求めるのは、ちょうど木から魚を求めるような物なのです」

宣王が言った。「(私、宣王の欲望は、)そのように大それていますか？」

孟子 先生は言った。

「ほとんど、それよりも更に、大それています。木から魚を求めるのは、魚を得られなくても、後に、災いは無いです。しかし、(宣王が、強い軍の成立といった、)そのような事をしていて、(中国統一といった、)そのような事を(大いに)欲して求めるのは、心の力を尽くして、そうしようとしてしまうと、後に、必ず、災いが有ります」

宣王が言った。「(理由を)聞く事ができ得ますか？」

孟子 先生は言った。「鄒という国の人達と、楚という国の人達が戦ったら、宣王は、どちらの国が勝つと見ますか？」

宣王が言った。「楚という国の人達が勝つでしょう」

孟子 先生は言った。

「そうであるならば、

小さいものは本から大きいものと敵対するべきではないのです。
少ないものは本から多数のものと敵対するべきではないのです。
弱いものは本から強いものと敵対するべきではないのです。
海の中の陸地で、千里四方の国は九か国です。
この(宣王の)斉という国は、そのうちの一か国だけを束ねて所有しているに過ぎません。
一か国分の力だけで、八か国を征服しようとするのは、鄒という国が楚という国と敵対するのと、どうして異なるでしょうか？　いいえ！　同様の愚行である！
(宣王は、)どうして、その(政治の)根本、根源(である思いやり)に立ち返らないのか？！」

「今、王、発、政、施、仁、使、天下、仕、者、皆、欲、立、於、王之朝。
耕、者、皆、欲、耕、於、王之野。
商賈、皆、欲、蔵、於、王之市。
『行旅』、皆、欲、出、於王之途。
天下、之、欲、疾、其君、者、皆、欲、赴、愬、於、王。
其、若、是、孰、能、御、之？」

　王、曰。
「吾、惛、不能、進、於、是、矣。

願、夫子、輔、吾志、明、以、教、我。
我、雖、不敏、請、嘗試、之」

曰。

「無、恒、産、而、有、恒、心、者、惟、士、為、能。
若、民、則、無、恒、産、因、無、恒、心。
苟、無、恒、心、『放辟邪侈』、無、不、為、已。
及、陥、於、罪、然、後、従、而、刑、之。
是、罔、民、也。
焉、有、仁、人、在、位、罔、民、而、可、為、也？
是故、明君、制、民之産、必、使、仰、足、以、事、父母。
俯、足、以、畜、妻子。
『楽歳』、終身、飽。
凶年、免、於、死亡。
然、後、駆、而、之、善。
故、民、之、従、之、也、軽。
今、之、制、民之産、仰、不足、以、事、父母。
俯、不足、以、畜、妻子。
『楽歳』、終身、苦。
凶年、不、免、於、死亡。
此、惟、救、死、而、恐、不、贍。
奚、暇、治、礼義、哉？
王、欲、行、之、則、盍、反、其本、矣？！
五畝之宅、樹、之、以、桑、五十、者、可、以、衣、帛、矣。

鶏、豚、狗、彘、之、畜、無、失、其時、七十、者、可、以、食、肉、矣。
百畝之田、勿、奪、其時、八口之家、可、以、無、饑、矣。
謹、『庠序』之教、申、之、以、孝悌之義、『頒白(=半白)』、者、不、負、戴、於、道路、矣。
老、者、衣、帛、食、肉、『黎民』、不、饑、不、寒。然、而、不、王、者、未、之、有、也」

(孟子 先生は言った。)

「今、宣王が、政治を(正しく)盛んにして、思いやり深い政治を(国民に)施せば、誰かに仕えている天下の者達、皆に『宣王の朝廷に立ちたいと欲する』と思わせる事ができます。
農耕従事者達、皆に『宣王の土地を耕したいと欲する』と思わせる事ができます。
商人達、皆に『宣王の市場の店で所蔵したいと欲する』と思わせる事ができます。
旅人達、皆に『宣王の道に出て旅したいと欲する』と思わせる事ができます。
自分の暴君を憎悪している天下の者達、皆に『宣王の所へ赴いて暴君を(討伐するように)宣王に訴えたいと欲する』と思わせる事ができます。
このようであれば、誰が、それを妨害可能でしょうか？　いいえ！　妨害不可能である！」

宣王が言った。

「私、宣王は、暗愚で、それを推し進める事ができません。

願わくば、孟子先生、私、宣王の志を助けて、明確に私、宣王に教えてください。

私、宣王は、非才といえども、請い願わくば、その通りに試してみますから」

孟子先生は言った。

「常に財産が無くても、常に平常心が有る者、平常心でいる事が可能である者は、『士』、『一人前である者』だけです。

普通の国民のような者は、常に財産が無ければ、そのせいで、常に平常心が無いでしょう。

仮に、常に平常心が無ければ、思うがままに悪事だけを行い見下し思い上がるだけでしょう。

罪に陥(おちい)るに及んで、その後、従って、その人は処刑されてしまうでしょう。

これでは、国民を強制的に追い込んで一網打尽にしてしまうような物です。

思いやり深い知者の人は、王位に在位すれば、国民を強制的に追い込んで一網打尽にしてしまうような事をする訳が無い！

このため、聡明な君主は、国民の財産を制御して、必ず、目上の人達を仰げば、父母に仕えるのに(財産が)足りるようにさせます。

目下の人達を俯(ふ)して見れば、妻子を養うのに(財産が)足りるようにさせます。

豊作の年には、一生、食べ飽きる事ができるようにさせます。

凶作の年でも、凍死や餓死を免れる事ができるようにさせます。

そうした後で、善へと向上して行くように駆り立てます。

そのため、国民にとって、そのような聡明な君主に従うのは軽い事なのです。

今の暗君どもは、国民の財産を制御しても、目上の人達を仰げば、父母に仕えるのに(財産が)不足してしまうようにさせてしまいます。

目下の人達を俯(ふ)して見れば、妻子を養うのに(財産が)不足してしまうようにさせてしまいます。

豊作の年でも、一生、苦しむようにさせてしまいます。

凶作の年には、凍死や餓死を免れる事ができないようにさせてしまいます。

これでは、死から救っても、(財産の)不足を恐れさせるばかりに成ってしまいます。

これでは、礼儀を修得する暇など無いです！

宣王よ、正しい政治を行いたいと欲するならば、どうして、その(政治の)根本、根源(である思いやり)に立ち返らないのか？！

『五畝』、『約五アールの面積』の家の庭に、(蚕の餌にも成る)桑(クワ)の木を植えれば、五十歳の者も、絹の衣服を着る事ができます。

鶏(ニワトリ)、豚、犬、猪(イノシシ)の畜産で、繁殖に適切な時期に失敗しなければ、七十歳の者も、肉を食べる事ができます。

『百畝』、『約百アールの面積』の田畑で、農業に適切な時期に権力者が労働力を奪わなければ、八人の家であれば、飢える事が無いはずである。

慎重に、学校での教育で、『孝悌』、『目上の人達を敬う事』の『義』、『正しさ』について、くり返せば、半分、白髪が混じるほどの高齢者が、道路で、荷物を頭に載せて運ぶ事が無く成るであろう。

老人でも絹の衣服を着て肉を食べる事ができるならば、庶民は飢える事が無いし、寒さに震える事も無い。そうであるのに、王でいられない者は未だいないです」

梁恵王下

荘暴、見(あう)、孟子、曰。
「暴(＝荘暴)、見(あう)、於、王(＝宣王)。
王、語、暴、以、好、楽(おんがく)。
暴(＝荘暴)、未、有、以、対(こたえる)、也」
曰。
好、楽(おんがく)、何如(いかん)?」

孟子、曰。
「王、之(の)、好、楽、甚、則(すなわち)、斉、国、其(それ)、庶幾(とてもちかい)、乎」

他日、見(あう)、於、王、曰。
「王、嘗、語、荘子(＝荘暴)、以、好、楽。
有、諸(これ)?」

王、変、乎、色、曰。
「寡人、非、能、好、先王之楽、也。
直、好、世俗之楽、耳(のみ)」

曰。
「王、之(の)、好、楽、甚、則(すなわち)、斉、其(それ)、庶幾(とてもちかい)、乎。
今之楽、猶、古之楽、也」

曰。

「可、得、聞、与(か)?」

曰。

「独、楽(たのしむ)、楽(おんがく)、与(ともに)、人、楽(たのしむ)、楽(おんがく)、孰(どちらが)、楽(たのしい)?」

曰。

「不、若(しく)、与(ともにする)、人」

曰。

「与(ともに)、少、楽(たのしむ)、楽(おんがく)、与(ともに)、衆、楽(たのしむ)、楽(おんがく)、孰(どちらが)、楽(たのしい)?」

曰。

「不、若(しか)、与(ともにする)、衆」

「臣、請、為(ために)、王、言、楽(たのしみ)。

今、王、鼓楽、於、此(ここ)、百姓、聞、王、鐘鼓之声、管籥(ふえ)之音、挙(こぞって)、疾(くるしめる)、首(あたま)、蹙(しかめる)、頞(はなすじ)、而、相、告、曰。

『吾(わが)王、之(の)、好、鼓楽。

夫(それなのに)、何(どうして)、使(させる)、我(われ)、至、於、此(この)極、也?

父、子、不、相、見(あう)。

兄弟、妻子、離散』。

今、王、田猟(狩猟)、於、此(ここ)、百姓、聞、王、車馬之音、見(みる)、羽旄之美、挙(こぞって)、
疾(くるしめる)、首(あたま)、蹙(しかめる)、頞(はなすじ)、而、相、告、曰。
『吾(わが)王、之(の)、好、田猟(狩猟)。
夫(それなのに)、何(どうして)、使(させる)、我(われ)、至、於、此(この)極、也？
父、子、不、相、見(あう)。
兄弟、妻子、離散』。
此(これ)、無(ない)、他。
不、与(ともにする)、民、同、楽(たのしみ)、也。
今、王、鼓楽、於、此(ここ)、百姓、聞、王、鐘鼓之声、管籥(ふえ)之音、挙(こぞって)、『欣
欣』然、有、喜色、而、相、告、曰。
『吾(わが)王、庶幾(とてもちかい)、無(ない)、疾病、与(か)。
何(どうして)、以、能、鼓楽、也？』。
今、王、田猟(狩猟)、於、此(ここ)、百姓、聞、王、車馬之音、見(みる)、羽旄之美、挙(こぞって)、
『欣欣』然、有、喜色、而、相、告、曰。
『吾(わが)王、庶幾(とてもちかい)、無(ない)、疾病、与(か)。
何(どうして)、以、能、田猟(狩猟)、也？』。
此(これ)、無(ない)、他。
与(ともにする)、民、同、楽(たのしみ)、也。
今、王、与(ともにする)、百姓、同、楽(たのしみ)、則(すなわち)、王、矣」

荘暴が孟子 先生に会って言った。
「私、荘暴は宣王に会ったのですが、
宣王は荘暴に『私、宣王は音楽が好きである』と語りました。

荘暴は、それに対して未だ答えていません。
言ってみると、
『音楽が好きである』のは、どうか？　と思うのですが？」
「宣王が音楽がとても好きであるならば、斉という国は、善政の国に、とても近いのである」
孟子先生は言った。
孟子先生は、後日、宣王に会って言った。
「宣王は、かつて荘暴に『私、宣王は音楽が好きである』と語ったとか。
そういう事が有りましたか？」
宣王が顔色を変えて言った。
「私、宣王は、古代の聖王による音楽が好きである訳ではないのです。
ただ、世俗的な音楽が好きであるだけなのです」
孟子先生は言った。
「宣王が音楽がとても好きであるならば、斉という国は、善政の国に、とても近いのです。
今の音楽は、今もなお、古代の聖王による音楽に、とても近いのです」
宣王が言った。
「どうしてか、聞く事ができ得ますか？」

孟子 先生は言った。
「独りで音楽を楽しむのと、他の人と共に音楽を楽しむのの、どちらが楽しいですか?」

宣王が言った。
「他の人と共にする楽しさには及びません」

孟子 先生は言った。
「少数の人々と共に音楽を楽しむのと、多数の人々と共に音楽を楽しむのの、どちらが楽しいですか?」

宣王が言った。
「多数の人々と共にする楽しさには及びません」

(孟子 先生は言った。)
「私、孟子に、請い願わくば、宣王の為に、楽しみについて話させてください。

今、宣王が、ここで太鼓などによる音楽を楽しんでも、全ての人々は、宣王による鐘や太鼓の音声や管楽器や『籥』という竹笛の音声を聞いて、皆こぞって頭を痛めて鼻筋(はなすじ)にしわを寄せてしかめて、お互いに言い合うでしょう。

『私達の王、宣王は太鼓などによる音楽が好きである。
それなのに、どうして、私達をこの悲惨の極みに至らせてしまっているのか?
父と子は、(離散してしまって、)お互いに会う事もできない。

兄弟、妻子も離散してしまっている』と。
今、宣王が、ここで狩猟をしても、全ての人々は、宣王による車や馬の音声を聞いて、雉（キジ）の羽と旄牛（ヤク）の尾による軍旗の美しさを見て、皆こぞって、頭を痛めて鼻筋（はなすじ）にしわを寄せてしかめて、お互いに言い合うでしょう。
『私達の王、宣王は狩猟が好きである。
それなのに、どうして、私達をこの悲惨の極みに至らせてしまっているのか？
父と子は、（離散してしまって、）お互いに会う事もできない。
兄弟、妻子も離散してしまっている』と。
これは他でもありません。
国民と共に楽しみを同じくしていないからなのです。
今、王が、ここで太鼓などによる音楽を楽しんだら、全ての人々は、王による鐘や太鼓の音声や管楽器や『籥』という竹笛の音声を聞いて、皆こぞって、『欣欣』然として喜んで、喜色を浮かべて、お互いに言い合ったとします。
『私達の王は無病に、とても近いのではないか。
そうでなければ、どうして、太鼓などによる音楽をできようか？　いいえ！
王は健康である！』と。
今、王が、ここで狩猟をしたら、全ての人々は、王による車や馬の音声を聞いて、雉（キジ）の羽と旄牛（ヤク）の尾による軍旗の美しさを見て、皆こぞって、『欣欣』然として喜んで、喜色を浮かべて、お互いに言い合ったとします。
『私達の王は無病に、とても近いのではないか。
そうでなければ、どうして、狩猟をできようか？　いいえ！　王は健康である！』と。
これは他でもありません。

国民と共に楽しみを同じくしていたら、そうなるのです。
今、宣王が、全ての人々と共に楽しみを同じくすれば、(善政を行う)真の王
と成れるのです」

斉、宣王、問、曰。
「『文王之囿、方、七十里』。
有、諸（これ）?」
孟子、対（こたえる）、曰。
「於、伝、有、之（これ）」
曰。
「若（のよう）、是（この）、其（それ）、大、乎?」
曰。
「民、猶、以、為（なす）、小、也」
曰。
「寡人之囿、方、四十里。
民、猶、以、為（なす）、大。
何（どうして）、也?」

曰。

「文王之囿、方、七十里。
芻蕘、者、往、焉。
雉兎、者、往、焉。
与、民、同、之。
民、以、為、小、不、亦、宜、乎。
臣、始、至、於、境、問、国之大禁。
然、後、敢、入。
臣、聞。
『郊関之内、有、囿、方、四十里。
殺、其麋鹿、者、如、殺人之罪』。
則、是、方、四十里、為、阱、於、国中。
民、以、為、大、不、亦、宜、乎」

斉の宣王が、孟子 先生に質問して言った。
「『文王の公園は七十里、四方であった』と聞いた事が有ります。
これは実際に有った事なのでしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。
「伝え聞く所によると、それは実際に有った事です」

宣王が言った。

「(文王の公園は、)そのように大きかったのですか？」

孟子 先生は言った。

「国民達は、それ(、七十里、四方)ですらなお、(文王の公園は)小さいと見なしていました」

宣王が言った。

「私、宣王の公園は四十里、四方です。
しかし、国民どもは、それ(、四十里、四方)ですらなお、(宣王の公園は)大きいと見なしています。
どうしてでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「文王の公園は、七十里、四方でした。
木こりの者も入っていく事ができました。
猟師をしている者も入っていく事ができました。
(文王は、)国民達と、それ(、公園)を共同で所有していたのです。
国民達が、(七十里、四方でも文王の公園は)小さいと見なしたのは、当然なのです。
私、孟子は、初めて、(どこかの国の)国境に到着すると、その国で大いに禁じられている事を質問します。
そうした後で、あえて入るのです。
私、孟子は、(この国、斉の国境で)聞きました。
『城外の関所の内側に、(宣王の)公園が、四十里、四方、有ります。

その(宣王の公園の)大小の鹿を殺した者どもは、殺人の罪と同じように処刑されます』と。

これでは、国の中の、四十里、四方(の宣王の公園)は、落とし穴に成ってしまっているような物です。

国民達が、(四十里、四方でも宣王の公園は)大きいと見なすのは、当然です」

斉、宣王、問、曰。

「交、隣国、有、道、乎?」

孟子、対(こたえる)、曰。

「有。

惟(ただ)、仁者、為(なす)、能、以、大、事(つかえる)、小。

是(この)故、湯(殷の湯王)、事(つかえる)、『葛』。

文王、事(つかえる)、『昆夷』。

惟(ただ)、智者、為(なす)、能、以、小、事(つかえる)、大。

故、大王(=古公亶父)、事(つかえる)、『獯粥』。

勾践、事(つかえる)、『呉』。

以、大、事(つかえる)、小、者(もの)、楽、天、者(もの)、也。

以、小、事(つかえる)、大、者(もの)、畏、天、者(もの)、也。

楽、天、者(もの)、保、天下。

畏、天、者(もの)、保、其(その)国。
『詩』、云。
『畏、天之威。
于(に)、時(このとき)、保、之(これ)』」

王、曰。
「大、哉、言、矣。
寡人、有、疾(やまい)。
寡人、好、勇」

対(こたえる)、曰。
「王、請、無(なかれ)、好、小勇。
夫(それ)、撫、剣、疾視(にらむ)、曰。
『彼、悪(どうして)、敢、当、我(われ)、哉?』。
此(これ)、匹夫之勇。
敵、一人、者(もの)、也。
王、請、大(おおきくする)、之(これ)。
『詩』、云。
『王、赫(あかく)、斯(ここ)、怒。
爰(ここ)、整、其旅(その軍隊)。
以、遏(とめる)、徂(いく)、莒。
以、篤、周、祜(さいわい)。
以、対(こたえる)、於、天下』。
此(これ)、文王之勇、也。

文王、一、怒、而、安、天下之民。

『書』、曰。

『天、降、下民。

作(つくる)、之(これ)、君。

作(つくる)、之(これ)、師。

惟(これ)、曰(いわく)。其(それ)、助、上帝。

寵、之(これ)、四方。

有罪、無罪、惟(ただ)、我(われ)、在。

天下、曷(どうして)、敢、有、越、厥(その)志?』。

一人、衡行(悪事を行う)、於、天下、武王、恥、之(これ)。

此(これ)、武王之勇、也。

而、武王、亦(また)、一、怒、而、安、天下之民。

今、王、亦(また)、一、怒、而、安、天下之民、民、惟(ただ)、恐、王、之(の)、不、好、勇、也」

斉の宣王は、孟子 先生に質問して言った。

「隣国と交際する方法が(何か)有りますか?」

孟子 先生は答えて言った。

「有ります。

ただ『仁者』、『思いやり深い知者』だけが、(自国が)大国でも、小国に仕える事ができます。

このため、殷の湯王は、葛に仕えました。

文王は、昆夷に仕えました。
また、ただ知者だけが、(自国が)小国でも、大国に仕える事ができます。
そのため、周王朝の古公亶父は、獯粥に仕えました。
勾践は呉に仕えました。
(自国が)大国でも、小国に仕える者は、天の神を楽しむ者なのです。
(自国が)小国でも、大国に仕える者は、天の神を畏敬する者なのです。
天の神を楽しむ者は、天下を保持できます。
天の神を畏敬する者は、自国を保持できます。
『詩経』で言われています。
『天の神の権威を畏敬する。
そうする時に、その自国を保持できる』と」

宣王が言った。
「大いなる言葉ですね。
ただ、私、宣王には、病癖が有るのです。
私、宣王は武勇を好んでしまうのです」

孟子先生は答えて言った。
「宣王よ、請い願わくば、矮小な武勇を好むなかれ。
剣を撫でつつ、にらみながら、言ったとします。
『あいつが、どうして、私に、あえて相当できるであろうか?』と。
これは、所詮、一人の男の武勇なのです。
所詮、一人としか敵対できない者なのです。
宣王よ、請い願わくば、このような武勇を大いなる物に変えてください。

『詩経』で言われています。

『(文)王は、赤く成って、ここに、怒った。

ここで、その軍隊を整備した。

その軍隊によって、莒への進軍を阻止した。

その軍隊によって、周の幸福を手厚く守った。

その軍隊によって、天下の人々に応えた』と。

これが、文王の武勇なのです。

文王は、一度でも、(悪に対して)怒ると、天下の人々に安らぎをもたらしました。

『書経』で言われています。

『天の神が、下位の国民達を降臨させたのである。

(天の神が、)この下位の国民達の王を作っているのである。

(天の神が、)この下位の国民達の教師を作っているのである。

(天の神が、)これらの王や教師を作っているのは、王や教師は、上帝、天の神(の神意)を補助しなさい、と言う事なのである。

(天の神は、)四方で(遍く)、これらの王や教師に恩寵を与えている。

有罪も、無罪も、ただ私(、武王)に在るのである。

(私、武王は、)天下で、どうして、あえて、その(神の)志(、神意)を違えて超える事が有るだろうか？　いいえ！　神意に従う！』と。

武王は、天下で、一人でも悪事を行うのを(見逃して許してしまう事を)恥じました。

これが、武王の武勇なのです。

そして、武王もまた、一度でも、怒ると、天下の人々に安らぎをもたらしました。

今、宣王もまた、一度でも、怒ったら、天下の人々に安らぎをもたらせば、
人々は、ただ、宣王が武勇を好まないのを、恐れる事でしょう」

斉、宣王、見、孟子、於、雪宮。
王、曰。
「賢者、亦、有、此楽、乎？」
孟子、対、曰。
「有。
人、不、得、則、非、其上、矣。
不、得、而、非、其上、者、非、也。
為、民、上、而、不、与、民、同、楽、者、亦、非、也。
楽、民之楽、者、民、亦、楽、其楽。
憂、民之憂、者、民、亦、憂、其憂。
楽、以、天下。
憂、以、天下。
然、而、不、王、者、未、之、有、也。
昔者、斉、景公、問、於、晏子、曰。
『吾、欲、観、於、転附、朝儛。
遵、海、而、南。
放、於、琅邪。

吾、何、而、可、以、比、於、先王、観、也？』
晏子、対、曰。
『善、哉、問、也。
天子、適、諸侯、曰、巡狩。
巡狩、者、巡、所、守、也。
諸侯、朝、於、天子、曰、述職。
述職、者、述、所、職、也。
無、非、事、者。
春、省、耕、而、補、不足。
秋、省、斂、而、助、不、給。
夏、諺、曰。吾王、不、游、吾、何、以、休？ 吾王、不、予、吾、何、
以、助？
一、遊、一、予、為、諸侯、度』。
今、也、不、然。
師、行、而、糧食。
饑、者、弗、食。
労、者、弗、息。
睊睊、胥、讒、民、乃、作、慝。
方、命、虐、民、飲食、若、流。
『流連荒亡』、為、諸侯、憂。
従、流、下、而、忘、反。
謂、之、『流』。
従、流、上、而、忘、反。
謂、之、『連』。

従(したがう)、獣、無(ない)、厭(あきる)。
謂、之(これ)、『荒』。
楽、酒、無(ない)、厭(あきる)。
謂、之(これ)、『亡』。
先王、無(ない)、『流連』之楽、『荒亡』之行。
惟(ただ)、君、所、行、也。
景公、説(よろこぶ)、大、戒、於、国。
出、舎、於、郊。
於、是(ここ)、始、興発、補、不足。
召、大師、曰。
『為(ために)、我(われ)、作、君臣、相、説(よろこぶ)、之(の)、楽(おんがく)』。
蓋(かんがえるに)、徴招、角招、是(これ)、也。
其(その)詩、曰。
『畜、君、何(どうして)、尤(ひなんする)？』。
『畜、君』、者(とは)、『好(あいする)、君』、也」

斉の宣王が、雪宮という立派な建物で、孟子 先生に会った。
宣王が言った。
「賢者にもまた、この(立派な建物の)ような楽しみが有りますか？」
孟子 先生は答えて言った。
「有ります。

ただし、国民達は、(共に、その楽しみを)得る事ができなければ、上位者の悪口を言ってしまうでしょう。
(共に、その楽しみを)得る事ができないからといって、上位者の悪口を言ってしまう者は、正しくは、ありませんが。
しかし、国民達の上位者と成っても、国民達と楽しみを共同で所有しない者もまた、正しくありません。
国民達が楽しむのを楽しむ者に対して、国民達もまた、その者が楽しむのを楽しむのです。
国民達が心配するのを心配する者に対して、国民達もまた、その者が心配するのを心配するのです。
(真の王は、)天下の人々によって楽しむのです。
(真の王は、)天下の人々によって心配するのです。
そのようにしていて、(真の)王に成れなかった者は、未だいないのです。
昔、斉の景公が、晏子に質問して言いました。
『私、景公は、転附や朝儛という場所の辺りの見回りをしたいと欲します。
海岸線に沿って従って、南下したいです。
琅邪という所まで南下したいです。
私、景公は、どのように見回れば、古代の聖王の見回りに相当する事ができるであろうか?』と。
晏子が答えて言いました。
『善いですね、その質問は。
天子が、諸侯を見回りに行くのを、巡狩と呼びました。
巡狩とは、諸侯が守っている所を見て回る事なのです。
諸侯が、天子の朝廷に出仕するのを、述職と呼びました。

述職とは、諸侯が職務としている所の事を(天子に)述べる事なのです。
仕事ではないのに(遊ぶために)見回る者などいなかったのです。
(天子は、)春(から夏まで)は、農耕の状況に気を配って顧みて、不足しているものを(国民達に)補助してあげたのです。
(天子は、)秋(から冬まで)は、税収の状況に気を配って顧みて、不足しているものを(国民達に)補助してあげたのです。
夏王朝のことわざで言われています。私達の王が見回ってくれなければ、私達は、何によって休息できるであろうか？　いいえ！　私達の王が見回ってくれなければ、私達は、何によって補助してもらえるであろうか？　いいえ！　と。
(天子による)見回りの一つ一つが、諸侯に対しての規則と成っていたのです。
しかし、今は、そうではありません。
人々の教師であるべき(権力)者どもは、(遊ぶために、どこかへ)行って、食糧を食べてしまいます。
そのせいで、飢えている者達は、食べる事ができなく成ってしまいます。
また、そのせいで、(権力者どもに遊ぶために)労役させられる者達は、休息する事ができなく成ってしまいます。
(権力者どもを)睊睊と怨んでにらんで、(権力者どもの)悪口を言い合って、国民達は、悪事を行うように成ってしまいます。
(権力者どもは、)神からの使命を放り捨てて、国民達を虐待して、湯水を浪費して流すように飲食しています。
(権力者どもの)流連荒亡、遊びふける事は、部下の諸侯の苦しみと成ります。
川の流れに従って川下りして(遊びふけって)、正気に戻るのを忘れてしまう。
これを流と呼びます。

川の流れに従って川を遡上して(遊びふけって)、正気に戻るのを忘れてしまう。
これを連と呼びます。
獣に従って(狩猟して遊びふけって)、飽きない。
これを荒と呼びます。
酒を楽しんで(酒にふけって)、飽きない。
これを亡と呼びます。
古代の聖王は、遊びふける事をしませんでした。
ただ、君主、景公よ、あなたの行動次第(、あなたの意思次第)なのです』と。
景公は、喜んで、大いに国(の中心部の役人達)を戒めました。
(そうしてから、景公は、)国の中心部を出て、郊外に滞在しました。
(景公は、)この郊外から、(見回りを)盛んにし始めて、(国民達に)不足しているものを補助してあげました。
(景公は、)大師という音楽家を呼び寄せて言いました。
『私、景公の為に、君主と臣下が相互に喜び合うような音楽を作りなさい』と。
私、孟子が考えるに、『徴招』と『角招』という音楽が、それなのです。
その(『徴招』と『角招』という音楽の)歌詞で言われています。
『君主を好むのをどうして非難するのか?』と。
原文の『畜、君』とは、『好、君』という意味なのです」

斉、宣王、問、曰。
「人、皆、謂、我（われ）。
『毀、明堂』。
毀、諸（これ）？
已（やめる）、乎？」

孟子、対（こたえる）、曰。
「夫（それ）、明堂、者（もの）、王者之堂、也。
王、欲、行、王政、則（すなわち）、勿（なかれ）、毀、之（これ）、矣」

王、曰。
「王政、可、得、聞、与（か）？」

対（こたえる）、曰。
「昔者（むかし）、文王、之（の）、治、『岐』、也、耕、者（もの）、九、一。
仕、者（もの）、世（世襲する）、禄。
関、市、譏、而、不、征。
沢梁、無（ない）、禁。
罪、人、不、孥（妻子にまで及ぼす）。
老、而、無（いない）、妻、曰（いわく）、『鰥（おとこやもめ）』。
老、而、無（いない）、夫、曰（いわく）、寡。
老、而、無（いない）、子、曰（いわく）、独。
幼、而、無（いない）、父、曰（いわく）、孤。
此（この）四者、天下之窮民、而、無（ない）、告、者（もの）。

文王、発、政、施、仁、必、先、斯四者。

『詩』、云。

『哿、矣、富、人。

哀、此煢独』」

王、曰。

「善、哉、言、乎」

曰。

「王、如、善、之、則、何為、不、行？」

王、曰。

「寡人、有、疾。

寡人、好、貨」

対、曰。

「昔者、公劉、好、貨。

『詩』、云。

『乃、積。

乃、倉。

乃、裹、餱、糧、於、橐、於、囊。

思、戢、用、光。

弓矢、斯、張。

干戈、戚揚。

爰、方、啓行(↓行啓)』。
故、居、者、有、積、倉。
行、者、有、橐、嚢、也。
然、後、可、以、『爰、方、啓行(↓行啓)』。
王、如、好、貨、与、百姓、同、之、於、王、何、有？」

王、曰。
「寡人、有、疾。
寡人、好、色」

対、曰。
「昔者、大王(＝古公亶父)、好、色、愛、厥妃。
『詩』、云。
『古公亶父、来、朝、走、馬。
率、西水、滸、至、於、岐、下。
爰、及、姜女、聿、来、胥、宇』。
当、是時、也、内、無、怨女、外、無、曠夫。
王、如、好、色、与、百姓、同、之、於、王、何、有？」

斉の宣王が孟子先生に質問して言った。
「人々は皆、私、宣王に言います。
『明堂を壊すべきです』と。
これ(、『明堂』)を壊すべきですか？

それとも、(壊すのを)やめるべきですか?」

孟子先生は答えて言った。

「『明堂』という物は、王者の堂です。

宣王が、(真の)王の政治を行いたいと欲するならば、これ(、『明堂』)を壊すなかれ」

宣王が言った。

「『王の政治』について聞く事ができ得ますか?」

孟子先生は答えて言った。

「昔、文王が『岐』を統治していた時、農耕従事者の税は(収穫物の)九分の一でした。

(文王は、)仕えている者(、臣下)に、給料を世襲させました。

(文王は、)関所や市場では、(不審者を役人に)とがめる事はさせても、税を取り立てる事はしませんでした。

(文王は、)沢で魚を取る仕掛けを禁止しませんでした。

(文王は、)人の罪を罰する時に、妻子にまで及ぼさなかった。

老いて、妻がいない人を『男やもめ』と言います。

老いて、夫がいない人を『女やもめ』と言います。

老いて、子がいない人を『独身』と言います。

幼くして、父がいない人を『孤児(のような人)』と言います。

これらの四者は、天下の困窮している人々で、困窮を(上位者に)訴えてくれる他者などいません。

文王は、政策を立ち上げて『思いやり』を施す時に、必ず、これらの四者を優先しました。
『詩経』で言われています。
『よいのです、富裕な人々は。
これらの身寄りが無い孤独な人々をあわれんで思いやる』と」

宣王が言った。
「善いですね、その言葉は」

孟子先生は言った。
「宣王よ、もし、その言葉を善いとするならば、どうして行わないのですか？」

宣王が言った。
「私、宣王には病癖が有るのです。
私、宣王は財産を好んでしまいます」

孟子先生は答えて言った。
「昔の公劉も財産を好んでいましたが。
『詩経』で言われています。
『(公劉は、財産を)積み上げさせた。
(公劉は、財産を)倉いっぱいにさせた。
(公劉は、十分に、)乾飯などの食糧(と財産)を袋に包ませた。
(公劉は、)人心をおさめる事による(将来の)栄光を思っていたのである。

弓矢をここで張り。
盾や矛といった武器、斧と鉞といった武器(を整備した)。
(公劉達は、)ここで、まさに、出発した』と。
そのため、居残った者達にも倉いっぱいに積み上げられた財産が有りました。
(公劉と)同行した者達にも袋いっぱいの食糧と財産が有りました。
そうした後で、そうする事によって、『(公劉達は、)ここで、まさに、出発』できたのです。
宣王よ、もし、財産を、全ての人々と共同で所有するのを好めば、宣王に(真の王として不足している物は)何か有るでしょうか？　いいえ！」

宣王が言った。
「私、宣王には病癖が有るのです。
私、宣王は『色』、『性的なもの』を好んでしまうのです」

孟子先生は答えて言った。
「昔の古公亶父も、『色』、『性的なもの』を好んでいて、自分の妃を愛しました。
『詩経』で言われています。
『古公亶父が、朝に、馬を走らせて、来た。
西水という川のほとりに沿って従って、岐山の下に至った。
ここに及んで、(妃である)姜女と、ここに来て、家を建てて共に暮らした』
と。
(妃と愛し合う古公亶父による影響で、)この当時、国の内外に、女やもめで自身を怨み悲しむ女性はいなく成ったし、男やもめもいなく成った。

宣王よ、もし、『色』、『性的なもの』を全ての人々と共同で好めば、宣王に(真の王として不足している物は)何か有るでしょうか？　いいえ！」

孟子、謂、斉、宣王、曰。

「王之臣、有、托、其(その)妻子、於、其(その)友、而、之(いく)、『楚』、遊、者(もの)、比(ころ)、其(その)、反(かえる)、也、則(すなわち)、凍、餒、其(その)妻子、則(すなわち)、如之何(これ、いかん)？」

王、曰。

「棄(しりぞける)、之(これ)」

曰。

「士師、不能、治、士、則(すなわち)、如之何(これ、いかん)？」

王、曰。

「已(やめる)、之(これ)」

曰。

「四境之内、不、治、則(すなわち)、如之何(これ、いかん)？」

王、顧、左右、而、言、他。

孟子 先生は、 斉の宣王に言った。

「宣王の臣下で、 自分の妻子を友に託して楚に行って学んでいた者がいて、 その者が帰った時に、 その妻子が凍え飢えていたら、 その友をどうしますか？」

宣王が言った。

「その友を退(しりぞ)けます」

孟子 先生は言った。

「『士師』、 『裁判官』が、 『士』、 『役人』を(正しく)統治不能であったならば、 その裁判官をどうしますか？」

宣王が言った。

「その裁判官を辞めさせます」

孟子 先生は言った。

「四方の国境内を(正しく思いやり深く)統治できない王、 その王をどうすれば良いと思いますか？」

宣王は、 左右に振り返ると、 他の話題を話し(て話題をそらし)た。

孟子、見(あう)、斉、宣王、曰。
「所謂(いわゆる)、故国(古い国)、者(とは)、非、謂、有、喬木、之(の)、謂、也。
有、世臣(代々仕えている臣下)、之(の)、謂、也。
王、無(いない)、親臣、矣。
昔者(むかし)、所、進、今日、不、知、其亡(そのいない)、也」
王、曰。
「吾(われ)、何、以、識、其(その)不才、而、舎(すてる)、之(これ)？」
曰。
「国、君、進、賢、如(のように)、不得已(やむをえず)。
将(まさに)、使(させる)、卑、逾(こえる)、尊。
疏、逾、戚。
可、不、慎、与(か)？！
左右、皆、曰。『賢』。未、可、也。
諸大夫、皆、曰。『賢』。未、可、也。
国、人、皆、曰。『賢』。然、後、察、之(これ)。見(みる)、『賢』、焉。然、後、用、
之(これ)。
左右、皆、曰。『不可』。勿(なかれ)、聴。
諸大夫、皆、曰。『不可』。勿(なかれ)、聴。
国、人、皆、曰。『不可』。然、後、察、之(これ)。見(みる)、『不可』、焉。然、後、
去、之(これ)。
左右、皆、曰。『可、殺』。勿(なかれ)、聴。

諸大夫、皆、曰。『可、殺』。勿（なかれ）、聴。
国、人、皆、曰。『可、殺』。然、後、察、之（これ）。見（みる）、『可、殺』、焉。然、
後、殺、之（これ）。
故、曰。
『国、人、殺、之（これ）、也』。
如（のように）、此（この）、然、後、可、以、為（なる）、民、父母」

　孟子先生は、斉の宣王に会って言った。
「いわゆる、古い国とは、高い木が有る国を言っている訳ではないのです。
（古い国とは、）代々仕えている臣下がいる国を言っているのです。
しかし、宣王には、側近の臣下ですらいません。
昔、昇進させた臣下が、今日、いなくなるかも分からない有様（ありさま）です」

　宣王が言った。
「私、宣王は、何によって、臣下の非才を識別して、その非才の臣下を取捨
選択したら良いのでしょうか？」

　孟子先生は言った。
「国の君主は、賢者を、やむを得ないかのように、昇進させるのです。
（賢者である場合は、）まさに、卑賤な血筋の者を、尊い血筋の者よりも超越
させて、昇進させます。
（賢者である場合は、）身内ではない者を、身内の者よりも超越させて、昇進
させます。

そのため、慎重に昇進させるべきです！
左右に仕えている側近が皆、言ったとします。『賢者である』と。それでも、まだ昇進させるべきではありません。
諸々の役人が皆、言ったとします。『賢者である』と。それでも、まだ昇進させるべきではありません。
国中の人々が皆、言ったとします。『賢者である』と。そう言われた後、その者を観察してみます。『賢者である』と見えたとします。そう見えた後、その者を採用するのです。
左右に仕えている側近が皆、言ったとします。『用いているべきではない』と。それでも、聴き入れるなかれ。
諸々の役人が皆、言ったとします。『用いているべきではない』と。それでも、聴き入れるなかれ。
国中の人々が皆、言ったとします。『用いているべきではない』と。そう言われた後、その者を観察してみます。『用いているべきではない』と見えたとします。そう見えた後、その者を去らせるのです。
左右に仕えている側近が皆、言ったとします。『殺すべきである』と。それでも、聴き入れるなかれ。
諸々の役人が皆、言ったとします。『殺すべきである』と。それでも、聴き入れるなかれ。
国中の人々が皆、言ったとします。『殺すべきである』と。そう言われた後、その者を観察してみます。『殺すべきである』と見えたとします。そう見えた後、その者を殺すのです。
このため、言われています。
『(王、独りではなく)国中の人々が、その者を殺したのである』と。

このようにして、そうした後で、国民の父母と成る事ができるのです」

斉、宣王、問、曰。

「湯、放、桀。

武王、伐、紂。

有、諸（これ）？」

孟子、対（こたえる）、曰。

「於、伝、有、之（これ）」

曰。

「臣、弑、其（その）君。

可、乎？」

曰。

「賊（そこなう）、仁、者（もの）。

謂、之（これ）、『賊』。

賊（そこなう）、義、者（もの）。

謂、之（これ）、『残』。

『残賊』之人。

謂、之（これ）、『一夫（一人の男）』。

聞。

『誅、一夫、紂、矣』。

未、聞。

『弑、君、也』」

斉の宣王が孟子 先生に質問して言った。

「殷の湯王は、夏王朝の桀という暴君を追放しました。

周王朝の武王は、殷の紂王という暴君を討伐しました。

これは実際に有った事ですよね？」

孟子 先生は答えて言った。

「伝え聞く所によると、それは実際に有った事です」

宣王が言った。

「臣下が、その上司である君主を殺す。

善い事でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「『仁』、『思いやり』を損なう者。

そのような(思いやりを損なう)者を『賊』と言います。

正義を損なう者。

そのような(正義を損なう)者を『残』、『(正義の)破壊者』と言います。

『残』、『(正義の)破壊者』や『賊』、『思いやりを損なう者』である人。

そのような(正義の破壊者である思いやりを損なう者である)人を『ただの一人の男』と言います。
次のように聞いています。
『ただの一人の男に過ぎない紂王に天誅を下(くだ)した』と。
次のようには未だ聞いた事が有りません。
『上司である(真の)君主を殺してしまった』と」

孟子、謂、斉、宣王、曰。
「為(つくる)、巨室、則(すなわち)、必、使(させる)、工師、求、大木。
工師、得、大木、則(すなわち)、王、喜、以、為(なす)、能、勝(たえる)、其(その)任、也。
匠人、斲(きる)、而、小(ちいさくする)、之(これ)、則(すなわち)、王、怒、以、為(なす)、不、勝(たえる)、其(その)任、矣。
夫(それ)、人、幼、而、学、之(これ)。
壮、而、欲、行、之(これ)。
王、曰。
『姑(しばらく)、舎(おく)、女(なんじ)、所、学、而、従(したがう)、我(われ)』。
則(すなわち)、何如(いかん)?
今、有、璞玉(未加工の宝玉)、於、此(ここ)、雖(いえども)、万鎰、必、使(させる)、玉人(宝玉を加工する職人)、彫琢(宝玉の加工、研磨)、之(これ)。(鎰は金貨の重さの単位。一鎰は九百グラム。)
至、於、治、国家、則(すなわち)、曰。
『姑(しばらく)、舎(おく)、女(なんじ)、所、学、而、従(したがう)、我(われ)』。
則(すなわち)、何、以、異、於、教、玉人(宝玉を加工する職人)、彫琢(宝玉の加工、研磨)、玉、哉?」

孟子 先生は斉の宣王に言った。

「巨大な建物を造るのであれば、必ず、大工に大木を探し求めさせます。大工が大木を得たら、王は、喜び、『その任務にたえる事が可能である』と見なします。

しかし、大工が、その大木を切って小さくしてしまったら、王は、怒り、『その任務にたえる事ができない』と見なします。

さて、ある人が、幼くして、真理を学び始めたとします。

(その人が、)壮年に成って、真理を実行したいと欲したとします。

しかし、宣王が言ったとします。

『しばらく、あなたが学んだ真理は横に置いて、私、宣王に従いなさい』と。

どうでしょうか?

今、未加工の宝玉が、ここに有って、『万鎰』、『九トンの重さの金貨の価値』といえども、必ず、宝玉を加工する職人に、その宝玉を加工、研磨させます。

しかし、国家の統治においては、宣王は言います。

『しばらく、あなたが学んだ真理は横に置いて、私、宣王に従いなさい』と。

これは、(宣王が、)宝石を加工する職人に、宝玉の加工、研磨を教える事と、何が異なるでしょうか? いいえ! 同様である!」

斉、人、伐、『燕』、勝、之（これ）。
宣王、問、曰。
「或（ある）、謂、寡人。
『勿（なかれ）、取』。
或（ある）、謂、寡人。
『取、之（これ）』。
以、万乗之国、伐、万乗之国、五旬、而、挙（あげる）、之（これ）。
人力、不、至、於、此（ここ）。
不、取、必、有、天、殃（わざわい）。
取、之（これ）、何如（いかん）？」

孟子、対（こたえる）、曰。
「取、之（これ）、而、燕、民、悦（よろこぶ）、則（すなわち）、取、之（これ）。
古之人、有、行、之（これ）、者（もの）。
武王、是（これ）、也。
取、之（これ）、而、燕、民、不、悦（よろこぶ）、則（すなわち）、勿（なかれ）、取。
古之人、有、行、之（これ）、者（もの）。
文王、是（これ）、也。
以、万乗之国、伐、万乗之国、箪食壺漿、以、迎、王師（王の軍勢）、豈、有、他、哉、
避、水火、也。
如（のように）、水、益（ますます）、深、如（のように）、火、益（ますます）、熱、亦（また）、運、而已（のみ）、矣」

斉の人々は、燕という国を討伐して、この燕という国に勝った。

(斉の)宣王が孟子 先生に質問して言った。
「ある人は、私、宣王に言いました。
『(燕という国を)取り込むなかれ』と。
別の、ある人は、私、宣王に言いました。
『それ(、燕という国)を取り込みましょう』と。
一万台の戦車がある大国(である斉)が、一万台の戦車がある大国(である燕)を討伐して、五十日間で、これ(、燕という大国)から勝利をあげる事ができました。
人の力だけでは、そのような結果には至らないでしょう。(神の力の介入が有ったと思います。)
(燕という国を)取り込まなければ、必ず、天の神からの災いが有るでしょう。
これ(、燕という国)を取り込むのは、どうでしょうか? 善いでしょうか?」

孟子 先生は答えて言った。
「この燕という国を取り込んで、燕の国民が喜ぶのであれば、この燕という国を取り込みなさい。
古代人にも、そのような事を行った者がいます。
それは、周王朝の武王です。
この燕という国を取り込んで、燕の国民が喜ばないのであれば、この燕という国を取り込むなかれ。
古代人にも、そのような事を行った者がいます。
それは、周王朝の文王です。

一万台の戦車がある大国(である斉)が、一万台の戦車がある大国(である燕)を討伐して、(燕の国民達が)竹製の器の食べ物と壺の飲み物で、斉の宣王の軍勢を歓迎しましたが、他でもありません、(燕という国で行われていた悪政による)水に溺れるような火に焼かれるような苦しみを免れる事ができた(と思った)からなのです。

水がますます深くなるかのように(燕という国よりも悪い政治を)すれば、、火がますます熱くなるかのように(燕という国よりも悪い政治を)すれば、また(再び燕という国の統治権は斉以外の国へ)移動してしまうだけでしょう」

斉、人、伐、『燕』、取、之(これ)。

諸侯、将(しょうとする)、謀、救、燕。

宣王、曰。

「諸侯、多、謀、伐、寡人、者(もの)。

何、以、待、之(これ)?」

孟子、対(こたえる)、曰。

「臣、聞。

『七十里、為(なす)、政、於、天下、者(もの)』。

湯、是(これ)、也。

未、聞、以、千里、畏、人、者(もの)、也。

『書』、曰。

『湯、一、征、自、葛、始』。
天下、信、之。
東面、而、征、西夷、怨、南面、而、征、北狄、怨、曰。
『奚為、後、我?』。
民、望、之、若、大、旱、之、望、雲霓、也。
帰、市、者、不、止。
耕、者、不、変。
誅、其君、而、弔、其民、若、時雨、降、民、大、悦。
『書』、曰。
『徯、我后。
后、来、其、蘇』。
今、燕、虐、其民。
王、往、而、征、之。
民、以、為、将、拯、己、於、水火之中、也。
箪食壺漿、以、迎、王師。
若、殺、其父兄、係累、其子弟、毀、其宗廟、遷、其重器、如之何、其、可、也?
天下、固、畏、斉之強、也。
今、又、倍、地、而、不、行、仁、政。
是、動、天下之兵、也。
王、速、出、令、反、其旄倪、止、其重器、謀、於、燕、衆、置、君、而、後、去、之、則、猶、可、及、止、也」

斉の人々が燕という国を討伐して、この燕という国を取り込んでしまった。
諸侯達は共謀して斉から燕という国を救おうとした。
(斉の)宣王が言った。
「諸侯どもの多くが、私、宣王を討伐しようと共謀しています。
どのように、これらの諸侯どもを待ち伏せするべきでしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。
「私、孟子は、このように聞いております。
『七十里、四方の小国でも、天下を統治して政治を行っていた者がいた』と。
それは、殷の湯王です。
千里、四方の大国なのに他の人々の国々を恐れる者など未だ聞いた事がありません。
『書経』で言われています。
『殷の湯王は、初めに、葛という国から征服を始めた』と。
天下の人々は、この殷の湯王を信頼していました。
そのため、(殷の湯王が、)東を向いて征服していたら、西夷の人々は怨めしく思い、南を向いて征服していたら、北狄の人々は怨めしく思い、このように言いました。
『どうして、(殷の湯王 様は、)私達の国の征服を後回しにするのですか？』
と。
天下の人々は、大旱魃の時に雨雲から降り虹をかける雨を待ち望むかのように、この殷の湯王による征服を待ち望みました。
(殷の湯王が征服しに来ても、殷の湯王を信頼していたので、)市場に行こうとしていた者達は、市場に行くのを止めませんでした。

(殷の湯王が征服しに来ても、殷の湯王を信頼していたので、)農耕していた者達は、いつもと変わらず農耕し続けました。
(殷の湯王は、)暴君に天誅を下して、その暴君の国の国民達を弔問したので、適時に雨が降ったかのように、暴君の国の国民達は大いに喜びました。
『書経』で言われています。
『私達の(真の)君主(である殷の湯王)を待ち望んでいます。
私達の(真の)君主(である殷の湯王)が来てくれれば、私達は蘇る事ができます』と。
今、燕という国の暴君は、その燕という国の国民達を虐待していました。
宣王は、燕という国に行って、燕という国の暴君を征伐しました。
燕という国の国民達は、『(宣王は、)まさに、(燕という国で行われていた悪政による)水に溺れるような火に焼かれるような苦しみの中から自分達を助けてくれた』と見なしました。
そのため、(燕の国民達は、)竹製の器の食べ物と壺の飲み物で、斉の宣王の軍勢を歓迎しました。
しかし、(宣王たちは、)その燕の国民達の、父兄を殺し、子弟を拘束し、宗廟を破壊し、貴重な宝を持ち去る等のような事をしましたが、このような事をして、どうして善いでしょうか？　いいえ！　悪い！
天下の諸侯達は、本(もと)から、斉という国の強さを恐れていたのです。
今、また、(宣王は、燕という国を取り込んで)領地を倍にしましたが、思いやり深い政治を行(おこな)っていません。
それのせいで、天下の諸侯達は(斉の宣王を討伐するために)兵士達を動かしているのです。

宣王よ、速やかに、命令を出して、燕という国の老人と幼子を(燕という国に)帰還させ、(燕という国の)貴重な宝の略奪を止め、燕という国の人々とはかって(新しい正しい)君主を(燕という国に)置いて、そうした後で、燕という国から去れば、なお、まだ、諸侯達の共謀を止めるに及ぶ事が可能でしょう」

鄒、与、魯、鬨。

穆公、問、曰。

「吾有司、死者、三十三人。
而、民、莫、之、死、也。
誅、之、則、不、可、勝、誅。
不、誅、則、疾視、其長上之死、而、不、救。
如之何、則、可、也?」

孟子、対、曰。

「凶年、饑歳、君之民、老、弱、転、乎、溝壑。
壮、者、散、而、之、四方、者、幾千人、矣。
而、君之倉廩、実。
府庫、充。
有司、莫、以、告。
是、上、慢、而、残、下、也。

曾子、曰。
『戒、之。
戒、之。
出、乎、爾、者、反、乎、爾、者、也』。
夫、民、今、而、後、得、反、之、也。
君。
無、尤、焉。
君、行、仁、政、斯、民、親、其上、死、其長、矣」

鄒という国と魯という国が戦争した。
(鄒の)穆公が孟子 先生に質問して言った。
「私、穆公の国の役人の死者は三十三人にのぼります。
しかし、庶民どもは死にませんでした。
これらの庶民どもに天誅を下したくても、全員に天誅を下すのは不可能です。
しかし、(庶民どもに)天誅を下さなければ、(庶民どもは、)上司である役人達が死にそうでも、にらみつけて、救わなく成ってしまうでしょう。
これは、どうすれば良いでしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。
「凶作の年に、君主、穆公の国民のうち、老人や弱者は道端で死んで(死体が)転がっていました。
壮年の者も離散して四方の外国へ行ってしまう者達が幾千人もいました。
しかし、君主、穆公の倉と米倉は(食糧で)満ちていました。

(穆公の)宝物庫も(財宝で)満ちていました。
役人のうち、(庶民の困窮を穆公に)訴えた人はいませんでした。
これは、上位者達の怠慢で、下位者達を損なっていたのです。
曾子は言いました。
『次の事を戒めなさい。
次の事を戒めなさい。
あなたから出した物(、言動)は、あなたへ返って来る物(、言動)なのである』と。
そのため、今、庶民達は、その役人どもの悪い言動を(役人どもへ)仕返しする事ができ得ただけなのです。
君主、穆公よ。
庶民達を非難するなかれ。
君主、穆公が、そこで、思いやり深い政治を行(おこな)っていれば、庶民達も、上位者である役人達に親切に成って、上位者である役人達のために死力を尽くしてくれていたでしょう」

滕、文公、問、曰。
「滕、小国、也。
間、於、斉、楚。
事(つかえる)、斉、乎?
事(つかえる)、楚、乎?」

孟子、対(こたえる)、曰。
「是(この)謀、非、吾(わが)、所、能、及、也。
無已(やむなく)、則(すなわち)、有、一、焉。
鑿、斯(この)池、也、築、斯(この)城、也、与(とともに)、民、守、之(これ)、効(力を尽くす)、死、而、民、弗(ない)、
去、則(すなわち)、是(これ)、可、為(なす)、也」

滕の文公が孟子 先生に質問して言った。
「滕は小国です。
(滕は、)斉と楚という大国の間にあります。
斉に仕えるべきでしょうか?
楚に仕えるべきでしょうか?」

孟子 先生は答えて言った。
「そのような、はかり事は、私、孟子の及ぶ事ができる所ではありません。
やむを得なければ、一つ、提案が有ります。
この池を更に深く掘り、この城を更に堅固に築き直し、国民達と共に、この
城を守り、死力を尽くして国民が去らないようにすれば、そのようにする(、
滕という国を守る)事が可能でしょう」

滕、文公、問、曰。

「斉、人、将(しようとする)、築、『薛』。

吾(われ)、甚、恐。

如之何(これ、いかん)、則(すなわち)、可?」

孟子、対(こたえる)、曰。

「昔者(むかし)、大王(=古公亶父)、居、『邠』。

狄、人、侵、之(これ)。去、之(これ)、岐山之下、居、焉。

非、択(えらぶ)、而、取、之(これ)。

不得已(やむをえず)、也。

苟(まことに)、為(なす)、善、後世、子孫、必、有、王者、矣。

君子、創業、垂統、為(なす)、可、継、也。

若(のような)、夫(その)成功、則(すなわち)、天、也。

君。

如彼何(かれ、いかん)、哉?

強(つとめる)、為(なす)、善、而已(のみ)、矣」

滕の文公が孟子 先生に質問して言った。

「斉の人々が薛という所に城塞を築こうとしています。

私、文公は、とても恐れています。

これをどうすれば良いでしょうか?」

孟子 先生は答えて言った。

「昔、古公亶父は邠という所にいました。
狄という北の外国人達が、その邠に侵入した時、(古公亶父は、)その邠を
去って、岐山の下に行きました。
その岐山の下を選び取った訳ではないのです。
やむを得ずなのです。
まことに、善行を為(な)せば、後世の子孫に、必ず、王者がいる物なのです。
王者は、善行を始めて、善行による恩恵を後世の子孫に残して、善行を継ぐ
事ができるようにします。
君主、文公よ。
その善行の成功のような事は、天の神次第なのです。
あの斉の人々をどうにかできるでしょうか？　いいえ！　他人は、どうにも
できない！
(人は、)努めて、善行を為(な)すしかできないのです」

滕、文公、問、曰。
「滕、小国、也。
竭(つくす)、力、以、事(つかえる)、大国、則(すなわち)、不、得、免、焉。
如之何(これ、いかん)、則(すなわち)、可？」

孟子、対(こたえる)、曰。
「昔者(むかし)、大王(＝古公亶父)、居、『邠』。

狄、人、侵、之(これ)。

事(つかえる)、之(これ)、以、皮幣(皮と絹)、不、得、免、焉。

事(つかえる)、之(これ)、以、犬、馬、不、得、免、焉。

事(つかえる)、之(これ)、以、珠玉、不、得、免、焉。

乃(すなわち)、属、其(その)耆老、而、告、之(これ)、曰。

『狄、人、之(の)、所、欲、者(もの)、吾(わが)土地、也。

吾(われ)、聞、之(これ)、也。君子、不、以、其(その)、所以(ゆえん)、養、人、者(もの)、害、人。

二三子(あなたたち)。何(どうして)、患、乎、無(いない)、君？

我(われ)、将(しようとする)、去、之(これ)』。

去、『邠』、逾(こえる)、梁山、邑、於、岐山之下、居、焉。

邠、人、曰。

『仁、人、也。

不、可、失、也』。

従(したがう)、之(これ)、者(もの)、如(のよう)、帰、市。

或(ある)、曰。

『世、守、也。

非、身、之(の)、所、能、為(なす)、也。

効(力を尽くす)、死、勿(なかれ)、去』。

君。請、択(えらぶ)、於、斯(この)二者」

滕の文公が孟子 先生に質問して言った。

「滕は小国です。

力を尽くして大国に仕えても、滅亡を免れる事ができ得ません。

これをどうしたら良いでしょうか？」

孟子 先生は答えて言った。

「昔、古公亶父は邠という所に居ました。

狄という北の外国人達が、その邠を侵略しました。

その狄に、皮や絹を献上して、仕えようとしましたが、侵略を免れる事ができ得ませんでした。

その狄に、犬や馬を献上して、仕えようとしましたが、侵略を免れる事ができ得ませんでした。

その狄に、真珠や宝玉を献上して、仕えようとしましたが、侵略を免れる事ができ得ませんでした。

(古公亶父は、)その邠の長老を集めて言いました。

『狄という北の外国人達が欲している所の物は、私達の土地、邠です。

私、古公亶父は、このように聞いています。王者は、人々を養う事ができる根源である物(である土地)のために、人々に損害を与えない、と。

あなた達よ。どうして君主である私、古公亶父がいなく成る事を心配するのか？

私、古公亶父は、この邠を去ろうと思います』と。

(古公亶父は、)邠を去って、梁山を越えて、岐山の下に集落を作って、居る事にした。

邠の人達は言いました。

『(古公亶父は、)思いやり深い知的な人である。

(私達の君主として)失うべきではない』と。

(邠の人達は、)市場へ行くかのように、その古公亶父に従って付いて行きました。
一方、ある人は言っています。
『(自分の土地は先祖が)代々守ってきている物なのである。
自身だけでは、(自分の土地の放棄の決定を)できない物なのである。
死力を尽くして、(自分の土地を)去るなかれ』と。
君主、文公よ。請い願わくば、この二者から、選択してください」

魯、平公、将(しょうとする)、出。
嬖(お気に入りの人)人、臧倉、者(もの)、請、曰。
「他日、君、出、則(すなわち)、必、命、有司、所、之(いく)。
今、乗輿、已(すでに)、駕、矣。
有司、未、知、所、之(いく)。
敢、請」

公、曰。
「将(しようとする)、見(あう)、孟子」

曰。
「何、哉、君、所、為(なす)、軽、身、以、先、於、匹夫、者(とは)？
以、為(なす)、賢、乎？

礼義、由（より）、賢者、出。
而（しかし）、孟子之後喪、逾（こえる）、前喪。
君。
無（なかれ）、見（あう）、焉」

公、曰。
「諾」

楽正子、入、見（あう）、曰。
「君。
奚為（どうして）、不、見（あう）、孟軻（＝孟子）、也？」

曰。
「或（ある）、告、寡人、曰。
『孟子之後喪、逾（こえる）、前喪』。
是（ここ）、以、不、往、見（あう）、也」

曰。
「何、哉、君、所謂（いわゆる）、『逾（こえる）』、者（とは）？
前、以、士？
後、以、大夫？
前、以、三鼎？
而、後、以、五鼎、与（か）？」

曰。
「否。
謂、棺槨衣衾之美、也」
曰。
「非、所謂(いわゆる)、『踰(こえる)』、也。
貧富、不、同、也」
楽正子、見(あう)、孟子、曰。
「克(＝楽正子)、告、於、君。
君、為(なす)、来、見(あう)、也。
嬖人、有、臧倉、者(もの)、沮(ぼうがいする)、君。
君、是(ここ)、以、不、果(はたす)、来、也」
曰。
「行、或(あり)、使(させる)、之(これ)。
止、或(あり)、尼、之(これ)。
行、止、非、人、所、能、也。
吾(われ)、之(の)、不、遇、魯侯(＝平公)、天、也。
臧氏之子(＝臧倉)、焉(どうして)、能、使(させる)、予、不、遇、哉？」

魯の平公が外出しようとした。
平公のお気に入りの人である臧倉という者が請うて言った。

「他の日に、君主、平公が外出する時は、必ず、役人に行き先の場所を命令します。
今、乗り物は既に馬に繋いであります。
しかし、役人は行き先の場所を未だ知りません。
あえて、請い願わくば、行き先を教えてください」

平公が言った。
「孟子 先生に会おうと思います」

臧倉が言った。
「(孟子という、)ただの庶民の一人の男を重んじて優先して、君主である平公様が自身を軽んじるような事をするとは、何と言う事でしょうか？
孟子を賢者と見なしているのですか？
礼儀は、賢者から出現してきています。
しかし、孟子は、(無礼にも、)後の葬式を、前の葬式を超えた立派さで行いました。(無礼だから孟子は賢者ではありません。)
君主、平公様。
孟子に会うなかれ」

平公が言った。
「わかりました」

楽正子が平公の所に入って行って言った。
「君主、平公様。

どうして孟子先生に会わなかったのですか?」

平公が言った。

「ある者が私、平公に言いました。

『孟子は、(無礼にも、)後の葬式を、前の葬式を超えた立派さで行(おこな)った』と。

このため、孟子に会いに行きませんでした」

楽正子が言った。

「君主、平公様、いわゆる、『(無礼にも、)超えた立派さで行(おこな)った』とは、

何を言っているのでしょうか?

(孟子先生は、)前の葬式が、下級の役人としての立派さであった事を言っているのでしょうか?

(孟子先生は、)後の葬式が、上級の役人としての立派さであった事を言っているのでしょうか?

(孟子先生は、)前の葬式では、三つの鼎で捧げ物を捧げた事を言っているのでしょうか?

それなのに、(孟子先生は、)後の葬式では、五つの鼎で捧げ物を捧げた事を言っているのでしょうか?」

平公が言った。

「いいえ。

棺や『槨』、『棺の外囲い』や死者に着せた衣服や死者に掛けた布団(ふとん)の華美さを言っているのです」

楽正子が言った。

「いわゆる、『(無礼にも、)超えた立派さで行(おこな)った』訳ではないのです。
孟子 先生の貧富が同じではなかったからなのです」

楽正子が孟子 先生に会って言った。

「私、楽正子は、君主、平公に(孟子 先生に会うように)言いました。
君主、平公は孟子 先生に会いに来ようとしました。
平公のお気に入りの人である臧倉という者が、君主、平公を妨害しました。
君主、平公は、このため、孟子 先生に会いに来る約束を果たしませんでした」

孟子 先生は言った。

「行くのにも、行かせる者(、神霊)がいるのです。
やめるのにも、やめさせる者(、神霊)がいるのです。
行くのも、やめるのも、人に可能な所の物ではないのです。
私、孟子と、平公が会えないのは、天の神次第なのです。
臧倉が、どうして、私、孟子を、(平公と)会えないようにさせる事が可能でしょうか？　いいえ！」

公孫丑上

公孫丑、問、曰。

「夫子、当、路、於、斉、管仲、晏子之功、可、復、許、乎？」

孟子、曰。

「子、誠、斉、人、也。

知、管仲、晏子、而已（のみ）、矣。

或、問、乎、曾西、曰。（曾西は曾子の子だそうです。）

『吾子（あなた）、与（と）、子路、孰（どちらが）、賢（まさっている）？』。

曾西、蹴然、曰。

『吾（わが）、先子、之（の）、所、畏、也』。

曰。

『然、則（すなわち）、吾子（あなた）、与（と）、管仲、孰（どちらが）、賢（まさっている）？』。

曾西、艴然、不、悦（よろこぶ）、曰。

『爾（なんじ）、何（どうして）、曾（すなわち）、比、予（わたし）、於、管仲？

管仲、得、君、如（のように）、彼（あの）、其（それ）、専、也。

行、乎、国政、如（のように）、彼（あの）、其（それ）、久、也。

功烈、如（のように）、彼（あの）、其（それ）、卑、也。

爾（なんじ）、何（どうして）、曾（すなわち）、比、予（わたし）、於、是（これ）？』

曰（言ってみれば）、管仲、曾西、之（の）、所、不、為（なす）、也。

而（しかし）、子（あなた）、為（ため）、我、願、之（これ）、乎？」

曰。
「管仲、以、其君、覇。
晏子、以、其君、顕。
管仲、晏子、猶、不足、為、与？」

曰。
「以、斉、王、由、反、手、也」

曰。
「若、是、則、弟子之惑、滋、甚。
且、以、文王之徳、百年、而、後、崩、猶、未、洽、於、天下。
武王、周公、継、之、然、後、大、行。
今、言、王、若、易。
然、則、文王、不足、法、与？」

曰。
「文王、何、可、当、也？
由、湯、至、於、武丁、賢聖之君、六、七、作。
天下、帰、殷、久、矣。
久、則、難、変、也。
武丁、朝、諸侯、有、天下、猶、運、之、掌、也。
紂、之、去、武丁、未、久、也。
其、故家、遺俗、流風、善政、猶、有、存、者。
又、有、微子、微仲、王子比干、箕子、膠鬲、皆、賢人、也。

相、与、輔相、之。
故、久、而、後、失、之、也。
尺、地、莫、非、其、有、也。
一、民、莫、非、其、臣、也。
然、而、文王、猶、方、百里、起。
是、以、難、也。
斉、人、有、言。曰。
『雖、有、智慧、不如、乗、勢。
雖、有、鎡基、不如、待、時』。
今、時、則、易、然、也。
夏后、殷、周、之、盛、地、未、有、過、千里、者、也。
而、斉、有、其地、矣。
鶏鳴、狗吠、相、聞、而、達、乎、四境。
而、斉、有、其民、矣。
地、不、改、辟、矣。
民、不、改、聚、矣。
行、仁政、而、王、莫、之、能、御、也。
且、王者、之、不、作、未、有、疏、於、此時、者、也。
民、之、憔悴、於、虐政、未、有、甚、於、此時、者、也。
饑、者、易、為、食。
渇、者、易、為、飲。
孔子、曰。
『徳之流行、速、於、置郵、而、伝、命』。

当、今之時、万乗之国、行、仁政、民、之(の)、悦、之(これ)、猶(ちょうど〜のよう)、解、倒懸、
也。
故、事、半、古之人、功、必、倍、之(これ)。
惟(ただ)、此(この)時、為(なす)、然(しかり)」

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。
「孟子 先生は、斉という国の政治の進路を担当すれば、管仲や晏子のような
功績を再現できると自認しますか？」

孟子 先生は言った。
「あなた、公孫丑は、実に、斉の人ですね。
知っているのが管仲と晏子だけとは。
ある人が(曾子の子であると言われている)曾西に質問して言いました。
『あなた、曾西と、子路の、どちらが勝(まさ)っていますか？』と。
曾西は、蹴然と畏敬して慎んで、言いました。
『(子路は、)私、曾西の亡き父である、曾子が畏敬していた人です(。だから、
子路の方が勝っています)』と。
ある人が言いました。
『そうであるならば、あなた、曾西と、管仲の、どちらが勝(まさ)っています
か？』と。
曾西は、艴然と怒って、不機嫌に成って、言いました。
『あなたは、どうして、私、曾西を、管仲なんかと比較するのですか？
管仲は、君主を得て、あのように、権力を専有しました。

(管仲は、)あのように、長期間、国政を行いました。
しかし、(管仲の)功績は、あのように、卑賤です。
あなたは、どうして、私、曾西を、こんな人(、管仲)と比較するのですか?』と。
言ってみれば、管仲は、曾西が相手にすらしなかった人物です。
それなのに、あなた、公孫丑は、私、孟子に、この管仲の功績の再現なんかを願うのですか?」

公孫丑が言った。
「管仲は、自分の上司である君主を、諸侯の覇者にさせました。
晏子は、自分の上司である君主の名声を天下に表して轟(とどろ)かせました。
管仲や晏子ですらなお取るに足りない人物と見なしてしまうのですか?」

孟子 先生は言った。
「斉という大国によって、(真の)王に成るのは、ちょうど手を返すように簡単です」

公孫丑が言った。
「そのようであるならば、孟子 先生に教わっている私、公孫丑の困惑は、ますます、ひどいです。
また、文王の徳、善行をもってしても、百年後、崩御するまで(善行を)保持してもなお、(文王の善行は)天下に未だ遍(あまね)く通じませんでした。
武王と周公が、この文王の善行を継続して、その後、(やっと、天下の人々の間で善行が)大いに行われるように成りました。

今、孟子 先生は、(真の)王に成るのは簡単であるかのように、言いました。
そうであるならば、文王を手本として則(のっと)るだけでは(真の王に成るには)不足でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「文王(を手本として則るの)が、どうして(真の王に成るには)不足に当たるであろうか？　いいえ！
殷の湯王から武丁に至るまで、賢王や聖王が六、七人いました。
長期間、天下の人々は殷に帰属していました。
長期間の物事であれば、その物事を変えるのは難しいのです。
武丁は、ちょうど手のひらで天下を動かすかのように、諸侯を武丁の朝廷に出仕させて、天下を所有しました。
殷の暴君の紂王の時代は、武丁の時代から去る事、未だ長期間ではありませんでした。
武丁までの、古くから続いている(善い)家、残存している(善い)慣習、後世に残存している先人からの(善い)教え、善政の影響は、なお残存していました。
また、微子、微仲、王子である比干、箕子、膠鬲がいて、皆、賢者でした。
微子、微仲、比干、箕子、膠鬲は、お互いに、共に、この紂王の補佐をしていました。
そのため、長期間、続いた後で、(やっと、)この紂王の権威は喪失したのです。
『一尺』、『約三十センチ メートル』四方の土地でも、殷の所有していない土地は無かったのです。

一人でも、殷の臣民ではない人はいなかったのです。

その上、なお、文王は、百里、四方の小国から立ち上がったのです。

このため、難しかったのです。

斉の人々の、ある名言が有ります。その名言では言われています。

『智慧が有っても、時勢に乗じるのには及ばないのである。

優れた農具が有っても、農耕に適切な時機を待つのには及ばないのである』と。

さて、今という時には、簡単なのです。

夏王朝、殷、周王朝が盛んでしたが、千里、四方を超過する(大国の広大な)土地の王であった者は未だいません。

しかし、斉という国は、その(千里、四方の大国の広大な)土地を所有しています。

(夏王朝、殷、周王朝は、比較的に富裕層の人口が多かったので、鶏や犬の数も多かったため、)鶏の鳴き声と犬の吠える声が、どちらも聞こえて、四方の国境にまで到達するほどでした。

さて、斉という国も、そのように多数の国民がいます。

(斉という国は、)土地を改めて開拓する必要が有りません。

(斉という国は、)人を改めて集める必要が有りません。

(斉という国の君主は、)思いやり深い政治を行って、(真の)王と成るのに、

それを妨害可能なものは無いのです。

また、真の王者の不在は、(今の、)この時よりも、間が空いている事は未だ無いほどなのです。

虐政によって人々が憔悴しているのが、(今の、)この時よりも、ひどい事は未だ無いほどなのです。

飢えた者は、(食べ物を選り好みしないで、)簡単な食べ物を食べます。
のどが渇いた者は、(飲み物を選り好みしないで、)簡単な飲み物を飲みます。
孔子先生は言いました。
『徳、善行の流行は、馬を乗り換えていって命令を伝えるよりも速いのである』と。
まさに、今の、この時、一万台の戦車がある大国で、思いやり深い政治を行えば、ちょうど逆さに吊られた人の縄が解かれたかのように、人々は喜ぶでしょう。
そのため、古代の聖人の半分の善い事を行(おこな)っても、効果は必ず、その倍に成るでしょう。
ただ、今の、この時を、そのような時であると見なすばかりなのです」

公孫丑、問、曰。
「夫子、加、斉之卿相、得、行、道、焉、雖(いえども)、由(より)、此(これ)、覇、王、不、異(あやしむ)、矣。
如(のよう)、此(この)、則(すなわち)、動、心？　否(いな)、乎？」
孟子、曰。
「否。
我、四十、不、動、心」

曰。

「若（のよう）、是（この）、則（すなわち）、夫子、過、孟賁、遠、矣」

曰。

「是（これ）、不、難。

告子、先、我（われ）、不、動、心」

曰。

「不、動、心、有、道、乎？」

曰。

「有。

北宮黝、之（の）、養、勇、也、不、膚、橈（たわませる）、不、目、逃。

思、以、一毫（一つの毛）、挫（おる）、於、人、若（のように）、撻（むちうつ）、之（これ）、於、市、朝。

不、受、於、褐寛博（粗末な緩い衣服を着た卑賤な者）。

亦（また）、不、受、於、万乗之君。

視、刺、万乗之君、若（のように）、刺、褐夫（粗末な衣服を着た卑賤な者）。

無（ない）、厳、諸侯。

悪声、至、必、反（かえす）、之（これ）。

孟施舎、之（の）、所、養、勇、也、曰。

『視、不、勝、猶（ちょうど〜のよう）、勝、也。

量（はかる）、敵、而、後、進、慮、勝、而、後、会、是（これ）、畏、三軍（大軍）、者（もの）、也。

舎（＝孟施舎）、豈（どうして）、能、為（なす）、必勝、哉？

能、無（ない）、懼（おそれる）、而已（のみ）、矣』。

孟施舎、似、曾子。
北宮黝、似、子夏。
夫(その)二子之勇、未、知、其(その)、孰(どちらが)、賢(まさっている)。
然、而、孟施舎、守、約(簡単である)、也。
昔(むかし)者、曾子、謂、子襄、曰。
『子、好、勇、乎?
吾(われ)、嘗(かつて)、聞、大、勇、於、夫子(=孔子)、矣。
自(みずから)、反、而、不、縮(直)、雖(いえども)、褐寛博(粗末な緩い衣服を着た卑賤な者)、吾(われ)、不、惴(おそれる)、焉。
自(みずから)、反、而、縮(直)、雖(いえども)、千万人、吾、往(いく)、矣』。
孟施舎、之(の)、守、気、又(また)、不如(しかず)、曾子、之(の)、守、約(簡単である)、也」

曰。
「敢、問。
夫子、之(の)、不、動、心、与(と)、告子、之(の)、不、動、心、可、得、聞、与(か)?」

「告子、曰。
『不、得、於、言、勿(なかれ)、求、於、心。
不、得、於、心、勿(なかれ)、求、於、気』。
不、得、於、心、勿(なかれ)、求、於、気、可。
不、得、於、言、勿(なかれ)、求、於、心、不、可。
夫(それ)、志、気之帥、也。
気、体、之(の)、充、也。
夫(それ)、志、至、焉、気、次(つづく)、焉。
故、曰。

『持、其志、無、暴、其気』」

「既、曰。

『志、至、焉、気、次、焉』。

又、曰。

『持、其志、無、暴、其気』。

者、何、也？」

曰。

「志、一、則、動、気。

気、一、則、動、志、也。

今、夫、蹶、者、趨、者、是、気、也。

而、反、動、其心」

「敢、問。

夫子、悪、乎、長？」

曰。

「我、知、言。

我、善、養、吾、浩然之気」

「敢、問。

何、謂、『浩然之気』？」

曰。

「難、言、也。

其、為、気、也、至大、至剛、以、直、養、而、無、害、則、塞、于、天地之間。

其、為、気、也、配、義、与、道。

無、是、餒、也。

是、集義、所、生、者、非、義、襲、而、取、之、也。

行、有、不、慊、於、心、則、餒、矣。

我、故、曰。

『告子、未、嘗、知、義』。

以、其、外、之、也。

必、有、事、焉。

而、勿、正。

心、勿、忘。

勿、助長、也。

無、若、宋、人、然。

宋、人、有、閔、其苗、之、不、長、而、揠、之、者。

芒芒然、帰、謂、其人、曰。

『今日、病、矣。

予、助、苗、長、矣』。

其子、趨、而、往、視、之、苗、則、槁、矣。

天下、之、不、助、苗、長、者、寡、矣。

以、為、無益、而、舎、之、者、不、耘、苗、者、也。

助、之、長、者、揠、苗、者、也。

非、徒(いたずらに)、無益、而、又(また)、害、之(これ)」

「何、謂、『知、言』？」

曰。

「詖辞(偏った正しくない言葉)、知、其(その)、所、蔽。

淫辞(道理から外れた言葉)、知、其(その)、所、陥(おちいる)。

邪辞、知、其(その)、所、離。

遁辞(責任逃れの言葉)、知、其(その)、所、窮。

生、於、其(その)心、害、於、其(その)政。

発、於、其(その)政、害、於、其(その)事。

聖人、復(また)、起、必、従、吾(わが)言、矣」

「宰我、子貢、善(よく)、為(なす)、説辞。

冉牛(＝冉伯牛)、閔子(＝閔子騫)、顔淵(＝顔回)、善(よく)、言、徳行。

孔子、兼(かねあわせる)、之(これ)、曰。

『我(われ)、於、辞命、則(すなわち)、不、能、也』。

然、則(すなわち)、夫子(＝孟子)、既、聖、矣、乎？」

曰。

「悪(ああっ)、是(これ)、何、言、也？

昔者(むかし)、子貢、問、於、孔子、曰。

『夫子、聖、矣、乎？』。

孔子、曰。

『聖、則(すなわち)、吾(われ)、不、能。
我(われ)、学、不、厭(あきる)。
而、教、不、倦(あきる)、也』。
子貢、曰。
『学、不、厭(あきる)、智、也。
教、不、倦(あきる)、仁、也。
仁、且(かつ)、智。
夫子、既、聖、矣』。
夫(それ)、聖、孔子、不、居。
是(これ)、何、言、也？」
「昔者(むかし)、竊(ひそかに)、聞、之(これ)。
子夏、子游、子張、皆、有、聖人之一体。
冉牛(＝冉伯牛)、閔子(＝閔子騫)、顔淵(＝顔回)、則(すなわち)、具(そなえている)、体、而、微。
敢、問、所、安」
曰。
「姑(しばらく)、舍(おく)、是(これ)」
曰。
「伯夷、伊尹、何如(どうですか)？」
曰。
「不、同、道。

非、其君、不、事。
非、其民、不、使。
治、則、進。
乱、則、退。
伯夷、也。
何、事、非、君？
何、使、非、民？
治、亦、進。
乱、亦、進。
伊尹、也。
可、以、仕、則、仕。
可、以、止、則、止。
可、以、久、則、久。
可、以、速、則、速。
孔子、也。
皆、古、聖人、也。
吾、未、能、有、行、焉。
乃、所、願、則、学、孔子、也」

「伯夷、伊尹、於、孔子、若、是、班、乎？」

曰。

「否。
自、有、生民、以来、未、有、孔子、也」

「然、則(すなわち)、有、同、与(か)？」

曰。

「有。

得、百里之地、而、君、之(これ)、皆、能、以、朝、諸侯、有、天下。

行、一、不義、殺、一、不辜、而、得、天下、皆、不、為(なす)、也。

是(これ)、則(すなわち)、同」

曰。

「敢、問、其(その)、所以、異」

曰。

「宰我、子貢、有若、智、足(たりる)、以、知、聖人。

汚(恥)、不、至、阿(へつらう)、其(その)、所、好。

宰我、曰。

『以、予、観、於、夫子、賢(まさっている)、於(よりも)、堯、舜、遠、矣』。

子貢、曰。

『見(みる)、其(その)礼、而、知、其(その)政。

聞、其楽(そのおんがく)、而、知、其(その)徳。

由(より)、百世之後、等(順位)、百世之王、莫(ない)、之(これ)、能、違、也。

自(より)、生民(人々)、以来、未、有、夫子(＝孔子)、也』。

有若、曰。

『豈(どうして)、惟(ただ)、民、哉？

麒麟、之、於、走獣、鳳凰、之、於、飛鳥、太山(＝泰山)、之、於、丘、垤、河(＝黄河)、海(＝渤海)、之、於、行潦、類、也。
聖人、之、於、民、亦、類、也。
出、於、其類、抜、乎、其萃。
自、生民、以来、未、有、盛、於、孔子、也』」

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。
「孟子 先生が斉という国の政治を担当する高官に加わって、『道』、『真理』を行う事ができ得れば、それにより、斉という国を覇者や、(真の)王に成らせても、不思議ではありません。
(孟子 先生は、)このようであれば、心を動かしますか？　否か？」

孟子 先生は言った。
「いいえ(。私、孟子は心を動かしません)。
私、孟子は四十歳で心を動かさなく成りました」

公孫丑が言った。
「そのようであれば、(心を動かさないのであれば、)孟子 先生は孟賁を遥かに遠く超越している事に成ります」

孟子 先生は言った。
「これ(、心を動かさない事)は難しくはありません。
(例えば、)告子は、私、孟子よりも先に心を動かさなく成りました」

公孫丑が言った。

「心を動かさなく成れる方法が有るのですか？」

孟子 先生は言った。

「有ります。

北宮黝の勇気を養う方法は、皮膚を撓(たわ)ませない動かさないし、目を逸(そ)らさない動かさないのです。

また、他人に一つの毛でも手折(たお)られたら、市場や朝廷で鞭(ムチ)を打たれたかのように思うのです。

粗末な緩い衣服を着た卑賤な者から侮辱を受ける事を許さないのです。

また、一万台の戦車がある大国の君主からも侮辱を受ける事を許さないのです。

一万台の戦車がある大国の君主を(武器で)刺しても、粗末な衣服を着た卑賤な者を(武器で)刺したかのように見なすのです。

諸侯に対しても厳かに心身を引き締めて慎もうと思わないのです。

悪口を言われて来たら、必ず、その仕返しをするのです。

孟施舎は、勇気を養う方法について、言いました。

『勝てない相手でも、勝てるかのように見なすのです。

敵の力を量(はか)った後に進軍したり、勝てる策略を熟慮した後に会戦したりするのは、大軍を恐れてしまう者どもなのです。

私、孟施舎が、どうして必勝できるでしょうか？　いいえ！　必勝できない！

ただ、よく恐れないだけなのです』と。

孟施舍の勇気を養う方法は、曾子の勇気を養う方法に似ています。
北宮黝の勇気を養う方法は、子夏の勇気を養う方法に似ています。
それら(孟施舍と北宮黝)の二者の勇気を養う方法の、どちらが勝(まさ)っているのか？　は未だ分かりません。
しかし、孟施舍の勇気を守る方法は簡単です。
昔、曾子は子襄に言いました。
『あなた、子襄は勇気を好むのですか？
私、曾子は、かつて、大いなる勇気について、孔子 先生から聞いた事が有ります。
自ら反省すると正しくないのであれば、粗末な緩い衣服を着た卑賤な者が相手でも、恐れて、勇気が無く成ってしまいます。
自ら反省しても正しいのであれば、千万人が相手でも、立ち向かって行く事ができる(、と聞きました)』と。
そのため、孟施舍の勇気を守る方法もまた、(孔子 先生と)曾子の(大いなる)勇気を守る方法の簡単さには及びません」

公孫丑が言った。
「あえて質問します。
孟子 先生の心を動かさない方法と、告子の心を動かさない方法について、聞く事ができ得ますか？」

「告子は言いました。
『ある言葉を会得、理解できない時に、心で(無理矢理、)会得、理解しようと求めるなかれ。

心で会得、理解できない時に、気持ちで(無理矢理、)会得、理解しようと求めるなかれ』と。
『心で会得、理解できない時に、気持ちで(無理矢理、)会得、理解しようと求めるなかれ』と言うのは善い。
『ある言葉を会得、理解できない時に、心で(無理矢理、)会得、理解しようと求めるなかれ』と言うのは善くない。
志、意思は気持ち、気分、気を率(ひき)いるのです。
気持ち、気分、気は肉体に充満します。
志、意思が至っている所に、気持ち、気分、気も続くのです。
そのため、次のように、言われています。
『その(善い)志、意思を保持して、その(志、意思による)気持ち、気分、気を乱すなかれ』と」

(公孫丑が言った。)
「今、孟子 先生は言いました。
『志、意思が至っている所に、気持ち、気分、気も続くのです』と。
しかし、また、孟子 先生は言いました。
『その志、意思を保持して、その志、意思による気持ち、気分、気を乱すなかれ』と。
(『志、意思が至っている所に、気持ち、気分、気も続く』はずなのに、)
『その志、意思を保持して、その志、意思による気持ち、気分、気を乱すなかれ』とは、どうしてなのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「志、意思を統一すれば、気持ち、気分、気を動かせるのです。
気持ち、気分、気を統一すれば、志、意思を動かせるのです。
例えば、今、つまずいている者が、走っていたのは、気持ち、気分、気によるのです(。志、意思による気持ち、気分、気によって肉体を動かして走っていたのです)。
しかし、(つまずくと、)かえって、逆に、その心を動かしてしまいます(。肉体の失敗に気持ち、気分、気が動転して、志、意思を動転させて、心を動転させてしまうのです)」

公孫丑が言った。
「あえて質問します。
孟子先生は何を成長させていますか？　(勇気を成長させていますか？)」

孟子先生は言った。
「私、孟子は言葉についての知恵を成長させています。
また、私、孟子は、善く『浩然の気』、『水が広大に満ちているような気』を養っています」

(公孫丑が言った。)
「あえて質問します。
どのような物を『水が広大に満ちているような気』と言っているのですか？」

孟子先生は言った。

「言い表すのが難しいですが。
その『水が広大に満ちているような気』は、最大、最強、(意思に)正直(に従い)、損なわずに養えば、天地の間に充塞、充満します。
その『水が広大に満ちているような気』は、正義と、『道』、『真理』に分配されています。
正義や真理が無ければ、枯れてしまいます。
これ(、『水が広大に満ちているような気』)は、正しい行動をして徳を積んで集めると、生じるものであり、正義(や真理)が、これ(、『水が広大に満ちているような気』)を奪い取って来る訳ではないのです。
(悪い)行動をして心において満足できなければ、(『水が広大に満ちているような気』は)枯れてしまいます。
そのため、私、孟子は言っているのです。
『告子は、未だかつて、正義について知っていない』と。
告子の言葉が、正義について、的外れだからなのです。
(正義は、)必ず一大事とする必要が有ります。
しかし、(いつまでも)意識して(正義を)行おうとするなかれ。
(正義を)心に忘れるなかれ。
(正義への、心の)成長を(誤った方法で)助けようとするなかれ。
宋の、ある人が、次のようにしたように、するなかれ。
宋の人に、自分の苗が成長しないのを心配して、自分の苗を抜いてしまった者がいた。
その人は、芒芒然と疲れて帰って、自分の家の人に言った。
『今日は疲れた。
私は、苗の成長を助けた』と。

その人の子が走って行って、その苗を見てみると、その苗は枯れてしまっていた。

(実は、)天下の人々のうち、苗の成長を(誤った方法で)助けようとしない者は少数なのである。

(正義を)無益と見なしてしまって、この正義を捨て置いてしまう者は、苗の周囲の雑草を除草しない者のような者なのである。

この正義への心の成長を(誤った方法で)助けようとする者は、苗を抜こうとする者のような者なのである。

(正義への心の成長を誤った方法で助けようとするのは、)いたずらに無駄にする、無益である、だけではなく、また、この正義への心を損なってしまうのです」

(公孫丑が言った。)

「どのような物を『言葉についての知恵』と言っているのですか?」

孟子 先生は言った。

「偏った正しくない言葉によって、それを言った人が隠蔽している所を知る事ができます。

道理から外れた言葉によって、それを言った人が陥っている所を知る事ができます。

邪悪な言葉によって、それを言った人が正義から離れている所を知る事ができます。

言い逃れの言葉によって、それを言った人が困窮している所を知る事ができます。

(これらの悪い言葉が、)ある人の心に発生してしまったら、その人の政治を損なってしまいます。
損害が、その人の政治に発生してしまったら、その人の事物を損なってしまいます。
聖人が再来したら、必ず、私、孟子の言葉に賛同してくれるでしょう」

(公孫丑が言った。)
「宰我、子貢は、善く、雄弁に優れていた、とされています。
冉伯牛、閔子騫、顔回は、善く、徳行、善行に優れていた、と言われています。
孔子 先生は、これらを兼ね合わせていながら、言いました。
『私、孔子は、雄弁、言葉については、才能が無い』と。
そうであるならば、孟子 先生は既に聖人に成っているのですか?」

孟子 先生は言った。
「ああっ、(公孫丑は、)何を言っているのですか?
昔、子貢が孔子 先生に質問して言いました。
『孔子 先生は聖人なのですか?』と。
孔子 先生は言いました。
『私、孔子は聖人では、あり得ない。
私、孔子は(真理を)学んで飽きない(だけな)のである。
そして、(真理を)教えて飽きない(だけな)のである』と。
子貢は言いました。
『(真理を)学んで飽きないのは、智者である。

(真理を)教えて飽きないのは、仁者、思いやり深い知者である。
(孔子先生は、)思いやり深い者、かつ、知者である。
孔子先生は、既に聖人なのである』と。
孔子先生ですら聖人と名乗らなかったのです。
(公孫丑は、)何を言っているのですか?」

(公孫丑が言った。)
「昔、密(ひそ)かに、このように、聞きました。
子夏、子游、子張は皆、聖人の一部を備えていた。
冉伯牛、閔子騫、顔回は、聖人の全体を備えていたが、微(かす)かにであった。
孟子先生が安んじている境地、段階をあえて質問します」

孟子先生は言った。
「しばらく、そのような話は横に置きなさい」
公孫丑が言った。
「伯夷と、伊尹は、どうなのでしょうか?」
孟子先生は言った。
「生き方が違います。
(正しい)君主でなければ、仕えない。
(正しい)国民でなければ、使役しない。
(正しく)国が統治されていれば、進んで国に仕える。
国が乱れていれば、国の役人を辞退する。

こうしたのが、伯夷なのです。
どんな人にでも、君主として、仕える！
どんな人でも、国民として、使役する！
(正しく)国が統治されていてもまた、進んで国に仕える。
国が乱れていてもまた、進んで国に仕える。
こうしたのが、伊尹なのです。
国に仕えるべき時に、国に仕える。
役人をやめるべき時に、役人をやめる。
長期間するべき時は、長期間する。
速やかに、やめるべき時は、速やかに、やめる。
こうしたのが、孔子 先生なのです。
伯夷、伊尹、孔子 先生は皆、古代の聖人です。
私、孟子には、行う事ができた事が未だ有りません。
(私、孟子は、)願わくば、孔子 先生の生き方を学びたいです」

公孫丑が言った。
「伯夷と、伊尹と、孔子 先生は、そのように、同じく(聖人に)分類できるのですか？」

孟子 先生は言った。
「いいえ。
(中国)人が存在して以来、孔子 先生のような人は未だいないのです」

公孫丑が言った。

「そうであるならば、伯夷と、伊尹と、孔子　先生には、(聖人として)同じ部分が有るのですか？」

孟子　先生は言った。

「有ります。
百里、四方の土地を得れば、その土地の君主に成る事ができて、皆、諸侯を自分の朝廷に出仕させる事ができて、天下を所有できます。
一つでも不義な悪い事を行(おこな)ったり、一人でも無罪の人を殺したりして、天下を得る事を、皆、しません。
これらが、(伯夷と、伊尹と、孔子　先生の、聖人としての)同じ部分です」

公孫丑が言った。

「孔子　先生が、伯夷や伊尹とは異なる理由をあえて質問します」

孟子　先生は言った。

「宰我、子貢、有若には、聖人を知るに足りる智慧が有りました。
(宰我、子貢、有若は、)好きな人に、へつらうに至るような恥ずかしい人達ではない。
宰我は言いました。
『私、宰我が孔子　先生を観察した所では、(孔子　先生は、)堯、舜よりも遥かに遠く勝(まさ)っている』と。
子貢は言いました。
『ある人の礼儀を見れば、その人の政治を知る事ができる。
ある人の音楽を聞けば、その人の徳、善行を知る事ができる。

百代後に成ってから、百代の代々の王達に順位をつけても、それが間違っている可能性は無いだろう。

(中国)人が存在して以来、孔子先生のような人は未だいないのです』と。

有若は言いました。

『どうして、(中国)人だけであろうか？　いいえ！

麒麟と地を走る獣達、鳳凰と空を飛ぶ鳥達、泰山と丘や蟻塚、黄河や渤海と水たまりは、同類です。

聖人と人々もまた同類です。

しかし、麒麟、鳳凰、泰山、黄河と渤海、聖人は、同類より出て来ていますが、抜群のもの達なのです。

(中国)人が存在して以来、孔子先生よりも知恵や善行が盛んな人は未だいないのです』と」

孟子、曰。

「以、力、仮（かりる）、仁、者（もの）、覇。

覇、必、有、大国。

以、徳、行、仁、者（もの）、王。

王、不、待、大。

湯、以、七十里。

文王、以、百里。

以、力、服、人、者（もの）、非、心服、也。力、不贍（不足）、也。

以、徳、服、人、者、中心、悦、而、誠、服、也。
如、七十子、之、服、孔子、也。
『詩』、云。
『自、西。
自、東。
自、南。
自、北。
無、思、不、服』。
此、之、謂、也」

孟子 先生は言った。
「暴力があって、思いやりの力を借りる者は、覇者です。
覇者は必ず、大国を所有している必要が有ります。
『徳』、『善行』があって、思いやりを実行する者は、真の王です。
真の王は、大国の所有を待ち望む必要が無いのです。
殷の湯王は、七十里、四方の小国で、天下を統治しました。
周の文王は、百里、四方の小国で、天下を統治しました。
暴力によって人々を服従させた者に対して、(人々は、)心から服従している訳ではないのです。(人々には、)暴力が不足しているだけなのです。
『徳』、『善行』によって人々を服従させた者に対して、(人々は、)全身全霊で喜んで、まことに服従するのです。
七十人の弟子達が、孔子 先生に心服したように。
『詩経』で言われています。

『西からも人々が来た。
東からも人々が来た。
南からも人々が来た。
北からも人々が来た。
(武王に)心服しない人はいなかった』と。
この詩の意味は、このような事を言っているのです」

孟子、曰。
「仁、則、栄。
不、仁、則、辱。
今、悪、辱、而、居、不、仁、是、猶、悪、湿、而、居、下、也。
如、悪、之、莫如、貴、徳、而、尊、士。
賢者、在、位、能者、在、職、国家、閑暇。
及、是時、明、其政、刑、雖、大国、必、畏、之、矣。
『詩』、云。
『迨、天、之、未、陰雨、徹、彼桑土、綢繆、牖、戸。
今、此下民、或、敢、侮、予?』。
孔子、曰。
『為、此詩、者、其、知、道、乎』。
能、治、其国家、誰、敢、侮、之?
今、国家、閑暇、及、是時、般楽怠敖、是、自、求、禍、也。

禍(わざわい)、福、無(いない)、不、自(よりも)、己、求、之(これ)、者(もの)。
『詩』、云。
『永、言、配、命、自(みずから)、求、多福』。
『太甲』、曰。
『天、作(つくる)、孽(わざわい)、猶(なお)、可、違。
自(みずから)、作(つくる)、孽(わざわい)、不、可、活』。
此(これ)、之(これ)、謂、也」

孟子先生は言った。
「思いやり深ければ、栄えます。
思いやりが無ければ、辱められます。
今、恥辱を憎悪しても、思いやりの無さに停滞しているのは、ちょうど湿気を憎悪しても低い場所に留まっているような物なのである。
もし、この恥辱を憎悪するならば、『徳』、『善行』を重んじて『士』、『一人前である人達』を尊敬する方法に及ぶ他の方法は無いのである。
賢者が上位に在位していて、有能な者が適切な職務についていれば、国家には余裕ができるのである。
そのような時に及んで、その国家の政治と刑法を明確にすれば、大国といえども必ず、その国家を畏敬するであろう。
『詩経』で言われています。
『天空が曇って雨が降るのに未だ及ばないうちに、徹底的に、(用意周到に、)あの鳥達は桑の根で巣穴を塞いだ。

今、この下の人々のうち、私、鳥たちをあえて侮る人はいるであろうか？
いいえ！　いない！』と。
孔子 先生は言った。
『この詩を作った者は、道理を知っている』と。
自分の国家をよく統治していれば、誰が、あえて、それを侮るであろうか？
いいえ！
今、国家に余裕があるからといって、その時に及んで、快楽にふけって怠けて遊んでしまうのは、災いを求めるような物なのである。
災いや幸福は、自ら求めてしまう物なのである。
『詩経』で言われています。
『長く、天からの神の命令(である正義)に従って、自ら、多くの幸福を求めたのである』と。
『書経』の『太甲』で言われています。
『天の神による運命による災いは、なお、変える事ができる。
しかし、自ら作ってしまった災いは、動かす事はできない(。自ら作ってしまった災いは、変える事はできない)』と。
これらの詩や言葉の意味は、このような事を言っているのである」

孟子、曰。
「尊、賢、使、能、俊傑、在、位、則、天下之士、皆、悦、而、願、立、
於、其朝、矣。

市　廛、而、不、征、法、而、不、廛、則、天下之商、皆、悦、而、願、蔵、於、其市、矣。

関、譏、而、不、征、則、天下之旅、皆、悦、而、願、出、於、其路、矣。

耕、者、『助(=助法)』、而、不、税、則、天下之農、皆、悦、而、願、耕、於、其野、矣。

廛、無、夫里之布、則、天下之民、皆、悦、而、願、為、之、氓、矣。

信、能、行、此五者、則、隣国之民、仰、之、若、父母、矣。

率、其子弟、攻、其父母、自、有、生民、以来、未、有、能、済、者、也。

如、此、則、無、敵、於、天下。

無、敵、於、天下、者、『天吏』、也。

然、而、不、王、者、未、之、有、也」

孟子先生は言った。

「賢者を尊重し、有能な者を使用し、優れた傑物が上位に在位していれば、天下の『士』、『一人前である者』は皆、喜び、その朝廷で立身出世したいと願うであろう。

市場の店からは税を取り立てるが、法によって店が無い商人からは税を取り立てなければ、(商売が盛んに成るので、)天下の商人は皆、喜び、その市場の店で所蔵したいと願うであろう。

関所では、不審者をとがめるが、税を取り立てなければ、天下の旅人は皆、喜び、その道に出て旅したいと願うであろう。

農耕者は、『助法』によって私田からは税を取り立てなければ、天下の農業従事者は皆、喜び、その国の土地を耕したいと願うであろう。

住居からは、夫布と里布という税を取り立てなければ、天下の人々は皆、喜び、その国の国民に成りたいと願うであろう。

まことに、よく、これらの五つの物事を行えば、隣国の国民は、その国の政府を父母であるかのように仰ぐであろう。

ある子弟を率いて、その父母を攻める事ができた者は、人が存在して以来、未だいないのである。

このようにすれば、天下に敵はいないのである。

天下に敵がいない者は、『天吏』、『天の神から任命された統治者』なのである。

そうであるのに、王と成れなかった者は、未だいないのである」

孟子、曰。

「人、皆、有、不、忍、人、之、心。

先王、有、不、忍、人、之、心。

斯、有、不、忍、人、之、政、矣。

以、不、忍、人、之、心、行、不、忍、人、之、政治、天下、可、運、之、掌、上。

所以、謂、人、皆、有、不、忍、人、之、心、者、今、人、乍、見、孺子、将、入、於、井、皆、有、怵惕、惻隠之心。

非、所以、内、交、於、孺子之父母、也。
非、所以、要、誉、於、郷党、朋友、也。
非、悪、其声、而、然、也。
由、是、観、之、無、惻隠之心、非、人、也。
無、羞悪之心、非、人、也。
無、辞譲之心、非、人、也。
無、是非之心、非、人、也。
惻隠之心、仁之端、也。
羞悪之心、義之端、也。
辞譲之心、礼之端、也。
是非之心、智之端、也。
人、之、有、是四端、也、猶、其、有、四体、也。
有、是四端、而、自、謂、不、能、者、自、賊、者、也。
謂、其君、不、能、者、賊、其君、者、也。
凡、有、四端、於、我、者、知、皆、拡、而、充、之、矣。
若、火、之、始、然、泉、之、始、達。
苟、能、充、之、足、以、保、四海。
苟、不、充、之、不足、以、事、父母」

孟子 先生は言った。

「人には皆、他人が苦しむのを忍耐できない心が有る。
古代の聖王には、他人が苦しむのを忍耐できない心が有ったのである。
それで、人が苦しむのを忍耐できない(思いやり深い)政治が有ったのである。

他人が苦しむのを忍耐できない心によって、人が苦しむのを忍耐できない(思いやり深い)政治を天下で行えば、天下を手のひらの上で動かすようにできるのである。

『人には皆、他人が苦しむのを忍耐できない心が有る』と言う理由は、幼子が井戸に入ろうとするのを、今、人が突然、見たら、皆、他人の危険を恐れて、他人を思いやる心を持つであろう。

『幼子の父母との交流の輪の内に入ろう』という理由からではない。

『故郷の人々や友人達からの名誉を求めよう』という理由からではない。

『幼子が井戸に入ってしまったら、何か言われてしまうのが、嫌だから』という理由からではない。

このため、これらを観察すると、他人を思いやる心が無い人は、人でなしである。

また、悪を恥じる心が無い人は、人でなしである。

他人に謙遜して譲る心が無い人は、人でなしである。

善悪の是非を判断できる知的な心が無い人は、人でなしである。

他人を思いやる心は、思いやりの最初の一歩なのである。

悪を恥じる心は、正義の最初の一歩なのである。

他人に謙遜して譲る心は、礼儀の最初の一歩なのである。

善悪の是非を判断できる知的な心は、智慧の最初の一歩なのである。

人には両手と両足という四肢が有るように、人には、これらの四つの最初の一歩の心が有るのである。

これらの四つの最初の一歩の心が有りながら、(思いやりや、正義や、礼儀や、智慧を学ぶのを)『できない』という嘘を言う者どもは、自身を損壊させる者どもなのである。

『自分の上司である君主は、(思いやりや、正義や、礼儀や、智慧を学ぶのを)できない』と言う者どもは、自分の上司である君主の名誉を損なう者どもなのである。

普通、自身に四つの最初の一歩の心が有る者は、これら四つの最初の一歩の心の全てを拡張し充実させる事ができる、と知るであろう。

燃え始めた火や、満ちあふれ始めた源泉のように(、四つの最初の一歩の心の全てを拡張し充実できる)。

仮に、これら四つの最初の一歩の心を充実させる事ができれば、天下を保有するに足りるのである。

仮に、これら四つの最初の一歩の心を充実させる事ができなければ、父母に仕えるのにも不足してしまうのである」

　孟子、曰。

「矢人、豈(どうして)、不、仁、於(よりも)、函人、哉?

矢人、惟(ただ)、恐、不、傷、人。

函人、惟(ただ)、恐、傷、人。

巫、匠、亦(また)、然。

故、術、不、可、不、慎、也。

孔子、曰。

『里(いる)、仁、為(なす)、美。

択(えらぶ)、不、処、仁、焉、得、智?』。

夫、仁、天之尊爵、也。
人、之、安宅、也。
莫、之、御、而、不、仁、是、不、智、也。
不仁、不智、無礼、無義、人、役、也。
人、役、而、恥、為、役、由、弓人、而、恥、為、弓、矢人、而、恥、
為、矢、也。
如、恥、之、莫如、為、仁。
仁、者、如、射。
射、者、正、己、而、後、発。
発、而、不、中、不、怨、勝、己、者。
反、求、諸、己、而已、矣」

孟子 先生は言った。
「矢の職人は、どうして、鎧の職人よりも、思いやりが無いであろうか？
いいえ！
ただし、矢の職人は、ただ、(矢が)人を傷つける事ができないのを恐れてしまう。
鎧の職人は、ただ、(鎧を着ているのに)人が傷つくのを恐れる。
神の巫女と、(棺などを造る)大工もまた、同様なのである。
そのため、どの技術を学ぶかは、慎重になるべきである。
孔子 先生は言いました。
『思いやりの中にいるのを美と為す。
思いやりを選択して処さなければ、知は得られない！』と。

思いやりは、天の神が最高の位階の物としている物なのである。
(思いやりは、)人が安らぐ事ができる家なのである。
思いやりを妨害できるものは無いのに、思いやりが無い人は、智慧が無いのである(。愚者である)。
思いやりが無い、智慧が無い、無礼な、不義な邪悪な者どもは、他人に使役されるべき(欲望の)奴隷である。
他人に使役されるべき(欲望の)奴隷でありながら、(欲望の)奴隷であるのを恥と見なす者どもは、弓の職人が弓を造るのを恥じるような物なのであるし、矢の職人が矢を造るのを恥じるような物なのである。
もし他人に使役されるべき(欲望の)奴隷であるのを恥じるのであれば、思いやりの善行を為(な)す方法に及ぶ他の方法は無いのである。
思いやり深い者とは、正しく弓で矢を射る競技をする者のようなのである。
正しく弓で矢を射る競技をする者は、自己の心身を正した後で、矢を発射する。
矢を発射して的に命中しなくても、自分に勝利した者を怨んだりしない。
的に命中しなかった原因を自己の心身に求めるだけなのである」

孟子、曰。
「子路。人、告、之(これ)、以、有、過(あやまち)、則(すなわち)、喜。
禹、聞、善言、則(すなわち)、拝。
大、舜、有、大、焉(これ)。

善、与(と)、人、同。

舎(すてる)、己、従、人。

楽(たのしむ)、取、於、人、以、為(なす)、善。

自(より)、耕稼、陶、漁、以、至、為(なる)、帝、無(ない)、非、取、於、人、者(もの)。

取、諸(これ)、人、以、為(なす)、善、是(これ)、与(と)、人、為(なす)、善、者(もの)、也。

故、君子、莫(ない)、大、乎、与(と)、人、為(なす)、善」

孟子先生は言った。

「子路は、他人が子路に過(あやま)ちが有るのを告げると、(自分の過ちを知れば、自分の過ちを治せるので、)喜んだ。

禹は、善い言葉を聞くと、礼拝した。

大いなる舜には、これらよりも大いなる方法が有った。

(舜は、)善行を他人と共同して行(おこな)った。

(舜は、)自分(の傲慢さ)を捨てて他人に従った。

(舜は、)他人の善行を取り入れて善行を為(な)すのを楽しんだ。

(舜は、)農耕したり、陶工したり、漁をしたりしていた時から、王に成っていた時に至るまで、他人の善行を取り入れてきた。

他人の善行を取り入れて善行を為(な)すのは、他人と(共同して)善行を為(な)しているような物なのである。

そのため、王者として、他人と(共同して)善行を為(な)すよりも、大いなる方法は無いのである」

孟子、曰。

「伯夷、非、其君、不、事。
非、其友、不、友。
不、立、於、悪人之朝。
不、与、悪人、言。
立、於、悪人之朝、与、悪人、言、如、以、朝衣、朝冠、坐、於、塗炭。
推、悪、悪、之、心、思、与、郷人、立、其冠、不正、望望然、去、之、
若、将、浼、焉。
是故、諸侯、雖、有、善、其辞命、而、至、者、不、受、也。
不、受、也、者、是、亦、不、屑、就、已。
柳下恵、不、羞、汚君。
不、卑、小官。
進、不、隠、賢。
必、以、其道。
遺佚、而、不、怨。
阨窮、而、不、憫。
故、曰。
『爾、為、爾。
我、為、我。
雖、袒裼裸裎、於、我側、爾、焉、能、浼、我、哉?』。
故、由由然、与、之、偕、而、不、自、失、焉。
援、而、止、之、而、止。

援(引く)、而、止、之(これ)、而、止、者(は)、是(これ)、亦(また)、不、屑(いさぎよい)、去、已(のみ)」

孟子、曰。

「伯夷、隘。

柳下恵、不、恭。

隘、与(と)、不、恭、君子、不、由(よる)、也」

孟子 先生は言った。

「伯夷は、正しい君主でなければ、仕えなかった。

(伯夷は、)正しい友人でなければ、友人でいるのをやめた。

(伯夷は、)悪人の朝廷に仕えて立たなかった。

(伯夷は、)悪人と話さなかった。

(伯夷にとっては、)悪人の朝廷に仕えて立ったり、悪人と話したりするのは、朝廷用の正装の衣服を着て冠をかぶっても、泥にまみれ炭火に焼かれる中に座るかのようであった。

(伯夷の、)悪を憎悪する心を推測すると、(もし、伯夷が、)故郷の人と(並んで)立って、その人の冠が不正であれば、(伯夷は、)望望然と遠くの、あらぬ方向を眺めて、そこを去って、まさに汚れるかのように思うであろう。

このため、諸侯が任命書を善くして、それを持って到来した使者がいても、(伯夷は、)受け取らなかったのである。

(伯夷が、)受け取らなかったのも、『(悪い)諸侯の下に就くのは、正しくない』としただけなのである。

柳下恵は、汚れた(悪い)君主を(自分の上司である君主とする事を)恥じなかった。

(柳下恵は、)矮小な官位でも軽視しなかった。
(柳下恵は、)自ら進んで、自分の賢さを隠さなかった。
(柳下恵は、)必ず、正しい道理によって、行(おこな)った。
(柳下恵は、)役人を辞めさせられても、怨まなかった。
(柳下恵は、)困窮しても、心配しなかった。
そのため、(柳下恵は、)言いました。
『あなた(の事)は、あなた(の事)である。
私(の事)は、私(の事)である。
私、柳下恵のそばで、衣服を脱いで裸を見せるような無礼な事をされても、
お前が、どうして、私、柳下恵を汚せるであろうか？　いいえ！』と。
このため、無礼な者どもと共にいても、由由然と、ゆったりとしていて、自分を失わなかった。
引き止められれば、留まった。
引き止められて、留まったのは、『去るのが正しくない』としただけなのである」
　さらに、孟子 先生は言った。
「伯夷は、心が狭い。
柳下恵は、慎重ではない。
心の狭さと、慎重の無さは、王者の方法ではない」

公孫丑下

孟子、曰。

「天、時、不如(しかず)、地、利。

地、利、不如(しかず)、人、和。

三里之城、七里之郭、環、而、攻、之(これ)、而、不、勝。

夫(それ)、環、而、攻、之(これ)、必、有、得、天、時、者(もの)、矣。

然、而、不、勝、者(もの)、是(これ)、天、時、不如(しかず)、地、利、也。

城、非、不、高、也。

池、非、不、深、也。

兵(武器)、革(鎧兜)、非、不、堅、利、也。

米粟(穀物)、非、不、多、也。

委、而、去、之(これ)、是(これ)、地、利、不如(しかず)、人、和、也。

故、曰。

『域、民、不、以、封(国境)疆(境)之界。

固、国、不、以、山溪之険。

威、天下、不、以、兵(武器)、革(鎧兜)之利』。

得道者、多、助。

失道者、寡(すくない)、助。

寡(すくない)、助、之(の)、至(いたり)、親戚、畔(そむく)、之(これ)。

多、助、之(の)、至(いたり)、天下、順(したがう)、之(これ)。

以、天下、之(の)、所、順(したがう)、攻、親戚、之(の)、所、畔(そむく)。

故、君子、有、不戦、戦、必、勝、矣」

孟子 先生は言った。

「『天の時』、『天候による好機』は、地の利に及ばない。

地の利は、人の和に及ばない。

三里、四方の城、七里、四方の『郭』、『外を囲う壁』を包囲して攻撃しても勝てない(場合が多い)。

包囲して攻撃していれば、必ず、『天の時』、『天候による好機』を得る事が有るはずである。

それでも、勝てない事が有るのは、『天の時』、『天候による好機』は、地の利に及ばないからである。

城壁が高くない訳が無い。

城壁の周囲の池の掘(ほり)が深くない訳が無い。

武器が鋭利ではない訳が無いし、鎧、兜が堅固ではない訳が無い。

穀物の備蓄が多くない訳が無い。

城の統治を敵に委ねてしまう形で、城から去ってしまう事が有るのは、地の利は、人の和に及ばないからである。

そのため、言われている。

『人々を分断するのに、国境の境目は不要である(。人の和によって人々は分かれる)。

国を堅固にするのに、山や谷の険しさは不要である(。人の和によって国を堅固にできる)。

天下の国々を威嚇するのに、武器の鋭利さや、鎧や兜の堅固さは不要である(。人の和によって外国を威嚇できる)』と。

『得道者』、『真理を体得している者』には助けが多い。
『失道者』、『真理を見失っている者』には助けが少ない。
助けの少なさの至りでは、親戚が、そのような人に反逆してしまう。
助けの多さの至りでは、天下の人々が、そのような人に従ってくれる。
天下の人々が従ってくれるような人は、親戚が反逆してしまうような人を攻める。
そのため、王者は、争わないが、(悪人どもと)戦えば、必ず、勝つのである」

孟子、将（しょうとする）、朝、王。
王、使（させる）、人、来、曰。
「寡人、如（のよう）、就（いく）、見（あう）、者（もの）、也。
有、寒疾（風邪）、不、可、以、風。
朝、将（しょうとする）、視、朝。
不識（どうでしょう）？
可、使（させる）、寡人、得、見（あう）、乎？」
対（こたえる）、曰。
「不幸、而、有、疾。
不能、造（いたる）、朝」

明日、出、弔、於、東郭氏。

公孫丑、曰。

「昔者（むかし）、辞、以、病。

今日、弔。

或（あるいは）、者（は）、不可、乎？」

曰。

「昔者、疾。

今日、愈。

如之何（これ、いかん）、不、弔？」

王、使（させる）、人、問、疾。

医、来。

孟仲子、対（こたえる）、曰。

「昔者（むかし）、有、王命、有、采薪之憂（病の床にふせる）、不能、造（いたる）、朝。

今、病、小（すこし）、愈、趨、造（いたる）、於、朝。

我、不、識、能、至？ 否、乎？」

使（させる）、数人、要、於、路、曰。

「請、必、無（ない）、帰、而、造（いたる）、於、朝」

不得已(やむをえず)、而、之(いく)、景丑氏、宿(とまる)、焉。

景子(＝景丑氏)、曰。

「内、則(すなわち)、父、子、外、則(すなわち)、君、臣、人之大倫、也。

父、子、主、恩。

君、臣、主、敬。

丑(＝景丑氏)、見(みる)、王、之(の)、敬、子(＝孟子)、也。

未、見(みる)、所以、敬、王、也」

曰。

「悪(ああっ)、是、何、言、也?

斉、人、無(いない)、以、仁義、与(と)、王、言、者(もの)。

豈(どうして)、以、仁義、為(なす)、不、美、也?

其(その)心、曰。

『是(これ)、何、足(たりる)、与(ともに)、言、仁義、也?』。

云、爾(そのとおり)、則(すなわち)、不敬、莫(ない)、大、乎(よりも)、是(これ)。

我、非、堯、舜之道、不、敢、以、陳(のべる)、於、王、前。

故、斉、人、莫如(しかず)、我、敬、王、也」

景子、曰。

「否。

非、此(これ)、之(の)、謂、也。

礼、曰。

『父、召、無(ない)、諾。

君、命、召、不、俟(まつ)、駕』。
固(もとより)、将(しようとする)、朝、也。
聞、王命、而、遂(ついに)、不、果。
宜、与(と)、夫(かの)礼、若(のよう)、不、相、似、然」
曰。
「豈(どうして)、謂、是(これ)、与(か)？
曾子、曰。
『晋、楚之富、不可、及、也。
彼(かれ)、以、其(その)富。
我(われ)、以、吾(わが)仁。
彼(かれ)、以、其(その)爵。
我(われ)、以、吾(わが)義。
吾(われ)、何(どうして)、慊(よいとする)、乎、哉？』。
夫(それ)、豈(どうして)、不義、而、曾子、言、之(これ)？
是(これ)、或(あるいは)、一、道、也。
天下、有、達、尊、三。
爵、一。
歯、一。
徳、一。
朝廷、莫如(しかず)、爵。
郷党、莫如(しかず)、歯。
輔(たすける)、世、長、民、莫如(しかず)、徳。
悪(どうして)、得、有、其(その)一、以、慢、其(その)二、哉？

故、将、大、有、為、之、君、必、有、所、不、召、之、臣。
欲、有、謀、焉、則、就、之。
其、尊、徳、楽、道、不、如是、不足、以、有、為、也。
故、湯(＝湯王)、之、於、伊尹、学、焉、而、後、臣、之。
故、不、労、而、王。
桓公、之、於、管仲、学、焉、而、後、臣、之。
故、不、労、而、覇。
今、天下、地、醜、徳、斉、莫、能、相、尚。
無、他。
好、臣、其、所、教、而、不、好、臣、其、所、受、教。
湯(＝湯王)、之、於、伊尹、桓公、之、於、管仲、則、不、敢、召。
管仲、且、猶、不、可、召。
而、況、不、為、管仲、者、乎?」

孟子 先生は朝廷で王に会おうとした。
すると、王の使者が来て言った。
「私のような者の方こそが、孟子 先生の所へ行って会う物ですが。
風邪の症状が有って、外気の風は良くないのです。
孟子 先生が朝廷へ来てくれたら、朝廷で会おう、と思います。
どうでしょう?
私と会ってもらっても良いでしょうか?」

孟子 先生は答えて言った。
「(私、孟子も、)不幸にも、病気の症状が有ります。
朝廷に至る事ができないほどです」

(孟子 先生は、)翌日、東郭氏の葬儀に出ようとした。

公孫丑が(孟子 先生に)言った。
「(孟子 先生は、)昨日、病気(という嘘)で、(王の命令を)辞退しました。
(それなのに、孟子 先生は、)今日、葬儀に出ようとしています。
葬儀に出るのは、良くないのでは?」

(孟子 先生は)言った。
「昨日、(嘘の)病気でした。
今日、病気が治癒した(事にします)。
葬儀に出ます!」

王は、使者に(孟子 先生の)病気のお見舞いをさせた。
王によって、使者は、医者も連れて来た。

孟仲子が答えて言った。
「昨日、王からの命令が有りましたが、(孟子 先生は)病の床にふせっていたので、朝廷に至る事ができませんでした。
(孟子 先生は、)今、病気が少し治癒したので、走って、朝廷へ至ろうとされた所です。

(ただし、孟子 先生は病気であったので、)私、孟仲子は、孟子 先生が朝廷へ
至る事ができたか？　否か？　分かりませんが」

　孟仲子は、数人を道の要所に配置して、孟子 先生に伝言した。
「請い願わくば、必ず、帰宅しないで、朝廷へ至ってください」

　孟子 先生は、やむを得ず、景丑氏の所へ行って、泊まった。

　景丑氏の景子が孟子 先生に言った。
「家の中では父と子が、家の外では君主と臣下が、人の大いなる倫理、道理
なのです。
父と子では、恩を主(メイン)とします。
君主と臣下では、敬意を主(メイン)とします。
私、景子は、王が孟子 先生を敬っているのを見た事が有ります。
(しかし、私、景子は、)孟子 先生が王を敬っている、という根拠に成る事を
未だ見た事が有りませんが」

　孟子 先生は言った。
「ああっ、何を言うのですか？
斉の人々で、『仁義』、『思いやりと正義』を、王と話す者はいません。
どうして『思いやりと正義』を『美しくない』と見なすのですか？　(どうし
て『思いやりと正義』を『話すのに、ふさわしくない』と見なすのですか？)
斉の人々は心の中で思っているのです。
『王は、共に思いやりと正義について話すのには、不足している！』と。

その通りであるならば、そう思っているよりも(王に対して)不敬である事は無いのです。
私、孟子は、堯、舜の『道理』、『真理』を王の前で、あえて話してきています。
そのため、斉の人々は、王に対する敬意において、私、孟子に及ばないのです」

景子が孟子 先生に言った。
「いいえ。
そういう事を言っている訳ではないのです。
礼儀として、言われています。
『父が呼んだら、はい、と応える以外は無いのである。
君主が命令して呼んだら、乗り物を待たない(で走って行く)のである』と。
孟子 先生は本から朝廷へ行って王に会おうとしていました。
王の命令を聞いても、ついに果たしませんでした。
礼儀を違えているようですが」

孟子 先生は言った。
「何を言っているのですか？
曾子は言いました。
『晋や楚という国の君主の富には及ばないが。
彼ら、君主は富を誇ります。
私、曾子は仁、思いやり深い知的な行動を誇ります。
彼ら、君主は爵位、地位を誇ります。

私、曾子は私、曾子の正義にかなう行動を誇ります。
私、曾子が、どうして、君主を良いとしようか？　いいえ！』と。
曾子が、このように言っているのに、どうして、私、孟子が正しくないでしょうか？　いいえ！　正しい！
これは、あるいは、いくつかのうちの、一つの道かもしれませんが。
天下の人々は、三つの物を尊敬する、共通認識に達しています。
一つは、爵位、地位です。
一つは、歯による年功です。
一つは、徳、善行です。
朝廷では、爵位、地位に、他の物は及びません。
故郷の人々では、歯による年功に、他の物は及びません。
この世の人々を助けて成長させる事では、徳、善行に、他の物は及びません。
どうして、そのうちの一つが有るからといって残りの二つを軽視でき得るでしょうか？　いいえ！
そのため、大いなる事を為(な)そうという思いが有る君主には、必ず、呼びつけたりできない臣下がいる物なのです。
相談したい事が有る場合は、君主の方(ほう)が、その臣下の所へ行く物なのです。
その君主が、徳、善行を尊重して、道理、真理を楽しむようでなければ、大いなる事を為(な)すのに不足している事に成るのです。
だから、殷の湯王は、伊尹から(弟子として真理を)学んだ後で、その伊尹を臣下に迎えました。
このため、殷の湯王は、労せずして王に成れたのです。
桓公は、管仲から(弟子として政治を)学んだ後で、その管仲を臣下にしました。

そのため、労せずして覇者に成れたのです。

今、天下の国々は、土地の広さなども似ているし、君主の徳、善行も同じくらいであるし、相互に相手を超える事ができない有様(ありさま)です。

これは他でも、ありません。

(君主が、)教える必要が有る(自分より劣った)人を臣下にするのを好んで、教えを受ける必要が有る(自分より優れた)人を臣下にするのを好まないからなのです。

殷の湯王は伊尹を、桓公は管仲を、あえて、呼びつけませんでした。

管仲ですらなお、呼びつけるべきではなかったのです。

まして、管仲を相手にすらしない者(、私、孟子)は、なおさら呼びつけるべきではないのです」

　陳臻、問、曰。

「前日、於、斉、王、餽(おくる)、兼金(良質の金)一百、而、不、受。

於、宋、餽(おくる)、七十鎰、而、受。(鎰は金貨の重さの単位。一鎰は約九百グラム。)

於、薛、餽(おくる)、五十鎰、而、受。

前日、之(の)、不、受、是(ぜ)、則(すなわち)、今日、之(の)、受、非(ひ)、也。

今日、之(の)、受、是(ぜ)、則(すなわち)、前日、之(の)、不、受、非(ひ)、也。

夫子、必、居、一、於、此(ここ)、矣」

孟子、曰。
「皆、是(ぜ)、也。
当(あたる)、在、宋、也、予、将(しようとする)、有、遠行(遠出)。
行、者(もの)、必、以、贐(おくりもの)。
辞、曰。
『餽(おくる)、贐(おくりもの)』。
予、何為(どうして)、不、受?
当(あたる)、在、薛、也、予、有、戒心。
辞、曰。
『聞、戒。
故、為(ため)、兵、餽(おくる)、之(これ)』。
予、何為(どうして)、不、受?
若(のよう)、於、斉、則(すなわち)、未、有、処、也。
無(ない)、処、而、餽(おくる)、之(これ)、是(これ)、貨、之(これ)、也。
焉(どうして)、有、君子、而、可、以、貨、取、乎?」

陳臻が孟子 先生に質問して言った。
「昨日、斉で王が『百鎰』、『約九十キロ グラム』の『兼金』、『良質の金』を贈ろうとしたら、孟子 先生は受け取りませんでした。
宋で『七十鎰』、『約六十三キロ グラム』の金を贈られたら、孟子 先生は受け取りました。
薛で『五十鎰』、『約四十五キロ グラム』の金を贈られたら、孟子 先生は受け取りました。

前の受け取らなかったのが正しいのであれば、後の受け取ったのは正しくない事に成ります。
後の受け取ったのが正しいのであれば、前の受け取らなかったのは正しくない事に成ります。
孟子 先生は必ず、これらのうち一方の状態にいるはずです」

孟子 先生は言った。
「皆、正しいのです。
宋にいるにあたって、私、孟子は、遠出しようとしていました。
どこかへ行く者には必ず、贈り物をするの(が礼儀なの)です
言葉にして、言われました。
『贈り物を贈ります』と。
私、孟子は、どうして、受け取らない事ができようか？　いいえ！　受け取るのが礼儀である！
薛にいるにあたって、私、孟子は、警戒するべき状況に有りました。
言葉にして、言われました。
『孟子 先生が警戒している、と聞きました。
そのため、警備兵を雇うための費用として、この金貨を贈ります』と。
私、孟子は、どうして、受け取らない事ができようか？　いいえ！　受け取るのが礼儀である！
斉でのような場合は、未だ金銭を所要する理由が無かった。
金銭を所要する理由が無いのに、金銭を贈られるのは、(贈り物である金銭を賄賂にしてしまって)私腹を肥やしてしまう事に成ってしまう。

どうして、王者が、私腹を肥やす事にとらわれてしまう事が有って善いであろうか？　いいえ！　善くない！」

孟子、之(いく)、「平陸」、謂、其(その)大夫(＝距心)、曰。

「子、之(の)、持戟(戦)之士(士)、一日、而、三、失、伍(五人一組の軍隊の隊列)、則(すなわち)、去、之(これ)？　否、乎？」

曰。

「不、待、三」

「然、則(すなわち)、子、之(の)、失、伍(五人一組の軍隊の隊列)、也、亦(また)、多、矣。凶年、饑歳、子之民、老羸(老弱)、転、於、溝壑(餓死などで道端で死んでいる)、壮者、散、而、之(いく)、四方、者(もの)、幾千人、矣」

曰。

「此(これ)、非、距心、之(の)、所、得、為(なす)、也」

曰。

「今、有、受、人之牛、羊、而、為(ため)、之(これ)、牧(飼う)、之(これ)、者(もの)、則(すなわち)、必、為(ため)、之(これ)、求、牧(牧場)、与(と)、芻(干し草)、矣。求、牧(牧場)、与(と)、芻(干し草)、而、不、得、則(すなわち)、反(かえす)、諸(これ)、其(その)人、乎？

抑(それとも)、亦(また)、立、而、視、其(その)死、与(か)？」

曰。

「此(これ)、則(すなわち)、距心之罪、也」

他日、見(あう)、於、王、曰。

「王、之(の)、為、都、者(もの)、臣、知、五人、焉。
知、其(その)罪、者(もの)、惟(ただ)、孔距心」

為(ため)、王、誦、之(これ)。

王、曰。

「此(これ)、則(すなわち)、寡人之罪、也」

孟子先生は「平陸」という場所へ行って、そこの役人である距心という人に言った。

「あなたの部下の戦士が一日に三回も、五人一組の軍隊の隊列の秩序を失わせたら、その戦士を(軍隊から)去らせますか？　否か？」

距心が言った。

「三回目まで待ちません(。二回目で軍隊から去らせます)」

(孟子 先生は言った。)

「さて、あなた、距心もまた、多数の組の、五人一組の軍隊の隊列を、失わせてい(るのと同様の事をしてい)ます。
凶作の年には、あなた、距心の民のうち、老人や幼子などの弱者は餓死などで道端で死んで死体が転がっていますし、壮年の者は離散して四方の他の場所へ逃げていく者が幾千人もいます」

距心が言った。
「それは、私、距心が為し得た事では、ありません」

孟子 先生は言った。
「今、他人の牛や羊を受け取って、これらの牛や羊の為に、これらの牛や羊を飼っている者がいれば、必ず、これらの牛や羊の為に、牧場と干し草を探し求めます。
牧場と干し草を探し求めて、得られなければ、これらの牛や羊を、その(真の持ち主の)人に返しませんか？
それとも、立ち尽くして、それらの牛や羊の死を傍観しますか？」

距心が言った。
「それは、私、距心の罪です」

孟子 先生は、別の日に、王に会って言った。
「王の都市の為政者である臣下のうち、五人と面識を持ちました。
しかし、自分の罪を認識できた者は、距心だけでした」

孟子先生は、王の為に、その距心との会話を話した。

王が言った。

「それは、私、王の罪です」

孟子、謂、蚳鼃、曰。

「子、之、辞、『霊丘』、而、請、士師、似、也。(『霊丘』は某所の名前。)

為、其、可、以、言、也。

今、既、数月、矣。

未、可、以、言、与?」

蚳鼃、諫、於、王、而、不、用。

致、為、臣、而、去。

斉、人、曰。

「所以、為、蚳鼃、則、善、矣。

所以、自、為、則、吾、不、知、也」

公都子、以、告。

曰。
「吾、聞、之、也。
『有、官守、者、不、得、其職、則、去。
有、言責、者、不、得、其言、則、去』。
我、無、官守。
我、無、言責、也。
則、吾進退、豈、不、綽綽然、有、余裕、哉？」

孟子先生は蚳鼃という人に言った。
「あなたが『霊丘』という所の役人を辞めて、裁判官を請い願ったのは、あなたに似つかわしいです。
(王に)言うべき事が有るためでしょう。
今、既に数か月も経ちました。
(王には)未だ言う事ができていないのですか？」

そのため、蚳鼃は、王に忠告して、(王に)用いられなく成ってしまった。
このため、蚳鼃は、臣下でいる責務を果たして、(退任して、王の元から)去った。

斉の人々が言った。
「蚳鼃にした、孟子の理由は善い。
しかし、孟子、自身がしている事は、私達には(善いのか悪いのか)分からない(。意味不明である)」

公都子が孟子 先生に、斉の人々の言っている話を知らせた。

孟子 先生は言った。

「私、孟子は、このように聞いています。

『役人として守るべき職務が有る者は、その職務を果たす事ができ得なければ、(役人を辞めて、)去るべきである。

(役人として上司などに)善悪を言う義務が有る者は、その善悪を言う義務を果たす事ができ得なければ、(役人を辞めて、)去るべきである』と。

私、孟子には、役人として守るべき職務が無いのです。

私、孟子には、(役人として上司などに)善悪を言う義務が無いのです。

そのため、私、孟子の進退は、綽綽然と余裕が有る有様（ありさま）なのです(。だから、残念ながら、蚳鼃とは違うのです)」

孟子、為（なる）、卿、於、斉。

出、弔、於、滕。

王、使（させる）、「蓋」、大夫、王驩、為（なる）、輔行（副使）。

王驩、朝暮、見（あう）。

反、斉、滕之路、未、嘗（かつて）、与（と）、之（これ）、言、行事、也。

公孫丑、曰。

「斉、卿之位、不、為（なす）、小、矣。
斉、滕之路、不、為（なす）、近、矣。
反、之（これ）、而、未、嘗（かつて）、与（ともに）、言、行事、何（どうして）、也？」

曰。
「夫（それ）、既、或（あり）、治、之（これ）。
予、何（どうして）、言、哉？」

孟子 先生は斉という国で高官と成った。
孟子 先生は滕という国の葬儀に出る事に成った。
斉の王は、蓋という所の役人である王驩という人をその副使に成らせた。
王驩は朝と夕暮れに孟子 先生と会った。
孟子 先生は、斉と滕の間の道を折り返す間、その王驩と行事について、未だかつて話した事が無いままであった。

公孫丑が言った。
「斉の高官の地位を『小さい』とは見なせません。
斉と滕の間も『近い』とは見なせません。
斉と滕の間の道を折り返す間、王驩と共に行事について、未だかつて話した事が無いままであったのは、どうしてですか？」

孟子 先生は言った。
「既に、その行事を取り仕切る者(である王驩)がいたのである。

私、孟子が、どうして、口(くち)を挟(はさ)む必要が有るであろうか？」

孟子、自(より)、斉、葬、於、魯。
反(かえる)、於、斉、止、於、嬴。

充虞、請、曰。
「前日、不、知、虞(=充虞)之不肖、使(させる)、虞(=充虞)、敦、匠、事。
厳。
虞(=充虞)、不、敢、請。
今、願、竊(ひそかに)、有、請、也。
木、若(のよう)、以、美、然？」

曰。
「古者、棺、槨、無(ない)、度。
中古、棺、七寸。
槨、称(かなう、つり合う)、之(これ)。
自(より)、天子、達、於、庶人。
非、直(ただ)、為(なす)、観、美、也。
然、後、尽、於、人心。
不、得、不、可、以、為(なす)、悦(まんぞく)。
無(ない)、財、不、可、以、為(なす)、悦(まんぞく)。

得、之、為、有、財、古之人、皆、用、之。
吾、何為、独、不、然？
且、比、化、者、無、使、土、親、膚、於、人心、独、無、恔、乎？
吾、聞、之。
『君子、不、以、天下、倹、其親』」

孟子先生は、斉から帰って、魯で(母の)葬儀をした。
孟子先生は、斉へ帰る途中で、嬴という所に滞在した。

充虞が孟子先生に請い願って、言った。
「先日(の葬儀で)は、(孟子先生は、)不肖、私、充虞にも関わらず、私、充虞を、棺を造る仕事に重用してくださいました。
棺を造る仕事は、侵し難い厳粛な物です。
そのため、私、充虞は、あえて請い願って質問しませんでした。
今、請い願わくば、(私、充虞には、)密かに、疑問に思っている事が有ります。
棺の木は、あのように美しい物で、善いのでしょうか？」

孟子先生は言った。
「古代には、棺や、『槨』、『棺の外囲い』に、限度が無かったのです。
中古の時代に、棺の厚さは七寸に成りました。
『槨』、『棺の外囲い』は、その棺にかなう、つり合う物に成りました。
天子から庶民に至るまで、そう成りました。

ただ外観を美しくするだけではないのです。
そうした後で、人としての心を尽くすのです。
そう、でき得なければ、満足できないからです。
高価な木材でなければ、満足できないからです。
高価な木材を得られたら、高価な木材が有るために、古代の人は皆、その高価な木材を使用したのです。
私、孟子も、どうして、独りだけ、そうしないでいられようか？　いいえ！
かつ、(死体が)土と化す頃まで、土を死体の皮膚に近づけさせないだけでも、人としての心において、快いのです！
私、孟子は、このように聞いています。
『王者は、天下の人々を理由にして、その親の葬儀を倹約したりしない』
と」

沈同、以、其(その)私、問、曰。
「燕、可、伐、与(か)？」
孟子、曰。
「可。
子噲、不、得、与(あたえる)、人、燕。
子之、不、得、受、燕、於、子噲。
有、仕、於、此(ここ)。

而、子、悦、之、不、告、於、王、而、私、与、之、吾子之禄爵、夫士、
也、亦、無、王命、而、私、受、之、於、子、則、可、乎？
何、以、異、於、是？」

斉、人、伐、燕。

或、問、曰。
「勧、斉、伐、燕。
有、諸？」

曰。
「未、也。
沈同、問。
『燕、可、伐、与？』。
吾、応、之、曰。
『可』。
彼、然、而、伐、之、也。
彼、如、曰、『孰、可、以、伐、之？』、則、将、応、之、曰、『為、天
吏、則、可、以、伐、之』。
今、有、殺人者、或、問、之、曰、『人、可、殺、与？』、則、将、応、
之、曰、『可』。
彼、如、曰、『孰、可、以、殺、之？』、則、将、応、之、曰、『為、
士師、則、可、以、殺、之』。
今、以、燕、伐、燕。

何為(どうして)、勧、之(これ)、哉？」

沈同が私的に孟子 先生に質問して言った。
「燕という国(の暴君)を討伐しても善いでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「善いです。
子噲は、燕という国を他人に与える事が、でき得ない人物であったのです。
子之も、子噲から燕という国を受け取る事が、でき得ない人物であったのです。
(例えば、)ここに(王に)仕えている人がいたとします。
その王に仕えている人が自己満足で、王に報告せずに、私的に自分の領地などや爵位、地位を誰かに与える事や、与えられた人もまた、王の任命無しに、その王に仕えている人から、私的に領地や地位などを受け取るのは、善いでしょうか？　いいえ！　善くない！
この例え話と、何が異なるでしょうか？　いいえ！　同様である！」

斉の人々は燕という国を討伐した。

ある人が孟子 先生に質問して言った。
「(孟子 先生は、)斉に燕という国の(暴君の)討伐を勧めた(、と聞きました)。
これは実際に有った事でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「勧めた事は未だ有りません。

沈同が私、孟子に質問しました。

『燕という国を討伐しても善いでしょうか?』と。

私、孟子は、この質問に応えて言いました。

『善いです』と。

彼、沈同は、そう質問してから、その燕という国を討伐しました。

彼、沈同が、もし、『誰が、その燕という国を討伐しても善いのでしょうか?』と言っていたら、(私、孟子は、)まさに、その質問に応えて、『天吏、天の神から任命された統治者であれば、その燕という国を討伐しても善いです』と言ったであろう。

今、殺人者がいて、ある人が、その殺人者について質問して、『(殺人者である)人を殺しても善いでしょうか?』と言ったら、(私、孟子は、)まさに、その質問に応えて、『善いです』と言ったであろう。

その、ある人が、もし、『誰が、(殺人者である、)その人を殺しても善いでしょうか?』と言ったら、(私、孟子は、)まさに、その質問に応えて、『裁判官であれば、(殺人者である、)その人を殺しても善いです』と言ったであろう。

今、燕という国(の暴君)が、燕という国(の暴君)を討伐したような物なのです。(斉の国の君主は暴君です。)

どうして、そんな事を勧めるでしょうか? いいえ!」

燕、人、畔（そむく）。

王、曰。

「吾（われ）、甚、慙（はじる）、於、孟子」

陳賈、曰。

「王、無（なかれ）、患（うれう）、焉。

王、自（みずから）、以、為（なす）、与（と）、周公、孰（どちらが）、仁、且（かつ）、智？」

王、曰。

「悪（ああっ）、是（これ）、何、言、也？」

曰。

「周公、使、管叔、監、殷。

管叔、以、殷、畔（そむく）。

知、而、使（させる）、之（これ）、是（これ）、不仁、也。

不、知、而、使（させる）、之（これ）、是（これ）、不智、也。

仁智、周公、未、之（これ）、尽、也。

而、況（まして）、於、王、乎？

賈(＝陳賈)、請、見（あう）、而、解、之（これ）」

見（あう）、孟子、問、曰。

「周公、何（どのような）、人、也？」

曰。

「古、聖人、也」

曰。

「使（させる）、管叔、監、殷。

管叔、以、殷、畔（そむく）、也。

有、諸（これ）?」

曰。

「然」

曰。

「周公、知、其（その）、将（しようとする）、畔（そむく）、而、使（させる）、之（これ）、与（か）?」

曰。

「不知、也」

「然、則（すなわち）、聖人、且（かつ）、有、過（あやまち）、与（か）?」

曰。

「周公、弟、也。

管叔、兄、也。

周公之過、不、亦（また）、宜（とうぜんである）、乎?

且（かつ）、古之君子、過（あやまちをおかす）、則（すなわち）、改、之（これ）。
今之君子、過（あやまちをおかす）、則（すなわち）、順（したがう）、之（これ）。
古之君子、其過（そのあやまち）、也、如、日、月之食。
民、皆、見（みる）、之（これ）。
及（およぶ）、其（その）、更、也、民、皆、仰、之（これ）。
今之君子、豈（どうして）、徒（いたずらにむだに）、順（したがう）、之（これ）？
又（また）、従（したがう）、為（なす）、之（これ）、辞」

燕という国の人々が反乱を起こした。

斉の宣王が言った。
「私、宣王は、孟子先生に対して、とても恥ずかしい」

陳賈が宣王に言った。
「宣王よ、心配するなかれ。
宣王よ、宣王、自身と、周公の、どちらが、思いやり深い者、かつ、智者であるとしますか？」

宣王が言った。
「ああっ、何を言っているのか？」

陳賈が宣王に言った。
「周公は、管叔に殷を監督させせました。

管叔は、殷によって反乱を起こしました。
知っていて、反乱させたら、思いやりが無いです。
知らないで、反乱させたら、智慧が無いです。
周公ですら、思いやりと智慧を未だ尽くす事ができませんでした。
まして、宣王は、なおさらではないですか？
陳賈が孟子に要請して会って『弁解』、『言い訳』しましょう」

陳賈が孟子 先生に会って質問して言った。
「周公は、どのような人でしたか？」

孟子 先生は言った。
「古代の聖人です」

陳賈が言った。
「(周公は、)管叔に殷を監督させました。
管叔は、殷によって反乱を起こしました。
これは実際に有った事でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「そうです」

陳賈が言った。
「周公は、管叔が反乱を起こそうとしていたのを知って、反乱を起こさせたのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「(周公は、)知りませんでした」

(陳賈が言った。)

「そうであるならば、聖人でありながら、かつ、過ちが有る物なのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「周公は弟です。

管叔は、その兄です。

周公が過ちを犯したのもまた、当然ではないでしょうか?

かつ、古代の王者は、過ちを犯したら、その過ちを改めました。

今の君主は、過ちを犯したら、その過ちに従ってしまいます。

古代の王者の過ちは、日食や月食のようでした。

国民は皆、それを見る事ができました。

その過ちを改めるに及ぶと、国民は、皆、その悔い改めを仰ぎ見ました。

今の君主は、どうして、いたずらに無駄に、自分の過ちに従ってしまうのか?

また、自分の過ちに従って、言い訳をしてしまいます」

孟子、致、為(なる)、臣、而、帰。

王、就(いく)、見(あう)、孟子、曰。

「前日、願、見(あう)、而、不、可、得。

得、侍、同、朝、甚、喜。

今、又(また)、棄、寡人、而、帰。

不、識？

可、以、継、此(これ)、而、得、見(あう)、乎？」

　対(こたえる)、曰。

「不、敢、請、耳(のみ)。

固(もとより)、所、願、也」

他日、王、謂、時子、曰。

「我(われ)、欲、中国、而、授、孟子、室。

養、弟子、以、万鐘(大量)。

使(させる)、諸大夫、国人、皆、有、所、矜式(慎んで手本にする)。

子、盍(どうか)、為(ため)、我、言、之(これ)？」

時子、因(よって)、陳子、而、以、告、孟子。

陳子、以、時子之言、告、孟子。

孟子、曰。

「然。
夫時子、悪、知、其不可、也？
如、使、予、欲、富、辞、十万、而、受、万？
是、為、欲、富、乎？
季孫、曰。
『異、哉、子叔疑。
使、己、為、政。
不、用、則、亦、已、矣。
又、使、其子弟、為、卿。
人、亦、孰、不、欲、富貴？
而、独、於、富貴之中、有、私、龍断、焉』。
古、之、為、市、也、以、其、所、有、易、其、所、無、者。
有司者、治、之、耳。
有、賤丈夫、焉。
必、求、龍断、而、登、之、以、左右、望、而、罔、市、利。
人、皆、以、為、賤。
故、従、而、征、之。
征、商、自、此賤丈夫、始、矣」

孟子は、臣下としての務めを果たし(て臣下を辞め)て、帰った。
宣王は、孟子 先生の所へ行って会って言った。
「先日は、孟子 先生に会おうと願いながら、でき得ませんでした。

(しかし、その後、)そばにいて同じ朝廷にいる事ができ得て、とても喜びました。
(けれども、孟子 先生は、)今、また、私、宣王を捨てて帰ってしまわれました。
どうでしょうか？
これに引き続き、会う事ができ得ませんか？」

孟子 先生は答えて言った。
「(私、孟子が、)あえて請い願うまでも無いばかりです。
(私、孟子が、)本(もと)から願っていた所の事です」

後日、宣王が時子に言った。
「私、宣王は、国の中央に、孟子 先生へ家を授けたいと欲(ほっ)します。
(私、宣王は、)大量の金銭で、孟子 先生の弟子達を養いたいです。
(私、宣王は、孟子 先生を、)諸々の役人と国民の皆に慎んで手本にさせたいです。
あなた、時子よ、どうか、私、宣王の為(ため)に、この言葉を孟子 先生に伝えてください！」

時子が、陳子によって、孟子 先生に告げた。

陳子が、時子の伝言を、孟子 先生に告げた。

孟子 先生は言った。

「そうですか。
あの時子は、どうして、それが不可能である事が分からないのでしょうか？
もし、私、孟子に富を欲望させる事ができたら、十万の金銭の職を辞めていても、大量の金銭を受け取るのでしょうが！
私、孟子は、富を欲望しない！
季孫氏の、ある人は言いました。
『子叔疑は、あやしい。
君主が自分にさせたら、政治を行う物であるし、
君主が用いなくなったら、辞める物である。
しかし、また、子叔疑は、自分の子や弟などを高官に成らせた。
人は誰でも富や高貴な地位を欲してしまう！
そうして、子叔疑は、富や高貴な地位を独占していながら、私的に壟断、利益を独占している』と。
古代の市場では、所有している物を、所有していない物と交換する場であった。
市場を司る役人は、それを統治するだけであった。
しかし、ある(、心が)卑賤な男がいた。
その(、心が)卑賤な男は、必ず切り立った高い場所を探し求めて、高い場所に登って、左右に眺めて、市場の利益を一網打尽にしてしまった。
人々は皆、その(、心が)卑賤な男を『(心が)卑賤である』と見なした。
したがって、このため、その(、心が)卑賤な男から税を取り立てた。
商人から税を取り立てるのは、その(、心が)卑賤な男から始まった事なのです」

孟子、去、斉、宿、於、昼。

有、欲、為(ため)、王、留、行、者(もの)。

坐、而、言。

不、応。

隠、几、而、臥。

客、不、悦(よろこぶ)、曰。

「弟子、斎宿、而、後、敢、言。

夫子、臥、而、不、聴。

請、勿(ない)、復(また)、敢、見(あう)、矣」

曰。

「坐。

我(われ)、明、語、子。

昔者(むかし)、魯、繆公、無(いない)、人、乎、子思之側、則(すなわち)、不、能、安、子思。

泄柳、申詳、無(いない)、人、乎、繆公之側、則(すなわち)、不、能、安、其(その)身。

子、為(ため)、長者、慮、而、不、及(およぶ)、子思。

子、絶、長者、乎？

長者、絶、子、乎？」

孟子 先生は斉を去って、昼という場所に泊まった。
斉の王の為(ため)に、孟子 先生が去って行くのを引き留める者がいた。
その者は、座り込んで、孟子 先生に話しかけた。
しかし、孟子 先生は応えなかった。
孟子 先生は、仕切りで身を隠して、寝ているふりをした。
その者が不機嫌に成って言った。
「私は、一晩、心身を清めた後で、あえて、話しかけています。
しかし、あなた、孟子は、寝ているふりをして、聞き入れてくれません。
請い願わくば、また、あえて、(あなた、孟子と)会おうとは思いません」

孟子 先生は言った。
「座ったままでいなさい。
私、孟子は、明らかに、あなたに話しましょう。
昔、魯という国の繆公は、子思のそばに、臣下の人がいなければ、子思について安心できませんでした。
泄柳と申詳は、繆公のそばに、賢人がいなければ、繆公の身について安心できませんでした。

あなたは、私、孟子の為に考慮してくれてはいるが、子思への待遇には及んでいません。
あなたが、私、孟子を絶交したのか？
私、孟子が、あなたを絶交したのか？」

孟子、去、斉。

尹士、語、人、曰。
「不、識、王之不可、以、為、湯、武、則、是、不、明、也。
識、其不可、然、且、至、則、是、干、沢、也。
千里、而、見、王。
不遇、故、去。
三、宿、而、後、出、『昼』、是、何、濡滞、也？
士、則、茲、不、悦」

高子、以、告。

曰。
「夫尹士、悪、知、予、哉？
千里、而、見、王、是、予、所、欲、也。
不遇、故、去、豈、予、所、欲、哉？

予(われ)、不得已(やむをえず)、也。

予(われ)、三、宿、而、出、『昼』、於、予、心、猶(なお)、以、為(なす)、速。

王、庶幾(請い願わくば)、改、之(これ)。

王、如(もし)、改、諸(これ)、則(すなわち)、必、反(かえす)、予(われ)。

夫(それ)、出、昼、而、王、不、予(われ)、追、也。

予(われ)、然、後、浩然、有、帰、志。

予(われ)、雖(いえども)、然、豈(どうして)、舎(すてる)、王、哉？

王、由(なお)、足(たりる)、用、為(なす)、善。

王、如(もし)、用、予(われ)、則(すなわち)、豈(どうして)、徒(ただ)、斉、民、安？

天下之民、挙(こぞって)、安。

王、庶幾(請い願わくば)、改、之(これ)。

予(われ)、日、望、之(これ)。

予(われ)、豈(どうして)、若(のよう)、是(この)、小丈夫、然、哉？

諫、於、其(その)君、而、不、受、則(すなわち)、怒、『悻悻』然、見(みせる)、於、其(その)面、去、

則(すなわち)、窮、日之力、而、後、宿、哉」

尹士、聞、之(これ)、曰。

「士(＝尹士)、誠、小人、也」

孟子先生は斉という国を去った。

尹士が、ある人に話した。

「斉の王が、殷の湯王や周王朝の武王のように成る事ができない、と知らなかったのであれば、孟子は、聡明ではない。

それを知っていて、孟子が、斉に到来したのであれば、孟子は、贅沢を求めていたのである。

孟子は、千里を超えて、斉の王に会った。

しかし、不遇であったので、去った。

三日間も泊まった後で、昼という場所を出たが、どうして去るのを遅らせていたのか？

私、尹士は、孟子の、そういう所が気に入らない」

高子が孟子 先生に尹士の言葉を告げ知らせた。

孟子 先生は言った。

「その尹士が、どうして私、孟子(の心)を知る事ができるであろうか？　いいえ！

千里を超えて、斉の王に会ったのは、私、孟子が、そうしたいと欲したからである。

不遇であったので去ったのが、どうして、私、孟子の欲した事であろうか？

いいえ！

私、孟子は、やむを得ず、そうしたのである。

私、孟子は、三日間も泊まって、昼という場所を出たが、私、孟子は、心で、『これでもなお速い』と見なしていました。

斉の王よ、請い願わくば、その態度を改めてください(、と私、孟子は願っていました)。

斉の王が、もし、その態度を改めてくれたら、必ず、私、孟子に引き返させるであろう。
しかし、昼という場所を出ても、斉の王は、私、孟子を追いかけてくれませんでした。
私、孟子は、そうした後で、『浩然と』、『水が広大に満ちあふれるように』、魯へ帰る気に成ったのです。
私、孟子は、そうとはいえ、どうして斉の王を見捨てる事ができようか？
いいえ！
斉の王は、なお、善行を為すのに足りる素質が有ります。
安らぎをもたらすでしょうか？　いいえ！
斉の王が、もし、私、孟子を重用してくれたら、どうして、斉の国民だけに
天下の人々の全てに、安らぎをもたらすつもりです。
斉の王よ、請い願わくば、その態度を改めてください。
私、孟子は、日々、そのように願い望んでいます。
私、孟子が、どうして、次のように、矮小な男のようにいられるでしょうか？　いいえ！
矮小な男は、上司である君主に忠告して受け入れてもらえないと、怒って、怒った様子を自分の顔面で見せて、上司である君主の所から去ってしまって、太陽の光の力が尽きた後で、泊まるようにします」
尹士が、この孟子先生の言葉を聞くと、言った。
「私、尹士は、まことに、矮小な人であった」

孟子、去、斉。

充虞、路、問、曰。

「夫子、若(のよう)、有、不予(不快)、色、然。

前日、虞、聞、諸(これ)、夫子。

曰。

『君子、不、怨、天。

不、尤(うらむ)、人』」

曰。

「彼(かれ)、一時。

此(これ)、一時、也。

五百年、必、有、王者、興。

其(その)間、必、有、名、世、者(もの)。

由(より)、周、而来、七百有余歳、矣。

以、其(その)数、則(すなわち)、過、矣。

以、其(その)時、考、之(これ)、則(すなわち)、可、矣。

夫(それ)、天、未、欲、平治、天下、也。

如(もし)、欲、平治、天下、当(あたり)、今之世、舎(おいて)、我(われ)、其(それ)、誰、也?

吾(われ)、何為(どうして)、不予(不快)、哉?」

孟子 先生は斉という国を去った。

充虞が途中で孟子 先生に質問して言った。

「孟子 先生は、不快な様子が有るように見えます。

先日、充虞は、次のように、孟子 先生から聞きました。

孟子 先生は言いました。

『王者は、(心の中で、不運でも)天の神を怨まない。

(心の中で、悪事を犯されても)他人を怨まない』と」

孟子 先生は言った。

「その時は、一時的に、そう思って、そう言いました。

今の、この時は、一時的に、次のように、思っています。

五百年間の周期で、必ず、王者が立ち上がる事が有るのです。

その五百年間の間には、(約二百年後には、)必ず、名声をこの世に轟(とどろ)かせる者もいるのです。

周王朝、以来、七百年余りです。

その年数、七百年余りは、五百年間の周期と、その約二百年後を過ぎています。

その時期、七百年余りによって、次のように考えたら良いのです。

天の神は、未だ、天下を平和に統治したいと欲(ほっ)していないのです。

もし、天の神が天下を平和に統治したいと欲(ほっ)したら、今の世、今の時代にあたって、私、孟子を置いて、他に誰が適任であろうか？　いいえ！

私、孟子が、どうして、不快でいようか？　いいえ！」

孟子、去、斉、居、休。

公孫丑、問、曰。

「仕、而、不、受、禄、古之道、乎？」

曰。

「非、也。

於、崇、吾(われ)、得、見(あう)、王。

退、而、有、去、志。

不、欲、変。

故、不、受、也。

継、而、有、師(軍隊)、命。

不、可、以、請。

久、於、斉、非、我志(わが)、也」

孟子 先生は斉という国を去って、休という所に居た。

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。

「国に仕えても、給料を受け取らないのは、古くからの道理なのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ。

崇という所で、私、孟子は、斉の王に会う事ができ得ました。

斉の王の所から退出して、『斉という国を去る事に成るかもしれない』という思いが有りました。

私、孟子は、変化を欲(ほっ)しませんでした。

そのため、金銭を受け取らなかったのです。

それに続いて、(斉の王から)軍隊への命令が有りました。(戦争が有りました。)

そのため、斉という国を去る許可を斉の王に請い願う事ができませんでした。

斉という国に長期間、滞在したのは、私、孟子の意思ではなかったのです」

滕文公上

滕、文公、為(なる)、世子(世継ぎ)、将(しょうとする)、之(いく)、楚、過、宋、而、見(あう)、孟子。

孟子、道(いう)、性善、言、必、称(ほめる)、堯、舜。

世子(世継ぎ)、自(より)、楚、反(かえる)、復(また)、見(あう)、孟子。

孟子、曰。
「世子(世継ぎ)、疑、吾(わが)言、乎？
夫(それ)、道、一、而已(のみ)、矣。
成覸、謂、斉、景公、曰。
『彼、丈夫(男)、也。
我、丈夫(男)、也。
吾(われ)、何(どうして)、畏、彼、哉？』。
顔淵(＝顔回)、曰。
『舜、何、人、也？
予(われ)、何、人、也？
有、為(なす)、者(もの)、亦(また)、若(のよう)、是(この)』。
公明儀、曰。
『文王、我(わが)師、也。
周公、豈(どうして)、欺(あざむく)、我、哉？』。
今、滕、絶、長、補、短、将(まさに)、五十里、也。

猶、可、以、為（なす）、善国。
『書』、曰。
『若（もし）、薬、不、瞑眩（めまい）、厥（その）疾、不、瘳（いえる）』」

滕という国の文公が、世継ぎであった時、楚という国へ行こうとして、宋という国を通り過ぎる際に、孟子 先生に会った。

孟子 先生は、（文公に、）「性善説」、「人には善くなるための種のような性質が有るという説」を話し、堯や舜の話を必ず話して堯や舜をほめた。

世継ぎであった文公は、楚から帰る時に、また、孟子 先生に会った。

孟子 先生は言った。
「世継ぎよ、私、孟子の言葉を疑っているのですか？
真理は唯一なのです。
成覸が斉という国の景公に言いました。
『彼も、独りの男に過ぎない。
私も、独りの男に過ぎない。
私が、どうして、彼を恐れるであろうか？　いいえ！』と。
顔回は言いました。
『舜は、どんなに優れていても、人に過ぎないではないか？
私、顔回も、どのような身であっても、人に過ぎないではないか？
為したい志が有る者もまた、この舜のように成れるのである』と。

公明儀が言いました。
『文王は、私にとって師なのである。
周公が、どうしたら、私を欺く事ができるというのか？　いいえ！』と。
今、滕という国は、長い部分を切って短い部分に補ってみれば、まさに、
ちょうど、五十里、四方くらいです。
善い国とする事が、今でもなお、可能です。
『書経』で言われています。
『薬が、めまい(などの副作用)を引き起こすくらい(強い薬)でなければ、その薬が効く病を治せない物なのである』と」

滕、定公、薨。

世子、謂、然友、曰。
「昔者、孟子、嘗、与、我、言、於、宋。
於、心、終、不、忘。
今、也、不幸、至、於、大故。
吾、欲、使、子、問、於、孟子、然、後、行、事」

然友、之、鄒、問、於、孟子。

孟子、曰。

「不、亦(また)、善、乎?
親、喪、固(もとより)、所、自(みずから)、尽、也。

曾子、曰。
『生、事(つかえる)、之(これ)、以、礼。
死、葬、之(これ)、以、礼。
祭、之(これ)、以、礼。
可、謂、孝、矣』。
諸侯之礼、吾(われ)、未、之(これ)、学、也。
雖(いえども)、然、吾(われ)、嘗(かつて)、聞、之(これ)、矣。
『三年之喪、斉疏(斉疏という名前の喪服)之服、飦粥(おかゆ)之食、自(より)、天子、達、於、庶人、三代、共、之(これ)』」

然友、反命(結果を報告する)。

定、為(なす)、三年之喪。

父兄、百官、皆、不、欲、也。
故、曰。
「吾(わが)宗国、魯、先君、莫(ない)、之(これ)、行。
吾(わが)先君、亦(また)、莫(ない)、之(これ)、行、也。
至、於、子之身、而、反(はんする)、之(これ)、不、可。
且(かつ)、『志』、曰。
『喪、祭、従、先祖』」

曰。

「吾(われ)、有、所、受、之(これ)、也」

謂、然友、曰。

「吾(われ)、他日、未、嘗(かつて)、学問。

好、馳、馬、試、剣。

今、也、父兄、百官、不、我、足(たりる)、也。

恐(おそらく)、其(それ)、不能、尽、於、大事。

子、為(ため)、我、問、孟子」

然友、復(また)、之(いく)、鄒、問、孟子。

孟子、曰。

「然。

不、可、以、他、求、者(もの)、也。

孔子、曰。

『君、薨、聴、於、冢宰。

歠(のむ)、粥、面、深墨、即位、而、哭。

百官、有司、莫(ない)、敢、不、哀、先、之(これ)、也。

上、有、好、者(もの)、下、必、有、甚、焉(これ)、者(もの)、矣。

君子之徳、風、也。

小人之徳、草、也。

草、尚(くわえる)、之(これ)、風、必、偃(ふす)』。

是(これ)、在、世子(世継ぎ)」

然友、反命(結果を報告する)。

世子(世継ぎ)、曰。

「然。

是(これ)、誠、在、我」

五月、居、廬(いおり)、未、有、命戒。

百官、族人、可、謂、曰、「知」。

及(およぶ)、至、葬、四方、来、観、之(これ)。

顔色之戚(悲しむ)、哭泣之哀、弔、者(もの)、大、悦(よろこぶ)。

滕という国の、(文公の父である)定公が死んだ。

世継ぎである文公が然友に言った。

「昔、かつて、孟子先生と、私、文公は、宋で話した事が有ります。

(孟子先生の言葉を)心から、ついに、忘れる事が有りませんでした。

今、不幸にも、父の葬儀をするに至りました。

私、文公は、あなた、然友に、孟子先生へ(父の葬儀について)質問させて、

そうした後で、葬儀を行いたいと欲(ほっ)します」

然友が、鄒へ行って、孟子 先生に質問した。

孟子 先生は言った。

「それはまた、善いではないですか？
親の葬儀は、本より、自ら、尽くす物なのです。
曾子 先生は(孔子 先生の言葉を)言いました。
『(親孝行とは、)父母が生きていれば、礼儀をもって父母に仕えることである。
父母が死んでしまわれたら、礼儀をもって父母を葬ることである。
父母の死後は、礼儀をもって父母を祭ることである。
そうできたら、親孝行と言えます』と。
諸侯における礼儀を、私、孟子は未だ学んだ事が有りません。
それでも、私、孟子は、かつて、このように聞いた事が有ります。
『三年間、喪に服す事と、斉疏という名前の喪服を着る事と、おかゆを食べる事は、天子から庶民までが達している、夏王朝と殷と周王朝の三代の、共通認識なのである』と」

然友が(文公に)結果を報告した。

文公が三年間の喪に服す事を決定した。

文公の父兄と、諸々の役人達が、(三年間の喪に服)したくないと欲した。
そのため、文公の父兄と、諸々の役人達が言った。

「私達の宗主国である魯の先祖代々の君主は、三年間の喪に服しませんでした。
我が国の先祖代々の君主もまた、三年間の喪に服しませんでした。
あなたの身、代に至って、それに反するのは、良くないです。
また、記録書で言われています。
『葬儀と祭儀については先祖に従いなさい』と」

文公が言った。
「私、文公には『三年間の喪に服すべきである』と教えを受けさせてくれた先生がいるのである」

文公が然友に言った。
「私、文公は、今まで、未だかつて学問を学んでこなかった。
(私、文公は、)馬を走らせる事や剣を試みる事を好んできた。
今、私、文公の父兄と、諸々の役人は、『私、文公には知恵が不足している』と思ってしまっている。
(このままでは、)恐らく、父の葬儀という一大事に力を尽くす事ができなく成ってしまいます。
あなた、然友よ、私、文公の為(ため)に、(どうしたら良いかを)孟子 先生に質問してきてください」

然友が、また、鄒へ行き、孟子 先生に質問した。

孟子 先生は言った。

「そうですね。

(葬儀の方法は、)他人へ求めるべき物ではないのです。

孔子 先生は言いました。

『君主が死んだら、冢宰を務める最高位の役人の命令を聴いて遂行するだけにします。

(世継ぎは、)おかゆを飲み、顔面の色は憂いに沈み、即位して泣く物なのです。

諸々の役人達も悲しむのは、(世継ぎが)これらの役人達よりも先に悲しんでいるからなのです。

上位者が好んでいる物が有ると、下位者達も必ず、その物をさらに好む事が有ります。

王者の徳、善行、善い言動は風のような物なのです。

矮小な人の徳、力は草のような物なのです。

この草(のような矮小な人の力)に風(のような王者の善い言動)を加えてあげると、草は必ず伏せて(従って)くれるのです』と。

それは、世継ぎである文公次第なのです」

然友が文公に結果を報告した。

世継ぎである文公が言った。

「そうですね。

それは、まことに、私、文公次第なのである」

(文公は、)五か月間、庵(いおり)にこもって、命令しなかった。

諸々の役人と、血族達は、「(文公が喪に服したのは、)善い」として、「(文公は)知者である」と言った。

文公の父の国葬に至るに及んで、四方から人々が来て観た。

文公が悲しんでいる顔色と、文公が悲しんで泣いた事に、弔問者達は(文公の様子と行動に対して)大いに喜ばしさを感じた。

滕、文公、問、為、国。

孟子、曰。

「民事、不、可、緩、也。

『詩』、云。

『昼、爾(なんじ)、于(いく)、茅(カヤ)。

宵、爾(なんじ)、索(なわ)、綯(よりあわせる)。

亟(すみやかに)、其(それ)、乗、屋。

其(それ)、始、播、百穀』。

民、之(の)、為(なる)、道、也、有、恒(つね)、産、者(もの)、有、恒(つね)、心。

無、恒(つね)、産、者(もの)、無、恒(つね)、心。

苟(かりに)、無、恒(つね)、心、『放辟邪侈(思うがままに悪事だけを行い見下し思い上がる)』、無(ない)、不、為(なす)、已(のみ)。

及(およぶ)、陥(おちいる)、乎、罪、然、後、従(したがって)、而、刑、之(これ)。
是(これ)、罔(追い込む)、民、也。
焉(どうして)、有、仁、人、在位、罔(追い込む)、民、而、可、為(なす)、也？
是故(このため)、賢君、必、恭倹、礼、下、取、於、民、有、制。
陽虎、曰。
『為(なす)、富、不、仁、矣。
為(なす)、仁、不、富、矣』。
夏后氏(＝夏王朝)、五十、而、『貢』。
殷、人、七十、而、『助』。
周、人、百畝、而、『徹』。
其(その)、実、皆、什、一、也。
徹、者(とは)、徹、也。
助、者(とは)、藉、也。
龍子、曰。
『治、地、莫(ない)、善、於(よりも)、助。
莫(ない)、不、善、於、貢』。
貢、者(とは)、校、数歳之中、以、為(なす)、常。
楽歳、粒米、狼戻。
多、取、之(これ)、而、不、為(なす)、虐、則(すなわち)、寡(すくない)、取、之(これ)。
凶年、糞(肥料をあげる)、其(その)田、而、不足、則(すなわち)、必、取、盈(みたす)、焉。
為(なる)、民、父母、使(させる)、民、『盻盻(怨みの目でにらむ)』然、将、終歳(年中)、勤、動、不、得、以、
養、其(その)父母。
又(また)、『称貸(貸して利息を取る)』、而、益(ます)、之(これ)、使(させる)、老、稚、転、乎、溝壑(餓死などで道端で死んでいる)。
悪(どうして)、在、其(その)、為(なる)、民、父母、也？

夫(それ)、世、禄、滕、固(もとより)、行、之(これ)、矣。
『詩』、云。
『雨、我(わが)公田、遂(ついに)、及(およぶ)、我(わが)私』。
惟(ただ)、助、為(なす)、有、公田。
由此(このため)、観、之(これ)、雖(いえども)、周、亦(また)、助、也。
設(もうける)、為(つくる)、『庠』、『序』、『学』、『校』、以、教、之(これ)。
『庠』、者(とは)、養、也。
『校』、者(とは)、教、也。
『序』、者(とは)、射、也。
夏、曰、『校』。
殷、曰、『序』。
周、曰、『庠』。
学、則(すなわち)、三代、共、之(これ)。
皆、所以、明、人倫、也。
人倫、明、於、上、小民、親、於、下。
有、王者、起、必、来、取、法。
是(これ)、為(なる)、王者、師、也。
『詩』、云。
『周、雖(いえども)、旧邦、其(その)命、維(これ)、新』。
文王之謂、也。
子、力(つとめる)、行、之(これ)、亦(また)、以、新、子之国」
使(させる)、畢戦、問、井地(土地の制度)。

孟子、曰。

「子之君、将（しょうとする）、行、仁政、選択、而、使、子。

子、必、勉、之（これ）。

夫（それ）、仁政、必、自（より）、経界（土地の境界）、始。

経界（土地の境界）、不正、井地（土地の制度）、不均、穀禄、不平。

是故（このため）、暴君、汚吏、必、慢、其経界（その土地の境界）。

経界（土地の境界）、既、正、分（わける）、田、制、禄、可、坐、而、定、也。

夫（それ）、滕、壌地、褊小、将（しょうとする）、為（なる）、君子、焉、将（しょうとする）、為（なる）、野人（役人ではない在野の人）、焉。

無（いない）、君子、莫（ない）、治、野人（役人ではない在野の人）。

無（いない）、野人（役人ではない在野の人）、莫（ない）、養、君子。

請、野、九、一、而、助。

国中、什、一、使（させる）、自（みずから）、賦。

卿、以下、必、有、圭田（祭儀用の神田）。

圭田（祭儀用の神田）、五十畝。

余夫、二十五畝。

死、徙（引っ越し）、無、出、郷。

郷（一区画）、田、同、井（『井』の文字の形に九つに分ける）、出入、相、友（たすける）、守望（見張り）、相、助、疾病、相、扶持（助ける）、則（すなわち）、百姓、親睦。

方、里（一里、四方）、而、井（『井』の文字の形に九つに分ける）。

井（『井』の文字の形に九つに分ける）、九百畝。

其中（その）、為（なり）、公田。

八家、皆、私、百畝、同、養、公田。

公事、畢、然、後、敢、治、私事。

所以、別、野人（役人ではない在野の人）、也。

此、其大略、也。
若、夫、潤沢、之、則、在、君、与、子、矣」

滕という国の文公が孟子 先生へ国の政治について質問した。

孟子 先生は言った。

「『民事』、『庶民の生活』を導くのを緩めるべきでは、ありません。
『詩経』で言われています。
『昼、あなたは、茅を取りに行きなさい。
夜の宵、あなたは、縄をより合わせなさい。
速やかに、屋根に乗って、屋根を点検して直しなさい。
諸々の穀物の種を播き始めなさい』と。
恒常的に財産が有る者は平常心が有るのが、国民についての道理、真理であるのです。
恒常的に財産が無い者は平常心が無い(場合が多い)のです。
仮に、平常心が無ければ、思うがままに悪事だけを行い見下し思い上がるだけなのです。
こうして、罪に陥るに及ぶと、その後、従って、この罪を犯した国民は処刑されてしまいます。
これでは、国民を死刑に追い込むような物なのです。
どうして、思いやり深い知的な人がいて、王位に在位していて、国民を死刑に追い込む事ができようか？　いいえ！

このため、賢明な君主は必ず、他人を恭しく敬って自身は慎み、下位の国民に礼儀をもって接し、国民から税を取り立てるのには税制が有った。

陽虎は言いました。

『富を作ろうとすれば(、私腹を肥やそうとすれば)、思いやりと知恵が無い事に成ってしまいます。

思いやり深い知的な行動を為せば、富を作れない(。私腹を肥やせない)』と。

夏王朝では、五十畝で、『貢』という税制であった。

殷王朝では、七十畝で、『助』という税制であった。

周王朝では、百畝で、『徹』という税制であった。

それらの税は、実は、皆、十分の一でした。

税制の『徹』とは、『取る』という意味の『徹』に由来し、収穫量の十分の一を税として取ります。

税制の『助』とは、『借りる』という意味の『籍』に由来し、国民の助力を借りて公田を農耕してもらい公田の収穫量をそのまま税として取ります。(税制の『助』は一つの公田を八家族分の国民達で分担したので、国民一人当たりの負担は十分の一の税に相当します。)

龍子は言いました。

『土地を統治するのに、税制の助よりも善い税制は無い。

(逆に、)税制の貢よりも善くない税制は無い』と。

税制の『貢』とは、数年間の中央値を調べて、恒常的な数値と見なします。

豊作の年は、米粒が散乱するほど、余裕が有ります。

この豊作の年に多く税を取っても虐政ではないのに、この豊作の年に少なく税を取る事に成ります。

凶作の年には、田に肥料をあげても税よりも不足しているのに、必ず満額の税を取り立ててしまいます。

このため、国民の父母である王に成っても、国民に、『盻盻』然と怨みの目でにらまれるし、年中いつも、勤務、労働しても、自分の父母を養う事ができ得ないようにさせてしまいます。

また、金銭などを国民に貸しても利息を取ってしまうので、国民の税を増やしてしまい、老人や幼子を餓死などで道端で死なせてしまい、死体が道端に転がる羽目に成ってしまいます。

どうして、国民の父母である王に成っていられるでしょうか？　いいえ！

ところで、役人の給料の世襲は、滕という国は本から行っています。

さて、『詩経』で言われています。

『私達が担当している公田に(恵みの)雨が降れば、遂に、私達の私田にも及ぶのである』と。

税制の『助』だけに公田が有ると見なせます。

このため、この詩経の詩を観ると、税制が『徹』であったといえども、周王朝もまた、税制の『助』も同時に運用していたのです。

次に、『庠』、『序』、『学』、『校』という学校を設けて造って、国民を教育します。

『庠』とは、『養』、『養老施設 兼 学校』、『学校』という意味です。

『校』とは、『教』、『教育施設』、『学校』という意味です。

『序』とは、『射』、『弓で矢を射る競技場 兼 学校』、『学校』という意味です。

夏王朝では、学校を、『校』と言いました。

殷王朝では、学校を、『序』と言いました。

周王朝では、学校を、『庠』と言いました。
夏王朝、殷、周王朝の三代で共に、高等学問の学校を『学』と言いました。
これらの学校は皆、人の倫理、道理を明らかにするのを目的としていました。
上位者である王から、下位者である国民へ、人の倫理、道理を明らかにすれば、矮小な国民達は親しみ合う事ができます。
王者が立ち上がる事が有れば必ず、学校へ来て、法を取り入れます。
それで、王者は、(人々の教)師であるのです。
『詩経』で言われています。
『周は、古い国といえども、天の神からの任命は、新しいのである』と。
この『詩経』の詩は、文王について言っています。
あなた、文公が、努めて、これらの事を実行すれば、あなた、文公の国へもまた、新たに、天の神からの任命があるはずです」

また、文公が、畢戦に、孟子 先生へ土地の制度について質問させた。

孟子 先生は言った。
「あなた、畢戦の君主である文公は、思いやり深い政治を実行しようとして、あなた、畢戦を使者に選択したのです。
あなた、畢戦は必ず、この土地の制度を勉強していきなさい。
さて、思いやり深い政治は、必ず、土地の境界から始めます。
土地の境界が不正であれば、土地の制度が不均等に成ってしまい、役人の給料も不平等に成ってしまいます。
このため、暴君や、汚職をしている役人は必ず、土地の境界をでたらめにします。

土地の境界が既に正しければ、田を分ける事と、給料を制度化する事は、座ったままでも決定する事が可能です。

さて、滕という国は、土地は狭く小さいですが、王者であろうとする人もいますし、役人ではない在野の人であろうとする人もいます。

王者がいなければ、役人ではない在野の人々を統治できません。

役人ではない在野の人々がいなければ、王者を養う事ができません。

請い願わくば、田畑は、利益の九分の一を税にして、『助』という税制にしてください。

国の都市の中は、利益の十分の一を税にして、自ら納税させてください。

高官以下の役人には必ず祭儀用の神田を所有させてください。

祭儀用の神田は、五十畝にしてください。

役人以外の残りの国民の、祭儀用の神田は、二十五畝にしてください。

(こうすれば、)死者の葬儀でも、引っ越しでも、故郷を出る必要が無く成ります。

一区画の田を『井』の文字の形に九つに分けて、周囲の八つの田を八つの家族に分けて、中央の一つの田を公田として共同で農耕させれば、出入りで相互に助け合えるし、見張りも相互に助け合えるし、病気の時も相互に助け合えるので、全ての人々が親睦を深める事ができます。

一里、四方の田を『井』の文字の形に九つに分けます。

『井』の文字の形に分けた九つの田の合計は、九百畝です。

その『井』の文字の形に分けた九つの田の中央の一つの田は、公田です。

八つの家族は皆、各々、百畝の私田を私有し、公田の世話を共同でします。

公田での仕事が終わった後で、あえて、私田の仕事を統治します。

こうする理由は、役人ではない在野の人々に公私を区別するのを教えるためです。
これらが、その土地の制度についての大まかな概略です。
この土地の制度の大まかな概略を活用するかは、あなた、畢戦の君主である文公と、あなた、畢戦次第です」

有、為(なす)、神農之言、者(もの)、許行。
自(より)、楚、之(いく)、滕、踵(いたる)、門、而、告、文公、曰。
「遠方之人、聞、君、行、仁政。
願、受、一廛、而、為(なる)、氓」
文公、与(あたえる)、之(これ)、処。
其(その)徒、数十人、皆、衣(きる)、褐(粗末な衣服)、捆(たばねる)、屨(くつ)、織、席(敷物)、以、為(なす)、食。
陳良之徒、陳相、与(と)、其(その)弟、辛(=陳辛)、負、耒耜(農具)、而、自(より)、宋、之(いく)、滕。
曰。
「聞、君、行、聖人之政。
是(これ)、亦(また)、聖人、也。
願、為(なる)、聖人、氓」

陳相、見（あう）、許行、而、大、悦、尽（ことごとく）、棄、其学（そのがく）、而、学（まなぶ）、焉。

陳相、見（あう）、孟子、道（いう）、許行之言、曰。

「滕、君、則（すなわち）、誠、賢君、也。

雖（いえども）、然、未、聞、道、也。

賢者、与（と）、民、並（ならぶ）、耕、而、食、饔飧（毎日の食事）、而、治。

今、也、滕、有、倉廩（米などの穀物の倉）、府庫（金銭などの倉）。

則（すなわち）、是（これ）、厲（虐げる）、民、而、以、自、養、也。

悪（どうして）、得、賢？」

孟子、曰。「許子（＝許行）、必、種（種をまく）、粟（穀物）、而、後、食、乎？」

曰。「然」

「許子（＝許行）、必、織、布（麻などによる織物）、而、後、衣（きる）、乎？」

曰。「否。許子（＝許行）、衣、褐（粗末な衣服）」

「許子（＝許行）、冠、乎？」

曰。「冠」

曰。「奚（どんなものを）、冠？」

曰。「冠、素(白い絹)」

曰。「自(みずから)、織、之(これ)、与(か)?」

曰。「否。以、粟(穀物)、易(かえる)、之(これ)」

曰。「許子(=許行)、奚為(どうして)、不、自(みずから)、織?」

曰。「害(さまたげる)、於、耕」

曰。「許子(=許行)、以、釜、甑(豆などの蒸し器)、爨(飯を炊く)、以、鉄、耕、乎?」

曰。「然」

「自(みずから)、為(つくる)、之(これ)、与(か)?」

曰。「否。以、粟(穀物)、易(かえる)、之(これ)」

「以、粟(穀物)、易(かえる)、械器、者(は)、不、為(なす)、厲(虐げる)、陶(陶工)、冶(鍛冶師)、陶(陶工)、冶(鍛冶師)、亦(また)、以、其(その)械器、
易(かえる)、粟(穀物)、者(は)、豈(どうして)、為(なす)、厲(虐げる)、農夫、哉?
且(かつ)、許子(=許行)、何(どうして)、不、為(なす)、陶(陶工)、冶(鍛冶)、舍(家)、皆、取、諸(これ)、其宮中(その家)、而、
用、之(これ)?
何為(どうして)、紛紛然、与(と)、百工、交易?
何(どうして)、許子(=許行)、之(の)、不、憚(控える)、煩?」

曰。

「百工之事、固、不、可、耕、且、為、也」

「然、則、治、天下、独、可、耕、且、為、与？

有、大人之事。

有、小人之事。

且、一人之身、而、百工、之、所、為、備。

如、必、自、為、而、後、用、之、是、率、天下、而、路、也。

故、曰。

『或、労、心。

或、労、力』。

労、心、者、治、人。

労、力、者、治、於、人。

治、於、人、者、食、人。

治、人、者、食、於、人。

天下之通義、也。

当、堯之時、天下、猶、未、平。

洪水、横、流、氾濫、於、天下。

草木、暢茂。

禽獣、繁殖。

五穀、不、登。

禽獣、偪、人。

獣蹄、鳥跡之道、交、於、中国。

堯、独、憂、之、挙、舜、而、敷、治、焉。
舜、使、『益』、掌、火。
『益』、烈、山、沢、而、焚、之、禽獣、逃、匿。
禹、疏、九河(＝黄河)。
瀹、『済(＝済水)』、『漯(＝漯水)』、而、注、諸、海。
決、『汝(＝汝水)』、『漢(＝漢水)』、排、『淮(＝淮水)』、『泗(＝泗
水)』、而、注、之、『江(＝長江)』。
然、後、中国、可、得、而、食、也。
当、是時、也、禹、八年、於、外、三、過、其門、而、不、入。
雖、欲、耕、得、乎?
后稷、教、民、稼穡、樹芸、五穀。
五穀、熟、而、民人、育。
人之有道、也、飽食、煖衣、逸居、而、無、教、則、近、於、禽獣。
聖人、有、憂、之、使、『契』、為、司徒、教、以、人倫。
父子、有、親。
君臣、有、義。
夫婦、有、別。
長幼、有、序。
朋友、有、信。
放勲(＝堯)、曰。
『労、之、来、之、匡、之、直、之、輔、之、翼、之、使、自、
得、之、又、従、而、振、徳、之』。
聖人、之、憂、民、如此。
而、暇、耕、乎?

堯、以、不、得、舜、為(なす)、己、憂。
舜、以、不、得、禹、皋陶、為(なす)、己、憂。
夫(それ)、以、百畝、之(の)、不、易(やすらか)、為(なす)、己、憂、者(もの)、農夫、也。
分、人、以、財。
謂、之(これ)、恵。
教、人、以、善。
謂、之(これ)、忠。
為(ため)、天下、得、人、者(もの)。
謂、之(これ)、仁。
是故(このため)、以、天下、与(あたえる)、人、易。
為(ため)、天下、得、人、難。
孔子、曰。
『大、哉、堯、之(の)、為(なる)、君。
惟(ただ)、天、為(なす)、大。
惟(ただ)、堯、則(のっとる)、之(これ)。
蕩蕩乎、民、無(ない)、能、名、焉。
君、哉、舜、也。
巍巍乎、有、天下、而、不、与(あずかる)、焉』。
堯、舜、之(の)、治、天下、豈(どうして)、無(ない)、所、用、其(その)心、哉？
亦(また)、不、用、於、耕、耳(のみ)。
吾(われ)、聞、用、夏、変(かえる)、夷、者(もの)。
未、聞、変(かわる)、於(に)、夷、者(もの)、也。
陳良、楚、産、也。
悦(よろこぶ)、周公、仲尼(=孔子)之道、北、学、於、中国。

北方之学者、未、能、或(あり)、之(これ)、先、也。

彼、所謂、豪傑之士、也。

子之兄弟、事(つかえる)、之(これ)、数十年。

師、死、而、遂(ついに)、倍(そむく)、之(これ)。

昔(むかし)者、孔子、没、三年、之(の)外、門人、治、任、将(しようとする)、帰、入、揖、於、

子貢、相、向、而、哭、皆、失、声、然、後、帰。

子貢、反(かえる)、築、室、於、場、独、居、三年、然、後、帰。

他日、子夏、子張、子游、以、有若、似、聖人、欲、以、所、事(つかえる)、孔子、

事(つかえる)、之(これ)、強、曾子。

曾子、曰。

『不可。

江漢(長江と漢水)、以、濯、之(これ)、秋、陽、以、暴(さらす)、之(これ)、皜(白い)、皜(白い)、乎、不、可、尚(かさねる)、已(のみ)』。

今、也、南蛮、鴃舌(意味不明な野蛮な言葉を話す)之人、非(ひ)、先王之道。

子、倍(そむく)、子之師、而、学、之(これ)。

亦(また)、異、於、曾子、矣。

吾、聞、出、於(より)、幽谷(深い谷)、遷、于、喬木(高い木)、者(もの)。

未、聞、下、喬木(高い木)、而、入、於、幽谷(深い谷)、者(もの)。

『魯頌』、曰。

『戎、狄、是(これ)、膺(討伐する)。

荊(南の国)、舒(南の国)、是(これ)、懲』。

周公、方(まさに)、且(かつ)、膺、之(これ)。

子、是(これ)、之(これ)、学。

亦(また)、為(なす)、不、善、変、矣」

「従、許子(＝許行)之道、則、市、賈、不、二。
国中、無、偽。
雖、使、五尺之童、適、市、莫、之、或、欺。
布、帛、長短、同、則、賈、相、若。
麻縷、糸、絮、軽重、同、則、賈、相、若。
五穀、多寡、同、則、賈、相、若。
屨、大小、同、則、賈、相、若」

曰。
「夫、物、之、不、斉、物之情、也。
或、相、倍、蓰。
或、相、什、百。
或、相、千、万。
子、比、而、同、之、是、乱、天下、也。
巨屨、小屨、同、賈、人、豈、為、之、哉?
従、許子(＝許行)之道、相、率、而、為、偽、者、也。
悪、能、治、国家?」

神農の言説を為しているとかたる者である許行がいた。
許行達は、楚という国から滕という国へ行き、門で文公に言った。
「私、許行は遠方の人で、あなた、文公が思いやり深い政治を行っている、
と聞きました。
願わくば、一つの家をもらい受けて、国民に成りたいです」

文公は、この許行達に場所と家を与えた。
その許行の信徒達は数十人いて、皆、粗末な衣服を着て、束ねて靴（くつ）を造ったり、敷物を織ったりして売って食べ物を買っていた。
また、儒学者である陳良の学徒であった陳相と、その弟である陳辛が、農具を背負って、宋という国から、滕という国へ来ていた。
陳相が文公に言った。
「あなた、文公が聖人の政治を実行している、と聞きました。
文公もまた、聖人なのです。
願わくば、聖人である文公の国民に成りたいです」
陳相は、許行に会って、大いに喜び、儒学を尽（ことごと）く捨てて、許行のかたる教えを学んだ。
陳相が、孟子先生に会って、許行のかたる言説について言った。
「滕の君主である文公は、まことに、賢明な君主です。
ですが、(文公は、)許行の道理を、未だに聞き入れてくれません。
賢者は、国民と並んで田を耕す事によって毎日の食事を食べ、国家を統治するべきなのです。
今や、滕という国には、米などの穀物の倉や、金銭の倉が有ります。

これは、(文公が、)国民を虐げて、(文公、)自身を養わさせているからなのです。

(文公が、)どうして、賢者であり得ようか？ いいえ！」

孟子 先生は言った。「許行 先生とやらは、必ず、穀物の種をまいた後で、その穀物を食べているのか？」

陳相が言った。「そうです」

孟子 先生は言った。「許行 先生とやらは、必ず、麻などによる織物を織った後で、その織物による衣服を着ているのか？」

陳相が言った。「いいえ。許行 先生は粗末な衣服を着ています」

(孟子 先生は言った。)「許行 先生とやらは、冠をかぶっていますか？」

陳相が言った。「冠をかぶっています」

孟子 先生は言った。「どんな冠をかぶっていますか？」

陳相が言った。「白い絹の冠をかぶっています」

孟子 先生は言った。「(許行 先生とやらは、)自ら、その白い絹の冠を織ったのですか？」

陳相が言った。「いいえ。穀物を売って白い絹の冠を買いました」

孟子 先生は言った。「許行 先生とやらは、どうして、自ら織らなかったのですか？」

陳相が言った。「農耕する時間の妨げに成ってしまうからです」

孟子 先生は言った。「許行 先生とやらは、釜や蒸し器で飯を炊き、鉄の農具で田を耕しますか？」

陳相が言った。「そうです」

（孟子 先生は言った。）「（許行 先生とやらは、）自ら、これらの道具を造ったのですか？」

陳相が言った。「いいえ。穀物を売って、これらの道具を買いました」

（孟子 先生は言った。）

「どうして、（許行 先生とやらが）穀物を売って道具を買うのは『陶工や鍛冶師を虐げている』と見なさないのですか？ また、どうして、陶工や鍛冶師が道具を売って穀物を買うのは『農業従事者を虐げている』と見なさないのですか？

また、許行 先生とやらは、どうして、自分の家で陶工や鍛治をしないで、それらを皆、買い取って、自分の家の中で、それらを利用するのであろうか？
どうして、『紛紛然』とゴタゴタ混雑させて、諸々の職人と売買するのであろうか？
どうして、許行 先生とやらは、自分の煩わしさを軽減しようとしないのか？」

陳相が言った。
「諸々の職人の仕事は、本(もと)より、農耕と同時にする事が不可能です」

(孟子 先生は言った。)
「そうであるならば、天下を統治する事だけは、農耕と同時にする事が可能というのですか？　いいえ！
大いなる人だけができる仕事が有るのです。
矮小な人がするべき仕事が有るのです。
また、一人の身でも、諸々の職人が作ってくれた諸々の道具や諸々の飲食物などを備え持っておく必要が有ります。
もし、必ず、自分が作った後で、それだけを利用するのであれば、天下の人々を率いて路上を奔走するような羽目に成ってしまいます。
そのため、言われています。
『ある者が、心を労する。
別の、ある者が、力を労する』と。
心を労する者が、他人を統治するべきです。
力を労する者が、他人によって統治されるべきです。

他人によって統治される者が、他人を養うべきです(。統治しない分の余裕が有るので)。

他人を統治する者が、他人によって養われるべきです(。統治する分、余裕が無いので)。

これが、天下に共通の正義、道理なのです。

堯の時にあたっては、天下はなお未だ平安ではありませんでした。

天下では洪水が起きて、河が横にも流れ氾濫していました。

(中国の至る所で、)草木が生い茂っていました。

(中国の至る所で、)鳥と獣が繁殖していました。

五穀が実りませんでした。

鳥と獣が人に迫るほどでした。

国の中央で獣道が交わっているほどでした。

堯、独りだけが、これらを心配して、舜を天子という最高位に挙げて、統治を敷かせました。

舜は、益という人に火を司らせました。

益という人は、山や、『沢』、『湿地』の草木を燃やしたので、鳥や獣は逃げて見えなく成った。

禹は、黄河の水が余裕を持って流れるように岸を抉(えぐ)って川幅を広げたりして黄河を通した。

(禹は、)『済水』と『漯水』という川の水が海へ注ぐようにした。

(禹は、水路を掘って、)『汝水』と『漢水』という川の水が水路に分かれるようにしたり、『淮水』と『泗水』という川の水が水路に排水されるようにしたりして、これらの川の水が長江へ注ぐようにした。

そうした後に、国の中央で、食べ物を食べる事ができ得るように成った。

この時にあたって、禹は、(多忙過ぎて、)八年間、家の外に出たままで、三回、家の門を過ぎても家に入る事ができなかった。

これでは、農耕したいと欲しても、でき得るであろうか？　いいえ！

后稷は、国民に農業を教育して、五穀の種を植えさせた。

五穀が熟して、国民は成長して長生きできるように成った。

十分な食べ物、暖かい衣服、安楽な暮らしをさせても、教育しなければ、鳥や獣に近い動物的人間に成ってしまって、『有道の人』、『真理にかなう人』に成れない。

聖人である堯は、それを心配して、契という人を教育などを司る長官に成らせて、人の倫理、道理を教育させた。

父と子には、親愛が有るように。

君主と臣下には、正義が有るように。

夫婦には、分別が有るように。

年長者と年少者には、秩序が有るように。

友人間には、誠実さが有るように。

堯は言いました。

『これらの人々をいたわり、正し、直し、助け、自ら会得させて、また、恩恵を与えて賑(にぎ)わす』と。

聖人による人々の心配のし方とは、この堯のようにするのである。

(聖人である王には、)田を耕している暇が有るであろうか？　いいえ！

堯は、舜のような正しい知者を獲得できないのを、自分の憂いとしました。

舜は、禹や皋陶のような正しい知者を獲得できないのを、自分の憂いとしました。

さて、百畝の田が平安ではないのを自分の憂いとする者は、農業従事者なのである。

財産を他人と分かち合う。

これを『恵』、『恩恵を与える』と言います。

善を他人に教育する。

これを『忠』、『神や善に忠実である』と言います。

天下の人々の為(ため)に正しい優れている人を獲得する者。

この人を『仁』、『思いやり深い知者』と言います。

このため、天下の権力を他人に与えるのは、簡単なのです。

天下の人々の為(ため)に正しい優れている人を獲得するのは、困難なのです。

孔子 先生は言いました。

『偉大である、聖王である堯の王としての在り方は。

(堯は、)唯一、天の神だけが大いなる者である、と見なした。

ただ堯は、この天の神を模倣した。

堯の政治は、蕩蕩乎と偉大過ぎて安らか過ぎて、国民は名前をつけて言い表す事ができなかった。

王者である、聖王である舜は。

(舜は、)巍巍乎と偉大に、天下を保持したが、しかし、(各分野を適切な臣下に適切に任せて、各分野に)直接的に関与しなかった』と。

堯、舜が、天下を統治していて、どうして、自分の心を用いないであろうか?　いいえ!

また、農耕については、(適切な臣下に適切に任せて、)自分の身を用いなかっただけなのである。

私、孟子は、夏王朝の文明を用いて、未開の外国を変革した者については、聞いた事が有ります。

(私、孟子は、自身を)未開の文明に変えてしまった者については、未だ聞いた事が有りません。

(あなた、陳相が捨てた儒学の師であった)陳良は、楚という国に生まれました。

(陳良は、)周公や孔子の道理を喜び、北上して、中国の中央で学びました。

北方の学者で、この陳良の先に出る事ができる者など未だいないのである。

彼、陳良は、いわゆる、『豪傑の士』、『知恵が優れているし、大胆な、一人前である者』なのである。

あなた達、陳相と陳辛という兄弟は、数十年間、この陳良に仕えました。

しかし、師である陳良が死ぬと、遂(つい)には、この陳良に背(そむ)いてしまいました。

昔、孔子 先生が死ぬと、家族ではない弟子達は、三年間の喪に服してから、帰郷しようとして、子貢の部屋に入って挨拶して、向き合って、泣いて皆、声を枯らしてしまって、その後、帰郷した。

子貢は、孔子 先生の墓場に引き返すと、孔子 先生の墓場に家を築いて、独りで三年間の喪に服して、その後、帰郷した。

後日、子夏と、子張と、子游は、有若が聖人である孔子 先生に似ていたので、孔子 先生に仕える身代わりとして、この有若に仕えたいと欲し、曾子 先生にも強要した。

すると、曾子 先生は言いました。

『できません。

(孔子 先生は、)長江と漢水が洗浄したかのように、秋の太陽にさらしたかのように、純白で、重ねる事ができないばかりなのです』と。

今、南方の野蛮人である、意味不明な野蛮な話をする人である許行は、古代の聖王の道理を非難しています。

あなた、陳相は、あなたの師であった陳良に背いて、こんな許行に学んでしまっています。

また、曾子とも違えています。

私、孟子は、深い谷から高い木へ移っていく(ように低劣さから崇高さへ移っていく)者については、聞いた事が有ります。

(私、孟子は、)高い木を下りて深い谷へ入り込んでしまう(ように崇高さから低劣さへ成り下がっていってしまう)者については、未だ聞いた事が有りません。

『詩経』の『魯頌』で言われています。

『西の未開な野蛮な外国と、北の未開な野蛮な外国を討伐した。

南の、荊という国と、舒という国を懲らしめた』と。

周公も、まさに、これらのような未開な野蛮な国々を討伐しました。

あなた、陳相は、これらのような未開な野蛮な説を学んでいます。

あなた、陳相の変わりようは、『善くない』、『悪い』と思います」

(陳相が言った。)

「許行 先生の道理に従えば、市場の価格を統一できます。

国中で、虚偽が無くなります。

『五尺』、『約百五十センチ メートル』の幼子を市場に行かせても、その幼子を欺く者はいなく成ります。

絹ではない麻なども、絹も、長短が同じであれば、価格は同じに成ります。

麻糸も、絹糸も、綿糸も、重さが同じであれば、価格は同じに成ります。

五穀も、数量が同じであれば、価格は同じに成ります。
靴も、大小が同じであれば、価格は同じに成ります」

孟子 先生は言った。
「物の質が異なるのが、物の事情なのです。
あるいは、質も価格も、二倍や五倍、違います。
あるいは、質も価格も、十倍や百倍、違います。
あるいは、質も価格も、千倍や一万倍、違います。
あなた、陳相が、これらを比べても混同してしまうのは、天下に混乱をもたらしてしまいます。
大きい靴も、小さい靴も、同じ価格であるようならば、人が、どうして、これらの高品質な物を作るであろうか？　いいえ！
許行 先生とやらの(誤った)道理に従ってしまえば、(手を抜くために、)相互に率先して虚偽を為し合ってしまう事に成ってしまうでしょう。
これで、どうして国家を統治できるでしょうか？　いいえ！」

墨者、夷之、因、徐辟、而、求、見、孟子。

孟子、曰。
「吾、固、願、見、今、吾、尚、病。
病、愈、我、且、往、見。

夷子(＝夷之)、不、来」

他日、又(また)、求、見(あう)、孟子。

孟子、曰。

「吾(われ)、今、則(すなわち)、可、以、見(あう)、矣。
不、直、則(すなわち)、道、不、見(あらわれる)。
我(われ)、且(まさに)、直、之(これ)。
吾、聞、夷子(＝夷之)、墨者。
墨、之(の)、治、喪、也、以、薄、為(なす)、其(その)道、也。
夷子(＝夷之)、思、以、易(かえる)、天下。
豈(どうして)、以、為(なす)、非、是(ぜ)、而、不、貴、也?
然、而、夷子(＝夷之)、葬、其(その)親、厚。
則(すなわち)、是(これ)、以、所、賤、事(つかえる)、親、也」

徐子(＝徐辟)、以、告、夷子(＝夷之)。

夷子(＝夷之)、曰。

「儒者之道、『古之人、若(のように)、保、赤子』。
此(この)言、何、謂、也?
之、則(すなわち)、以、為、愛、無(ない)、差、等。
施、由(より)、親、始」

徐子(＝徐辟)、以、告、孟子。

孟子、曰。

「夫夷子(＝夷之)、信、以、為、人、之、親、其兄之子、為、若、親、其隣之赤子、乎?

彼、有、取、爾、也。

赤子、匍匐、将、入、井、非、赤子之罪、也。

且、天、之、生、物、也、使、之、一、本。

而、夷子(＝夷之)、二、本、故、也。

蓋、上世、嘗、有、不、葬、其親、者。

其親、死、則、挙、而、委、之、於、壑。

他日、過、之、狐、狸、食、之、蠅、蚋、姑、嘬、之。

其顙、有、泚。

睨、而、不、視。

夫泚、也、非、為、人、泚。

中心、達、於、面目。

蓋、帰、反、虆、梩、而、掩、之。

掩、之、誠、是、也、則、孝子、仁人、之、掩、其親、亦、必、有、道、矣」

徐子(＝徐辟)、以、告、夷子(＝夷之)。

夷子(＝夷之)、憮然、為、間、曰。

「命、之(＝夷之)、矣」

墨者の夷之が、徐辟によって、孟子 先生に会う事を求めた。

孟子 先生は言った。
「私、孟子は、本より、会いたいと願っていましたが、私、孟子は今もなお病気なのです。
病気が治癒したら、私、孟子は会いに行こうと思います。
夷之は来ないでください」

(夷之が、)後日、また、孟子 先生に会う事を求めた。

孟子 先生は言った。
「私、孟子は、今回は、会うのも良いでしょう。
(夷之による誤りを)直さなければ、『道』、『真理』は(世に)現れないであろう。
私、孟子は、まさに、これ(、夷之による誤り)を直そう。
私、孟子は、『夷之は墨者である』と聞いています。
墨者は、葬儀を粗末にするのを、その道理としてしまっています。
夷之は、墨子の説によって、天下の人々を変えよう、と思ってしまっています。
夷之は、葬儀を粗末にするのが正しいとしてしまっていて、尊重してしまっている!
しかし、夷之は、自分の親の葬儀を手厚くした。
これでは、卑賤な方法で、親に仕えてしまって(矛盾して)いる」

徐辟が、孟子 先生の言葉を、夷之に言った。

夷之が言った。

「儒者の道理の言葉によると、『古代人は、赤子を保護するかのようにした』と。

この言葉の真意は、どのような事を言っているのでしょうか？

この言葉の真意は、愛には差が無くて、愛は等しいとしています。

愛を施すのを、親から始めているに過ぎないのです」

徐辟が、夷之の言葉を、孟子 先生に言った。

孟子 先生は言った。

「人は、(血族ではない)隣人の赤子に親愛の情を抱く(いだく)ように、自分の兄の子に親愛の情を抱くと、あの夷之は信じてしまっているのか？

彼、夷之は、(言葉の意味を)取り違えてしまって、そう信じてしまっているのである。

赤子が匍匐前進して井戸に入ってしまおうとしても、赤子の罪ではないのである。

また、天の神は、万物を生じさせているが、これらの万物の根本を唯一にしている。

しかし、夷之は根本を二つ以上の複数にしてしまっている。だから、誤るのである。

考えるに、太古、かつて、自分の親の葬儀をしなかった者がいたのである。

自分の親が死ぬと、持ち上げて運んで、谷に放置して腐敗するのに任せたのである。

後日、その谷を通り過ぎると、狐(キツネ)や狸(タヌキ)が、その親の死体を食い散らかし、

蠅(ハエ)や蚋(ブユ)が、その親の死体に、しばらくたかって、食っていた。

親の葬儀をしなかった者の額(ひたい)に汗が出た。

親の死体を横目で見て、直視できなかった。

汗が出たのは、他人から、どう思われるかを考えたせいの汗ではなかった。

心中の様子が外見に到達して現れたのである。

多分、親の葬儀をしなかった者は、帰って、土を運ぶ籠によって、(土で、)

その親の死体を覆ったであろう。

土で親の死体を覆うのが、まことに、正しいのであれば、親孝行の子や思いやり深い知者が棺で自分の親の死体を覆うのもまた、必ず、道理が有るのである」

　徐辟が、孟子 先生の言葉を、夷之に言った。

夷之は、呆然として、応答までの時間を空けてしまってから、言った。

「よくぞ、私、夷之に言ってくださいました」

滕文公下

陳代、曰。

「不、見(あう)、諸侯、宜、若(のよう)、小、然。

今、一、見(あう)、之(これ)、大、則(すなわち)、以、王、小、則(すなわち)、以、覇。

且(かつ)、『志』、曰。

『枉(まげる)、尺、而、直、尋』。(中国では一尋は八尺。)

宜、若(のよう)、可、為(なす)、也」

孟子、曰。

「昔、斉、景公、田(狩猟をする)。

招、虞人(山や公園などの役人)、以、旌。

不、至。

将(しようとする)、殺、之(これ)。

『志士、不、忘、在、溝壑(餓死などで道端で死ぬ)。

勇士、不、忘、喪、其元(その首)』。

孔子、奚(なにに)、取、焉?

取、非、其(その)招、不、往、也。

如(のような)、不、待、其(その)招、而、往、何、哉?

且(かつ)、夫(それ)、枉(まげる)、尺、而、直、尋、者(とは)、以、利、言、也。

如(もし)、以、利、則(すなわち)、枉(まげる)、尋、直、尺、而、利、亦(また)、可、為(なす)、与(か)?

昔者(むかし)、趙簡子、使(させる)、王良、与、嬖奚、乗。

終日、而、不、獲、一、禽(鳥)。

嬖奚、反命、曰。
『天下之賤工、也』。
或、以、告、王良。
良(＝王良)、曰。
『請、復、之』。
強、而、後、可。
一、朝、而、獲、十、禽。
嬖奚、反命、曰。
『天下之良工、也』。
簡子(＝趙簡子)、曰。『我、使、掌、与、女、乗』。謂、王良。
良(＝王良)、不、可、曰。
『吾、為、之、範、我馳駆、終日、不、獲、一。
為、之、詭　遇、一、朝、而、獲、十。
詩、云。不、失、其馳、舎、矢、如、破。
我、不、貫、与、小人、乗。
請、辞』。
御者、且、羞、与、射、者、比。
比、而、得、禽獣、雖、若、丘陵、弗、為、也。
如、枉、道、而、従、彼、何、也？
且、子、　過　、矣。
枉、己、者、未、有、能、直、人、者、也」

陳代が孟子先生に言った。

「(孟子 先生が、)諸侯に会わないのは、心が狭小のように思います。

今、一回、諸侯に会えば、その諸侯が偉大であれば王に成らせる事ができますし、その諸侯が矮小でも覇者に成らせる事ができます。

また、記録書で言われています。

『一尺分は曲げる代わりに、一尋、八尺分を直す』と。

(孟子 先生は、)この言葉のようにするのが善いと思います」

孟子 先生は言った。

「昔、斉という国の景公が、狩猟をした。

(景公は、)旗で、山や公園などの役人を呼び寄せようとした。

しかし、その役人は来なかった。

(景公は、)その役人を殺そうとした。

(孔子 先生は言いました。)

『志が有る一人前である者は、忘れず、餓死などで道端で死ぬ覚悟が在る。

勇敢な一人前である者は、忘れず、自分の首を切られる覚悟(、死をも恐れぬ勇気)を失わない』と。

孔子 先生は、何に感じ入ったのか?

(孔子 先生は、その役人が、)正しくない呼び寄せ方では、来なかった事に感じ入ったのである。

呼び寄せられるのを待たずに来てしまうようでは、どうであろうか？　正しくない！　と思います。

また、『一尺分は曲げる代わりに、一尋、八尺分を直す』とは、利益について言ってしまっています。

もし、利益によって、一尋、八尺分を曲げてしまって、一尺分だけを直してしまっても、利益に成るのであれば、『善い』と見なしてしまうのか？
昔、趙簡子は、王良を、嬖奚と、馬車に乗せた。
嬖奚は、趙簡子に結果を報告して、言いました。
一日中、狩猟をしても、一羽の鳥も獲れなかった。
『天下一下手な御者でした』と。
ある人が、嬖奚の言葉を、王良に告げ知らせた。
王良は、趙簡子に言いました。
『請い願わくば、再挑戦させてください』と。
王良が強く願ったので、後に、趙簡子は許可した。
朝だけで、十羽の鳥が獲れた。
嬖奚は、趙簡子に結果を報告して、言いました。
『天下一巧みな御者でした』と。
趙簡子は、王良に言いました。『私、趙簡子は、あなた、王良を、嬖奚を馬車に乗せる御者を担当させます』と。
王良は、それを許さず、言いました。
『私、王良が、その嬖奚の為に、規範に則って馬を走らせたら、(嬖奚は、)一日中、狩猟をしても、一羽も鳥を獲れませんでした。
その嬖奚の為に、不正な方法で馬を走らせたら、(嬖奚は、)朝だけで、十羽も鳥を乱獲してしまいました。
詩経で言われています。正しく馬を走らせるのを失敗しなければ、弓で矢を発射すると、(命中して)的を破る物である、と。
私、王良は、不正な方法で乱獲するような矮小な人(、弓で矢を射るのが下手な矮小な人)を馬車に乗せるのは慣れていません。

請い願わくば、辞退したいです』と。
巧みな御者も、弓で矢を射るのが下手な者と並べられるのを恥じたのです。
並べられれば、鳥や獣を山のように得られても、並べられたくないのである。
『道理』、『真理』をねじ曲げてしまって、矮小な人に従ってしまうようでは、どうであろうか？ 正しくない！
また、あなた、陳代は、過ちを犯しています。
自己をねじ曲げてしまった者で、他人を直す事ができた者など未だいないのです」

景春、曰。
「公孫衍、張儀、豈(どうして)、不、誠(まこと)、大、丈夫、哉？
一、怒、而、諸侯、懼(おそれる)。
安居、而、天下、熄(やむ)」

孟子、曰。
「是(これ)、焉(どうして)、得、為(なす)、大、丈夫、乎？
子、未、学、礼、乎？
丈夫、之(の)、冠、也、父、命、之(これ)。
女子、之(の)、嫁、也、母、命、之(これ)。
往、送、之(これ)、門、戒、之(これ)、曰。
『往、之(いく)、女(なんじ)、家、必、敬、必、戒、無(なかれ)、違、夫子』。

以、順、為(なす)、正、者(は)、妾、婦之道、也。
居、天下之広居(仁)、立、天下之正位、行、天下之大道。
得、志、与(ともに)、民、由(よる)、之(これ)。
不、得、志、独、行、其(その)道。
富貴、不、能、淫。
貧賤、不、能、移。
威武、不、能、屈。
此(これ)、之(これ)、謂、『大、丈夫』」

景春が孟子 先生に言った。
「公孫衍や、張儀は、なかなか、どうして、まことに、大いなる男ではないでしょうか?
(公孫衍や、張儀が、)一回、怒ったら、諸侯は恐れる羽目に成ります。
(公孫衍や、張儀が、)安楽に暮らしていると、天下の混乱もやみます」

孟子 先生は言った。
「(公孫衍や、張儀を、)どうして、『大いなる男である』と見なす事ができ得るでしょうか? いいえ!
あなた、景春は、礼儀について、未だ学んでいないのですか?
男性が成人して冠を受けると、父が、その男性に教訓を言います。
女性が嫁ぐと、母が、その女性に教訓を言います。
(母は、)その女性を(結婚相手の家の)門まで送って行くと、その女性を戒めて、言います。

『あなたが(結婚相手の)家へ行ったら、必ず、(結婚相手を)敬い、必ず自身を戒めて、結婚相手の命令に違える事なかれ』と。

従順を正しいとするのが、既婚女性の道理なのです。

天下の人々への広い思いやりに留まり、天下で正しい位へ立身出世し、天下の大いなる道理である善を行う。

志を実行する好機を得られれば、国民と共に、これら思いやりと善によって、実行する。

志を実行する好機を得られなければ、独りで、その、道理である善を行う。

富を得ても、高貴な地位を得ても、度を越さない(で、自制、節制できる)。

貧しくても、卑賤な地位でも、(悪へ)心変わりしない。

武威にも屈しない。

このような男を『大いなる男である』と言うのである」

周霄、問、曰。

「古之君子、仕、乎?」

孟子、曰。

「仕。

伝、曰。

『孔子、三月、無(いない)、君、則(すなわち)、皇皇(不安)、如(のよう)、也。

出、疆(さかい)、必、載、質』。

公明儀、曰。

『古之人、三月、無（いない）、君、則（すなわち）、弔』」

「三月、無（いない）、君、則（すなわち）、弔、不、以、急、乎？」

曰。

「士、之（の）、失、位、也、猶（ちょうど〜のよう）、諸侯、之（の）、失、国家、也。

『礼』、曰。

『諸侯、耕、助、以、供、粢盛（神への捧げ物）。

夫人、蚕、繅（蚕の繭から糸を取る）、以、為（つくる）、衣服』。

犠牲（神への捧げ物）、不、成、粢盛、不、潔、衣服、不、備、不、敢、以、祭。

惟（ただ）、士、無（ない）、田、則（すなわち）、亦（また）、不、祭。

牲殺（犠牲）、器皿（器）、衣服、不、備、不、敢、以、祭、則（すなわち）、不、敢、以、宴。

亦（また）、不足、弔、乎？」

「『出、疆（さかい）、必、載、質』、何、也？」

曰。

「士、之（の）、仕、也、猶（ちょうど〜のよう）、農夫、之（の）、耕、也。

農夫、豈（どうして）、為（ため）、出、疆（さかい）、舎（すてる）、其（その）耒耜（農具）、哉？」

曰。

「晋、国、亦（また）、仕、国、也。

未、嘗（かつて）、聞、仕、如此（このよう）、其（それ）、急。

仕、如此、其、急、也、君子、之、難、仕、何、也？」

曰。

「丈夫、生、而、願、為、之、有、室。
女子、生、而、願、為、之、有、家。
父母之心、人、皆、有、之。
不、待、父母之命、媒妁之言、鑽、穴隙、相、窺、逾、牆、相、従、
則、父母、国人、皆、賤、之。
古之人、未、嘗、不、欲、仕、也。
又、悪、不、由、其道。
不、由、其道、而、往、者、与、鑽、穴隙、之、類、也」

周霄が孟子 先生に質問して言った。
「古代の王者も仕えたのですか？」

孟子 先生は言った。
「仕えました。
口伝で言われています。
『孔子 先生は、三か月間、上司である君主がいなければ、(国家に仕えて働いていないので)不安なようであった。
国境から出る時には必ず、(未来の君主への)贈り物を(乗り物に)載せていた』と。
公明儀は言いました。

『古代人は、三か月間、上司である君主がいなければ、慰められた』と」

(周霄が言った。)

「『三か月間、上司である君主がいなければ、慰められる』のは、性急ではないでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「役人が位を失ってしまうのは、ちょうど諸侯が国家を失ってしまうような物なのである。

『礼記』で言われています。

『諸侯は、税制の助の公田を耕す(儀式をする)と、神への捧げ物を(神へ)捧げる。

諸侯の夫人は、蚕(カイコ)の繭(まゆ)から絹の糸を取って、衣服を作る』と。

犠牲の牛などが成長しなかったり、神への捧げ物が清浄ではなかったり、衣服を準備できなかったりすれば、あえて祭儀を行わなかった。

役人も、田が無ければ、祭儀を行わなかった。

犠牲の牛などや、祭器や、祭衣が準備できなかったら、あえて祭儀を行わなかったので、あえて宴も開催しなかった。

これでも、慰めるには、不足していますか？」

(周霄が言った。)

「『国境から出る時には必ず、(未来の君主への)贈り物を(乗り物に)載せていた』のは、どうしてでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「役人が国家に仕えるのは、ちょうど農業従事者が田を耕すような物なのです。

農業従事者が、どうして、国境から出る為に、自分の農具を捨てるでしょうか？ いいえ！」

周霄が言った。

「晋という国でもまた、役人が国に仕えています。

しかし、仕えるのが、その孟子 先生の話のように性急な物であるとは、未だかつて聞いた事が有りません。

また、仕えるのが、その孟子 先生の話のように性急な物であるならば、王者である孟子 先生が仕え難いのは、どうしてでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「男性が生まれたら、(父母は、)その男性の為に、(良い)妻がいるのを願います。

女性が生まれたら、(父母は、)その女性の為に、(良い夫の良い)家が有るのを願います。

これらのような父母の心が、人には皆、有ります。

父母からの言葉や、仲人からの言葉を待たずに、(壁に)穴を空けて相互に覗き合って、壁を越えて相互に性的な行為をし合ったならば、父母や、自国の人々は皆、その男女を軽蔑します。

古代人で、未だかつて、役人として国家に仕えたいと欲しない人はいなかった。（ただし、現代と違って、働く気が有れば、国や他人に仕えて働ける時代であった。）

また、古代人は、正しい手段によらず、役人に成るのを憎悪した。

正しい手段によらず行う者は、壁に穴を空ける類（たぐい）と同様な者なのである」

彭更、問、曰。

「後車、数十乗、従者、数百人、以、伝食（次々と世話に成る）、於、諸侯、不、以、泰（贅沢）、乎？」

孟子、曰。

「非、其（その）道、則（すなわち）、一、箪、食、不、可、受、於（から）、人。

如（もし）、其（その）道、則（すなわち）、舜、受、堯之天下、不、以、為（なす）、泰（贅沢）。

子、以、為（なす）、泰（贅沢）、乎？」

曰。

「否。

士、無（ない）、事（こと）、而、食、不、可、也」

曰。

「子、不、通、功、易、事、以、羨、補、不足、則、農、有、余、粟、
女、有、余、布。
子、如、通、之、則、梓匠輪輿、皆、得、食、於、子。
於、此、有、人、焉。
入、則、孝、出、則、悌、守、先王之道、以、待、後之学者、而、不、
得、食、於、子、子、何、尊、梓匠輪輿、而、軽、為、仁義、者、哉？」

曰。

「梓匠輪輿、其志、将、以、求、食、也。
君子、之、為、道、也、其志、亦、将、以、求、食、与？」

曰。

「子、何、以、其志、為、哉？
其、有、功、於、子、可、食、而、食、之、矣。
且、子、食、志、乎？ 食、功、乎？」

曰。

「食、志」

曰。

「有、人、於、此。
毀、瓦、画、墁、其志、将、以、求、食、也、則、子、食、之、
乎？」

曰。

「否」

曰。

「然、則（すなわち）、子、非、食（やしなう）、志、也。
食（やしなう）、功（行動の結果）、也」

彭更が孟子 先生に質問して言った。

「(孟子 先生は、)後続車が数十台、従者が数百人で、諸侯達に次々と世話に成っていますが、贅沢では、ありませんか？」

孟子 先生は言った。

「正しい道理でなければ、竹の器、一つ分の食べ物でも、他人から受け取るのは、善くないのである。
もし正しい道理であれば、舜は、堯から天下の統治権を受け取ったが、『贅沢である』と見なさないのである。
あなた、彭更は、舜を『贅沢である』と見なしますか？」

彭更が言った。

「いいえ。
ただし、一人前である者は、仕事が無いのに、食べるのは、善くないのです」

孟子 先生は言った。
「あなた、彭更が、行動の結果に精通し、仕事を分担させ、不足分を余剰分で補充しなければ、農業従事者は穀物の余剰を抱えてしまいますし、女性は普段使いの麻などの織物の余剰を抱えてしまいます。
あなた、彭更が、もし、これらに精通していれば、大工や車の職人などは皆、あなたのおかげで、食べ物を得られます。
ここに、ある人がいたとします。
(その人は、)家に入れば目上の人達を敬い、家を出ても目上の人達を敬い、後世の学者達を待つために古代の聖王の道理、真理を守っていても、あなた、彭更のせいで、食べ物が得られないというのであれば、あなた、彭更は、なぜ、大工や車の職人などを尊重しても、思いやり深い知的な正義の人を軽んじるのですか?」

彭更が言った。
「大工や車の職人などの目標は、食べ物を求めての物です。
王者は道理、真理を実行しますが、王者の目標もまた、食べ物を求めての物なのですか?」

孟子 先生は言った。
「あなた、彭更は、なぜ、『目標によって、食べ物を得られる』と見なしてしまっているのですか?
あなた、彭更にとって、(良い)行動の結果が有って、養うべきであるならば、その人を養います。

また、あなた、彭更は、目標を養っているのか？　行動の結果を養っているのか？」

彭更が言った。

「目標を養っています」

孟子先生は言った。

「ここに、ある人がいたとします。

（その人は、）瓦で屋根を覆おうとして屋根を壊しますし、壁を綺麗に塗ろうとして壁を掻いてしまって傷つけますが、その人の目標が食べ物を求めての物であれば、あなた、彭更は、その人を養いますか？」

彭更が言った。

「いいえ」

孟子先生は言った。

「そうであれば、あなた、彭更は、目標を養っているのではなく、行動の結果を養っているのです」

万章、問、曰。

「宋、小国、也。

今、将(しようとする)、行、王、政。
斉、楚、悪(ぞうおする)、而、伐、之(これ)、則(すなわち)、如之何(これをどうする)？」

孟子、曰。

「湯(=湯王)、居、亳。
与(と)、『葛』、為(なる)、隣。
葛伯、放(自由奔放)、而、不、祀。
湯(=湯王)、使(させる)、人、問、之(これ)、曰。
『何為(どうして)、不、祀？』
曰。
『無(ない)、以、供、犠牲、也』。
湯(=湯王)、使(させる)、遺(おくる)、之(これ)、牛、羊。
葛伯、食、之(これ)、又(また)、不、以、祀。
湯(=湯王)、又(また)、使(させる)、人、問、之(これ)、曰。
『何為(どうして)、不、祀？』。
曰。
『無、以、供、粢盛(神への捧げ物)、也』。
湯(=湯王)、使(させる)、亳、衆、往、為(ため)、之(これ)、耕、老弱(老人と幼子)、饋(おくる)、食。
葛伯、率、其(その)民、要、其(その)、有、酒、食、黍(キビ)、稲(イネ)、者(もの)、奪、之(これ)、不、授、者(もの)、
殺、之(これ)。
有、童子、以、黍(キビ)、肉、餉(おくる)、殺、而、奪、之(これ)。
『書』、曰。
『葛伯、仇、餉』。
此(これ)之謂、也。

為(ため)、其(その)、殺、是(この)童子、而、征、之(これ)。

四海之内、皆、曰。

『非、富、天下、也。

為(ため)、匹夫、匹婦、復讐、也』。

湯、始、征、自(より)、葛、載(はじめ)。

十一、征、而、無、敵、於、天下。

東面、而、征、西夷、怨、南面、而、征、北狄、怨、曰。

『奚為(どうして)、後、我?』。

民、之(の)、望、之(これ)、若(のよう)、大旱、之(の)、望、雨、也。

帰、市、者(もの)、弗(ない)、止。

芸(草木を植える)、者(もの)、不、変。

誅、其(その)君、弔、其(その)民、如(のよう)、時雨、降、民、大、悦。

『書』、曰。

『徯(まつ)、我后(わが君主)。

后(君主)、来、其(それ)、無(ない)、罰』。

『有、攸(ところ)、不、惟(おもう)、臣、東征、綏(やすらがせる)、厥(その)士女。

篚(はこ)、厥(その)、玄、黄、紹、我(わが)周王、見(あう)、休(よろこばしい)。

惟(これ)、臣、附、于、大邑、周』。

其(その)君子、実(みたす)、玄、黄、于、篚(はこ)、以、迎、其(その)君子。

其(その)小人、簞食壺漿(食べ物と飲み物で軍隊を歓迎する)、以、迎、其(その)小人。

救、民、於、水火之中、取、其(その)残、而已(のみ)、矣。

『太誓』、曰。

『我(わが)武、惟(これ)、揚、侵、于、之疆(このさかい)。

則(すなわち)、取、于、残、殺、伐、用、張。

于(よりも)、湯、有、光』。
不、行、王、政、云、爾(しかり)。
苟(かりに)、行、王、政、四海之内、皆、挙、首、而、望、之(これ)、欲、以、為(なす)、君。
斉、楚、雖(いえども)、大、何(どうして)、畏、焉?」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「宋は小国です。
(宋は、)今、真の王の政治を実行しようとしています。
斉という国や、楚という国が、この宋を憎悪して討伐隊を派遣したら、それをどうしますか?」

孟子 先生は言った。
「殷の湯王は、亳という所に居ました。
葛という国と隣接していました。
葛伯は、自由奔放で、神霊を祭りませんでした。
殷の湯王は、使者に、その葛伯へ質問させました。
『どうして、神霊を祭らないのですか?』と。
葛伯は言いました。
『神霊へ捧げる犠牲の牛などが無いのです』と。
殷の湯王は、使者に、牛と羊を葛伯へ贈らせました。
葛伯は、その牛と羊を食べてしまい、神霊を祭りませんでした。
殷の湯王は、また、使者に、その葛伯へ質問させました。
『どうして、神霊を祭らないのですか?』と。

葛伯は言いました。
『神霊へ捧げる、穀物などの捧げ物が無いのです』と。
殷の湯王は、亳の人達に、葛伯の為に、葛という国へ行かせて田を耕させ、
そのうちの老人と幼子には、食べ物を贈らせた。
葛伯は、葛の国民を率いて、道の要所で待ち伏せ、亳の者達が所有していた
酒や食べ物や黍や稲を奪い、渡さない者は殺した。
黍と肉を贈ろうとして所有していた亳の幼子も、殺して、黍と肉を奪った。
『書経』で言われています。
『葛伯は、贈り物をした恩に仇で返した』と。
この言葉は、このような事を言っているのです。
(殷の湯王は、)その亳の幼子も殺されたため、その葛伯を征伐した。
天下の人々は皆、言いました。
『天下という富のためではない。
(殷の湯王は、)国民の為に復讐したのである』と。
(殷の湯王は、)最初の葛という国から、征伐を始めました。
十一の国々の暴君を征伐しても、天下の人々で敵対する人達はいなかった。
東に向けて征伐していくと西の外国人達が怨んで、南に向けて征伐していく
と北の外国人達が怨んで、言いました。
『どうして、私達を後回しにするのですか？　(早く征伐しに来てくださ
い)』と。
大旱魃で雨を望むかのように、人々は、その殷の湯王が来るのを望みました。
市場に行く者達は、(殷の湯王を信頼していたので、)市場に行くのをやめま
せんでした。
農業従事者達は、(殷の湯王を信頼していたので、)変わらず農業をしました。

暴君に天誅を下し、暴君の国の国民達を弔問したので、適時に雨が降ったかのように、暴君の国の国民達は大いに喜びました。

『書経』で言われています。

『私達の真の君主(である殷の湯王)を待っています。

真の君主(である殷の湯王)が来ても、無実の国民達を処罰しない』と。

『臣従しようと思わない所(である東の外国)が有ったため、東の外国を征伐して、その国民の男女達に安らぎをもたらした。

(諸国は、)黒い絹織物と、黄色の絹織物を箱に入れて贈って、私達の周の武王を招いて会って喜んだ。

大いなる国、周に臣従して属国と成ったのである』と。

諸国の君主達は、黒い絹織物と、黄色の絹織物に満ちた箱を贈って、王者である周の武王を歓迎した。

諸国の国民達は、食べ物と飲み物で周の軍隊を歓迎した。

(周の武王は、暴君による悪政による)水に溺れるような火に焼かれるような苦しみの中から暴君の国の国民達を救い、残忍な暴君どもだけを取り除いたのである。

『書経』の『太誓』で言われています。

『私達、周の武威が揚がって、その暴君の国の国境を侵略していきました。

残忍な暴君どもだけを取り除いて殺すという征伐を、張り巡らしていきました。

殷の湯王よりも、光が有りました』と。

(万章は、)真の王の政治を行(おこな)っていないのに、そのように、言ってしまいます。

仮に、真の王の政治を行えば、天下の人々は皆、頭を挙げて、それを望み、『自分達の君主にしたい』と欲します。斉と、楚は大国といえども、どうして、畏れる必要が有りますか？　いいえ！」

孟子、謂、戴不勝、曰。
「子、欲、子之王之善、与？
我、明、告、子。
有、楚、大夫、於、此、欲、其子、之、斉語、也、則、使、斉、人、伝、諸？　使、楚、人、伝、諸？」

曰。
「使、斉、人、伝、之」

曰。
「一、斉、人、伝、之、衆、楚、人、咻、之、雖、日、撻、而、求、其、斉、也、不、可、得、矣。
引、而、置、之、荘、岳之間、数年、雖、日、撻、而、求、其、楚、亦、不、可、得、矣。
子、謂、薛居州、『善士』、也、使、之、居、於、王、所。

在、於、王、所、者（もの）、長幼、卑尊、皆、薛居州、也、王、誰、与（ともに）、為（なす）、不善？
在、王、所、者（もの）、長幼、卑尊、皆、非、薛居州、也、王、誰、与（ともに）、為（なす）、善？
一、薛居州、独、如宋王何（宋王をどうできる）？」

孟子 先生は戴不勝に言った。
「あなた、戴不勝は、あなた、戴不勝の王が善良に成って欲しいですか？
私、孟子は、あなた、戴不勝に、明らかに告げ知らせましょう。
ここに楚の役人がいて、自分の子に斉の言葉を話して欲しかったら、斉の人に、その子へ伝授させますか？　楚の人に、その子へ伝授させますか？」

戴不勝が言った。
「斉の人に、その子へ伝授させます」

孟子 先生は言った。
「一人の斉の人が、その子に伝授しても、多数の楚の人達が、その子にうるさく話しかけたら、日々、鞭（ムチ）で打っても、その子に斉の言葉を話すのを求めても、でき得ないでしょう。
その子を引き連れて、数年間、(斉という国の)荘という場所と岳という場所の間に置いたら、日々、鞭（ムチ）で打っても、その子に楚の言葉を話すのを求めても、また、でき得ないでしょう。

あなた、戴不勝は、薛居州を『善良な一人前である者である』と言って、その薛居州に宋の王の所へ居させます。

宋の王の所にいる者が、年長者も年少者も、卑賤な者も尊い者も、皆、薛居州のようであれば、宋の王は、誰と共に悪行を為（な）せるであろうか？　いいえ！

宋の王の所にいる者が、年長者も年少者も、卑賤な者も尊い者も、皆、薛居州のようでなければ、宋の王は、誰と共に善行を為（な）せるであろうか？　いいえ！

薛居州、一人だけで、宋の王をどうしようというのですか？」

　公孫丑、問、曰。

「不、見（あう）、諸侯、何、義？」

　孟子、曰。

「古、者（は）、不、為（なる）、臣、不、見（あう）。

段干木、踰（こえる）、垣、而、辟、之（これ）。

泄柳、閉門、而、不、内。

是（これ）、皆、已甚（度を越している）。

迫、斯（ここ）、可、以、見（あう）、矣。

陽貨、欲、見（あう）、孔子、而、悪（ぞうおする）、無礼。

大夫、有、賜、於、士、不、得、受、於、其（その）家、則（すなわち）、往、拝、其（その）門。

陽貨、瞯（隙を狙う）、孔子之亡（いない）、也、而、饋（おくる）、孔子、蒸豚。
孔子、亦（また）、瞯（隙を狙う）、其亡（そのいない）、也、而、往、拝、之（これ）。
当（あたる）、是時（このとき）、陽貨、先。
豈（どうして）、得、不、見（あう）？
曾子、曰。
『脅、肩、諂、笑、病、于（よりも）、夏畦（夏の農作業）』。
子路、曰。
『未、同、而、言。
観、其（その）色、赧赧然。
非、由（=子路）、之（の）、所、知、也』。
由（より）、是（これ）、観、之（これ）、則（すなわち）、君子、之（の）、所、養、可、知、已（のみ）、矣」

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。
「諸侯と会わないのには、どのような意味が有るのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「古代では、臣下に成るつもりがなければ、諸侯と会わなかったのである。
段干木は、壁を越えて、諸侯と会うのを避けました。
泄柳は、門を閉ざして、諸侯を内側に入れませんでした。
これらは皆、度を越していますが。
会うのを迫られたら、諸侯と会っても善いのです。
陽貨は、孔子 先生と会いたいと欲したが、無礼に成ってしまうのを嫌った。

上級の役人が下級の役人に贈り物をして(下級の役人が不在で)、その下級の役人の家で礼の言葉を受け取れなければ、下級の役人は、上級の役人の家の門まで行って礼拝するのが礼儀です。
陽貨は、孔子先生のいない隙を狙って、孔子先生に蒸した豚を贈りました。孔子先生もまた、陽貨のいない隙を狙って、陽貨の家の門まで行って礼拝しました。
この時にあたって、陽貨が先に礼儀をもって会いに行ったのである。
(孔子先生は、)どうして、陽貨と会わない事ができ得ようか？　いいえ！
曾子先生は言いました。
『肩をちぢめて、へつらって笑うのは、夏の農作業よりも疲れる』と。
子路は言いました。
『(心の中では)未だ賛同していないのに、(口先だけで)賛同を言ってしまう。そのような人の顔色を観察してみると、赧赧然と恥ずかしくて赤く成っていた。
私、子路の知った事ではないが』と。
これらの言葉によって、その諸侯と会わない事について観察、考察してみると、王者が修養している物(である『へつらわない』という事)が分かるばかりである」

戴盈之、曰。
「什、一、去、関、市之征、今茲(今年)、未、能。

請、軽、之（これ）、以、待、来年、然、後、已（やめる）、何如（どうですか）？」

孟子、曰。

「今、有、人、日、攘（ぬすむ）、其（その）隣之鶏、者（もの）。

或（ある）、告、之（これ）、曰。

『是（これ）、非、君子之道』。

曰。

『請、損（へらす）、之（これ）、月、攘（ぬすむ）、一、鶏、以、待、来年、然、後、已（やめる）』。

如（もし）、知、其（その）、非、義、斯（ここ）、速（すみやかに）、已（やめる）、矣。

何（どうして）、待、来年？」

戴盈之が孟子 先生に言った。

「利益の十分の一を税にし、関所と市場の税を撤廃するのを、今年は、未だ、できません。

請い願わくば、これらの高い目標を下げて、来年まで待って、その後、やめるのは、どうでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「今、日々隣人の鶏を盗んでいる人がいたとします。

ある人が、その人に言いました。

『それは、王者の道理に反している』と。

その人は言いました。

『請い願わくば、その高い目標を下げて、月々一羽の鶏を盗んで、来年まで
待って、その後、やめます』と。
もし、その行動が、正しくない事がわかったら、そこで速(すみ)やかに、やめる物
なのです。
どうして、来年まで待とうか？　いいえ！」

公都子、曰。
「外人(接点が無い人々)、皆、称、夫子、『好、弁』。
敢、問。
何、也？」

孟子、曰。
「予、豈(どうして)、好、弁、哉？
予、不得已(やむをえず)、也。
天下之生、久、矣。
一、治、一、乱。
当(あたる)、堯之時、水、逆行、氾濫、於、中国。
蛇、龍、居、之(これ)。
民、無(ない)、所、定。
下、者(もの)、為(つくる)、巣。
上、者(もの)、為(なす)、営窟(洞穴に住む)。

『書』、曰。

『洚水、警、余』。

洚水、者、洪水、也。

使、禹、治、之。

禹、掘、地、而、注、之、海。

駆、蛇、龍、而、放、之、菹。

水、由、地中、行。

『江(＝長江)』、『淮(＝淮水)』、『河(＝黄河)』、『漢(＝漢水)』、是、也。

険阻、既、遠。

鳥獣、之、害、人、者、消。

然、後、人、得、平土、而、居、之。

堯、舜、既、没。

聖人之道、衰。

暴君、代、作。

壊、宮室、以、為、汚池。

民、無、所、安息。

棄、田、以、為、園囿。

使、民、不、得、衣食。

邪説、暴行、又、作。

園囿、汚地、沛沢、多、而、禽獣、至。

及、紂之身、天下、又、大乱。

周公、相、武王、誅、紂、伐、『奄』、三年、討、其君。

駆、『飛廉』、於、海隅、而、戮、之。

滅、国、者、五十。

駆、虎、豹（ヒョウ）、犀（サイ）、象（ゾウ）、而、遠、之（これ）。

天下、大、悦。

『書』、曰。

『丕（大いに）、顕（あきらか）、哉、文王、謨（はかりごと）。

丕（大いに）、承、哉、武王、烈。

佑啓（助け啓発し導く）、我（わが）後人、咸（みな）、以、正、無（ない）、欠』。

世、衰、道、微、邪説、暴行、有、作（起こる）。

臣、弑、其（その）君、者（もの）、有、之（これ）。

子、弑、其（その）父、者（もの）、有、之（これ）。

孔子、懼（おそれる）、作（つくる）、『春秋』。

『春秋』、天子之事、也。

是故（このため）、孔子、曰。

『知、我、者（もの）、其（それ）、惟（ただ）、春秋、乎。

罪、我、者（もの）、其（それ）、惟（ただ）、春秋、乎』。

聖王、不、作（おこる）。

諸侯、放恣（勝手で、だらしない）。

処士（役人に成らない者）、横議（勝手に議論する）。

楊朱、墨翟之言、盈（みちる）、天下。

天下之言、不、帰、楊、則（すなわち）、帰、墨。

楊氏、為（ため）、我。

是（これ）、無（なくす）、君、也。

墨氏、兼愛（無差別に平等に愛してしまう）。

是（これ）、無（なくす）、父、也。

無（なくす）、父、無（なくす）、君、是（これ）、禽獣（鳥獣）、也。

公明儀、曰。
『庖(台所)、有、肥肉。
廏、有、肥馬。
民、有、饑、色。
野、有、餓莩(餓死者の死体)。
此(これ)、率、獣、而、食、人、也』。
楊、墨之道、不、息(やむ)、孔子之道、不、著(あらわれる)。
是(これ)、邪説、誣(あざむく)、民、充塞(余地を無くす)、仁義、也。
仁義、充塞(余地を無くす)、則(すなわち)、率、獣、食、人。
人、将(しようとする)、相、食。
吾、為(ため)、此(これ)、懼(おそれる)、閑(ならう)、先聖之道、距(ふせぐ)、楊、墨、放、淫辞(道理から外れた言葉)、邪説者(もの)、不、得、作(起こる)。
作(起こる)、於、其(その)心、害、於、其(その)事。
作(起こる)、於、其(その)事、害、於、其(その)政。
聖人、復(また)、起、不、易(かえる)、吾(わが)言、矣。
昔者(むかし)、禹、抑、洪水、而、天下、平。
周公、兼、夷狄、駆、猛獣、而、百姓、寧(やすらかにする)。
孔子、成、『春秋』、而、乱臣、賊子、懼(おそれる)。
『詩』、云。
『戎、狄、是、膺(討伐する)。
荊、舒、是、懲。
則(すなわち)、莫(ない)、我、敢、承(うける)』。
無(なくす)、父、無(なくす)、君、是(これ)、周公、所、膺(討伐する)、也。

我、亦(また)、欲、正、人心、息(やめさせる)、邪説、距(ふせぐ)、詖行(偏った言行)、放、淫辞(道理から外れた言葉)、以、承(うけつぐ)、
三聖者。
豈(どうして)、好、弁、哉？
予、不得已(やむをえず)、也。
能、言、距(ふせぐ)、楊、墨、者(もの)、聖人之徒(仲間)、也」

公都子が孟子 先生に言った。
「接点が無い人々は皆、孟子 先生が『雄弁を好む』と言っています。
あえて質問します。
どうして、(孟子 先生は雄弁を好むの)でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「私、孟子が、どうして、雄弁を好むであろうか？　いいえ！
私、孟子は、やむを得ず、しているのです。
天下に人々が生じて、久しいです。
交互に、善く統治されていたり、乱れたりします。
堯の時にあたっては、河の水が逆行して、国の中央にまで、氾濫しました。
蛇や、龍という巨大な奇形な爬虫類(はちゅうるい)が、この水中に居ました。
そのため、国民は、定住できる所が無い有様(ありさま)でした。
下位者は、木の上に巣を作りました。
上位者は、洞穴に住みました。
『書経』で言われています。
『洪水が、私に警告したのである』と。

原文の『洚水』とは『洪水』を意味します。

(堯は、)禹に治水させせました。

禹は、川の岸の地面を掘って(川幅を広げて)、川の水が(氾濫せずに)海へ注ぐようにしました。

禹は、蛇と、龍という巨大な奇形な爬虫類(はちゅうるい)を沼に追い払いました。

川の水が、(氾濫せずに、)大地の川筋の中を流れて行くように成りました。

『長江』、『淮水』、『黄河』、『漢水』という川が、それなのです。

(氾濫を起こしていた川の)険しい地形は、既に遠ざかりました。

鳥や獣のうち、人に害を与えた者達の姿も消えました。

そうした後で、人々は、平坦な土地を得て、そこに居住できるように成りました。

堯と、舜は、既に死んでいます。

聖人の道理、真理は、(この世の人々の間で)衰えてきています。

暴君どもが、代わる代わる、立ち上がっています。

(暴君どもは、)家々を壊して、池にしてしまいます。

国民は、安息できる所が無い有様(ありさま)です。

(暴君どもは、)田を捨てさせて、公園にしてしまいます。

(暴君どもは、)国民が衣食を得られないようにしてしまいます。

邪悪な説、乱暴な行動もまた、立ち上げられています。

公園、池、大湿地帯が多く成ってしまい、鳥や獣が到来するように成ってしまいました。

殷の紂王の身、代に及んで、天下は、また、大いに乱れました。

周公は、武王を助けて、殷の紂王に天誅を下し、奄という国を討伐して、三年間かかって、その奄の暴君を討伐しました。

飛廉という人を海に面した僻地にまで追放してから、その飛廉という人を処刑しました。

武王が滅ぼした国は、五十にものぼります。

虎(トラ)、豹(ヒョウ)、犀(サイ)、象(ゾウ)を追い払って遠ざけました。

天下の人々は大いに喜びました。

『書経』で言われています。

『大いに明らかである、文王の智謀は。

大いに(文王の智謀を)継承している、武勇が苛烈な武王は。

私達の後世の人達を助け啓発し導いて、皆、正しさにおいて欠損が無いようにしてくれました』と。

周王朝の治世の権威は衰えてしまい、道理、真理も衰えてしまい、邪悪な説、

乱暴な行動が立ち上げられてしまっています。

上司である君主を殺してしまう臣下がいます。

父を殺してしまう子がいます。

孔子 先生は、後世を恐れて、『春秋』という文書を作りました。

『春秋』のような文書の作成は、(本来は、)天子の仕事です。

このため、孔子 先生は言いました。

『私、孔子を知ってもらえる物は、春秋という文書だけであろう。

私、孔子を僭越であると非難してくれる物も、春秋という文書だけであろう』と。

聖王が立ち上がってくれない。

諸侯たちは、勝手で、だらしない。

役人に成らない者どもが、(政治について、)勝手に議論してしまう。

楊朱と、墨翟の(誤った)言説が、天下に満ちてしまっている。

天下の言説は、楊朱に帰属してしまわなければ、墨翟に帰属してしまう、という有様(ありさま)である。
楊朱(の言説)は、自分の為(ため)しか考えていない。
これでは、君主を無くしてしまう(。無政府主義者である)。
墨翟(の言説)は、無差別に平等に愛してしまう。
これでは、父を無くしてしまう(。家族を崩壊させてしまう)。
君主を無くしてしまうし、父も無くしてしまう人は、動物的人間である。
公明儀は言いました。
『(暴君の)台所には分厚い肉が有る。
(暴君の)馬の厩舎には肥えた馬がいる。
国民には飢えている『気色』、『様子』が有る。
野には餓死者の死体が有る。
これでは、暴君が獣を率いて人を食べさせているような物なのである』と。
楊朱と、墨翟の(誤った)道理が止(や)まなければ、孔子先生の道理、真理は現れない。
邪悪な言説が人々をだましてしまい、(人々の間で)思いやりと正義の余地が無いのである。
(人々の間で)思いやりと正義の余地が無ければ、(暴君どもは)獣を率いて人を食べさせるような事をしてしまう。
人々は、相互に、共食いしようとしているような物なのである。
私、孟子は、それを恐れて、古代の聖人の道理、真理を習って、楊朱と墨翟の邪悪な説を予防して、道理から外れた言葉を追い払って、邪悪な説を唱える者どもが起こる事ができ得ないようにしているのである。

邪悪な思考が、自分の心に起こってしまったら、自分の仕事を損なってしまいます。
邪悪な思考が、自分の仕事に起こってしまったら、自分の政治を損なってしまいます。
聖人が、また、立ち上がっても、私、孟子の言葉を変えないであろう。
昔、禹は、洪水を抑えて、天下を平安にしました。
周公は、外国も兼ね合わせて統治し、猛獣を追い払って、全ての人々に安らぎをもたらしました。
孔子 先生は、『春秋』という文書を完成させたので、反乱を企てている臣下や、親不孝な子は恐れました。
『詩経』で言われています。
『西の未開な野蛮な外国と、北の未開な野蛮な外国を討伐した。
南の、荊という国と、舒という国を懲らしめた。
私、周公に、あえて敵対して受けて立つ者はいない』と。
父を無くすような者どもや、君主を無くすような者どもは、周公が討伐したような者どもなのである。
私、孟子もまた、人々の心を正し、邪悪な説を辞めさせ、偏った言行を予防し、道理から外れた言葉を追放して、禹、周公、孔子 先生という三人の聖者の後継者に成りたいのである。
どうして、雄弁を好んでいるであろうか？　いいえ！
私、孟子は、やむを得ず、しているのである。
楊朱と墨翟の邪悪な説を予防する言葉を話す事ができる者は、聖人の仲間なのである」

匡章、曰。

「陳仲子、豈(どうして)、不、誠、廉士(清廉潔白な一人前である者)、哉？

居、於、於陵、三日、不、食、耳、無(ない)、聞、目、無(ない)、見(みる)、也。

井、上、有、李(すもも)。

螬(スクモムシ)、食、実、者、過半、矣。

匍匐、往、将(とる)、食、之(これ)。

三、咽(のむ)、然、後、耳、有、聞、目、有、見(みる)」

孟子、曰。

「於、斉国之士、吾、必、以、仲子(＝陳仲子)、為(なす)、巨擘(抜群の人)、焉。

雖(いえども)、然、仲子(＝陳仲子)、悪(どうして)、能、廉？

充、仲子(＝陳仲子)之操、則(すなわち)、蚓(ミミズ)、而、後、可、者(もの)、也。

夫(それ)、蚓(ミミズ)、上、食、槁壌(乾いた土)、下、飲、黄泉(地下の泉)。

仲子(＝陳仲子)、所、居、之(の)、室、伯夷、之、所、築、与(か)？ 抑(それとも)、亦(また)、盗

跖、之(の)、所、築、与(か)？

所、食、之(の)、粟(穀物)、伯夷、之(の)、所、樹(うえる)、与(か)？ 抑(それとも)、亦(また)、盗跖、之(の)、所、樹(うえる)、

与(か)？

是、未、可、知、也」

曰。

「是、何、傷、哉？

彼、身、織、屨(靴)。
妻、辟(ひく)、纑(麻を紡ぐ)、以、易(かえる)、之(これ)、也」

曰。

「仲子(＝陳仲子)、斉之世家(世襲の家)、也。
兄、『戴』、『蓋』、禄、万鍾(大量)。
以、兄之禄、為(なす)、不義之禄、而、不、食、也。
以、兄之室、為(なす)、不義之室、而、不、居、也。
辟(さける)、兄、離、母、処、於、於陵。
他日、帰、則(すなわち)、有、饋(おくる)、其(その)兄、生、鵝(ガチョウ)、者(もの)。
己、頻戚(ひんしゅく)、曰。
『悪(なに)、用、是(この)、鶃鶃(ガチョウの鳴き声)、者(もの)、為(なす)、哉?』。
他日、其(その)母、殺、是鵝(このガチョウ)、也、与(あたえる)、之(これ)、食、之(これ)。
其(その)兄、自(より)、外、至、曰。
『是(これ)、鶃鶃(ガチョウの鳴き声)之肉、也』。
出、而、哇(はく)、之(これ)。
以、母、則(すなわち)、不、食。
以、妻、則(すなわち)、食、之(これ)。
以、兄之室、則(すなわち)、弗(ない)、居。
以、於陵、則(すなわち)、居、之(これ)。
是(これ)、尚(なお)、為(なす)、能、充、其(その)類、也、乎?
若(のよう)、仲子(＝陳仲子)、者(もの)、蚓(ミミズ)、而、後、充、其(その)操、者(もの)、也」

匡章が孟子 先生に言った。

「陳仲子は、なかなか、どうして、まことに、清廉潔白な一人前である者ではないか？　はい！

於陵という所に居た時、三日間、食べず、耳が聞こえなく成りましたし、目も見えなく成りました。

その時、井戸の上に、李(すもも)の実が有りました。

その李(すもも)の実は、螬(スクモムシ)という虫が半分以上、食べてしまっている実でした。

(陳仲子は、)匍匐前進して、その李(すもも)の実を取って食べました。

(李の実の欠片を、)三回、飲み込んで、そうした後で、耳が聞こえるように成りましたし、目が見えるように成りました」

孟子 先生は言った。

「斉という国の領土において、私、孟子も、必ず、陳仲子を『飛び抜けた人である』と見なします。

ですが、陳仲子を、どうして、『清廉潔白である』と見なす事ができようか？　いいえ！

陳仲子の意思の堅固さを満たそうと思ったら、ミミズに成れた後で、可能に成る代物です。

ミミズは、地上で土だけを食べ、地下で地下の泉からの地下水だけを飲みます。

また、陳仲子が居住している家は、伯夷が建築した家でしょうか？　それとも、盗跖が建築した家でしょうか？

(陳仲子が)食べている穀物は、伯夷が植えた穀物でしょうか？　それとも、また、盗跖が植えた穀物でしょうか？

これらを未だ知る事ができません」

匡章が言った。

「それらが、どうして、瑕疵に成りますか？　いいえ！

彼、陳仲子、自身は、靴を織ります。

陳仲子の妻は、麻を紡いで、この麻を売って生活必需品などを買っていま
す」

孟子 先生は言った。

「陳仲子の家は、斉という国の世襲の名家です。

陳仲子の兄の戴は、蓋という所で、多額の給料をもらっています。

陳仲子は、兄の給料を『不義による給料である』と見なしてしまって、その
給料によって食べません。

陳仲子は、兄の家を『不義による家である』と見なしてしまって、その家に
居住しません。

陳仲子は、(不敬にも)兄を避け、(親不孝にも)母を離れ、於陵に処してし
まっています。

陳仲子が、ある日、実家に帰ると、陳仲子の兄に生きているガチョウを贈っ
た者がいた。

陳仲子は、自分の顔をしかめさせて、言いました。

『このゲイゲイと鳴く者を用いて何にできようか？』と。

後日、陳仲子の母は、そのガチョウを殺して、(料理して、)陳仲子に与えて
ガチョウを食べさせた。

陳仲子の兄が、外から帰って来て、言いました。

『それはガチョウの肉です』と。

陳仲子は、家から出て、そのガチョウの肉を吐いた。

陳仲子は、(親不孝にも)母の料理は食べません。

陳仲子は、妻の料理は食べます。

陳仲子は、(不敬にも)兄の家には居住しません。

陳仲子は、於陵という所の家には居住します。

それでもなお、あなた、匡章は、『陳仲子は、清廉潔白などの種類の正義を満たしている』と見なす事ができますか？

陳仲子のような者は、ミミズに成れた後で、誤った意思の堅固さを満たす事ができる者なのです」

離婁上

孟子、曰。

「離婁之明、公輸子之巧、不、以、規矩、不、能、成、方、員(円)。

師曠之聡、不、以、六律、不、能、正、五音。

堯、舜之道、不、以、仁政、不、能、平、治、天下。

今、有、仁心、仁聞、而、民、不、被、其沢(その恩恵)、不、可、法(のっとる)、於、後世、者(は)、

不、行、先王之道、也。

故、曰。

『徒善(口先だけの善)、不足、以、為、政。

徒法、不、能、以、自(おのずと)、行』。

『詩』、云。

『不、愆(あやまちをおかす)、不、忘、率(したがう)、由(よる)、旧章(古代の聖王の法)』。

遵、先王之法、而、過(あやまちをおかす)、者(もの)、未、之(これ)、有、也。

聖人、既、竭、目力、焉、継、之(これ)、以、規矩準縄。

以、為(なす)、方、員(円)、平、直、不、可、勝(まさる)、用、也。

既、竭、耳力、焉、継、之(これ)、以、六律。

正、五音、不、可、勝(まさる)、用、也。

既、竭、心思、焉、継、之(これ)、以、不、忍、人、之(の)、政。

而、仁、覆、天下、矣。

故、曰。

『為(なす)、高、必、因、丘陵。

為(なす)、下、必、因、川沢』。

為政、不、因、先王之道、可、謂、智、乎？
是(ここ)、以、惟(ただ)、仁者、宜(するのがよい)、在、高位。
不仁、而、在、高位、是(これ)、播(ひろくおよぼす)、其(その)悪、於、衆、也。
上、無(ない)、道、揆(はかる)、也、下、無(ない)、法、守、也。
朝、不、信、道、工、不、信、度(制度)。
君子、犯、義、小人、犯、刑、国、之(の)、所、存、者(もの)、幸、也。
故、曰。
『城、郭、不、完、兵(武器)、甲(鎧)、不、多、非、国之災、也。
田野、不、辟(ひらく)、貨財、不、聚(あつまる)、非、国之害、也』。
上、無礼、下、無学、賊民、興(おこる)、喪(ほろぶ)、無、日、矣。
『詩』、曰。
『天、之(の)、方(まさに)、蹶(くつがえす)、無(なかれ)、然、泄泄(多言する)』。
泄泄(多言する)、猶(ちょうど~のよう)、沓沓(多弁する)、也。
事(つかえる)、君、無、義、進退(ふるまい)、無礼、言、則(すなわち)、非(ひなんする)、先王之道、者(もの)、猶(ちょうど~のよう)、
沓沓(多弁する)、也。
故、曰。
『責、難、於、君。
謂、之(これ)、恭。
陳(のべる)、善、閉、邪。
謂、之(これ)、敬。
吾(わが)君、不能。
謂、之(これ)、賊』」

孟子 先生は言った。

「離婁の明らかに物を見る力でも、公輸子の巧みさでも、コンパスとL字形の定規を利用しなくては、正方形や長方形や、円を描く事はできない。

師曠の良く聞こえる力でも、『六律』という音を定める竹笛を利用しなくては、『五音』という五つの音階音を正しくする事はできない。

堯、舜の道理、真理を知っていても、思いやり深い政治を行わなければ、天下を平安に統治する事はできない。

今、思いやり深い心があって、思いやり深いという名声が聞こえていても、人々が、その人から恩恵を受ける事ができないし、後世の人々が則(のっと)る事ができないのは、古代の聖王の道理を実行しないからである。

そのため、次のように、言われています。

『口先だけの善では、政治を行うのには、不足している。

口先だけの法では、自ずと行われるのは、不可能である』と。

『詩経』で言われています。

『過(あやま)ちを犯さず、忘れず、古代の聖王の法に従う』と。

古代の聖王の法を遵守して、過(あやま)ちを犯す者は、未だいないのである。

聖人は既に視力を尽くして、さらに、コンパス、L字形の定規、水を入れた水準器、墨縄(すみなわ)を利用する事にしたのである。

正方形や長方形や、円を描くのに、コンパス、L字形の定規、水を入れた水準器、墨縄(すみなわ)を利用するよりも、優れている方法は無いのである。

(聖人は)既に聴力を尽くして、さらに、『六律』という音を定める竹笛を利用する事にしたのである。

『五音』という五つの音階音を正しくするのに、『六律』という音を定める竹笛を利用するよりも、優れている方法は無いのである。

(聖人は)既に心の思いを尽くして、さらに、他人が苦しむのを忍耐できない政治の実行を利用する事にしたのである。

そうして、思いやりは、天下を覆い尽くしたのである。

そのため、言われています。

『高くするには、必ず、丘陵を利用するのである。

低くするには、必ず、小川の近くを利用するのである』と。

政治を実行するのに、古代の聖王の道理、真理を適用しないのは、智者と言えるであろうか？　いいえ！

このため、思いやり深い知者だけが高位に在位するのが善いのである。

思いやりの無い愚者が高位に在位したら、その者の悪行は、多数の人々に広く影響してしまうのである。

上位者が道理、真理に相談しなければ、下位者は法を守らない。

朝廷の権力者が道理、真理を信じなければ、職人は(権力者による)制度を信じない。

君主が悪行を犯しても、国民達が犯罪を犯しても、自国が存続している者は、幸運なだけなのである。

そのため、言われています。

『城や壁が不完全である事や、武器や鎧が多くない事は、国にとって災いに成らない。

田を開拓できない事や、金銭が集まらない事は、国にとって害に成らない』と。

上位者が無礼で、下位者が無学であれば、国賊の人々が現れて、(国は、)何日間かで滅びる！

『詩経』で言われています。

『天の神が、まさに、(自国を)転覆させようとする時に、今まで通り、多言するなかれ』と。
『多言する』とは、ちょうど、『多弁する』事なのである。
君主に仕えても、正義の心や言行が無く、ふるまいが無礼で、口(くち)を開けば古代の聖王の道理、真理を非難する者が、ちょうど、『多弁する』者なのである。
そのため、言われています。
『(古代の聖王の道理、真理という)難行を君主に責めて、求める。
こうするのを(君主に対して)恭しいと言う。
善い事を述べて、邪悪な人々の口(くち)を閉じさせる。
こうするのを(神や善を)敬っていると言う。
私の上司である君主には(思いやり深い政治をするのは)不可能である。
こう見なしてしまうのを国賊と言う』と」

　孟子、曰。
「規矩、方、員(円)之至、也。
聖人、人倫之至、也。
欲、為(なる)、君、尽、君、道。
欲、為(なる)、臣、尽、臣、道。
二者、皆、法(のっとる)、堯、舜、而已(のみ)、矣。
不、以、舜、之(の)、所以、事(つかえる)、堯、事(つかえる)、君、不敬、其(その)君、者(もの)、也。

不、以、堯、之、所以、治、民、治、民、賊、其民、者、也。
孔子、曰。
『道、二。
仁、与、不仁、而已、矣』。
暴、其民、甚、則、身、弑、国、亡。
不、甚、則、身、危、国、削。
名、之、曰、『幽厲』。（古代に幽と厲という暴君がいた。）
雖、孝子、慈孫、百世、不、能、改、也。
『詩』、云。
『殷、鑑、不、遠、在、夏后之世』。
此、之、謂、也」

孟子 先生は言った。
「コンパスとL字形の定規は、正方形や長方形や、円の至りなのである。
聖人は、人の倫理、道理の至りなのである。
真の王に成りたいと欲するならば、真の王の道理、真理を尽くすのである。
真の臣下に成りたいと欲するならば、真の臣下の道理、真理を尽くすのである。
これら二つの物は皆、堯、舜に則るしかないのである。
舜が堯に仕えたように、君主に仕えないのは、その君主に不敬な者なのである。
堯が国民を統治したように、国民を統治しないのは、その国民に損害を与えている者なのである。

孔子 先生は言いました。
『道は二つしかない。
思いやり深さと、思いやりの無さ、という二つしかない(。善と悪の二つしかない)』と。
自国民に乱暴を働いて、度を越せば、その人、自身は殺されるし、国も滅びてしまう。
度を越さなくても、その人の身は危険にさせられるし、国の領土も削られてしまう。
その人を名づけて、『暴君』と言うのである。
親孝行の子がいても、思いやり深い子孫がいても、永遠に、『暴君』という悪名は改める事ができない。
『詩経』で言われています。
『殷の鑑(かがみ)、見本は、遠くにではなく、夏王朝の時代に存在している』と。
この『詩経』の言葉は、このような事を言っているのである」

孟子、曰。
「三代(=夏王朝、殷、周王朝)、之(の)、得、天下、也、以、仁。
其(その)、失、天下、也、以、不仁。
国、之(の)、所以、廃、興(おこる)、存、亡、者(もの)、亦(また)、然。
天子、不仁、不、保、四海。
諸侯、不仁、不、保、社、稷。

卿大夫、不仁、不、保、宗廟。
士、庶人、不仁、不、保、四体。
今、悪(ぞうおする)、死亡、而、楽、不仁、是(これ)、猶(ちょうど~のよう)、悪(ぞうおする)、酔、而、強、酒」

孟子 先生は言った。
「夏王朝、殷、周王朝という三代が、天下を得たのは、思いやり深さによる物なのである。
それらが、天下を失ったのは、思いやりの無さによる物なのである。
国が建国されたり、滅亡したりする理由もまた、同様なのである。
天子に、思いやりが無ければ、天下を保持できない。
諸侯に、思いやりが無ければ、神の祭壇を保持できない。
上級の役人に、思いやりが無ければ、先祖の霊廟を保持できない。
下級の役人や、庶民に、思いやりが無ければ、肉体を保持できない(。殺されてしまう)。
今、死は嫌うが、思いやりの無い物事を楽しむのは、ちょうど、酔うのは嫌うが、酒を何杯も飲んで楽しむような物なのである」

孟子、曰。
「愛、人、不、親、反(かえりなさい)、其(その)仁。
治、人、不、治、反(かえりなさい)、其(その)智。

礼、人、不、答、反（かえりなさい）、其（その）敬。
行、有、不、得、者（もの）、皆、反求（原因が自分に有るとして反省する）、諸（これ）、己。
其（その）身、正、而、天下、帰、之（これ）。
『詩』、云。
『永、言、配、命、自（みずから）、求、多福』」

孟子 先生は言った。
「他人を愛しても、親愛の情を抱（いだ）いてもらえなければ、自分の思いやりを反省しなさい。
他人を統治しても、善く統治できなければ、自分の智慧を反省しなさい。
他人に礼儀を尽くしても、返礼してもらえなければ、自分の敬意を反省しなさい。
行（おこな）っても、善い結果が得られない者は皆、その原因が自分に有るとして反省しなさい。
自分自身を正しくすれば、天下の人々は、その人に帰属してくれる。
『詩経』で言われています。
『長く、天からの神の命令(である正義)に従って、自ら、多くの幸福を求めたのである』と」

孟子、曰。

「人、有、恒、言。
皆、曰、『天下国家』。
天下之本（根本）、在、国。
国之本（根本）、在、家。
家之本（根本）、在、身」

孟子先生は言った。
「人々が常に言う言葉が有る。
皆、言います。『天下国家』、『世界統一国家』と。
天下の根本は、国に在ります。
国の根本は、家、家族に在ります。
家、家族の根本は、自身に在ります」

孟子、曰。
「為政、不、難。
不、得、罪、於、巨室（大勢力の家）。
巨室（大勢力の家）、之（の）、所、慕、一国、慕、之（これ）。
一国、之（の）、所、慕、天下、慕、之（これ）。
故、沛然（大きな勢いで）、徳教、溢、乎、四海」

孟子 先生は言った。

「政治は、難しくないのです。
大勢力の家に対しての罪を得ないようにするのです。
大勢力の家が慕う人を、一国の人々も慕います。
一国の人々が慕う人を、天下の人々も慕います。
このため、大きな勢いで、徳、善行についての教えは、天下に満ちあふれるのです」

孟子、曰。

「天下、有道、小徳、役(しえきされる)、大徳、小賢、役(しえきされる)、大賢。
天下、無道、小、役(しえきされる)、大、弱、役(しえきされる)、強。
斯(この)二者、天、也。
順(したがう)、天、者(もの)、存。
逆、天、者(もの)、亡(ほろぶ)。
斉、景公、曰。
『既、不能、令、又、不、受、命、是(これ)、絶、物、也』。
涕(なみだ)、出、而、女(めあわせる)、於、呉。
今、也、小国、師、大国、而、恥、受、命、焉。
是(これ)、猶(ちょうど～のよう)、弟子、而、恥、受、命、於(から)、先師、也。
如(もし)、恥、之(これ)、莫若(しかず)、師、文王。

師、文王、五年、小国、七年、必、為政、於、天下、矣。
『詩』、云。
『商(=殷)之孫子（子孫）、其麗（そのつらなる）、不、億（多数）。
上帝（天の神）、既、命、侯、于（に）、周、服。
侯、服、于（に）、周、天命、靡（ない）、常。
殷、士、膚敏（優美で敏捷）、祼（祭）、将（しようとする）、于（で）、京』。
孔子、曰。
『仁、不、可、為（なす）、衆、也』。
夫（それ）、国、君、好、仁、天下、無（いない）、敵。
今、也、欲、無（いない）、敵、於、天下、而、不、以、仁。
是（これ）、猶（ちょうど～のよう）、執（とる）、熱、而、不、以、濯（そそぐ）、也。
『詩』、云。
『誰、能、執（とる）、熱、逝、不、以、濯（そそぐ）?』」

孟子先生は言った。
「天下が有道であれば、徳、善行の少ない者は、大いなる徳、善行の者によって使役されますし、賢明さが少ない者は、大いなる賢者によって使役されます。
天下が無道であれば、小さい者は、大きい者によって使役されますし、弱い者は、強い者によって使役されます。
これらの二つの物は、天の神による運命次第なのである。
天の神に従う者は、存続できます。
天の神に逆らう者は、滅びます。

斉という国の景公は言いました。
『既に命令できないし、また、命令を受け入れないのもできないし、命令を受け入れないと、物資を絶たれてしまう』と。
(景公は、)涙を流して、呉という国と政略結婚させました。
しかし、今の小国は、大国を教師としてしまって、命令を受け入れるのを恥としてしまっている。
これは、ちょうど、弟子が、亡き師からの命令を受け入れるのを恥としてしまっているような物なのである。
もし、これを恥とするのであれば、文王を教師とするのに、及ぶ方法は無いのである。
文王を教師とすれば、大国であれば五年間で、小国であれば七年間で、必ず、天下を統治できるように成るであろう。
『詩経』で言われています。
『殷王朝の子孫、その連なりは、多数である!
天の神は既に、周に服従するように命令している。
周に服従させるように、天の神の命令は、常に固定されている訳ではないのである。
殷の役人達は、優美に敏捷に、周の首都で祭儀の準備をしている』と。
孔子 先生は言いました。
『思いやり深い知者には、大衆は匹敵できないのである』と。
国の君主が思いやりを好めば、天下に敵対する者はいないのである。
しかし、今の国の君主は、天下に敵対する者がいないのを欲(ほっ)しても、思いやりによって政治を実行しないのである。

これでは、ちょうど、熱さを取ろうとしても、水を注がないような物なのである。
『詩経』で言われています。
『熱さを取ろうとして、水を注がない者が誰かいるであろうか？』と」

孟子、曰。
「不仁者、可、与、言、哉？
安、其危、而、利、其葘、楽、其、所以、亡、者。
不仁、而、可、与、言、則、何、亡、国、敗、家、之、有？
有、孺子、歌、曰。
『滄浪之水、清、兮、可、以、濯、我纓。
滄浪之水、濁、兮、可、以、濯、我足』。
孔子、曰。
『小子、聴、之。
清、斯、濯、纓、濁、斯、濯、足、矣。
自、取、之、也』。
夫、人、必、自、侮、然、後、人、侮、之。
家、必、自、毀、而、後、人、毀、之。
国、必、自、伐、而、後、人、伐、之。
『太甲』、曰。
『天、作、孽、猶、可、違。

自（みずから）、作（つくる）、孽（わざわい）、不、可、活』。
此（これ）、之（の）、謂、也」

孟子 先生は言った。

「思いやりの無い者と共に話し合う事はできない！
(思いやりの無い者は、)自分にとっての危険を安らぎとしてしまうし、自分にとっての災いを利益としてしまうし、自分が滅ぶ理由に成りそうなものを楽しんでしまう。
思いやりの無い者が、仮に、話し合う事が可能な者であれば、国は滅びないし、家も滅びない！
ある幼子がいて、このように歌って言った。
『滄浪という川の水が、清浄であれば、私の飾り紐を洗浄するべきである。
滄浪という川の水が、濁っていれば、私の足を洗浄するべきである』と。
孔子 先生は、(この幼子の言葉を聞いて、)言いました。
『あなたも、あの言葉を聴きましたね。
(川が、)清浄であれば、それで飾り紐を洗浄するし、濁っていれば、それで足を洗浄するのである。
(人では、)自分が、それらの結果を選び取ってしまうのである』と。
人では、必ず、自分が見下した後で、他人は、その人を見下すのである。
家、家族では、必ず、自分の家族が悪口を言った後で、他人は、その家族の悪口を言うのである。
国では、必ず、自国が討伐した後で、他国の人々も、その国を討伐するのである。

『書経』の『太甲』で言われています。
『天の神による運命による災いは、なお、変える事ができる。
しかし、自ら作ってしまった災いは、動かす事はできない(。自ら作ってしまった災いは、変える事はできない)』と。
この『書経』の言葉は、このような事を言っているのである」

孟子、曰。
「桀、紂、之、失、天下、也、失、其民、也。
失、其民、者、失、其心、也。
得、天下、有、道。
得、其民、斯、得、天下、矣。
得、其民、有、道。
得、其心、斯、得、民、矣。
得、其心、有、道。
所、欲、与、之、聚、之。
所、悪、勿、施、爾、也。
民、之、帰、仁、也、猶、水、之、就、下、獣、之、走、壙、也。
故、為、淵、敺、魚、者、獺、也。
為、叢、敺、爵、者、鸇、也。
為、湯(＝湯王)、武(＝武王)、敺、民、者、桀、与、紂、也。
今、天下之君、有、好、仁、者、則、諸侯、皆、為、之、敺、矣。

雖（いえども）、欲、無、王、不、可、得、已（のみ）。
今、之（の）、欲、王、者（もの）、猶（ちょうど～のよう）、七年之病、求、三年之艾（モグサ）、也。
苟（かりに）、為（なす）、不、畜（たくわえる）、終身、不、得。
苟（かりに）、不、志、於、仁、終身、憂、辱、以、陥、於、死亡。
『詩』、云。
『其（それ）、何、能、淑（よい）？
載、胥（そうごに）、及（ならびに）、溺』。
此（これ）、之（の）、謂、也」

孟子 先生は言った。
「桀や、紂王が、天下を失ったのは、天下の人々を失ったからである。
人々を失った者は、人々の心を失ったのである。
天下を得る方法が有る。
天下の人々を得れば、そこで、天下を得られる。
天下の人々を得る方法が有る。
人々の心を得れば、そこで、人々を得られる。
人々の心を得る方法が有る。
人々が欲（ほっ）する物を与えたり、集めたりするのである。
そして、人々が憎悪する事をしないだけなのである。
人々が思いやり深い者に帰属するのは、ちょうど、水が低い所へ流れていくような物なのであるし、獣が野原を走るような物なのである。
このため、魚を深淵に追い込む形に成る者はカワウソなのである。
草むらにスズメを追い込む形に成る者はハヤブサなのである。

そのため、殷の湯王や周王朝の武王へ人々を追い込む形に成った者は、桀や
紂王なのである。

今、天下の君主のうち、思いやりを好む者がいれば、その人の為(ため)に、諸侯は
皆、人々を追い込む形に成るのである。

(思いやりを好む者は、)王に成りたくないと欲(ほっ)しても、でき得ないばかりな
のである。

今の、王に成りたいと欲(ほっ)している者たちは、ちょうど、七年間、病気の者が、
三年物の艾(モグサ)の灸を求めるような物なのである。

(三年物の艾の灸は、)仮に、備蓄しなければ、一生、得られない。

(同様に、)仮に、思いやり深いのを目標として志さなければ、心配したり、
辱(はずかし)められたりして、死ぬに陥(おちい)るであろう。

『詩経』で言われています。

『どうして、善い、とできようか?

相互に、共倒れして、溺れるだけであろう』と。

この『詩経』の言葉は、このような事を言っているのである」

孟子、曰。

「自暴、者(もの)、不、可、与(ともに)、有、言、也。
自棄、者(もの)、不、可、与(ともに)、有、為(なす)、也。
言、非、礼義。
謂、之(これ)、『自暴』、也。

吾(わが)身、不能、居、仁、由(よる)、義。
謂、之(これ)、『自棄』、也。
仁、人之安宅、也。
義、人之正路、也。
曠(おろそかにする)、安宅、而、弗(ない)、居。
舎(すてる)、正路、而、不、由(よる)。
哀、哉」

孟子 先生は言った。
「自暴自棄な者と共に話し合う事はできない。
自暴自棄な者と共に協力し合う事はできない。
口(くち)を開くと、礼儀を非難する。
こうするのを『自暴』と言うのである。
『自身は、思いやりに留まって、正義によって、行動する事ができない』と
決めつける。
こうするのを『自棄』と言うのである。
思いやりは、人が安らげる家なのである。
正義は、人の正しい道なのである。
(人々は、)安らげる家である思いやりをおろそかにしてしまって、留まらない。
(人々は、)正しい道である正義を捨ててしまって、正義によって行動しない。
悲しいかな」

孟子、曰。

「道、在、邇(ちかい)。

而、求、諸(これ)、遠。

事、在、易。

而、求、諸(これ)、難。

人人、親(おや)、其親(そのおや)、長、其(その)長、而、天下、平」

孟子 先生は言った。

「道理、真理は近くに在るのである(。真理の対象は身近に在るのである)。

しかし、(人々は、)その道理、真理の対象を遠くに求めてしまう。

仕えるのは、容易にできる事の中に在るのである。

しかし、(人々は、)それを難しい事の中に求めてしまう。

人々が、自分の親を真の親と見なし、自分の周囲の年長者を真の年長者と見なせば、天下は平安に成るのである」

孟子、曰。

「居、下位、而、不、獲、於、上、民、不、可、得、而、治、也。

獲、於、上、有、道。
不、信、於（によって）、友、弗（ない）、獲、於、上、矣。
信、於（によって）、友、有、道。
事（つかえる）、親、弗（ない）、悦、弗（ない）、信、於（によって）、友、矣。
悦、親、有、道。
反（反省する）、身、不、誠、不、悦、於、親、矣。
誠、身、有、道。
不、明、乎（について）、善、不、誠、其、身、矣。
是故（このため）、誠、者（は）、天之道、也。
思、誠、者（は）、人之道、也。
至誠、而、不、動、者（もの）、未、之（これ）、有、也。
不、誠、未、有、能、動、者（もの）、也」

孟子 先生は言った。

「下位に居て、上位者の関心を得られなければ、統治権を得る事はできない。
上位者の関心を得る方法が有る。
友人に信頼されなければ、上位者の関心を得られない。
友人に信頼される方法が有る。
親に仕えて、親を喜ばせる事ができなければ、友人に信頼されない。
親を喜ばせる方法が有る。
自身を反省して、誠実さが無ければ、親を喜ばせる事はできない。
自身を誠実にする方法が有る。
善について聡明でなければ、自身を誠実にできない。

このため、誠実さは、天の神の道なのである。
誠実さについての思考は、人の道なのである。
誠実さの至りによって、心を動かされない者は未だいないのである。
不誠実さによって、(他人の)心を動かす事ができた者は未だいないのである」

孟子、曰。
「伯夷、辟(さける)、紂、居、北海之浜。
聞、文王、作興(盛んに成る)、曰。
『盍(どうして)、帰、乎、来?
吾(われ)、聞、西伯(=文王)、善、養、老、者(もの)』。
太公、辟(さける)、紂、居、東海之浜。
聞、文王、作興(盛んに成る)、曰。
『盍(どうして)、帰、乎、来?
吾(われ)、聞、西伯(=文王)、善、養、老、者(もの)』。
二老者、天下之大老、也。
而、帰、之(これ)。
是(これ)、天下之父、帰、之(これ)、也。
天下之父、帰、之(これ)、其(その)子、焉(どこへ)、往?
諸侯、有、行、文王之政、者(もの)、七年之内、必、為政、於、天下、矣」

孟子 先生は言った。

「伯夷は、紂王を避けて、北海のほとりに居住した。
(伯夷は、)文王(の勢力)が盛んに成っていると聞いて、言った。
『帰属してこよう!
私、伯夷は、文王が老人を養う者である、と聞きました』と。
太公望は、紂王を避けて、東海のほとりに居住した。
(太公望は、)文王(の勢力)が盛んに成っていると聞いて、言った。
『帰属してこよう!
私、太公望は、文王が老人を養う者である、と聞きました』と。
これら二人の長老は、天下の大いなる長老であった。
そして、文王に帰属した。
これは、天下の父のような者達が、文王に帰属したのである。
天下の父のような者達が、文王に帰属したのであれば、天下の子のような者達は、他の、どこへ行くというのか? いいえ!
諸侯のうち、文王のような政治を行う者がいれば、七年以内に必ず、天下を統治できるであろう」

孟子、曰。

「求(=冉有)、也、為(なる)、季氏、宰。
無、能、改、於、其(その)徳、而、賦(税を取り立てる)、粟(穀物)、倍、他日。

孔子、曰。
『求(=冉有)、非、我(わが)徒、也。
小子、鳴、鼓、而、攻(せめる)、之(これ)、可、也』。
由(より)、此(これ)、観、之(これ)、君、不、行、仁政、而、富、之(これ)、皆、棄、於(によって)、孔子、者(もの)、也。
況(まして)、於、為(ため)、之(これ)、強、戦、争、地、以、戦、殺、人、盈(みたす)、野、争、城、以、戦、殺、人、盈(みたす)、城?
此(これ)、所謂(いわゆる)、率、土地、而、食、人肉。
罪、不、容、於、死。
故、善、戦、者(もの)、服、上、刑。
連、諸侯、者(もの)、次、之(これ)。
辟(ひらく)、草莱(荒れ地)、任、土地、者(もの)、次、之(これ)」

孟子 先生は言った。
「冉有は、季氏の『宰』、『長と成って司って取り仕切る者』に成った。
(冉有は、)その季氏の悪徳を改める事ができず、後日、穀物への税を二倍にしてしまった。
孔子 先生は言いました。
『冉有は、私、孔子の学徒ではない(、と言えてしまいます)。
あなた達よ、太鼓を鳴らして、この冉有を責めても良い』と。
この話を観察、考察すると、君主が思いやり深い政治を行わないのに、その君主を富ませる者は皆、孔子 先生に見捨てられてしまう者なのである。

まして、その君主の為（ため）に、強引に戦争し、土地を争って戦い、人を殺して野を死体で満たし、城塞を争って戦い、人を殺して城塞を死体で満たす者は、孔子先生に見捨てられてしまう者なのである。

これが、いわゆる、『土地を率いて人肉を食べさせる』と言われている物なのである。

その罪は、死んでも、許されない。

このため、よく戦争をする者は、最も重い刑罰に服すべきである。

(戦争のために、)諸侯を連合させる者は、次に重い刑罰に服すべきである。

荒れ地を開拓させ、さらに、その荒れ地を他人に任せる者は、次に重い刑罰に服すべきである」

孟子、曰。

「存、乎（に）、人、者（もの）、莫（ない）、良、於（よりも）、眸（目）子。

眸（目）子、不、能、掩（おおいかくす）、其（その）悪。

胸中、正、則（すなわち）、眸（目）子、瞭（明るい）、焉。

胸中、不正、則（すなわち）、眸（目）子、眊（暗い）、焉。

聴、其（その）言、也、観、其（その）眸（目）子、人、焉（どうして）、廋（かくす）、哉？」

孟子先生は言った。

「人の心中に存在する物を、目よりも良く表す物は無いのである。

目は、その人の悪を覆い隠す事ができない。
胸中が正しければ、目も明るいのである。
胸中が正しくなければ、目も暗いのである。
その人の発言を聴いて、その人の目を観察すれば、その人を隠す事はできないのである！」

孟子、曰。
「恭、者（もの）、不、侮、人。
倹、者（もの）、不、奪、人。
侮、奪、人、之（の）、君、惟（ただ）、恐、不、順（したがう）、焉。
　悪（どうして）、得、為（なす）、恭、倹？
恭、倹、豈（どうして）、可、以、声音、笑貌、為（なす）、哉？」

孟子 先生は言った。
「恭しい者は、他人を見下さない。
つつましい者は、他人から奪わない。
他人を見下し、他人から奪う暴君は、他人が従ってくれない事だけを恐れる。
暴君を『恭しく、つつましい者である』と見なす事はでき得ない！
恭しさや、つつましさは、作り声や、作り笑いによってでは、できないのである！」

淳于髠、曰。

「男女、授受、不、親、礼、与（か）？」

孟子、曰。

「礼、也」

曰。

「嫂（兄嫁）、溺、則（すなわち）、援（たすける）、之（これ）、以、手、乎？」

曰。

「嫂（兄嫁）、溺、不、援（たすける）、是（これ）、豺（ヤマイヌ）、狼（オオカミ）、也。
男女、授受、不、親、礼、也。
嫂（兄嫁）、溺、援（たすける）、之（これ）、以、手、者（は）、権（便宜的な方法）、也」

曰。

「今、天下、溺、矣。
夫子、之（の）、不、援（たすける）、何（なぜ）、也？」

曰。

「天下、溺、援（たすける）、之（これ）、以、道。

嫂（兄嫁）、溺、援（たすける）、之（これ）、以、手。
子、欲、手、援（たすける）、天下、乎？」

淳于髡が孟子 先生に言った。
「男女間の受け渡しでは、親密に接触しないのが、礼儀なのですか？」

孟子 先生は言った。
「礼儀なのです」

淳于髡が言った。
「兄嫁が溺れていたら、手で接触して助けますか？」

孟子 先生は言った。
「兄嫁が溺れても助けない人は、獣（けだもの）、人でなしです。
男女間の受け渡しでは、親密に接触しないのが、礼儀なのです。
兄嫁が溺れていたら、手で接触して助けるのは、『方便』、『便宜的な方法』、特別措置、超法規的措置なのです」

淳于髡が言った。
「今、天下の人々は溺れているような物なのです。
孟子 先生が助けないのは、なぜでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「天下の人々が溺れているような悪政からは、道理、真理によって助けます。
兄嫁が溺れていたら、手で接触して助けます。
あなた、淳于髡は、天下の人々を手で接触して助けますか？　いいえ！」

公孫丑、曰。

「君子、之、不、教、子、何、也？」

孟子、曰。

「勢、不、行、也。
教、者、必、以、正。
以、正、不、行、継、之、以、怒。
継、之、以、怒、則、反、夷、矣。
『夫子、教、我、以、正。
夫子、未、出、於、正、也』。
則、是、父子、相、夷、也。
父子、相、夷、則、悪、矣。
古、者、易、子、而、教、之。
父子之間、不、責、善。
責、善、則、離。
離、則、不祥、莫、大、焉」

公孫丑が孟子 先生に言った。
「王者が、実の子を教えたがらないのは、なぜでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「成り行きが、上手く行かないからなのです。
教えるには、必ず、正しさによって教えます。
正しさによって教えて、行ってもらえなければ、さらに、怒って教えます。
怒って教えれば、かえって、駄目にしてしまう場合が有ります。
『先生は、正しさによって、私を教えます。
しかし、(怒るという事は、)先生も、正しく成っていない』と。
こう成ってしまったら、父と子は相互に駄目にし合ってしまいます。
父と子が相互に駄目にし合うのは、善くないのです。
古代では、他の父と、子を交換して、子を教育しました。
父と子の関係では、善によって相手を責めるべきではないのです。
善によって相手を責めてしまえば、心が離れてしまいます。
心が離れてしまうよりも、大きな災いは無いのです」

孟子、曰。
「事(つかえる)、孰(だれに)、為(なす)、大？
事(つかえる)、親、為(なす)、大。

守、孰、為、大？
守、身、為、大。
不、失、其身、而、能、事、其親、者、吾、聞、之、矣。
失、其身、而、能、事、其親、者、吾、未、之、聞、也。
孰、不、為、事？
事、親、事之本、也。
孰、不、為、守？
守、身、守之本、也。
曾子、養、曾皙、必、有、酒、肉。
将、徹、必、請、所、与。
問、『有、余？』、必、曰、『有』。
曾皙、死。
曾元、養、曾子、必、有、酒、肉。
将、徹、不、請、所、与。
問、『有、余？』、曰、『亡、矣。将、以、復、進、也』。
此、所謂、養、口、体、者、也。
若、曾子、則、可、謂、『養、志』、也。
事、親、若、曾子、者、可、也」

孟子 先生は言った。
「誰に仕えるのを優先するのか？
親に仕えるのを優先する。
誰を守るのを優先するのか？

自身を守るのを優先する。
自身を喪失しないで、親に仕えることができている者について、私、孟子は聞いた事が有ります。
自身を喪失して、親に仕える事ができた者について、私、孟子は未だ聞いた事が有りません。
どちらを『親に仕える事ができている』とするのか？
親に仕えるのは、仕える事の根本なのである。
どちらを『自身を守る事ができている』とするのか？
自身を守るのは、守る事の根本なのである。
曾子は、父である曾晳を養ったが、必ず、酒と肉を用意していた。
下げようとする時は必ず『残りを誰にあげるのか？』と聞いた。
曾晳が『残りは有りますか？』と質問すると、曾子は必ず『有ります』と言う事ができた。
曾晳は死んでしまった。
子である曾元が、曾子を養ったが、必ず、酒と肉は用意していた。
しかし、下げようとする時に『残りを誰にあげるのか？』と聞かなかった。
曾子が『残りは有りますか？』と質問すると、曾元は『無いです。作りましょう』と言った。
これでは、いわゆる、(曾元は、曾子の)口や体を養っているだけの者なのである。
曾子のようにしたら、『志、意思も養っている』と言えるのである。
親に仕えるには、曾子のようにすれば、善いのである」

孟子、曰。
「人、不足、与(と)、適(あたる)、也。
政、不足、間(うかがう)、也。
惟(ただ)、大、人、為(なす)、能、格(ただす)、君、心之非。
君、仁、莫(ない)、不仁。
君、義、莫(ない)、不義。
君、正、莫(ない)、不正。
一、正(ただす)、君、而、国、定、矣」

孟子先生は言った。
「他人に当たるには、及ばないのである。
政治に当たるには、及ばないのである。
大いなる人だけが、君主の心の悪い部分を正す事ができるのである。
君主に思いやりが無ければ、政治も思いやりが無い。
君主に正義が無ければ、政治も正義が無い。
君主が不正であれば、政治も不正である。
一回、君主を正しくするだけで、国は安定するのである」

孟子、曰。

「有、不、虞(しんぱいする)、之(の)、誉。

有、求、全、之(の)、毀(わるぐちをいう)」

孟子 先生は言った。

「予想外の名誉が有る。

完全を期しても、悪口を言われる場合が有る」

孟子、曰。

「人、易、其(その)言、也、無(ない)、責、耳(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。

「ある人の発言が軽率であるのは、その人が無責任であるだけなのである」

孟子、曰。

「人之患、在、好、為(なる)、人、師」

孟子 先生は言った。

「人の病癖は、他人の教師に成るのを好む事に在るのである」

楽正子、従、於、子敖、之（いく）、斉。

楽正子、見（あう）、孟子。

孟子、曰。

「子、亦（また）、来、見（あう）、我、乎？」

曰。

「先生、何為（どうして）、出、此（この）言、也？」

曰。

「子、来、幾日、矣？」

曰。

「昔者（むかし）」

曰。

「昔者(むかし)、則(すなわち)、我、出、此(この)言、也、不、亦(また)、宜(とうぜんである)、乎？」

曰。

「舎館、未、定」

曰。

「子、聞、之(これ)、也？

『舎館、定、然、後、求、見(あう)、長者』、乎？」

曰。

「克(＝楽正子)、有、罪」

楽正子が、子敖の従者として、斉という国へ行った。

楽正子は、孟子 先生に会った。

孟子 先生は言った。

「あなた、楽正子のような人でも、私、孟子に会いに来る物なのですね？」

楽正子が言った。

「孟子 先生は、どうして、そんな事を言うのですか？」

孟子 先生は言った。

「あなた、楽正子は、斉に来て、何日目ですか？」

楽正子が言った。

「何日か前に来ました」

孟子 先生は言った。

「何日か前に来たなら、私、孟子が、そんな事を言っても当然ですよね？」

楽正子が言った。

「宿が決まらなかったのです」

孟子 先生は言った。

「あなた、楽正子は、このように聞いた事が有りますか？

『宿が決まった後で、年長者に会うのを求める』と？」

楽正子が言った。

「私、楽正子が悪かったです(。すみませんでした)」

孟子、謂、楽正子、曰。

「子、之(の)、従、於、子敖、来、徒(ただ)、餔啜(飲食)、也。

我、不、意(おもう)、子、学、古之道、而、以、餔啜(飲食)、也」

孟子 先生は楽正子に言った。

「あなた、楽正子が、子敖の従者として来たのは、ただ飲食するためなのです。
あなた、楽正子が、飲食のために、古代の道理、真理を学んだとは、私、孟子は思ってもみませんでした」

孟子、曰。

「不孝、有、三。
無（ない）、後、為（なす）、大。
舜、不、告、而、娶（めとる）、為（ため）、無（ない）、後、也。
君子、以、為（なす）、猶（ちょうど〜のよう）、告、也」

孟子 先生は言った。

「親不孝には三種類、有ります。
それらのうち、後継ぎがいないのを『最大の親不孝である』とします。
舜が、親に告げ知らせずに結婚したのは、後継ぎがいないためでした。
王者は、これを『舜は、親に告げ知らせたような物なのである』とします」

孟子、曰。

「仁之実、事（つかえる）、親、是（これ）、也。

義之実、従、兄、是（これ）、也。

智之実、知、斯（この）二者、弗（ない）、去、是（これ）、也。

礼之実、節文（節度を保つ）、斯（この）二者、是（これ）、也。

楽之実、楽（たのしむ）、斯二者。

楽（たのしむ）、則（すなわち）、生（しょうじる）、矣。

生（しょうじる）、則（すなわち）、悪（どうして）、可、已（やめる）、也？

悪（どうして）、可、已（やめる）、則（すなわち）、不、知、足、之（の）、蹈（ふむ）、之（これ）、手、之（の）、舞、之（これ）」

孟子先生は言った。

「思いやりの実践とは、親に仕える事なのである。

正義の実践とは、兄に従う事なのである。

智慧の実践とは、これらの二つの事を知って、実践をやめない事なのである。

礼儀の実践とは、これらの二つの事を節度を保って実践する事なのである。

音楽の実践とは、これらの二つの事を楽しむ事なのである。

楽しむとは、実践したいという思いが生じる事なのである。

実践したいという思いが生じれば、実践をやめない！

実践をやめなければ、音楽に合わせて、知らずに、足踏みしてしまい、手を動かしてしまうのである」

孟子、曰。

「天下、大、悦、而、将(しようとする)、帰、己。
視、天下、悦、而、帰、己、猶(ちょうど～のよう)、草芥(雑草とゴミ)、也、惟(ただ)、舜、為(なす)、然。
不、得、乎、親、不、可、以、為(なす)、人。
不、順、乎(によって)、親、不、可、以、為(なす)、子。
舜、尽、事(つかえる)、親、之(の)、道、而、瞽瞍、厎(いたる)、予(たのしむ)。
瞽瞍、厎(いたる)、予(たのしむ)、而、天下、化。
瞽瞍、厎(いたる)、予(たのしむ)、而、天下、之(の)、為(なる)、父子、者(もの)、定。
此(これ)、之(これ)、謂、大孝」

孟子 先生は言った。

「天下の人々が大いに喜んで自分に帰属しようとしたとします。
天下の人々が喜んで自分に帰属するのを、ちょうど、雑草やゴミのように視るのを、舜だけが、そうできたのです。
親の関心を得られなければ、人でなしなのである。
親が従ってくれなければ、子ではないような物なのである。
舜が親に仕える道理、真理を尽くしたので、父である瞽瞍は楽しむに至った。
父である瞽瞍が楽しむに至ったので、天下の人々は感化されたのである。
父である瞽瞍が楽しむに至ったので、天下の父と子の関係も安定したのである。

このようにするのを『大いなる親孝行』と言うのである」

離婁下

孟子、曰。

「舜、生、於、諸馮、遷、於、負夏、卒（しぬ）、於、鳴条、東夷之人、也。

文王、生、於、岐周、卒（しぬ）、於、畢郢、西夷之人、也。

地、之（の）、相、去、也、千有余里。

世、之（の）、相、後（おくれる）、也、千有余歳。

得、志、行、乎、中国、若（のよう）、合、符節（割符）。

先聖、後聖、其揆（その方法）、一、也」

孟子先生は言った。

「舜は、諸馮という所で生まれ、負夏という所に移り住み、鳴条で死んだので、東の未開な外国の人なのである。

文王は、岐周という所で生まれ、畢郢という所で死んだので、西の未開な外国の人なのである。

舜の生きていた土地と、文王が生きていた土地は、千里余りも離れている。

舜の生きていた時代よりも、文王が生きていた時代は、千年余りも後である。

舜と文王は、志を実行する好機を得て、国の中央で志を実行したが、割符が合うように符号している。

古代の聖王である舜と、舜より後の聖王である文王は、(思いやり深い政治を行うという)方法が同一だったのである」

子産、聴（さばく）、鄭国之政、以、其（その）乗輿、済（わたる）、人、於、「溱(＝溱水)」、「洧(＝洧水)」。

孟子、曰。
「恵（思いやり）、而、不、知、為政。
歳、十一月、徒杠（徒歩で渡る橋）、成、十二、月、輿梁（車が通る橋）、成、民、未、病、渉（わたる）、也。
君子、平、其（その）政、行、辟（さける）、人、可、也。
焉（どうして）、得、人人、而、済（わたる）、之（これ）？
故、為政者、毎（ごと）、人、而、悦（よろこばす）、之（これ）、日、亦（また）、不足、矣」

子産が鄭という国の政治をさばいていた時、自分の乗り物で、人々に、溱水と洧水という川を渡らせてあげた。

孟子 先生は言った。
「(子産は、)思いやりは有るが、政治という物を分かっていない。
十一月に徒歩で渡れる橋を完成させ、十二月に車が通れる橋を完成させれば、人々が川を渡る方法を気に病む必要が無く成ります。
王者が、自分の政治を公平に行（おこな）っているならば、他人を避けさせて通行しても、善い。

(王者が、)どうして、人々に(一人一人、直接、)川を渡らせてあげるであろうか？　いいえ！

統治者が、一人ずつ、喜ばせていたら、一日間でも足りないであろう」

孟子、告、斉、宣王、曰。

「君、之、視、臣、如、手足、則、臣、視、君、如、腹心。
君、之、視、臣、如、犬、馬、則、臣、視、君、如、国、人。
君、之、視、臣、如、土芥、則、臣、視、君、如、寇讐」

王、曰。

「礼、為、旧君、有、服。
何如、斯、可、為、服、矣？」

曰。

「諫、行、言、聴、膏沢、下、於、民。
有、故、而、去、則、君、使、人、導、之、出、疆、又、先、於、其、所、往。
去、三年、不、反、然、後、収、其田、里。
此、之、謂、『三有礼』、焉。
如此、則、為、之、服、矣。

今、也、為（なる）、臣、諫、則（すなわち）、不、行、言、則（すなわち）、不、聴、膏沢（恩恵）、不、下、於、
民。
有、故、而、去、則（すなわち）、君、搏執（とらえる）、之（これ）、又（また）、極、之（これ）、於、其（その）、所、往。
去、之（の）、日、遂（ついに）、収、其田（その家）、里。
此（これ）、之（これ）、謂、寇讐（仇敵）。
寇讐（仇敵）、何（どうして）、服、之（これ）、有？」

孟子先生は斉という国の宣王に言った。

「君主が、自分の手足のように臣下を見なせば、臣下も、自分の腹や胸のように君主を見なしてくれます。

君主が、自分の犬や馬のように(敬意の対象外として)臣下を見なしてしまえば、臣下も、自国民に過ぎないかのように君主を見なしてしまいます。

君主が、土やゴミのように(無価値であるかのように)臣下を見なしてしまえば、臣下も、仇敵のように君主を見なしてしまいます」

宣王が言った。

「礼儀によると、前に君主であった人のために喪に服す、事が有るそうです。どうすれば、前に君主であった人のために、喪に服してもらえるのであろうか？」

孟子先生は言った。

「忠告したら行（おこな）ってくれるし、提言すれば聴き入れてくれるし、恩恵を庶民にまで下りて来させる。

理由が有って去るならば、善い君主は、使者を派遣して国境を出るまで先導してくれるし、先に行き先へ推薦してくれる。
去って、三年間、帰らなければ、その後で、その人の田や家を回収する。
こうするのを『三有礼』と言います。
このようにすれば、前に君主であった、その人のために、喪に服してくれます。
今の君主は、臣下が忠告しても行わず、提言しても聴き入れず、恩恵を庶民にまで下ろさない。
理由が有って去るのに、今の悪い君主は、その人を捕らえてしまうか、または、その人を行った先で悲惨の極みに陥（おとしい）れようとします。
去った日に、その人の田や家を回収してしまいます。
このようにするのを『仇敵』、『目の敵（かたき）にする』と言います。
どうして、仇敵の喪に服するでしょうか？　いいえ！」

孟子、曰。

「無、罪、而、殺、士、則（すなわち）、大夫、可、以、去。
無、罪、而、戮、民、則（すなわち）、士、可、以、徙（うつる）」

孟子 先生は言った。

「暴君が、罪が無い下級の役人を殺したら、上級の役人は去るべきである。

暴君が、罪が無い庶民を殺したら、下級の役人は去るべきである」

孟子、曰。

「君、仁、莫（ない）、不仁。
君、義、莫（ない）、不義」

孟子 先生は言った。

「君主が思いやり深ければ、国民も思いやり深く成る物である。
君主が正しければ、国民も正しく成る物である」

孟子、曰。

「非礼之礼、非義之義、大、人、弗（ない）、為（なす）」

孟子 先生は言った。

「非礼な似非（えせ）非礼儀作法と、正しくない似非（えせ）非正義的行為を、大いなる人はしないのである」

孟子、曰。

「中、也、養、不中(善くない)。

才、也、養、不才。

故、人、楽(たのしむ)、有、賢父兄、也。

如(もし)、中、也、棄、不中、才、也、棄、不才、則(すなわち)、賢、不肖(愚か)、之(の)、相、去、

其(その)間、不、能、以、寸(非常ではない)」

孟子先生は言った。

「善い人が、善くない人を修養させるのである。

有能な人が、非才な人を修養させるのである。

そのため、人は、賢明な父兄がいるのを喜ぶのである。

もし、善い人が善くない人を見捨ててしまい、有能な人が非才な人を見捨ててしまったら、賢者と、愚者の距離は非常な距離に成ってしまうのである」

孟子、曰。

「人、有、不、為(なす)、也、而、後、可、以、有、為(なす)」

孟子 先生は言った。

「人は、悪行を為(な)さない決意を所有した後で、善行を為(な)す事が有るように成るであろう」

孟子、曰。

「言、人之不善、当(まさに)、如後患何(後の心配をどうする)？」

孟子 先生は言った。

「他人の悪い所を言ってしまったら、今後の(、その他人による逆恨みによる凶行の)心配をどうするのか？」

孟子、曰。

「仲尼(＝孔子)、不、為(なす)、已甚(度が過ぎている事)、者(もの)」

孟子 先生は言った。

「孔子 先生は、度が過ぎている事を為(な)さなかった者なのである」

孟子、曰。

「大、人、者(もの)、言、不、必、信。

行、不、必、果。

惟(ただ)、義、所、在」

孟子 先生は言った。

「大いなる人である者は、言葉が必ずしも誠実ではない(。正義のために嘘をつく場合が有り得る)。

(大いなる人である者は、)行動を必ずしも果たさない。

(大いなる人である者は、)正義だけに従って誠実に話したり、嘘をついたり、行動したり、行動しなかったりするのである」

孟子、曰。

「大、人、者(もの)、不、失、其(その)赤子之心、者(もの)、也」

孟子先生は言った。

「大いなる人である者は、幼子のような心を失わない者なのである」

孟子、曰。

「養、生、者（もの）、不足、以、当（あてる）、大事。
惟（ただ）、送、死、可、以、当（あてる）、大事」

孟子先生は言った。

「親が生きれるように養っているだけの者は、一大事を担当させるには不足なのである。
ただ、親が死んで、(心を尽くして)葬儀をして送別できた者は、一大事を担当させるのは可能なのである」

孟子、曰。

「君子、深、造（きわめる）、之（これ）、以、道、欲、其、自得、之（これ）、也。

自得、之(これ)、則(すなわち)、居、之(これ)、安。
居、之(これ)、安、則(すなわち)、資(元と成る物)、之(これ)、深。
資(元と成る物)、之(これ)、深、則(すなわち)、取、之(これ)、左右、逢、其原(その根源)。
故、君子、欲、其(その)、自得、之(これ)、也」

孟子 先生は言った。
「王者が、道理、真理(を学ぶ事)によって、知恵を深く極めるのは、知恵を自分の力で『会得』、『理解』したいと欲(ほっ)するからである。
知恵を自分の力で『会得』、『理解』すれば、知恵に安定して留まる事ができる。
知恵に安定して留まれたら、知恵を元に深く応用できる。
知恵を元に深く応用できたら、左右の全ての場所で、知恵を用いて、万物の根源に遭遇できる。
このため、王者は、そのようにして(、真理を学ぶ事によって)、知恵を自分の力で『会得』、『理解』したいと欲(ほっ)するのである」

孟子、曰。
「博(ひろく)、学、而、詳、説、之(これ)、将(しようとする)、以、反(かえって)、説、約、也」

孟子 先生は言った。

「博学に、広く学んで、その知恵を詳細に説明するのは、かえって逆に、知恵の要約を説明しようとするからである」

孟子、曰。

「以、善、服、人、者、未、有、能、服、人、者、也。以、善、養、人、然、後、能、服、天下。天下、不、心服、而、王、者、未、之、有、也」

孟子 先生は言った。

「善によって他人を(圧倒して)服従させようとする者で、他人を服従させる事ができた者は未だいないのである。善によって(天下の)人々を修養させた後で、天下の人々を心服させる事ができるのである。天下の人々が心服しないのに、真の王に成れた者は未だいないのである」

孟子、曰。

「言、無、実、不祥(不吉)。
不祥(不吉)之実、蔽(おおいかくす)、賢、者(もの)、当、之(これ)」

孟子先生は言った。
「言葉には、実際、不吉な言葉など無いのである。
実際に不吉なものとは、賢者を覆い隠す者が、まさに、それなのである」

徐子、曰。
「仲尼(=孔子)、亟(度々)、称(ほめる)、於、水、曰。
『水、哉。水、哉』。
何、取、於、水、也?」

孟子、曰。
「原泉(源泉)、混混(尽きる事無く湧く)、不、舍(おく)、昼夜。
盈(みたす)、科(部分)、而、後、進、放(発する)、乎(にまで)、四海。
有、本(もと)、者(もの)、如是(このよう)。
是(これ)、之(これ)、取、爾(のみ)。
苟(かりに)、為(なす)、無(ない)、本(もと)、七、八月之間、雨、集、溝、澮(田畑の用水路の溝)、皆、盈(みちる)、其(その)、涸(かれる)、
也、可、立、而、待、也。
故、声聞(評判)、過(すぎる)、情、君子、恥、之(これ)」

徐子が孟子 先生に言った。
「孔子は、何度も、水をほめて言いました。
『水であるかな。水であるかな』と。
(孔子は、)水の何に感じ入ったのか?」

孟子 先生は言った。
「(水は、)源泉から、昼も夜も絶え間無く、混混と尽きる事無く湧(わ)きます。
水は、一部分ずつ満たしていった後に、前進して、四海にまで行き渡ります。
根本が有るものは、この水のようなのである。
それを感じ入るばかりなのです。
仮に、根本が無いとしたら、七月から八月までの間に雨が田畑の用水路の溝(みぞ)に集まって全て満たしても、その雨水が枯れるのを、立って待つ事ができてしまうであろう。
そのため、世の人々に聞こえている名声が、実情を超過しているのを、王者は恥じるのである」

孟子、曰。
「人、之(の)、所以、異、於、禽獣(鳥や獣)、者(もの)、幾(ちかい)、希(まれ)。
庶民、去、之(これ)。

君子、存、之。
舜、明、於、庶物、察、於、人倫、由、仁義、行。
非、行、仁義、也」

孟子 先生は言った。
「真の人が、動物的人間と異なる理由と成る物は、希少に近い(思いやりと正義な)のである。
庶民の大衆は、それ(ら、思いやりと正義)を除去してしまう。
王者には、それ(ら、思いやりと正義)が在るのである。
舜は、諸々の物を明らかにして、人の倫理、道理を観察して、思いやりと正義(についての知恵)によって行動したのである。
(舜は、受け売りで猿真似で)思いやりと正義を行おうとした訳ではないのである」

孟子、曰。
「禹、悪、旨酒、而、好、善言。
湯(=湯王)、執、中、立、賢、無、方。
文王、視、民、如、傷、望、道、而、未、之、見。
武王、不、泄、邇、不、忘、遠。
周公、思、兼、三王、以、施、四事。

其(その)、有、不、合、者(もの)、仰、而、思、之(これ)、夜、以、継、日。
幸、而、得、之(これ)、坐、以、待、旦(朝)」

　孟子 先生は言った。

「禹は、美味い酒を嫌い、善い言葉を好んだ。

殷の湯王は、『中庸』、『節制』を執り行い、賢者を立身出世させて、その際に一定の方法は無かった(。様々な方法を用いた)。

文王は、自分の傷口のように国民を観て(大事にし)、未だ見た事が無いかのように道理、真理を望んだ。

武王は、近くの者達になれなれしくせず、遠くの者達の事を忘れなかった。

周公は、三人の聖王を兼ね合わせて、三人の聖王による四つの事をしようと思った。

(周公は、)三人の聖王による四つの事に適合できないものが有れば、仰いで、それについて思考して、日中に思考し続けて夜も思考するほどであった。

(周公は、)そうして、幸いにも、(夜に、)それについての善い考えを得ると、座して翌朝まで待っ(て、実行するほどであっ)た」

　孟子、曰。

「王者之跡、熄(やむ)、而、詩、亡(ほろぶ)。
詩、亡(ほろぶ)、然、後、『春秋』、作(つくる)。

晋之『乗』、楚之『梼杌』、魯之『春秋』、一、也。
其(その)事、則(すなわち)、斉、桓(＝桓公)、晋、文(＝文公)。
其(その)文、則(すなわち)、『史(歴史を記録した役人)』。
孔子、曰。
『其(その)義、則(すなわち)、丘(＝孔子)、竊(ひそかに)、取、之(これ)、矣』」

孟子先生は言った。
「王者の跡が途絶えてしまって、(王者による)詩が滅んでしまった。
(王者による)詩が滅んでしまった後に、(孔子 先生は、歴史書)『春秋』を作った。
晋という国の歴史書『乗』、楚という国の歴史書『梼杌』、魯という国の歴史書『春秋』は、歴史書としては同一である。
その歴史書『春秋』は、斉という国の桓公と、晋という国の文公の事の歴史書である。
その歴史書『春秋』の、元と成った文書は、『史』という歴史を記録した役人による文書である。
孔子 先生は言いました。
『私、孔子は、ひそかに、この歴史書、春秋に、私、孔子による意義、真意を取り入れたのである』と」

孟子、曰。

「君子之沢（恩恵）、五世、而、斬（きれる）。
小人之沢（恩恵）、五世、而、斬（きれる）。
予、未、得、為（なる）、孔子、徒、也。
予、私淑（ひそかに善いとして手本とする）、諸（これ）、人、也」

孟子 先生は言った。

「王者の恩恵は、五世代後に切れてしまいます。
矮小な人の恩恵も、五世代後に切れてしまいます。
私、孟子は、孔子 先生の(直接の)学徒に成る事ができ得なかった。
私、孟子は、儒学者の人に学んで、ひそかに、孔子 先生を善いとして手本と
しているのである」

孟子、曰。

「可、以、取、可、以、無、取、取、傷（そこなう）、廉。
可、以、与、可、以、無、与、与、傷（そこなう）、恵（思いやり）。
可、以、死、可、以、無、死、死、傷（そこなう）、勇」

孟子 先生は言った。

「取っても善いし、取らなくても善いのに、取ると、清廉潔白を損なってしまう。
与えても善いし、与えなくても善いのに、与えると、思いやり(の価値)を損なってしまう。
死んでも善いし、死ななくても善いのに、死ぬと、勇気(の価値)を損なってしまう」

逢蒙、学、射、於、羿。
尽、羿之道、思。
「天下、惟(ただ)、羿、為(なす)、愈(こえる)、己」
於、是(ここ)、殺、羿。

孟子、曰。
「是(これ)、亦(また)、羿、有、罪、焉」

公明儀、曰。
「宜、若(のよう)、無、罪、焉?」

曰。
「薄、乎、云、爾(のみ)。
悪(どうして)、得、無、罪?

鄭、人、使(させる)、子濯孺子、侵、衛。
衛、使(させる)、庾公之斯、追、之(これ)。
子濯孺子、曰。
『今日、我、疾、作(おこる)。
不、可、以、執(とる)、弓。
吾、死、矣、夫』。
問、其僕(その仕えている者)、曰。
『追、我、者(もの)、誰、也?』。
其僕(その仕えている者)、曰。
『庾公之斯、也』。
曰。
『吾、生、矣』。
其僕(その仕えている者)、曰。
『庾公之斯、衛、之(の)、善、射、者(もの)、也。
夫子、曰。吾、生。
何、謂、也?』。
曰。
『庾公之斯、学、射、於、尹公之他。
尹公之他、学、射、於、我。
夫(かの)尹公之他、端人(正しい人)、也。
其、取、友、必、端(正しい)、矣』。
庾公之斯、至、曰。
『夫子、何為(どうして)、不、執(とる)、弓?』。
曰。

『今日、我、疾、作（おこる）。
不、可、以、執（とる）、弓』。
曰。
『小人、学、射、於、尹公之他。
尹公之他、学、射、於、夫子。
我、不、忍、以、夫子之道、反（かえって）、害、夫子。
雖（いえども）、然、今日之事、君、事、也。
我、不、敢、廃』。
抽（ぬく）、矢、叩、輪、去、其（その）金、発、乗矢（四本の矢）、而、後、反（かえる）」

逢蒙は、弓で矢を射る技術を羿から学んだ。
(逢蒙は、)羿の弓道を学び尽くすと、思った。
「天下で、私、逢蒙を超越しているのは、羿だけである」と。
このため、(逢蒙は、)羿を殺してしまった。

孟子 先生は言った。
「これは、また、羿にも罪が有る」

公明儀は言った。
「羿には、罪が無いような物ではありませんか？」

孟子 先生は言った。
「罪が軽いと言うだけである。

どうして、『(羿には、)罪が無い』とでき得ようか？　いいえ！
鄭という国の人々が、子濯孺子に、衛という国を侵略させた。
衛という国の人々は、庾公之斯に、子濯孺子達を追い払わせた。
子濯孺子は言いました。
『今日、私、子濯孺子は病気に成ってしまいました。
そのため、弓を執る事ができません。
私、子濯孺子は死ぬであろう』と。
子濯孺子は、仕えている者に質問して言いました。
『私、子濯孺子を追撃している者は誰なのか？』と。
その、子濯孺子に仕えている者は言いました。
『庾公之斯です』と。
子濯孺子は言いました。
『私、子濯孺子は生き延びるであろう』と。
その、子濯孺子に仕えている者は言いました。
『庾公之斯は、衛という国の、弓で矢を射るのが上手な者です。
あなた、子濯孺子は、言います。私、子濯孺子は生き延びるであろう、と。
なぜ、そう言えるのですか？』と。
子濯孺子は言いました。
『庾公之斯は、尹公之他から、弓で矢を射る技術を学びました。
尹公之他は、私、子濯孺子から、弓で矢を射る技術を学びました。
その尹公之他は、正しい人です。
友(を作ったり、弟子)を取るのも必ず正しいはずです』と。
庾公之斯が、到来して、言いました。
『あなた、子濯孺子は、どうして、弓を執らないのですか？』と。

子濯孺子は言いました。

『今日、私、子濯孺子は病気に成ってしまいました。

そのため、弓を執る事ができません』と。

庾公之斯は言いました。

『私、庾公之斯は、尹公之他から、弓で矢を射る技術を学びました。

尹公之他は、あなた、子濯孺子から、弓で矢を射る技術を学びました。

私、庾公之斯は、あなた、子濯孺子の弓道によって、逆にかえって、あなた、子濯孺子を殺害してしまうのを忍耐できません。

ですが、今日の追撃は、君主からの命令です。

私、庾公之斯は、あえて、(完全に、)やめる事は、できません』と。

(庾公之斯は、)矢を引き抜くと、戦車の車輪に叩きつけて矢の金属製の鏃(やじり)を除去して(矢の殺傷能力を無くして)、そうした四本の矢を(子濯孺子へ形式的に)発射すると、その後、(子濯孺子を見逃して)帰還した」

孟子、曰。

「西子、蒙(こうむる)、不潔、則(すなわち)、人、皆、掩(おおう)、鼻、而、過、之(これ)。(西子は有名な美人。)

雖(いえども)、有、悪人、斎戒、沐浴、則(すなわち)、可、以、祀、上帝(天の神)」

孟子先生は言った。

「美人である西子でも、汚物を被ってしまったら、人々は皆、鼻を覆って、
この西子を通り過ぎてしまうであろう。
悪人でも、飲食を節制して体を洗浄して心身を清浄にすれば、天の神を祭っ
ても良い」

孟子、曰。
「天下、之、言、性、也、則、故、而已、矣。
故、者、以、利、為、本。
所、悪、於、智、者、為、其、鑿、也。
如、智者、若、禹、之、行、水、也、則、無、悪、於、智、矣。
禹、之、行、水、也、行、其、所、無、事、也。
如、智者、亦、行、其、所、無、事、則、智、亦、大、矣。
天之高、也、星辰之遠、也、苟、求、其、故、千歳之日至、可、坐、而、致、
也」

孟子 先生は言った。
「天下の万物の性質を言えたとしたら、過去によってしか言えない。
過去によ(って天下の万物の性質を言え)る者は、智慧を根本とする。
智慧を嫌われてしまう者は、その智慧で他人を探ってしまうためである。

もし智者が、禹が水の流れを通して行かせたようにすれば、智慧を嫌われないのである。

禹が水の流れを通して行かせた時は、(水の流れに)無理が無いように通して行かせたのである。

もし智者もまた、(智慧に)無理が無いように実行したら、その智慧もまた大いなる物なのである。

天が高くても、星々が遠くても、(禹のような智者が、)仮に、過去を探求すれば、千年後の夏至の日を、座して計算する事が可能なのである」

公行子、有、子之喪。

「右師(=王驩)」、往、弔。

入、門、有、進、而、与、「右師(=王驩)」、言、者。

有、就、「右師(=王驩)」之位、而、与、「右師(=王驩)」、言、者。

孟子、不、与、「右師(=王驩)」、言。

「右師(=王驩)」、不、悦、曰。

「諸君子、皆、与、驩(=王驩)、言。

孟子、独、不、与《と》、驩(=王驩)、言。
是《これ》、簡《かろんじる》、驩(=王驩)、也」

孟子、聞、之《これ》、曰。
「礼。
『朝廷、不、歴《めぐる》、位、而、相、与《ともに》、言。
不、踰《こえる》、階、而、相、揖《挨拶》、也』。
我、欲、行、礼。
子敖(=王驩)、以、我、為《なす》、簡《かろんじる》。
不、亦《また》、異《おかしい》、乎?」

公行子の子の葬儀が有った。

王驩が弔問しに行った。

王驩が門から入ると、王驩の所へ進んで王驩と話す者どもがいた。
王驩が自分の位置の席についても、王驩と話す者どもがいた。
孟子先生は、王驩と話さなかった。
王驩が、不機嫌に成って、言った。
「諸々の人々は皆、私、王驩と話してくれました。

しかし、孟子、独りだけが、私、王驩と話してくれませんでした。
これは、私、王驩を軽んじているのです」

孟子先生は、この王驩の言葉を聞いて、言った。
「礼儀によると、
『朝廷では、席を巡りまわって、互いに共に話すなかれ。
位階、段を超えて、互いに挨拶するなかれ』と言われています。
私、孟子は、礼儀を実行したいと欲(ほっ)したのです。
王驩は、『私、孟子が王驩を軽んじている』と見なしたそうですが。
これはまた、おかしな事を言う物です」

孟子、曰。
「君子、所以、異、於、人、者(もの)、以、其(その)、存、心、也。
君子、以、仁、存、心、以、礼、存、心。
仁者、愛、人。
有、礼、者(もの)、敬、人。
愛、人、者(もの)、人、恒(つね)、愛、之(これ)。
敬、人、者(もの)、人、恒(つね)、敬、之(これ)。
有、人、於、此(ここ)。
其(その)、待(待遇で遇する)、我、以、横逆(横暴)、則(すなわち)、君子、必、自(みずから)、反(反省する)、也。
『我、必、不仁、也。

必、無礼、也。
此(この)物、奚(どうして)、宜(都合良く)、至、哉？』。
其(その)、自(みずから)、反(反省する)、而、仁、矣。
自(みずから)、反(反省する)、而、有、礼、矣。
其(その)、横逆(横暴)、由(なお)、是(この)、也、君子、必、自(みずから)、反(反省する)、也。
『我、必、不、忠』。
自(みずから)、反(反省する)、而、忠、矣。
其(その)、横逆(横暴)、由(なお)、是(この)、也、君子、曰。
『此(これ)、亦(また)、妄人(愚者)、也、已(のみ)、矣。
如此(このよう)、則(すなわち)、与(と)、禽獣(鳥や獣)、奚(どうして)、択(えらぶ)、哉？
於、禽獣(鳥や獣)、又(また)、何、難(非難する)、焉』。
是故(このため)、君子、有、終身之憂、無、一朝之患、也。
乃(すなわち)、若(のよう)、所、憂、則(すなわち)、有、之(これ)。
『舜、人、也。
我、亦(また)、人、也。
舜、為(なす)、法、於、天下、可、伝、於、後世。
我、由(なお)、未、免、為(なる)、郷人(村人)、也』。
是(これ)、則(すなわち)、可、憂、也。
憂、之(これ)、如何(どうするのか)？
如(のよう)、舜、而已(のみ)、矣。
若(のよう)、夫(かの)君子、所、患、則(すなわち)、亡(ない)、矣。
非、仁、無(ない)、為(なす)、也。
非、礼、無(ない)、行、也。
如(のよう)、有、一朝之患、則(すなわち)、君子、不、患、矣」

孟子 先生は言った。

「王者が、他の人と異なる理由は、正しい心が在るからである。

王者には、思いやりによって正しい心が在るし、礼儀によって正しい心が在る。

思いやりが有る者は、他人を愛する事ができる。

礼儀が有る者は、他人を敬う事ができる。

ある人を愛する者は、その人も常に、その者を愛するのである。

ある人を敬う者は、その人も常に、その者を敬うのである。

ここに、ある人がいたとします。

横暴な態度で遇されたら、王者は必ず自身を反省します。

『私には、必ず、思いやりが無かったのである。

私には、必ず、礼儀が無かったのである。

でなければ、こんな横暴な態度が、どうして、(運命的に、)都合良く到来するであろうか？　いいえ！』と。

王者は、自身を反省して、思いやり深く成る。

王者は、自身を反省して、礼儀を持って接する。

それでもなお、横暴な態度で遇されたら、王者は必ず自身を反省します。

『私には、必ず、誠実さが無かったのである』と。

王者は、自身を反省して、誠実に成ります。

それでもなお、横暴な態度で遇されたら、王者は(心の中で)言います。

『こいつもまた、愚者なだけなのである。

このように横暴ならば、獣(けだもの)、人でなしと、どのような違いが有るというのか？　いいえ！　無い！
また、獣(けだもの)、人でなしを、どうして、非難する(暇が有る)であろうか？　いいえ！』と。
このため、王者には、一生の心配は有るが、一時的な心配は無いのである。
次のような一生の心配が、王者には有るのである。
『舜も、人に過ぎない。
私もまた、人に過ぎない。
しかし、舜は、天下の手本となるような大いなる事を為(な)して後世にまで伝えられて語り継がれるであろう。
他方、私は、今なお、庶民である境遇を免れる事が未だできていない』と。
王者は、このような事を心配しても善いのである。
このような事を心配するならば、どうしたら善いのか？
舜のように成るしか無いのである。
あの舜のような王者には、心配するものが無いのである。
思いやりの無い事はしないだけなのである。
失礼な事は行わないだけなのである。
一時的な心配を、王者は心配しないのである」

禹、稷(＝后稷)、当(あたる)、平、世、三、過、其(その)門、而、不、入。
孔子、賢、之(これ)。

顔子(＝顔回)、当(あたる)、乱世、居、於、陋巷(路地)、一、箪、食、一、瓢(ひょうたん)、飲。
人、不、堪、其(その)憂、顔子(＝顔回)、不、改、其楽(そのたのしみ)。
孔子、賢、之(これ)。

孟子、曰。
「禹、稷(＝后稷)、顔回、同、道。
禹、思、天下、有、溺、者(もの)、由(なお)、己、溺、之(これ)、也。
稷(＝后稷)、思、天下、有、饑、者(もの)、由(なお)、己、饑、之(これ)、也。
是(ここ)、以、如是(このよう)、其(それ)、急、也。
禹、稷(＝后稷)、顔子(＝顔回)、易(かえる)、地(立場)、則(すなわち)、皆、然。
今、有、同室(家)之人、闘、者(もの)、救、之(これ)、雖(いえども)、被髪纓冠(慌てて)、而、救、之(これ)、可、也。
郷、隣、有、闘、者(もの)、被髪纓冠(慌てて)、而、往、救、之(これ)、則(すなわち)、惑、也。
雖(いえども)、閉、戸、可、也」

禹と、后稷は、平安な世にあたっていても、三回、自分の家の門を過ぎても、家に入れなかった(ほど多忙であった)。
孔子先生は、これら禹と后稷を「賢者である」とした。

顔回は、乱世にあたって、路地に居住して、竹の容器一つ分の食べ物を食べ、ひょうたん一つ分の飲み物を飲んでいた。
他の人々は、その苦しみに忍耐できなかったが、顔回は、その苦行を楽しんで改めなかった。

孔子先生は、この顔回を「賢者である」とした。

孟子先生は言った。

「禹、后稷、顔回の道理、真理は同一なのである。

(治水を担当していた)禹は、天下で溺れた者がいたら、その者を自分が溺れさせたかのように思ったのである。

(農業を担当していた)后稷は、天下で飢えた者がいたら、その者を自分が飢えさせたかのように思ったのである。

このため、急いだので、あのように多忙であったのである。

禹、后稷、顔回は、立場が変わったら、皆、他の者と同様に急いで、多忙であったであろう。

今、同じ家の家族達のうち、闘争している者達がいて、その闘争を止めて、それらの家族達を救うためであれば、慌てていて乱れ髪で冠の飾り紐を結ぶ途中でも、それらの家族達を救うのは、(家族は自分の担当の範疇なので、)善い事なのである。

故郷で、隣人達のうち、闘争している者達がいて、その闘争を止めて、それらの隣人達を救うためであったら、慌てていて乱れ髪で冠の飾り紐を結ぶ途中で、それらの隣人達を救うのは、(隣人達は自分の担当の範疇ではないので、)気の迷いのような物であり、自分の家の戸を閉ざしても善いのである」

公都子、曰。

「匡章、通、国、皆、称。『不孝、焉』。
夫子、与(と)、之(これ)、遊、又(また)、従、而、礼貌(礼儀正しい)、之(これ)。
敢、問。
何、也？」

孟子、曰。

「世俗、所謂(いわゆる)、不孝、者(もの)、五。
惰、其(その)四支、不、顧、父母之養、一、不孝、也。
博弈、好、飲酒、不、顧、父母之養、二、不孝、也。
好、貨財、私、妻子、不、顧、父母之養、三、不孝、也。
従、耳目之欲、以、為(なす)、父母、戮(はずかしめる)、四、不孝、也。
好、勇、闘很(口論する)、以、危、父母、五、不孝、也。
章子(＝匡章)、有、一、於、是(これ)、乎？
夫(かの)章子(＝匡章)、子、父、責、善、而、不、相、遇(会う)、也。
責、善、朋友之道、也。
父、子、責、善、賊(そこなう)、恩、之(の)、大、者(もの)。
夫(かの)章子(＝匡章)、豈(どうして)、不、欲、有、夫妻子母之属、哉？
為(ため)、得、罪、於、父、不、得、近、出、妻、屏(しりぞける)、子、終身、不、養、焉。
其(その)、設、心、以、為、不、若是(このよう)、是、則(すなわち)、罪、之(の)、大、者(もの)。
是(これ)、則(すなわち)、章子(＝匡章)、已(のみ)、矣」

公都子が孟子先生に言った。

「匡章は、国中の皆が『親不孝者である』と言っています。

しかし、孟子 先生は、この匡章と遊び、また、従って、この匡章に対して礼儀正しくしています。
あえて質問いたします。
どうして、でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「世俗で、いわゆる、『親不孝者である』と言われる者には五種類あります。
自分の四肢を怠惰にして働かず、父母を養うのを顧みない者は、第一の親不孝者です。
賭け事をし、飲酒を好み、父母を養うのを顧みない者は、第二の親不孝者です。
金銭や財産を好んで自分と自分の妻子のために自分の物にしてしまうが、父母を養うのを顧みない者は、第三の親不孝者です。
耳による欲望や目による欲望に従ってしまって父母を辱(はずかし)める悪行を為(な)してしまう者は、第四の親不孝者です。
武勇を好んで口論して父母を危険にさらす者は、第五の親不孝者です。
匡章には、これら五種類の親不孝のうち、一つでも有るでしょうか？ いいえ！ 一つも無い！
あの匡章は、父と子の間で善、正義によって責め合ってしまって、互いに会わないように成ってしまったのです。
善、正義によって責め合うのは、友人同士の道理なのです。
父と子の間で善、正義によって責め合ってしまうのは、父の恩を損なってしまう事のうち、大きな物なのです。

あの匡章が、どうして、夫妻の絆（きずな）や親子の絆（きずな）を欲（ほっ）しない事が有り得ようか？　いいえ！　欲する！

しかし、匡章は、父への罪を得てしまって、父へ近づく事ができ得ないので、妻を自分の家から出してしまい、子を自分の家から退けてしまって、一生、(妻や子によって)養われない事にしたのである。

匡章が、そのように(妻や子によって養われない)決心をしたのは、そうしなければ、父への罪が大きく成ってしまうと匡章は見なしたのである。

このようにできるのは、匡章だけであろう」

曾子、居、武城。

有、「越」、寇（侵略）。

或（ある）、曰。

「寇（侵略）、至。

盍（どうして）、去、諸（これ）？」

曰。

「無（なかれ）、寓（とめる）、人、於、我室（わが家）、毀傷、其（その）薪木」

寇（侵略）、退、則（すなわち）、曰。

「修、我(わが)墻(壁)、屋。
我、将(しようとする)、反(かえる)」
寇、退、曾子、反(かえる)。

左右、曰。
「待、先生、如此(このよう)、其(それ)、忠、且(かつ)、敬、也。
寇(侵略)、至、則(すなわち)、先、去、以、為(なす)、民、望。
寇(侵略)、退、則(すなわち)、反(かえる)。
殆(ほとんど)、於、不、可」

沈猶行、曰。
「是(これ)、非、汝、所、知、也。
昔、沈猶(＝沈猶行)、有、『負芻』之禍。
従、先生、者(もの)、七十人。
未、有、与(あずかる)、焉」

子思、居、於、衛。

有、「斉」、寇(侵略)。

或(ある)、曰。
「寇(侵略)、至。
盍(どうして)、去、諸(これ)?」

子思、曰。

「如(もし)、汲(＝子思)、去、君、誰、与(ともに)、守？」

孟子、曰。

「曾子、子思、同、道。
曾子、師、也、父兄、也。
子思、臣、也、微(卑賤)、也。
曾子、子思、易(かえる)、地(立場)、則(すなわち)、皆、然」

ある時、曾子 先生は武城という所に居ました。

越という国からの侵略が有りました。

ある人が曾子 先生に言った。

「侵略軍が到来します。
どうして、ここを去らないのですか？」

曾子 先生は言った。

「私、曾子の家に他人を泊めて、薪と成る樹木を傷つけるなかれ」

侵略軍が退却すると、曾子 先生は言った。

「私、曾子の塀の壁と家を修理してください。

私、曾子は帰ろうと思います」

侵略軍が退却したので、曾子 先生は帰ってきた。

曾子 先生のそばに仕える人達が言った。
「(武城の人々による)曾子 先生への待遇は、このように、誠実、かつ、敬意に満ちている。
侵略軍が到来したら、(曾子 先生は、武城の)人々の望み通りに先に去った(ので、武城の人々も曾子 先生に続いて避難できた)。
侵略軍が退却したら、(曾子 先生は、武城に)帰ってきました。
(曾子 先生の行動は、)ほとんど善くないと思います」

沈猶行が(、曾子 先生のそばに仕える人達に、)言った。
「これ(、曾子 先生の行動)は、あなた達が(未だ)知る事ができない境地の事なのである。
昔、私、沈猶行には、負芻に襲われる災難が有りました。
(現場には、曾子 先生と、)曾子 先生に従っている者達が七十人いました。
しかし、(曾子 先生は、)関与しようとしませんでした(。無視しました)」

ある時、子思は衛という国に居ました。

斉という国からの侵略が有りました。

ある人が子思に言った。

「侵略軍が到来します。
どうして、ここを去らないのですか？」

　子思は言った。

「もし私、子思が去ったら、君主は誰と共に、ここを守るというのか？」

　孟子 先生は言った。

「曾子と、子思の道理は同一なのである。
曾子が、教師であり、父兄であ(る、という立場であ)っただけなのです。
子思が、臣下であり、下級の役人であ(る、という立場であ)っただけなのです。
曾子と、子思は、立場を変えたら、皆、他方と同様にしたであろう」

　儲子、曰。

「王、使(させる)、人、瞯(うかがう)、夫子。
果(はたして)、有、以、異、於、人、乎？」

　孟子、曰。

「何、以、異、於、人、哉？
堯、舜、与(と)、人、同、耳(のみ)」

儲子が孟子 先生に言った。

「王が、他人に、あなた、孟子 先生をひそかに監視させました。果たして、(孟子 先生には、)人とは異なる所が有るのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「(私、孟子が、)どうして、人と異なるであろうか? いいえ! 人である!

堯や、舜も、人と同じであっただけなのである」

斉、人、有、一妻、一妾、而、処、室、者(もの)。

其(その)良人(夫)、出、則(すなわち)、必、饜(あきる)、酒、肉、而、後、反(かえる)。

其(その)妻、問、其、所、与(ともに)、飲食、者(もの)、則(すなわち)、尽(ことごとく)、富貴、也。

其(その)妻、告、其(その)妾、曰。

「良人(夫)、出、則(すなわち)、必、饜(あきる)、酒、肉、而、後、反(かえる)。

問、其(その)、与(ともに)、飲食、者(もの)、尽(ことごとく)、富貴、也。

而、未、嘗(かつて)、有、顕者(高位)、来。

吾、将(しょうとする)、瞷(うかがう)、良人(夫)、之(の)、所、之(いく)、也」

蚤（早く）、起、施、従、良人（夫）、之（の）、所、之（いく）。
徧（あまねく）、国中、無（いない）、与（ともに）、立、談、者（もの）。
卒（ついに）、之（いく）、東、郭（郊外）、墦（墓）、間（の）、之、祭、者（もの）、乞、其（その）余。
不足、又（また）、顧、而、之（いく）、他。
此（これ）、其（その）、為（なす）、饜足（満足）、之（の）、道、也。
其（その）妻、帰、告、其（その）妾、曰。
「良人（夫）、者（もの）、所、仰、望、而、終、身、也。
今、若此（このよう）」
与（ともに）、其（その）妾、訕（非難する）、其（その）良人（夫）、而、相、泣、於、中庭。
而、良人（夫）、未、之（これ）、知、也。
施施（いそいそと）、従（より）、外、来、驕（自慢する）、其（その）妻、妾。
「由（より）、君子、観、之（これ）、則（すなわち）、人、之（の）、所以、求、富貴、利達（立身出世）、者（もの）、其（その）妻、妾、
不、羞、也、而、不、相、泣、者（もの）、幾（ちかい）、希（まれ）、矣」

斉という国の人で、一人の正妻と、一人の正妻ではない妻がいて、自分の家にい(て働かないでい)る者がいた。
その者である夫は、家から出ると、必ず酒や肉を飽きるまで飲食した後で、帰ってきた。

その正妻が、夫と共に飲食した者達に質問すると、ことごとく金持ち達か高貴な地位の人達であった。

その正妻は、正妻ではない妻に言った。

「私達の夫は、家から出ると、必ず酒や肉を飽きるまで飲食した後で、帰ってきます。

私達の夫と共に飲食した者達に質問すると、ことごとく金持ち達か高貴な地位の人達でした。

しかし、未だかつて、高位な地位の者達が、私達の家に来た事は有りません。

私は、私達の夫の行き先をひそかに尾行しようと思います」

正妻は早く起きると、夫の行き先を尾行した。

夫は、国中を遍(あまね)くまわったが、夫と共に立って話す者はいなかった。

夫は、ついに、東の郊外の墓場へ行き、墓と墓の間で先祖を祭っている者に、供え物の残りを乞食した。

それで不足していたら、また、見回して、他の者の所へ行っ(て乞食し)た。

これ(、乞食)が、その夫が、満足するまで飲食する方法だったのである。

正妻は帰ると、正妻ではない妻に言った。

「夫という者は、妻が仰ぎ望むように畏敬したまま身を終えるような者であるべきなのです。

それなのに、今、夫は、このように乞食していました」

正妻は、正妻ではない妻と共に、自分達の夫を非難して、共に中庭で泣きました。

しかし、夫は、それを未だ知りませんでした。

夫は、いそいそと外から帰って来て、自分の正妻と、正妻ではない妻に(贅沢な飲食を)自慢してしまったのです。

(孟子 先生は言った。)

「王者から、この逸話を観察、考察すると、人が、金銭や高貴な地位や立身出世を求める方法が、その人の正妻や、正妻ではない妻が恥ずかしく成って共に泣かない方法であるのは、希少に近いのである」

万章上

万章、問、曰。

「『舜、往、于、田、号泣、于、旻天』。

何為、其、号泣、也?」

孟子、曰。

「怨、慕、也」

万章、曰。

「父母、愛、之、喜、而、不、忘。

父母、悪、之、労、而、不、怨。

然、則、舜、怨、乎?」

曰。

「長息、問、於、公明高、曰。

『舜、往、于、田、則、吾、既、得、聞、命、矣。

号泣、于、旻天、于、父母、則、吾、不、知、也』。

公明高、曰。

『是、非、爾、所、知、也』。

夫公明高、以、孝子之心、為、不、若是、恝。

『我、竭、力、耕、田、共、為、子、職、而已、矣。

父母、之、不、我、愛、於、我、何、哉?』。

帝(＝堯)、使、其子、九男、二女、百官、牛、羊、倉廩、備、以、事、舜、於、畎畝之中。

天下之士、多、就、之、者。

帝(＝堯)、将、胥、天下、而、遷、之、焉。

為、不、順、於、父母、如、窮、人、無、所、帰。

天下之士、悦、之、人、之、所、欲、也。

而、不足、以、解、憂。

好色、人、之、所、欲。

妻、帝(＝堯)之二女、而、不足、以、解、憂。

富、人、之、所、欲。

富、有、天下、而、不足、以、解、憂。

貴、人、之、所、欲。

貴、為、天子、而、不足、以、解、憂。

人、悦、之、好色、富、貴、無、足、以、解、憂、者。

惟、順、於、父母、可、以、解、憂。

人、少、則、慕、父母、知、好色、則、慕、少艾、有、妻子、則、慕、妻子、仕、則、慕、君、不、得、於、君、則、熱中。

大孝、終身、慕、父母。

五十、而、慕、者、予、於、大、舜、見、之、矣」

万章が孟子 先生に質問して言った。

「『舜は、田畑へ行くと、天を仰いで号泣した』と言われています。どうして号泣したのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「(父母を)怨むほど慕っていたからである」

万章が言った。
「父母が、その子を愛したら、その子は喜んで忘れないべきです。
父母が、その子を嫌っても、その子は、労苦しても、怨まないべきです。
そうであるならば、舜は、(父母を)怨んでしまったのでしょうか?」

孟子 先生は言った。
「長息が、公明高に質問して言いました。
『舜が、田畑に行った、と私、長息は既に聞いた事が有ります。
舜が、天を仰いで、父母について号泣した、事について、私、長息には分からない、理解できないのですが』と。
公明高は言いました。
『それは、あなた、長息には(未だ)分からない境地なのである』と。
その公明高は、親孝行な子の心を、そのように、『さっぱりとしていない』としています。
『私、舜は、力を尽くして、田畑を耕して、子が為すべき務めを(父母に)捧げているばかりである。
それなのに、父母が、私、舜を愛してくれないのは、なぜなのか?』と。
堯は、九男二女の自分の子達と、諸々の役人を、牛、羊、穀物の倉を備えさせて、田畑の中で耕していた舜に仕えさせた。
天下の『一人前である者』達で、この舜につき従う者達が多数に成った。

堯は、天下の統治権を全て、この舜に移そうとした。
しかし、(舜は、)父母が従ってくれない為に、困窮している人に帰る場所が無いかのようであった。
天下の『一人前である者』達に喜ばれる事は、人が欲する物である。
しかし、舜の心配を解くには不足だったのである。
好色な事は、人が欲する物である。
舜は堯の二人の娘達と結婚したが、舜の心配を解くには不足だったのである。
富は、人が欲する物である。
天下という富を所有しても、舜の心配を解くには不足だったのである。
高貴な地位は、人が欲する物である。
高貴な天子に成っても、舜の心配を解くには不足だったのである。
人に喜ばれる事、好色な事、富、高貴な地位でも、舜の心配を解くには不足なものだったのである。
ただ父母が従ってくれる事だけが、舜の心配を解く事ができたのである。
人は、若ければ父母を慕い、好色な事を知れば若く美しい女性を慕い、妻子を持てば妻子を慕い、君主に仕えれば君主を慕い、君主の関心を得られなければ(君主の関心を得ようと)熱中する。
しかし、大いなる、親孝行な子は、一生、父母を慕うのである。
五十歳でも父母を慕う者について、私、孟子は、大いなる舜によって、見聞きする事ができたのである」

万章、問、曰。
「『詩』、云。
『娶、妻、如之何（これをどうする）?
必、告、父母』。
信、斯（この）言、也、宜、莫（ない）、如（のよう）、舜。
舜、之（の）、不、告、而、娶、何、也?」

孟子、曰。
「告、則（すなわち）、不、得、娶。
男女、居、室（家）、人之大倫、也。
如（もし）、告、則（すなわち）、廃、人之大倫、以、懟（うらむ）、父母。
是（ここ）、以、不、告、也」

万章、曰。
「舜、之（の）、不、告、而、娶、則（すなわち）、吾、既、得、聞、命、矣。
帝(=堯)、之（の）、妻、舜、而、不、告、何、也?」

曰。
「帝(=堯)、亦（また）、知、告、焉、則（すなわち）、不、得、妻、也」

万章、曰。
「父母、使（させる）、舜、完、廩、捐（すてる）、階。
瞽瞍、焚（もやす）、廩。
使（させる）、浚（さらう）、井。

出。

従、而、揜、之。

象、曰。

『謨、蓋、都君(=舜)、咸、我績。

牛羊、父母、倉廩、父母、干戈、朕、琴、朕、弤、朕、二嫂、使、治、朕棲』。

象、往、入、舜、宮。

舜、在、牀、琴。

象、曰。

『鬱陶、思、君、爾』。

忸怩。

舜、曰。

『惟、茲臣庶、汝、其、于、予、治?』。

不、識?

舜、不、知、象、之、将、殺、己、与?」

曰。

「奚、而、不、知、也?

象、憂、亦、憂。

象、喜、亦、喜」

曰。

「然、則、舜、偽、喜、者、与?」

曰。

「否。

昔者(むかし)、有、饋(おくりものをする)、生、魚、於、鄭、子産。

子産、使(させる)、校人(池などの役人)、畜(かう)、之(これ)、池。

校人(池などの役人)、烹(にる)、之(これ)。

反命(結果を報告する)、曰。

『始、舎、之(これ)、圉圉(弱っている)焉。

少(しばらく)、則(すなわち)、洋洋(水が満ちあふれているよう)焉。

攸然(悠然)、而、逝』。

子産、曰。

『得、其(その)、所、哉。得、其(その)、所、哉』。

校人(池などの役人)、出、曰。

『孰(だれが)、謂、子産、智?

予、既、烹(にる)、而、食、之(これ)。

曰。得、其(その)、所、哉。得、其(その)、所、哉』。

故、君子、可、欺、以、其(その)方。

難、罔(あざむく)、以、非、其(その)道。

彼、以、愛、兄、之(の)、道(みち)、来。

故、誠、信、而、喜、之(これ)。

奚(どうして)、偽、焉?」

万章が孟子先生に質問して言った。

「『詩経』で言われています。

『妻と結婚するには、どうするのか？（と言うと、）
(事前に)必ず、父母に告げ知らせるのである』と。
この言葉を信じるならば、舜のようにしないのが当然です。
舜が、(父母に)告げ知らせず結婚したのは、なぜでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「(父母に)告げ知らせたら、結婚でき得なかったからである。
男女が(結婚して)一つ屋根の下で暮らすのは、人の大いなる倫理、道理なのである。
もし(父母に)告げ知らせたら、人の大いなる倫理、道理をやめてしまって、父母を怨んでしまう。
このため、(父母に)告げ知らせなかったのである」

万章が言った。
「舜が(父母に)告げ知らせずに結婚したのは、私、万章は既に聞く事ができ得ました。
堯が、舜に結婚をさせて、(舜の父母に)告げ知らせなかったのは、なぜでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「堯もまた、(舜の父母に)告げ知らせたら、結婚させる事ができ得なかったからである」

万章が言った。

「(舜の)父母は、舜に穀物の倉を完全に直させている間に、はしごを捨てました。
そして、(舜の父である)瞽瞍は、穀物の倉(ごと舜)を燃や(そうと)しました。
(しかし、舜の殺害に失敗しました。)
(舜の父母は、舜に)井戸を浚(さら)させました。
(舜は、命の危険を察知して、)逃げ出しました。
そして、(舜の父母は、)井戸に(蓋をして)覆いました。
(舜の弟である)象は言いました。
『舜(を井戸に入れて井戸)に蓋(ふた)をするように計画できたのは、皆、私、象の功績なのである。
牛や羊は父母に、米や穀物の倉も父母に、武器は私、象に、琴も私、象に、弓も私、象に、兄である舜の二人の嫁には私、象の寝床で(性的な)奉仕をさせよう』と。
象が、舜の宮殿に行って、入りました。
舜が、床にいて、琴を弾いていました。
象は言いました。
『心が塞いでいて、君主である、舜の事ばかり思っていました』と。
象は、とても恥ずかしくなりました。
舜は言いました。
『これらの臣下達を、あなた、象は、私、舜の所で、統治してみますか?』
と。
どうでしょう?
舜は、弟である象が、自分を殺そうとしているのを知らなかったのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「どうして知らないであろうか？　いいえ！　知っていた！
ただ、象が心配していたら、舜もまた心配に成ったのである。
象が喜んでいたら、舜もまた喜んだのである」

万章が言った。

「そうであるならば、舜は、嘘で喜んでいたのですか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ。
昔、生きている魚を、鄭という国の子産に、贈った者がいました。
子産は、池の役人に、その生きている魚を池で飼わせようとした。
池の役人は、その生きている魚を煮て食べてしまった。
池の役人は、子産に結果を報告して言った。
『初めは、あの生きている魚を、池に入れると、弱っていました。
しばらくすると、水が満ちあふれているように元気に満ちあふれて泳ぐように成りました。
悠然と、ゆったりと、泳いで行って見えなく成りました』と。
子産は言いました。
『良い居場所を得たのか。良い居場所を得たのか』と。
池の役人は、子産の所を出ると、言いました。
『誰が、子産は智者である、と言っているのか？
私は既に魚を煮て食べてしまいました。

それなのに、子産は言いました。良い居場所を得たのか、良い居場所を得たのか、と』と。
そのため、王者を、正しい方法を悪用して、だます事はできます。
しかし、王者を、正しくない方法を利用して、だますのは難しいのです。
彼、象は、兄である舜を愛しているかのような方法を悪用して来ました。
このため、舜は、それを、まことに、信じて、喜んだのです。
どうして、嘘で喜んだであろうか？　いいえ！」

　万章、問、曰。
「象、日、以、殺、舜、為(なす)、事(こと)。
立、為(なる)、天子、則(すなわち)、放、之(これ)、何、也？」

　孟子、曰。
「封、之(これ)、也。
或(ある)、曰。『放、焉』」

　万章、曰。
「舜、流、共工、于、幽州。
放、驩兜、于、崇山。
殺、三苗、于、三危。
殛(ころす)、鯀、于、羽山。

四、罪、而、天下、咸(みな)、服。
誅、不仁、也。
象、至、不仁。
封、之(これ)、有庳。
有庳之人、奚(なに)、罪、焉？
仁人、固(もとより)、如是(このよう)、乎？
在、他人、則(すなわち)、誅、之(これ)。
在、弟、則(すなわち)、封、之(これ)」

曰。
「仁人、之(の)、於、弟、也、不、蔵(かくす)、怒、焉。
不、宿(とどめる)、怨、焉。
親愛、之(これ)、而已(のみ)、矣。
親、之(これ)、欲、其(その)貴、也。
愛、之(これ)、欲、其(その)富、也。
封、之(これ)、有庳、富貴、之(これ)、也。
身、為(なる)、天子。
弟、為(なる)、匹夫、可、謂、『親愛、之(これ)』、乎？」

「敢、問。
『或(ある)、曰。放』、者(とは)、何、謂、也？」

曰。
「象、不、得、有、為、於、其(その)国。

天子、使(させる)、吏、治、其(その)国、而、納、其(その)貢税、焉。
故、謂、『之(これ)、放』。
豈(どうして)、得、暴、彼(かの)民、哉?
雖(いえども)、然、欲、常常、而、見(あう)、之(これ)。
故、源源(次々と)、而、来。
『不、及、貢。
以、政、接、于、有庳』。
此(これ)、之(これ)、謂、也」

万章が孟子先生に質問して言った。
「弟である象は、日々、舜を殺すのを一大事としていました。
舜は、擁立されて、天子と成りましたが、この象を追放しただけなのは、なぜでしょうか?」

孟子先生は言った。
「象に領地を与えて封じたのである。
ある人が『象を追放した(ような物である)』と言っただけなのです」

万章が言った。
「舜は、共工を幽州に追放しました。
(舜は、)驩兜を崇山に追放しました。
(舜は、)三苗を三危で殺しました。
(舜は、)鯀を羽山で殺しました。

これら四人を処刑したので、天下の人々は皆、心服しました。
思いやりの無い愚者に天誅を下したのです。
象は、思いやりの無い愚者の至りです。
しかし、(舜は、)この象に有庳という領地を与えて封じました。
有庳の人々に、何か罪が有ったのでしょうか?
それとも、思いやり深い人は、本より、次のようなのでしょうか?
他人であれば、天誅を下す。
弟であれば、領地を与えて封じる(、というように)」

孟子 先生は言った。
「思いやり深い人は、弟に対して、怒りを隠しません。
しかし、怨みを(いつまでも)留めません。
(思いやり深い人は、)弟に親愛の情を抱くだけなのです。
(思いやり深い人は、)弟に親愛の情を抱いて、弟に高貴な地位を得て欲しいのです。
(思いやり深い人は、)弟に親愛の情を抱いて、弟に富を得て欲しいのです。
(舜は、)象に有庳という領地を与えて封じて、象に富と高貴な地位を得させました。
(舜は、)自身は、天子と成りました。
弟である象が庶民のままであって、『象に親愛の情を抱いている』と言えるでしょうか? いいえ!」

万章が言った。
「あえて質問します。

『ある人が、象を追放した(ような物である)、と言っただけなのです』とは、どのような事を言っているのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「象には、国を統治するのは、でき得ない。天子である舜は、(象の代わりに、)役人に、国を統治させて、税を(象に)納めさせた。

そのため、(ある人は、)『象を追放した(ような物である)』と言ったのです。どうして、象が、その国民達に暴政をする事ができ得たでしょうか？ いいえ！

しかも、舜は、常々、象と会いたいと欲したのである。

このため、象も、次々と、舜の所へ来ました。

『朝貢、外交の時期に及んではいない。

しかし、舜は、政治を理由に、有庳の王(であり弟である象)と接見した』と言われています。

この言葉は、このような事を言っているのです」

咸丘蒙、問、曰。

「語、云。

『盛徳之士、君、不、得、而、臣。

父、不、得、而、子。

舜、南面、而、立。
堯、帥、諸侯、北面、而、朝、之。
瞽瞍、亦、北面、而、朝、之。
舜、見、瞽瞍、其容、有、蹙。
孔子、曰。於、斯時、也、天下、殆、哉。岌岌、乎』。
不、識？
此語、誠、然、乎、哉？」

孟子、曰。
「否。
此、非、君子之言。
斉東野人之語、也。
堯、老、而、舜、摂、也。
『堯典』、曰。
『二十有八載、放勲(＝堯)、乃、徂落。
百姓、如、喪、考妣。
三年、四海、遏密八音』。
孔子、曰。
『天、無二、日。
民、無二、王』。
舜、既、為、天子、矣、又、帥、天下、諸侯、以、為、堯、三年、喪、是、
二、天子、矣」

咸丘蒙、曰。

「舜、之(の)不、臣、堯、則(すなわち)、吾、既、得、聞、命、矣。
『詩』、云。
『普天之下(遍く天下)、莫(ない)、非、王土。
率土之浜(地の果てまで)、莫、非、王、臣』。
而、舜、既、為(なる)、天子、矣。
敢、問。
瞽瞍、之(の)、非、臣、如何(どうして)？」

曰。
「是(この)詩、也、非、是(これ)、之(これ)、謂、也。
労、於、王、事(こと)、而、不、得、養、父母、也。
曰。
『此(これ)、莫(ない)、非、王、事。
我、独、賢労(他の人よりも苦労する)、也』。
故、説、詩、者(もの)、不、以、文、害、辞。
不、以、辞、害、志。
以、意、逆(むかえる)、志。
是(これ)、為(なす)、得、之(これ)。
如(もし)、以、辞、而已(のみ)、矣。
雲漢之詩、曰。
『周、余、黎民(庶民)、靡(ない)、有、孑遺(残り)』。
信、斯(この)言、也、是、周、無、遺(のこっている)、民、也。
孝子之至、莫(ない)、大、乎、尊、親。
尊、親、之(の)、至、莫(ない)、大、乎、以、天下、養。

為、天子、父、尊之至、也。
以、天下、養、養之至、也。
『詩』、曰。
『永、言、孝、思。
孝、思、維、則』。
此、之、謂、也。
『書』、曰。
『祗、載、見、瞽瞍、夔夔、斉栗。
瞽瞍、亦、允、若』。
是、為、『父、不、得、而、子』、也」

咸丘蒙が孟子 先生に質問して言った。
「次のように、言われています。
『徳、善行が大いなる、一人前である者を、君主は、臣下にでき得ない。
父も、子にでき得ない。
舜は、天子に成って、南を向いて立ちました。
堯は、諸侯を率いて、北を向いて、舜の朝廷に集まった。
舜の父である瞽瞍もまた、北を向いて、舜の朝廷に集まった。
舜は、瞽瞍を見ると、その顔をしかめました。
孔子は言いました。この時、天下は危険であった。岌岌と危険であった、
と』と。
どうでしょう？
この話は、まことに、その通りなのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「いいえ。
この話は、王者が言っている話では、ありません。
斉という国の東の無学な人の作り話です。
堯が老いてから、舜は摂政に成りました。
そして、『書経』の『堯典』で言われています。
『(舜が摂政に成ってから)二十八年後に、堯は死んだ。
全ての人々が、自分の亡くなった父母の喪に服すように、喪に服した。
三年間、天下の全ての人々は、音楽を演奏せず静かにして喪に服した』と。
孔子 先生は言いました。
『天に、太陽は、唯一無二である。
人々に、王は、唯一無二である』と。
仮に、舜が、(堯の生前に)既に天子に成っていたら、また、天下の諸侯を率いて堯に対する三年間の喪に服していたら、天子が二人いた事に成ってしまいます(。だから、作り話です)」

咸丘蒙が言った。
「舜が堯を臣下にしなかった事は、私、咸丘蒙は既に聞く事ができ得ました。
『詩経』で言われています。
『遍(あまね)く天下に、王の領土ではない所は無い。
地の果てまで、王の臣下ではない人はいない』と。
しかし、舜は既に天子に成っています。
あえて質問します。

舜の父である瞽瞍が舜の臣下ではないのは、どうしてでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「その詩経の詩は、そのような事を言っている訳ではないのです。

王によって苦労させられて、父母を養う事ができ得ない事を言っている詩なのです。

次のようにも、言われています。

『これは、王の仕事です。

それなのに、私、独りだけが、他の人よりも苦労している』と。

そのため、詩を説明する者は、文字によって、文字の意味を損なわないようにする必要が有ります。

また、文字の意味によって、詩の真意を損なわないようにする必要が有ります。

文字の意味によって、詩の真意を迎え受けるのです。

こうする事で、初めて、詩を説明でき得るのです。

もし、文字の意味だけにとらわれると、詩の真意を損なってしまいます。

例えば、雲漢の詩で、言われています。

『周での出来事の後、庶民に、生き残りはいなかった』と。

この詩の言葉を文字通りに信じてしまうと、周王朝では、生き残っている庶民がいない事に成ってしまいます。

親孝行な子の至りは、親を尊重する者よりも、大いなる者はいないのである。

親を尊重する事の至りは、天下によって親を養うよりも、大いなる物は無いのである。

天子の父に成れる事は、親を尊重する事の至りなのである。

天下によって親を養うのは、養う事の至りなのである。
『詩経』で言われています。
『永遠に、親孝行を思う。
親孝行を思えば、規則、見本と成るのである』と。
この『詩経』の詩は、このような事を言っているのである。
『書経』で言われています。
『(舜は)、慎んで、父である瞽瞍と会ったが、畏敬して慎んでいた。
瞽瞍もまた、まことに、(舜の意思に)従った』と。
これが、『父も、子にでき得ない』なのである」

万章、曰。
「『堯、以、天下、与（あたえる）、舜』。
有、諸（これ）?」

孟子、曰。
「否。
天子、不能、以、天下、与（あたえる）、人」
「然、則（すなわち）、舜、有、天下、也、孰（だれが）、与（あたえる）、之（これ）?」
曰。

「天、与(あたえる)、之(これ)」

「『天、与(あたえる)、之(これ)』、者(とは)、諄(くり返し丁寧に教える)諄然、命、之(これ)、乎？」

曰。

「否。

天、不、言。

以、行、与(と)、事(こと)、示、之(これ)、而已(のみ)、矣」

曰。

「『以、行、与(と)、事(こと)、示、之(これ)』、者(とは)、如之何(どうする)？」

曰。

「天子、能、薦、人、於、天、不能、使(させる)、天、与(あたえる)、之(これ)、天下。

諸侯、能、薦、人、於、天子、不能、使(させる)、天子、与(あたえる)、之(これ)、諸侯。

大夫、能、薦、人、於、諸侯、不能、使(させる)、諸侯、与(あたえる)、之(これ)、大夫。

昔者(むかし)、堯、薦、舜、於、天、而、天、受、之(これ)。

暴(あらわす)、之(これ)、於、民、而、民、受、之(これ)。

故、曰。

『天、不、言。

以、行、与(と)、事(こと)、示、之(これ)、而已(のみ)、矣』」

曰。

「敢、問。

『薦(すすめ)、之(これ)、於、天、而、天、受、之(これ)。暴(あらわす)、之(これ)、於、民、而、民、受、之(これ)』、如何(どうする)?」

曰。

「使(させる)、之(これ)、主、祭、而、百神、享(うけいれる)、之(これ)。是(これ)、天、受、之(これ)。

使(させる)、之(これ)、主、事、而、事、治、百姓、安、之(これ)。是(これ)、民、受、之(これ)、也。

天、与(あたえる)、之(これ)、人、与(あたえる)、之(これ)。

故、曰。

『天子、不能、以、天下、与(あたえる)、人』。

舜、相(たすける)、堯、二十有八載。

非、人、之(の)、所、能、為(なす)、也。

天、也。

堯、崩。

三年之喪、畢(おわる)、舜、避、堯之子、於、南河之南。

天下、諸侯、朝覲、者(もの)、不、之(いく)、堯之子、而、之(いく)、舜。

訟獄、者(もの)、不、之(いく)、堯之子、而、之(いく)、舜。

謳歌、者(もの)、不、謳歌、堯之子、而、謳歌、舜。

故、曰。

『天、也』。

夫(それ)、然、後、之(いく)、中国、践(位につく)、天子、位、焉。

而、居、堯之宮、逼(せまる)、堯之子、是(これ)、簒、也。

非、天、与(あたえる)、也。

『泰誓』、曰。
『天、視、自、我民、視。
天、聴、自、我民、聴』。
此、之、謂、也」

万章が孟子 先生に言った。
「『堯は、天下を舜に与えた』と言います。
これは実際に有った事でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「いいえ。
天子が、天下を、人に与える事は、できません」

(万章が言った。)
「そうであるならば、舜は天下を所有しましたが、誰が、この天下を与えたのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「天の神が、天下を与えたのである」

(万章が言った。)
「『天の神が、天下を与えたのである』とは、(天の神が、)諄諄と、くり返し丁寧に天下に命令したのですか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ。

天の神は、(音波では)話しません。

行動と、その結果である事象で、示すだけなのです」

(万章が言った。)

「『行動と、その結果である事象で、示す』とは、どのようにする事を言っているのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「天子が、人を、天の神に推薦しても、天の神に天下を与えさせる事は、できません。

諸侯が、人を、天子に推薦しても、天子に諸侯の地位を与えさせる事は、できません。

役人が、人を、諸侯に推薦しても、諸侯に役人の地位を与えさせる事は、できません。

昔、堯は、舜を、天の神に推薦して、天の神は、それを受け入れてくれました。

堯が、舜を、人々に表すと、人々も、舜を受け入れてくれました。

そのため、次のように、言われています。

『天の神は、(音波では)話さない。

行動と、その結果である事象で、示すだけなのです』と」

万章が言った。
「あえて質問します。
『堯は、舜を、天の神に推薦して、天の神は、それを受け入れてくれました。
堯が、舜を、人々に表すと、人々も、舜を受け入れてくれました』とは、どのようにする事を言っているのでしょうか?」

孟子先生は言った。
「堯は、舜に、神々の祭儀を主催させて、全ての神々が舜を受け入れてくれた(ので、異常現象は起きなかった)。
これが、天の神が舜を受け入れてくれた事なのである。
堯は、舜に、政治を主導させると、善く政治できて、全ての人々に安らぎをもたらした。
これが、人々が舜を受け入れてくれた事なのである。
天の神が天下を舜に与えてくれたのですし、人々が天下を舜に与えてくれたのです。
そのため、次のように、言われています。
『天子が、天下を、人に与える事は、できない』と。
舜は、二十八年間、堯を助けました。
これは、(実は、)人だけで可能な事ではないのです。
これは、天の神による物だったのです。
堯が死にました。
堯に対する三年間の喪が終わると、舜は、堯の子を避けて、南河の南へ行きました。

しかし、天下の諸侯のうち天子に会う必要が有った者達は、堯の子の所へ行かず、舜の所へ行きました。
訴訟する必要が有った者達は、堯の子の所へ行かず、舜の所へ行きました。
賛歌を歌っていた者達は、堯の子の賛歌を歌わず、舜の賛歌を歌いました。
そのため、次のように、言ったのです。
『天の神による物』と。
その後、舜は、国の中央に行って、天子の位につきました。
仮に、舜が、堯の宮殿に居たまま、堯の子に退位を迫ってしまっていたら、これは、簒奪に成ってしまいます。
天の神が(直接的に物質的に)天下を舜に与えた訳ではないのです。
『書経』の『泰誓』で言われています。
『王である私の国民達の目によって、天の神は、王である私の行動を見ます。
王である私の国民達の耳によって、天の神は、王である私の言葉を聞きます』と。
この『書経』の『泰誓』の言葉は、このような事を言っているのです」

万章、問、曰。
「人、有、言。
『至、於、禹、而、徳、衰、不、伝、於、賢、而、伝、於、子』。
有、諸(これ)？」

孟子、曰。
「否。
不、然、也。
天、与(あたえる)、賢、則(すなわち)、与(あたえる)、賢。
天、与(あたえる)、子、則(すなわち)、与(あたえる)、子。
昔者(むかし)、舜、薦、禹、於、天。
十有七年。
舜、崩。
三年之、喪、畢(おわる)、禹、避、舜之子、於、陽城。
天下之民、従(したがう)、之(これ)、若(よう)、尭、崩之後、不、従(したがう)、尭之子、而、従(したがう)、舜、也。
禹、薦、益、於、天。
七年。
禹、崩。
三年之喪、畢(おわる)、益、避、禹、子、於、箕山之陰(山の北側)。
朝覲、訟獄、者(もの)、不、之(いく)、益、而、之(いく)、啓。
曰。
『吾(わが)君之子、也』。
謳歌、者(もの)、不、謳歌、益、而、謳歌、啓。
曰。
『吾(わが)君之子、也』。
丹朱之不肖。
舜之子、亦(また)、不肖。
舜、之(の)、相(たすける)、尭、禹、之(の)、相(たすける)、舜、也、歴、年、多、施、沢(恩恵)、於、民、
久。

啓、賢、能、敬、承継、禹之道。
益、之、相、禹、也、歴、年、少、施、沢、於、民、未、久。
舜、禹、益、相、去、久遠、其子之賢、不肖、皆、天、也。
非、人、之、所、能、為、也。
莫、之、為、而、為、者、天、也。
莫、之、致、而、至、者、命、也。
匹夫、而、有、天下、者、徳、必、若、舜、禹、而、又、有、天子、薦、之、者。
故、仲尼（＝孔子）、不、有、天下。
継、世、而、有、天下、天、之、所、廃、必、若、桀、紂、者、也。
故、益、伊尹、周公、不、有、天下。
伊尹、相、湯（＝湯王）、以、王、於、天下。
湯（＝湯王）、崩。
太丁、未、立。
外丙、二年。
仲壬、四年。
太甲、顛覆、湯之典刑。
伊尹、放、之、於、桐、三年。
太甲、悔、過、自、怨、自、艾、於、桐、処、仁、遷、義、三年、以、聴、伊尹、之、訓、己、也、復帰、于、亳。
周公、之、不、有、天下、猶、益、之、於、夏、伊尹、之、於、殷、也。
孔子、曰。
『唐（＝堯）、虞（＝舜）、禅。

夏后、殷、周、継。
其(その)義、一、也』」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「人々は言っています。
『禹に至って、徳、善行、善が衰退してしまい、賢者に王位を伝えず、天子の子に王位を伝えた』と。
これは実際に有った事でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「いいえ。
そうでは、ありません。
天の神が王位を賢者に与えるのであれば、賢者に与えられます。
天の神が王位を天子の子に与えるのであれば、天子の子に与えられます。
昔、舜が、禹を天の神に推薦しました。
それから、十七年が経ちました。
舜が死にました。
三年間の喪が終わると、禹は、舜の子を避けて、陽城という所へ行きました。
天下の人々は、堯の死後、堯の子に従わず、舜に従ったように、禹に従いました。
禹は、益という人を天の神に推薦しました。
それから、七年が経ちました。
禹が死にました。

三年間の喪が終わると、益は、禹の子を避けて、箕山の北に行きました。
天子に会う必要が有った者達や、訴訟をする必要が有った者達は、益の所へ行かず、禹の子である啓の所へ行きました。
天子に会う必要が有った者達や、訴訟をする必要が有った者達は、言いました。
『私達の君主の子である』と。
賛歌を歌う者達も、益の賛歌を歌わず、禹の子である啓の賛歌を歌いました。
賛歌を歌う者達も、言いました。
『私達の君主の子である』と。
堯の子である丹朱は、親である堯に似ず、愚者でした。
舜の子もまた、親である舜に似ず、愚者でした。
舜は堯を助けて、禹は舜を助けて、多くの年数が経っていましたし、長期間、恩恵を人々に施しました。
禹の子である啓は、賢者で、禹の道理、真理を敬って継承する事ができました。
益は禹を助けて、少しの年数しか経っていませんでしたし、恩恵を人々に施すのが未だ短期間でした。
舜と禹と、益の年数の差が大きい事や、その子が賢者であるか、親に似ず、愚者であるか、という事は皆、天の神による物なのです。
これらは、人に可能な事ではないのです。
人がしなくても、そう成ってしまうものは、天の神による物なのです。
人がしなくても、そう成るに至ってしまうものは、天の神による運命による物なのです。

庶民であったが天下を所有する者は、『徳』、『善行』が必ず舜や禹のようであり、また、天子が、その者を天の神に推薦しているのです。
そのため、孔子 先生は天下を所有できませんでした。
天子の治世を継承して天下を所有している者を、天の神がやめさせる場合は、必ず、桀や、紂王のような(暴君である)者なのです。
このため、益、伊尹、周公は、天下を所有できませんでした。
伊尹は殷の湯王を助けて天下の王に成らせました。
殷の湯王が死にました。
殷の湯王の子である太丁は、未だ擁立される前に死にました。
殷の湯王の子である外丙は、擁立されてから、二年後に死にました。
殷の湯王の子である仲壬は、擁立されてから、四年後に死にました。
太丁の子である太甲は、殷の湯王の法を転覆させました。
伊尹は、この太甲を三年間、桐という所に追放しました。
太甲は、過(あやま)ちを後悔し、自身の愚かさを怨み、自身を陶冶して治し、桐という所で、三年間、思いやりに留まり、悪から正義へ移り、伊尹から自分への教訓を聴き入れたので、亳という所で復帰しました。
ちょうど、夏王朝の益のように、殷王朝の伊尹のように、周公は、天下を所有できなかった。
孔子 先生は言いました。
『堯と、舜は、禅譲した。
夏王朝、殷王朝、周王朝は、世襲で継承した。
それらの意味、道理は同一なのである』と」

万章、問、曰。

「人、有、言。

『伊尹、以、割烹（料理）、要（もとめる）、湯(＝湯王)』。

有、諸（これ）？」

孟子、曰。

「否。

不、然。

伊尹、耕、於、有莘之野、而、楽（たのしむ）、堯、舜之道、焉。

非、其（その）義、也、非、其（その）道、也、禄、之（これ）、以、天下、弗（ない）、顧、也。

繫馬千駟、弗（ない）、視、也。

非、其（その）義、也、非、其（その）道、也、一介（些細な物）、不、以、与（あたえる）、人。

一介（些細な物）、不、以、取、諸（これ）、人。

湯(＝湯王)、使（させる）、人、以、幣（贈り物）、聘、之（これ）。

囂囂（無欲）然、曰。

『我、何、以、湯(＝湯王)之聘、幣（贈り物）、為（なす）、哉？

我、豈（どうして）、若（しく）、処、畎畝（田畑）之中、由（より）、是（これ）、以、楽（たのしむ）、堯、舜之道、哉？』。

湯(＝湯王)、三、使（させる）、往、聘、之（これ）。

既、而、幡然（心をひるがえす）、改、曰。

『与（よりも）、我、処、畎畝（田畑）之中、由（より）、是（これ）、以、楽（たのしむ）、堯、舜之道、吾、豈（どうして）、若（しく）、

使（させる）、是（この）君、為（なる）、堯、舜之君、哉？

吾、豈（どうして）、若（しく）、使（させる）、是（この）民、為（なる）、堯、舜之民、哉？

吾、豈、若、於、吾身、親、見、之、哉？
天、之、生、此民、也、使、先知、覚、後知、使、先覚、覚、後覚、也。
予、天民之先覚者、也。
予、将、以、斯道、覚、斯民、也。
非、予、覚、之、而、誰、也？』。
思、天下之民、匹夫、匹婦、有、不、被、堯、舜之沢、者、若、己、推、
而、内、之、溝、中。
其自任、以、天下之重、如此。
故、就、湯(＝湯王)、而、説、之、以、伐、夏、救、民。
吾、未、聞、枉、己、而、正、人、者、也。
況、辱、己、以、正、天下、者、乎？
聖人之行、不、同、也。
或、遠、或、近、或、去、或、不、去。
帰、潔、其身、而已、矣。
吾、聞、其、以、堯、舜之道、要、湯(＝湯王)。
未、聞、以、割烹、也。
『伊訓』、曰。
『天誅、造、攻、自、牧宮。
朕、載、自、亳』」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「人々は言っています。
『伊尹は、料理によって、殷の湯王に仕官を求めた』と。

これは実際に有った事でしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「いいえ。

そうでは、ありません。

伊尹は、有莘という国の田畑を耕しつつ、堯、舜の道理、真理を(学んで)楽しんでいました。

正しくなければ、正しい方法でなければ、天下を給料としても、この伊尹は、顧みませんでした。

四頭の馬を繋いだ馬車、千台でも、(伊尹は、)顧みませんでした。

また、伊尹は、正しくなければ、正しい方法でなければ、些細な物でも、他人に与えませんでした。

(伊尹は、正しくなければ、正しい方法でなければ、)些細な物でも、他人から取りませんでした。

殷の湯王は、使者を派遣して、贈り物をして、この伊尹を招聘しようとしました。

伊尹は、無欲な様子で、言いました。

『私、伊尹を、どうして、殷の湯王は、贈り物で、招聘しようとするのか？

(殷の湯王による贈り物による招聘は、)私、伊尹にとって、田畑の中にいて、堯、舜の道理、真理を(学んで)楽しむのには、及ばないのである！』と。

殷の湯王は、三回、使者を伊尹の所へ行かせて、伊尹を招聘しようとした。

伊尹は、既に、心を翻(ひるがえ)して改めていて、言いました。

『私、伊尹は、田畑の中にいて堯、舜の道理、真理を(学んで)楽しむよりも、

この君主(、殷の湯王)を堯、舜のような君主に成らせよう！

私、伊尹が、これらの人々を堯、舜の国民のように成らせるのに、他の事は及ばないのである！

私、伊尹、自身が、それらを見るのに、他の事は及ばないのである！

天の神は、これらの人々を生じていて、先の知者に、後(のち)に知る者を目覚めさせ、先に目覚めている者に、後(のち)に目覚める者を目覚めさせているのである。

私、伊尹は、天の神による人の中で先に目覚めている者なのである。

私、伊尹は、このような道理、真理に、これらの人々を目覚めさせよう。

私、伊尹が、これらの人々を目覚めさせなかったら、誰がするのか？』と。

伊尹は、天下の人々で、一人の男性でも、一人の女性でも、堯、舜によるような恩恵を受け取れない者がいたら、その者を自分が溝(みぞ)の中に押して陥(おとしい)れたかのように思ったのである。

(伊尹は、)このように、天下を担う重責を自任したのである。

このため、(伊尹は、)殷の湯王につくと、その殷の湯王に、夏王朝を征伐して人々を救うように説いたのである。

私、孟子は、自分を曲げて他人を正す事ができた者について、未だ聞いた事が無い。

まして、自分を辱めて天下を正す事ができた者について、私、孟子は未だ聞いた事が無い。

聖人達の行動は同一ではない。

聖人達は、あるいは、遠ざかったり、あるいは、近づいたり、あるいは、去ったり、あるいは、去らなかったりする。

聖人達は、自身を清浄に帰しているだけなのである。

私、孟子は、伊尹が堯、舜の道理、真理によって殷の湯王に仕官を求めた、と聞いています。

私、孟子は、伊尹が料理によって殷の湯王に仕官を求めた、とは未だ聞いた事が、ありません(。作り話です)。
『書経』の『伊訓』で言われています。
『天誅を下すために攻めようとするのは、牧宮にいる桀(の悪政)による物なのである。
私、伊尹は、亳という所から始めた』と」

万章、問、曰。
「或、謂。
『孔子、於、衛、主、癰疽。
於、斉、主、侍人、瘠環』。
有、諸、乎?」

孟子、曰。
「否。
不、然、也。
好事者、為、之、也。
於、衛、主、顔讐由。
弥子之妻、与、子路之妻、兄弟、也。
弥子、謂、子路、曰。
『孔子、主、我、衛、卿、可、得、也』。

子路、以、告。
孔子、曰。
『有、命』。
孔子、進、以、礼、退、以、義。
得、之（これ）、不、得、曰、『有、命』。
而、主、癰疽（腫れ物）、与（と）、侍人、瘠環、是（これ）、無（ない）、義、無（ない）、命、也。
孔子、不、悦、於（によって）、魯、衛。
遭、宋、桓司馬、将（しようとする）、要、而、殺、之（これ）。
微（質素な服で変装する）服、而、過、宋。
是（この）時、孔子、当、阨。
主、司城貞子、為（なる）、陳侯、周、臣。（『陳侯周臣』の解釈は諸説有るようです。）
吾、聞。
『観、近臣、以、其（その）、所、為（なす）、主。
観、遠臣、以、其（その）、所、主』。
若（もし）、孔子、主、癰疽（腫れ物）、与（と）、侍人、瘠環、何、以、為（なす）、孔子？」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「ある人が言っていました。
『孔子 先生は、衛という国では、腫れ物などの医者を主人として、客人に成った。
斉という国では、君主のそばに仕えていた瘠環を主人として、客人に成った』と。

これは実際に有った事でしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「いいえ。

そうでは、ありません。

それは、好事家の作り話です。

孔子 先生は衛という国では、顔讐由を主人として、客人に成りました。

さて、弥子という人の妻と、子路の妻は姉妹でした。

弥子は子路に言いました。

『孔子 先生は、私、弥子を主人として、客人に成れば、衛という国で高官に成る事ができ得ます』と。

子路は、弥子の言葉を、孔子 先生に告げ知らせました。

孔子 先生は言いました。

『天の神による運命という物が有ります』と。

孔子 先生は、礼儀によって進みましたし、礼儀によって退きました。

孔子 先生は、高貴な地位を得るか、得ないかについては、『天の神による運命という物が有ります』と言いました。

さて、仮に、腫れ物などの医者と、君主のそばに仕えていた瘠環を主人として、客人に成ってしまったら、正しくないし、『天の神による運命』と信じていない事に成ってしまいます。

孔子 先生は、魯という国と、衛という国では喜ばれませんでした。

孔子 先生は、宋という国では、桓司馬が道の要所で待ち伏せして、孔子 先生を殺そうとする目に遭われました。

そのため、孔子 先生は質素な服で変装して、宋を通り過ぎました。

この当時、孔子先生は、このような苦しい目に遭(あ)われたのである。
その時は、孔子先生は、陳侯の臣下である司城貞子を主人として、客人に成った。

私、孟子は、このように聞いた事が有ります。

『側近の臣下を、その側近の臣下を主人としている、客人によって、観察するのである。
側近ではない臣下を、その側近ではない臣下が主人としている人によって、観察するのである』と。

もし、仮に、孔子先生が、腫れ物などの医者と、君主のそばに仕えていた瘠環を主人としてしまえば、孔子先生らしくないのである！」

万章、問、曰。

「或(ある)、曰。

『百里奚、自(みずからを)、粥(売る)、於、秦、養、牲、者(もの)、五、羊之皮。
食(そだてる)、牛、以、要(もとめる)、秦、繆公』。

信、乎？」

孟子、曰。

「否。

然、好事者、為(なす)、之(これ)、也。

百里奚、虞、人、也。

晋、人、以、垂棘之璧、与、屈産之乗、仮、道、於、虞、以、伐、虢。
宮之奇、諫。
百里奚、不、諫。
知、虞公、之、不、可、諫、而、去、之、秦。
年、已、七十、矣。
曾、不、知、以、食、牛、干、秦、繆公、之、為、汚、也、可、謂、
『智』、乎？
不、可、諫、而、不、諫、可、謂、『不、智』、乎？
知、虞公、之、将、亡、而、先、去、之、不、可、謂、『不、智』、也。
時、挙、於、秦、知、繆公、之、可、与、有、行、也、而、相、之、可、
謂、『不、智』、乎？
相、秦、而、顕、其君、於、天下、可、伝、於、後世、不、賢、而、能、
之、乎？
自、粥、以、成、其君、郷党、自、好、者、不、為。
而、謂、賢者、為、之、乎？」

万章が孟子先生に質問して言った。
「ある人が言っていました。
『百里奚は、自身を、秦という国で犠牲用の牛を飼っている者に、五枚の羊の皮で、売った。
百里奚は、牛を育てて、秦という国の繆公に仕官を求めたのである』と。
この話を信じますか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ。

それは、好事家の作り話です。

百里奚は、虞という国の人です。

晋の人々は、垂棘の璧と、屈産の馬によって、虞という国から道を借りて、虢という国を討伐しようとした。

宮之奇は、君主に忠告しました。

百里奚は、君主に忠告しませんでした。

百里奚は、虞公は忠告しても駄目な人であると知っていたので、虞という国を去って、秦という国へ行きました。

その時、百里奚は、既に、七十歳でした。

仮に、牛を育てて秦という国の繆公に仕官を求めるのは汚れていると知らなかったら、『智者である』と言えるであろうか？　いいえ！　だから、事実ではない！

忠告しても無駄であるから忠告しないのは、『智者ではない。愚者である』と言えるであろうか？　いいえ！

虞公が滅びようとしているのを知って、滅びるより先に、その虞という国を去るのは、『智者ではない。愚者である』とは言えないのである。

ある時、秦という国で役人に挙げられて、繆公が共に智慧を実行できる人であると知って、その繆公を助けるのは、『智者ではない。愚者である』と言えるであろうか？　いいえ！

秦という国を助けて、その君主である繆公を天下に表して、後世にまで伝えられるようにしたが、賢者ではない愚者であったのに可能であったのか？

いいえ！　賢者であった！

自身を売って、その君主を成功させるなど、村人でも、自身を好んでいる者は、しない。
しかし、『賢者が、そうした』と言うのか？　いいえ！　賢者は、そんな事はしない！」

万章下

孟子、曰。

「伯夷、目、不、視、悪、色。

耳、不、聴、悪、声。

非、其(その)君、不、事(つかえる)。

非、其(その)民、不、使(つかう)。

治、則(すなわち)、進。

乱、則(すなわち)、退。

横政、之(の)、所、出、横民、之(の)、所、止(とどまる)、不、忍、居、也。

思、与(ともに)、郷人(粗野な人)、処、如(のよう)、以、朝衣、朝冠、坐、於、塗炭、也。

当(あたる)、紂之時、居、北海之浜、以、待、天下之清、也。

故、聞、伯夷之風、者、頑夫(頑迷な男)、廉、懦夫(臆病な男)、有、立、志。

伊尹、曰。

『何、事(つかえる)、非、君?

何、使(つかう)、非、民?』。

治、亦(また)、進。

乱、亦(また)、進。

曰。

『天、之(の)、生、斯(この)民、也、使(させる)、先知、覚、後知、使(させる)、先覚、覚、後覚。

予、天民之先覚者、也。

予、将(しようとする)、以、此(この)道、覚、此(この)民、也』。

思、天下之民、匹夫、匹婦、有、不、与（あずかる）、被（こうむる）、堯、舜之沢（恩恵）、者（もの）、如（のよう）、己、
推（おす）、而、内、之（これ）、溝（みぞ）、中。
其（その）自任、以、天下之重、也。
柳下恵、不、羞、汚君。
不、辞、小官。
進、不、隠、賢。
必、以、其（その）道。
遺佚、而、不、怨。
阨窮、而、不、憫（心配する）。
与（ともに）、郷人（粗野な人）、処、由由然（ゆったりとする）、不、忍、去、也。
『爾（なんじ）、為（なり）、爾（なんじ）。
我、為（なり）、我。
雖（いえども）、袒裼裸裎、於、我（わが）側、爾（なんじ）、焉（どうして）、能、浼（けがす）、我、哉？』。
故、聞、柳下恵之風、者（もの）、鄙夫（卑しい男）、寛、薄夫（軽薄な男）、敦（情に厚い）。
孔子、之（の）、去、斉、接、淅（といだ米）、而、行。
去、魯、曰。
『遅遅、吾、行、也』。
去、父母、国、之（の）、道、也。
可、以、速、而、速、可、以、久、而、久、可、以、処、而、処、可、以、
仕、而、仕、孔子、也」

孟子先生は言った。
「伯夷は、目で、(悪人や悪事などの)邪悪なものを視なかった。

耳で、(悪口などの)邪悪なものを聴かなかった。
正しい君主でなければ、仕えなかった。
適切な国民しか使役しなかった。
国が正しく治まっていれば、進んで仕えた。
国が乱れていれば、辞退した。
横暴な政策が出されている所や、横暴な人々がいる所に居るのを忍耐できなかった。
無礼な粗野な人といるのを、朝廷用の正装の衣服を着て冠をかぶっても、泥にまみれ炭火に焼かれる中に座るかのように思った。
紂王の時にあたって、北海のほとりにいて、天下が清浄に成るのを待った。
そのため、伯夷の話を聞いた者には、頑迷な人でも清廉潔白に成ったり、臆病な人でも高い志を立てたりする事が有った。
伊尹は言いました。
『どんな君主にでも仕える！
どんな国民でも使役する！』と。
国が治まっていても、進んで仕えた。
国が乱れていても、進んで仕えた。
伊尹は言いました。
『天の神が、これらの人々を生じているが、先の知者に、後に知る者を目覚めさせているし、先に目覚めている者に、後に目覚める者を目覚めさせている。
私、伊尹は、天の神による人々のうち先に目覚めている者なのである。
私、伊尹は、道理、真理に、これらの人々を目覚めさせよう』と。

伊尹は、天下の人々のうち、一人の男性でも、一人の女性でも、堯、舜によるような恩恵にあずかって受け取れない者がいれば、自分が溝(みぞ)の中に押して陥(おとしい)れたかのように思ったのである。
天下を担う重責をそのように自任していたのである。
柳下恵は、汚れた君主を恥としなかった。
矮小な官位でも辞退しなかった。
進んで、自分の賢さを隠さなかった。
正しい道理、正しい手段によって必ず行(おこな)った。
辞めさせられても、怨まなかった。
困窮しても心配しなかった。
無礼な粗野な人と共にいても、由由然と、ゆったりとしていて、去るのが忍耐できなかった。
『あなた(の事)は、あなた(の事)である。
私(の事)は、私(の事)である。
私、柳下恵のそばで、衣服を脱いで裸を見せるような無礼な事をされても、お前が、どうして、私、柳下恵を汚せるであろうか？　いいえ！』と。
そのため、柳下恵の話を聞いた者には、卑しい人でも寛大に成ったり、軽薄な人でも情に厚く成ったりした者がいた。
孔子先生が斉という国を去った時は、といだ米を取り入れて、（速やかに、）去って行った。
孔子先生は魯という国を去る時に、言いました。
『私、孔子の足は遅々として進まない』と。
これが、父母の国を去る時の去り方だったのである。

速くするべきならば速くしたし、長期間かけるべきならば長期間かけたし、いるべきならばいたし、仕えるべきならば仕えたのが、孔子先生なのである」

孟子、曰。
「伯夷、聖之清、者(もの)、也。
伊尹、聖之任、者(もの)、也。
柳下恵、聖之和、者(もの)、也。
孔子、聖之時、者(もの)、也。
孔子、之(これ)、謂、集大成。
『集大成』、也、者(とは)、金声(鐘を鳴らして音楽を開始する)、而、玉振(磬という打楽器を打ち鳴らして音楽を終了する)、之(これ)、也。
『金声』、也、者(とは)、始、条理、也。
『玉振、之(これ)』、也、者(とは)、終、条理、也。
『始、条理』、者(とは)、智之事、也。
『終、条理』、者(とは)、聖之事、也。
智、譬(たとえば)、則(すなわち)、巧、也。
聖、譬(たとえば)、則(すなわち)、力、也。
由(ちょうど〜のよう)、射、於、百歩之外、也。
其(その)至、爾(なんじの)力、也。
其(その)中、非、爾(なんじの)力、也」

孟子 先生は言った。
「伯夷は、聖人のうち清廉潔白な者であった。
伊尹は、聖人のうち責任感が有る者であった。
柳下恵は、聖人のうち柔和な者であった。
孔子 先生は、聖人のうち時機を心得た者であった。
孔子 先生は、これら聖人の善行を集大成したと言える。
『集大成する』とは、鐘を鳴らして音楽を開始して、磬という打楽器を打ち鳴らして音楽を終了するような物なのである。
『鐘を鳴らして音楽を開始する』とは、条理、道理を開始する事である。
『磬という打楽器を打ち鳴らして音楽を終了する』とは、条理、道理を果たし終える事である。
『条理、道理を開始する』とは、智慧の事なのである。
『条理、道理を果たし終える』とは、聖人の善行の事なのである。
智慧とは、例えば、技巧なのである。
聖人の善行とは、例えば、力なのである。
ちょうど、的から百歩離れて弓で矢を射るような物なのである。
的に到達できたのは、あなたの力による物なのである。
的に的中できたのは、あなたの力ではなく、あなたの技巧による物なのである」

北京錡、問、曰。

「周室、班、爵、禄、也、如之何？」

孟子、曰。

「其詳、不、可、得、聞、也。

諸侯、悪、其害、己、也、而、皆、去、其籍。

然、而、軻(＝孟子)、也、嘗、聞、其略、也。

天子、一位、公、一位、侯、一位、伯、一位、子、男、同一位、凡、五等、也。

君、一位、卿、一位、大夫、一位、上士、一位、中士、一位、下士、一位、凡、六等。

天子之制、地、方、千里、公、侯、皆、方、百里、伯、七十里、子、男、五十里、凡、四等。

不、能、五十里、不、達、於、天子、附、於、諸侯、曰、附庸。

天子之卿、受、地、視、侯、大夫、受、地、視、伯、元士、受、地、視、子、男。

大国、地、方、百里。

君、十、卿、禄、卿、禄、四、大夫、大夫、倍、上士、上士、倍、中士、中士、倍、下士、下士、与、庶人、在、官、者、同、禄。禄、足、以、代、其耕、也。

次国、地、方、七十里。

君、十、卿、禄、卿、禄、三、大夫、大夫、倍、上士、上士、倍、中士、中士、倍、下士、下士、与、庶人、在、官、者、同、禄。禄、足、以、代、其耕、也。

小国、地、方、五十里。
君、十、卿、禄、卿、禄、二、大夫、大夫、倍、上士、上士、倍、中士、中士、倍、下士、下士、与(の)、庶人、在、官、者(もの)、同、禄。禄、足(たりる)、以、代(かわる)、其(その)耕、也。
耕、者(もの)、之(の)、所、獲、一夫、百畝。
百畝之糞(肥料をあげた)、上農夫、食(やしなう)、九人、上、次、食(やしなう)、八人、中、食(やしなう)、七人、中、次、食(やしなう)、六人、下、食(やしなう)、五人。
庶人、在、官、者(もの)、其(その)禄、以、是(これ)、為(なす)、差」

北京錡が孟子 先生に質問して言った。
「周王朝の王室は、爵位と給料を、どのように与えていたのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「その詳細を聞き知る事はでき得なく成ってしまいました。
諸侯は、自分の損と成るのを嫌って、皆、それについての文書を葬り去ってしまいました。
ですが、私、孟子は、かつて、その概略を聞いた事があります。
天子は一位階、公爵も一位階、侯爵も一位階、伯爵も一位階、子爵と男爵は同一の一位階で、一般的に、五等級、五位階、有りました。
君主は一位階、卿という高官も一位階、大夫という上級の役人も一位階、上士という上級の役人も一位階、中士という中級の役人も一位階、下士という下級の役人も一位階で、一般的に、六等級、六位階、有りました。

天子が統治する土地は千里四方、公爵と侯爵は百里四方、伯爵は七十里四方、子爵と男爵は五十里四方で、一般的に、四等級、四段階に分けられていました。

五十里四方を統治できない者は、天子の所へ直接的に到達できないので、諸侯に天子へ取り次いでもらう事を『附庸』と言いました。

天子の卿という高官は、土地を給料として受け取っていましたが、侯爵の百里四方と同一視できる規模の土地でした。天子の大夫という上級の役人も、土地を給料として受け取っていましたが、伯爵の七十里四方と同一視できる規模の土地でした。元士とも呼ばれる天子の上士という上級の役人も、土地を給料として受け取っていましたが、子爵と男爵の五十里四方と同一視できる規模の土地でした。

(公爵と侯爵の)大国は、土地が百里四方です。

君主は卿の給料の十倍です。卿の給料は大夫の四倍です。大夫は上士の二倍です。上士は中士の二倍です。中士は下士の二倍です。下士と庶民の役人の者は同一の給料です。その同一の給料とは、自分の田を耕して得られる利益の代わり足り得る物です。

次の中堅国は、土地が七十里四方です。

君主は卿の十倍です。卿の給料は大夫の三倍です。大夫は上士の二倍です。上士は中士の二倍です。中士は下士の二倍です。下士と庶民の役人の者は同一の給料です。その同一の給料とは、自分の田を耕して得られる利益の代わり足り得る物です。

小国は、土地が五十里四方です。

君主は卿の給料の十倍です。卿の給料は大夫の二倍です。大夫は上士の二倍です。上士は中士の二倍です。中士は下士の二倍です。下士と庶民の役人の

者は同一の給料です。その同一の給料とは、自分の田を耕して得られる利益の代わり足り得る物です。

農耕従事者が獲得するのは、一人当たり、百畝の田畑です。

肥料をあげた百畝の田畑で、上農夫は九人を養えます。次位の農夫は八人を養えます。中堅の農夫は七人を養えます。次位の農夫は六人を養えます。下位の農夫は五人を養えます。

庶民の役人の給料は、これら農夫と同じように、五段階にします」

万章、問、曰。

「敢、問、友」

孟子、曰。

「不、挟(はさむ)、長、不、挟(はさむ)、貴、不、挟(はさむ)、兄弟、而、友。

友、也、者(もの)、友、其(その)徳、也。

不、可、以、有、挟(はさむ)、也。

孟献子、百乗之家、也。

有、友、五人、焉。

楽正裘、牧仲、其(その)、三人、則(すなわち)、予、忘、之(これ)、矣。

献子(＝孟献子)、之(の)、与(と)、此(この)五人、者(もの)、友、也、無(ない)、献子(＝孟献子)之家、者(もの)、也。

此(この)五人、者(もの)、亦(また)、有、献子(＝孟献子)、之(の)、家、則(すなわち)、不、与(と)、之(これ)、友、矣。

非、惟(ただ)、百乗之家、為(なす)、然、也。

雖(いえども)、小国之君、亦(また)、有、之(これ)。

費、恵公、曰。

『吾、於、子思、則(すなわち)、師、之(これ)、矣。

吾、於、顔般、則(すなわち)、友、之(これ)、矣。

王順、長息、則(すなわち)、事(つかえる)、我、者(もの)、也』。

非、惟(ただ)、小国之君、為(なす)、然、也。

雖(いえども)、大国之君、亦(また)、有、之(これ)。

晋、平公、之(の)、於、亥唐、也、入、云、則(すなわち)、入、坐、云、則(すなわち)、坐、食、

云、則(すなわち)、食。

雖(いえども)、疏食(粗食)、菜羹(野菜のスープなどの質素な食事)、未、嘗(かつて)、不、飽(お腹いっぱい食べる)。

蓋(かんがえるに)、不、敢、不、飽、也。

然、終、於、此(ここ)、而已(のみ)、矣。

弗(ない)、与(ともに)、共(ともに)、天位(王位)、也。

弗(ない)、与(ともに)、治、天職(天の神からの務め)、也。

弗(ない)、与(ともに)、食、天禄(天の神からの恩恵)、也。

士、之(の)、尊、賢、者(もの)、也。

非、王、公、之(の)、尊、賢、也。

舜、尚、見(あう)、帝(=堯)、帝(=堯)、館、甥(=舜)、于、弐室(別邸)、亦(また)、饗、舜、

迭(こうごに)、為(なる)、賓、主。

是(これ)、天子、而、友、匹夫、也。

用、下、敬、上。

謂、之(これ)、『貴(たっとぶ)、貴(き)』。

用、上、敬、下。

謂、之、『尊、賢』。
『貴、貴』、『尊、賢』、其義、一、也」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「友について、あえて質問します」

孟子 先生は言った。
「(友人との間に、)年長者である事を挟まないし、高貴な地位である事を挟まないし、兄弟がいる事を挟まないで、友と成ります。
友である者とは、友の徳、善行、善を友とするのである。
(友人との間に)徳、善行、善以外の事を挟まないのである。
孟献子は、百台の戦車がある名家の者でした。
孟献子には、友が五人いました。
楽正裘と、牧仲。その他の三人を私、孟子は忘れてしまいました。
孟献子が、これらの五人の者と友に成ったのは、孟献子の家を無視した者だからです。
これらの五人の者もまた、(仮に、)孟献子が家を無視しなかったら、孟献子と友に成らなかったであろう。
百台の戦車がある名家だけが、そうであった訳ではない。
小国の君主でも、そういう事が有ったのである。
費という国の恵公は言いました。
『私、恵公は、子思を師とする。
私、恵公は、顔般を友とする。

王順と、長息は、私、恵公に仕えてくれている者である』と。
小国の君主だけが、そうであった訳ではない。
大国の君主でも、そういう事が有ったのである。
晋という国の平公は、亥唐が入るように言えば入るし、座るように言えば座るし、食べるように言えば食べた。
平公は、粗食、野菜のスープなどの質素な食事でも、お腹いっぱい食べた。
考えるに、平公は、あえて、お腹いっぱい食べたのである。
しかし、平公は、ここまでで終わってしまったに過ぎなかった。
平公は、亥唐と、君主の位を共にしなかった。
平公は、亥唐と、天の神からの務めを共に行わなかった。
平公は、亥唐と、天の神からの恩恵を共に頂かなかった。
これでは、役人が賢者を尊重するような物である。
王や公爵が賢者を尊重する方法ではなかったのである。
舜が堯と会った時、堯は舜を別邸に泊めて、また舜をもてなして、その際、客と主人を交互に変えた。
これが、天子が庶民を友とする方法なのである。
下位者は、(真の)上位者を敬います。
これを『(真の)高貴さを尊重する』と言います。
上位者は、下位者を敬う事が有ります。
これを『賢さを尊重する』と言います。
『(真の)高貴さを尊重する』のも、『賢さを尊重する』のも、それらの意義は同一なのである」

万章、曰。

「敢、問。

交際、何心、也？」

孟子、曰。

「恭、也」

曰。

「郤、之、郤、之、為、不恭、何、哉？」

曰。

「尊者、賜、之、曰。

『其、所、取、之、者、義、乎？ 不、義、乎？』。

而、後、受、之。

以、是、為、『不恭』。

故、弗、郤、也」

曰。

「請。

無、以、辞、郤、之、以、心、郤、之、曰。

『其、取、諸、民、之、不義、也』。

而、以、他、辞、無、受、不可、乎？」

曰。

「其(その)、交、也、以、道、其(その)、接、也、以、礼、斯(すなわち)、孔子、受、之(これ)、矣」

万章、曰。

「今、有、御(ふせぐ)、人、於、国門之外、者(もの)。

其(その)、交、也、以、道、其(その)、餽(おくる)、也、以、礼、斯(すなわち)、可、受、御、与(か)?」

曰。

「不可。

『康誥』、曰。

『殺越(殺す)、人、于、貨、閔(悩む)、不、畏、死、凡民、罔(ない)、不、譈(憎悪する)』。

是(これ)、不、待、教、而、誅、者(もの)、也。

殷、受、夏、周、受、殷、所、不、辞(言葉)、也。

於、今、為(なす)、『烈』。

如之何、其(それ)、受、之(これ)?」

曰。

「今之諸侯、取、之(これ)、於、民、也、猶(ちょうど〜のよう)、御、也。

『苟(かりに)、善、其(その)礼際、矣、斯(すなわち)、君子、受、之(これ)』。

敢、問。

何、説、也?」

曰。

「子、以、為(なす)『有、王者、作(おこる)、将(しようとする)、比、今之諸侯、而、誅、之(これ)』、乎？ 其(それ)『教、之(これ)、不、改、而、後、誅、之(これ)』、乎？
夫(それ)、謂、『非、其(その)、有、而、取、之(これ)、者(もの)、盗、也』、充、類、至、義之尽、也。
孔子、之(の)、仕、於、魯、也、魯、人、猟較、孔子、亦(また)、猟較。
猟較、猶(なお)、可。
而、況(まして)、受、其(その)賜、乎？」

曰。

「然、則(すなわち)、孔子、之(の)、仕、也、非、事(こと)、道、与(か)？」

曰。

「事(こと)、道、也」

「事(こと)、道、奚(どうして)、猟較、也？」

曰。

「孔子、先、簿正(帳簿によって正す)、祭器、不、以、四方之食、供、簿正(帳簿によって正す)」

曰。

「奚(どうして)、不、去、也？」

曰。

「為(なす)、之(これ)、兆、也。

兆、足（たりる）、以、行、矣。
而、不、行。
而、後、去。
是（ここ）、以、未、嘗（かつて）、有、所、終、三年、淹（とどまる）、也。
孔子、有、見行可之仕。
有、際可之仕。
有、公養之仕。
於、季桓子、見行可之仕、也。
於、衛、霊公、際可之仕、也。
於、衛、孝公、公養之仕、也」

万章が孟子 先生に言った。
「あえて質問します。
どのような心で交際するべきでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「恭しく敬って交際するべきである」

万章が言った。
「ものを辞退するべき時に、ものを辞退するのが、恭しく敬っていないと成るのは、どのような場合でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「尊重するべき者が、ものを与えてくれた時に、言ったとします。
『このものを取った方法は正しいのか？　正しくないのか？』と。
そうした後で、そのものを受け取ったとします。
こうした事によって、『恭しく敬っていない』と見なします。
そのため、辞退するべきではないのである」

万章が言った。
「請い願わくば質問します。
言葉で辞退せず、心の中で辞退して言ったとします。
『このものは、国民から正しくない方法で取られたのである』と。
他の理由を言葉で言って、受け取らないのは、よろしくないのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「正しい方法による交際で、礼儀による接し方であれば、孔子 先生も受け取ったのである」

万章が言った。
「今、国の門の外で人を妨害して殺して金銭を奪っている者がいたとします。
正しい方法による交際で、礼儀による贈り方であれば、その者から贈り物を受け取るべきなのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「受け取るべきでは、ありません。

『書経』の『康誥』で言われています。
『金銭のために人を殺して、悩まないし、死ぬのを恐れない者を、普通の人々も憎悪する』と。
このような者は、教えるのを待たずに、天誅を下すべき者なのである。
これは、殷は夏王朝から受け継いでいるし、周王朝は殷から受け継いでいる、不文律なのです。
今でも、『厳罰を下すべきである』とします。
どうして受け取れようか？　いいえ！」

万章が言った。
「ちょうど、人を妨害して殺して金銭を奪っている者のように、今の諸侯は国民から金銭を搾取しています。
『仮に、礼儀と交際方法が善ければ、王者は贈り物を受け取る』と言いますが。
あえて質問します。
どのように説明できるというのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「あなた、万章は、『王者が立ち上がる事が有れば、今の諸侯に天誅を下す』と見なしますか？　それとも、『(王者は、)今の諸侯を教えても改めなかった後で、今の諸侯に天誅を下す』と見なしますか？
『所有していないものを取る者は盗人である』と言ってしまうのは、分類を拡充してしまって、極端な正義にまで至ってしまっている。

孔子 先生が魯という国で役人として仕えていた時、魯の人が狩猟の成果を比較していると、孔子 先生もまた狩猟の成果を比較した。

狩猟の成果の比較ですらなお、善いのである。

まして、今の諸侯からの贈り物を受け取るのは、善いのである！」

万章が言った。

「そうであるならば、孔子 先生が国に役人として仕えたのは、道理、真理を一大事としたからではないのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「道理、真理を一大事としたのである」

（万章が言った。）

「道理、真理を一大事としているのに、どうして狩猟の成果を比較したのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「孔子 先生は先に祭器を帳簿によって正し、四方からの食べ物は帳簿によって正さず、人々が改めるのを待ったのである」

万章が言った。

「どうして、（孔子 先生は、魯という国を）去らなかったのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「(孔子 先生は、人々が正しく成る、)きっかけを作ってみたのである。
(人々が正しく成る、)きっかけを作るのは、十分な行い足り得るのです。
しかし、(人々は、道理、真理を)実行しなかった。
そうした後で、(孔子 先生は、魯という国を)去ったのである。
このため、未だかつて、三年間が終わるまで留まった場所は無いのである。
孔子 先生は、道理、真理が行われる可能性を見出してから国に役人として仕える事が有った。
孔子 先生は、正しく交際されたから国に役人として仕える事が有った。
孔子 先生は、国の客人として公に養われたから国に役人として仕える事が有った。
季桓子には、道理、真理が行われる可能性を見出してから国に役人として仕えたのです。
衛という国の霊公には、正しく交際されたから国に役人として仕えたのです。
衛の孝公には、国の客人として公に養われたから国に役人として仕えたのです」

孟子、曰。
「仕、非、為(ため)、貧、也。
而、有時、乎、為(ため)、貧。
娶、妻、非、為(ため)、養、也。
而、有時、乎、為(ため)、養。

為（ため）、貧、者（もの）、辞、尊、居、卑、辞、富、居、貧。
辞、尊、居、卑、辞、富、居、貧、悪（どうする）、乎、宜（よい）、乎？
抱関撃柝（門番や夜の見回りなどの下級の役人）。
孔子、嘗（かつて）、為（なる）、委吏（倉庫を管理する役人）、矣、曰。
『会計、当、而已（のみ）、矣』。
嘗（かつて）、為（なる）、乗田（家畜を飼育する役人）、矣、曰。
『牛、羊、茁（勢い良く成長する）、壮長、而已（のみ）、矣』。
位、卑、而、言、高、罪、也。
立、乎、人、之（の）、本朝、而、道、不、行、恥、也」

孟子先生は言った。
「貧しさのせいで、国に役人として仕える訳ではない。
しかし、貧しさのせいで、国に役人として仕える時が有る。
妻と結婚するのは、父母を養ってもらうためではない。
しかし、父母を養ってもらうために、妻と結婚する時が有る。
貧しさのせいで、国に役人として仕える者は、尊い高位を辞退して卑賤な下位にいるべきであるし、富を辞退して貧しいままでいるべきである。
尊い高位を辞退して卑賤な下位にいて、富を辞退して貧しいままでいるには、どうするのが良いのか？（と言うと、）
門番や夜の見回りなどの下級の役人に成るべきである。
孔子先生は、かつて、倉庫を管理する役人であった時に言いました。
『会計が当たっているだけで良いのである』と。
孔子先生は、かつて、家畜を飼育する役人であった時に言いました。

『牛や、羊が、勢い良く成長して、強壮に成長するだけで良いのである』と。
卑賤な下位の者が、高位者かのような事を言うのは、罪に成ってしまうのである。
人として、自国の朝廷に役人として仕えて立っていながら、道理、真理を行わないのは、恥なのである」

万章、曰。
「士、之（の）、不、托（たよる）、諸侯、何、也？」
孟子、曰。
「不、敢、也。
諸侯、失、国、而、後、托（たよる）、於、諸侯、礼、也。
士、之（の）、托（たよる）、於、諸侯、非礼、也」
万章、曰。
「君、餽（おくる）、之（これ）、粟、則（すなわち）、受、之（これ）、乎？」
曰。
「受、之（これ）」
「受、之（これ）、何、義、也？」

曰。

「君、之(の)、於、氓(移民)、也、固(もとより)、周、之(これ)」

曰。

「周、之(これ)、則(すなわち)、受、賜、之(これ)、則(すなわち)、不、受、何、也？」

曰。

「不、敢、也」

曰。

「敢、問。

其(その)、不、敢、何、也？」

曰。

「抱関撃柝(門番や見回りなどの下級の役人)、者(もの)、皆、有、常、職、以、食(やしなう)、於(によって)、上。

無(ない)、常、職、而、賜、於、上、者(もの)、以、為(なす)、不恭、也」

曰。

「君、餽(おくる)、之(これ)、則(すなわち)、受、之(これ)。

不、識？

可、常、継、乎？」

曰。

「繆公、之(の)、於、子思、也、亟(何度も)、問、亟(何度も)、餽(おくる)、鼎、肉。
子思、不、悦。
於、卒(ついに)、也、標、使者、出、諸(これ)、大門之外(正門)、北面、稽首、再拝、而、不、受、
曰。
『今、而、後、知、君、之(の)、犬、馬、畜(やしなう)、汲(=子思)』。
蓋、自(より)、是(これ)、台、無(ない)、餽(おくる)、也。
悦、賢、不、能、挙、又、不、能、養、也、可、謂、『悦、賢』、乎?」
曰。
「敢、問。
国、君、欲、養、君子、如何(どのように)、斯(すなわち)、可、謂、『養』、矣?」
曰。
「以、君命、将、之(これ)、再拝、稽首、而、受。
其(その)後、廩人、継、粟、庖人、継、肉。
不、以、君命、将、之(これ)。
子思、以、為、『鼎、肉、使(させる)、己、僕僕爾(煩わしく)、亟(何度も)、拝、也。非、養、君子、
之(の)、道、也』。
堯、之(の)、於、舜、也、使(させる)、其(その)子、九男、事(つかえる)、之(これ)、二女、女(めあわせる)、焉、百官、
牛、羊、倉廩、備、以、養、舜、於、畎畝之中(田畑)。
後、挙、而、加(くわえる)、諸(これ)、上位。
故、曰。
『王、公、之(の)、尊、賢、者(もの)、也』」

万章が孟子 先生に言った。
「役人が、諸侯を頼ってはいけないのは、なぜでしょうか?」

孟子 先生は言った。
「あえて、しないのである。
諸侯が、国を失った後、他の諸侯を頼るのは、礼儀なのである。
役人が、他の諸侯を頼るのは、非礼なのである」

万章が言った。
「君主が、他国から来ている元役人に、穀物を贈ったら、受け取って善いのでしょうか?」

孟子 先生は言った。
「受け取って善い」

(万章が言った。)
「受け取って善いのは、どのような意味で、でしょうか?」

孟子 先生は言った。
「君主は、本来、移民に対して、物資を行き渡らせるものだからである」

万章が言った。

「移民への救済措置ならば受け取るが、そうではなく贈られたら受け取らないのは、なぜ、でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「あえて、しないのである」

万章が言った。

「あえて質問します。

あえて、しないのは、なぜ、でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「門番や見回りなどの下級の役人をしている者は皆、常に職が有って、上位者から養われています。

常職に就いていないのに、上位者から贈り物を受け取る者を『恭しく敬っていない』とします」

万章が言った。

「君主が贈り物をしたら受け取っても善いのですね。

どうでしょう?

常に継続して贈られたら、受け取っても善いのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「繆公は、子思に、(使者を)何度も訪問させて、何度も鼎(かなえ)で肉を贈らせ(て、何度も子思に敬礼させて子思に迷惑をかけ)た。

子思は不機嫌に成った。
(子思は、)ついに、使者を案内して、使者を正門の外に出して、北を向いて敬礼し、二回、拝んで、贈り物を受け取らずに、言いました。
『今、後に成って知りました。君主である繆公は、私、子思を、犬や馬のように養っているだけである、と』と。
考えるに、それから、(繆公は、使者によって)贈り物をさせなかったのであろう。
賢者を喜んでも、賢者を高位に挙げる事ができず、また、正しく養う事もできないのに、『賢者を喜んでいる』と言えるであろうか？　いいえ！」

万章が言った。
「あえて質問します。
国の君主が、(善行の)王者を養いたいと欲（ほっ）したら、どのようにすれば、『(善行の)王者を養っている』と言えるのでしょうか？」

孟子　先生は言った。
「(初回だけは、使者に)君主の命令を復唱させて贈り物をさせて、王者は、二回、拝んで敬礼して受け取ります。
その後は、倉庫の管理人に穀物は渡し、台所の料理人に肉は渡します。
君主の命令は復唱させません。
子思は、『鼎（かなえ）の肉が、私、子思を、煩わしく何度も拝ませるような物なのである。王者を養う正しい方法ではない』と見なしたであろう。

堯が、舜を養った方法は、堯の子である九人の男性を舜に仕えさせたし、堯の二人の娘を舜と結婚させせたし、諸々の役人に、牛、羊、穀物の倉を備えさせて、田畑の中にいた舜を養わせた。
その後、(堯は、舜を)高位に挙げて、上位者達に加えた。
そのため、言われています。
『王、公爵が、賢者を尊重する方法なのである』と」

万章、曰。
「敢、問。
不、見（あう）、諸侯、何、義、也？」

孟子、曰。
「在、国、曰、『市井（町中）之臣』、在野、曰、『草莽（草むら）之臣』、皆、謂、庶人。
庶人、不、伝、質、為（なる）、臣、不、敢、見（あう）、於、諸侯、礼、也」

万章、曰。
「庶人、召、之（これ）、役、則（すなわち）、往、役。
君、欲、見（あう）、之（これ）、召、之（これ）、則（すなわち）、不、往、見（あう）、之（これ）、何、也？」

曰。
「往、役、義、也。

往、見、不義、也。
且、君、之、欲、見、之、也、何、為、也、哉?」
曰。
「為、其多聞、也。
為、其賢、也」
曰。
「為、其多聞、也、則、天子、不、召、師。
而、況、諸侯、乎?
為、其賢、也、則、吾、未、聞、欲、見、賢、而、召、之、也。
繆公、亟、見、於、子思、曰。
『古、千乗之国、以、友、士、何如?』。
子思、不、悦、曰。
『古之人、有、言。曰。
『事、之、云、乎。
豈、曰、友、之、云、乎?』。
子思、之、不、悦、也、豈、不、曰。『以、位、則、子、君、也。我、
臣、也。何、敢、与、君、友、也? 以、徳、則、子、事、我、者、也。
奚、可、以、与、我、友?』。
千乗之君、求、与、之、友、而、不、可、得、也。
而、況、可、召、与?
斉、景公、田。
招、虞人、以、旌。

不、至。
将(しょうとする)、殺、之(これ)。
『志士、不、忘、在、溝壑(餓死などで道端で死ぬ)。
勇士、不、忘、喪、其元(その首)』。
孔子、奚、取、焉？
取、非、其(その)招、不、往、也」

曰。
「敢、問。
招、虞人(山や公園などの役人)、何、以？」

曰。
「以、皮冠。
庶人、以、旃(赤い旗)、士、以、旂(龍が描かれた旗)、大夫、以、旌。
以、大夫之招、招、虞人(山や公園などの役人)、虞人(山や公園などの役人)、死、不、敢、往。
以、士之招、招、庶人、庶人、豈(どうして)、敢、往、哉？
況(まして)、乎、以、不賢人之招、招、賢人、乎？
欲、見(あう)、賢人、而、不、以、其(その)道、猶(ちょうど〜のよう)、欲、其(その)、入、而、閉、之(これの)門、
也。
夫(それ)、義、路、也。
礼、門、也。
惟(ただ)、君子、能、由(よる)、是(この)路、出入、是(この)門、也。
『詩』、云。
『周、道、如(のよう)、砥、其(その)直、如(のよう)、矢。

君子、所、履、小人、所、視』」

万章、曰。

「『孔子、君、命、召、不、俟（まつ）、駕（乗り物）、而、行』。

然、則（すなわち）、孔子、非（ひ）、与（か）？」

曰。

「孔子、当、仕、有、官職。

而、以、其（その）官、召、之（これ）、也」

万章が孟子 先生に言った。

「あえて質問します。

孟子 先生が諸侯に会わないのは、どのような意義が有るのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「国の中央にいるが役人ではない庶民を『町中の臣下』と言いますし、在野の庶民を『草むらの臣下』と言いますが、皆、庶民の事を言っているのです。庶民は、贈り物をして臣下に成っていないので、諸侯に、あえて会わないのは礼儀なのです」

万章が言った。

「諸侯が、庶民を呼び寄せれば、庶民は行って労役します。

君主が、会いたいと欲（ほっ）して、呼び寄せているのに、行って会わないのは、なぜ、でしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「庶民が、行って労役するのは、正しい。

庶民が、諸侯の所に、行って会うのは、正しくないのである。

また、君主が、会いたいと欲（ほっ）するのは、何のためであるのか？」

　万章が言った。

「『多聞』、『博識』のためです。

賢者であるためです」

　孟子 先生は言った。

「『多聞』、『博識』のためであるならば、天子ですら、師を呼びつけたりしないのである。

まして、諸侯が師を呼びつけるのは、善くない！

賢者であるためならば、『賢者に会いたいと欲（ほっ）して、賢者を呼びつけた』などと私、孟子は未だ聞いた事が有りません。

繆公が、何度も子思と会っていた時、言いました。

『古代では、千台の戦車がある大国の君主が、役人を友としたそうですが、どう思いますか？』と。

子思は、不機嫌に成って、言いました。

『古代人が言っていた事が有ります。

この人に仕えている、と言ってください。

どうして、この人を友にしている、と言えるであろうか？　いいえ！　と』と。

子思が、不機嫌に成って、言った言葉の意味とは、『地位であれば、あなた、繆公は君主である。私、子思は臣下である。どうして、あえて君主と友に成るであろうか？　いいえ！　徳、善行であれば、あなた、繆公は私、子思に仕える者である。どうして、私、子思と友に成れるであろうか？　いいえ！』という事なのである。

千台の戦車がある大国の君主が、賢者と友に成る事を求めても、でき得ないのである。

ましして、呼びつける事など、でき得ないのである！

斉という国の景公が、狩猟をした。

(景公は、)旗で、山や公園などの役人を呼び寄せようとした。

しかし、その役人は来なかった。

(景公は、)その役人を殺そうとした。

(孔子先生は言いました。)

『志が有る一人前である者は、忘れず、餓死などで道端で死ぬ覚悟が在る。勇敢な一人前である者は、忘れず、自分の首を切られる覚悟(、死をも恐れぬ勇気)を失わない』と。

孔子先生は、何に感じ入ったのか？

(孔子先生は、その役人が、)正しくない呼び寄せ方では、来なかった事に感じ入ったのである」

万章が言った。

「あえて質問します。

山や公園などの役人は、どうやって正しく呼び寄せるのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「皮の冠で正しく呼び寄せるのである。

庶民は赤い旗で呼び寄せますし、下級の役人は龍が描かれた旗で呼び寄せますし、上級の役人は旌という旗で呼び寄せます。

上級の役人を呼び寄せる、旌という旗で、山や公園などの役人を呼び寄せても、山や公園などの役人は、死んでも、あえて、来ないのです。

下級の役人を呼び寄せる、龍が描かれた旗で、庶民を呼び寄せても、庶民は、あえて、来るであろうか？ いいえ！ 来ない！

まして、愚者を呼びつける方法で、賢者を呼びつけても、賢者は来ないのである！

賢者に会いたいと欲(ほっ)しても、正しい方法ではないのは、ちょうど、入れたいのに、門を閉めてしまっているような物なのである。

正義は、道なのである。

礼儀は、門なのである。

王者だけが、正義という道によって、礼儀という門を出入りできるのである。

『詩経』で言われています。

『周の道は、砥石のようであり、真っ直ぐであるのは、矢のようである。

王者が、踏んで行った場所である。

人々が、それを視た場所である』と」

万章が言った。

「『孔子 先生は、君主の命令で呼ばれたら、乗り物を待たずに、君主の所へ行った』と言われています。
そうであるならば、孔子 先生は正しくないのか？」

孟子 先生は言った。
「孔子 先生は、当時、国に役人として仕えていて、官職が有った。
その官職の事で呼ばれたからである」

孟子、謂、万章、曰。
「一郷之善士、斯(ここ)、友、一郷之善士。
一国之善士、斯(ここ)、友、一国之善士。
天下之善士、斯(ここ)、友、天下之善士。
以、友、天下之善士、為(なす)、未、足(たりる)、又、尚論、古之人。
頌、其(その)詩、読、其(その)書、不、知、其(その)人、可、乎？
是(ここ)、以、論、其(その)世、也。
是(これ)、尚友、也」

孟子 先生は万章に言った。
「一集落の善い一人前である者は、そこで、一集落の善い一人前である者を友とする。

一国の善い一人前である者は、そこで、一国の善い一人前である者を友とする。
天下の善い一人前である者は、そこで、天下の善い一人前である者を友とする。
天下の善い一人前である者を友としても、未だ不足とするならば、また、古代人について論じて思考しなさい。
ある古代人の詩を読んで歌っても、ある古代人の文書を読んでも、その古代人について知らなくて善いであろうか？　いいえ！　善くない！
このため、その古代人の一生について論じて思考しなさい。
このようにして、ある古代人について論じて思考して、その古代人を友とできるのである」

斉、宣王、問、卿。
孟子、曰。
「王、何、卿、之(これ)、問、也？」
王、曰。
「卿、不、同、乎？」
曰。

「不、同。
有、貴戚（君主の親戚）之卿。
有、異姓之卿」

王、曰。
「請、問、貴戚（君主の親戚）之卿」
曰。
「君、有、大、過（あやまち）、則（すなわち）、諫。
反覆（くり返す）、之（これ）、而、不、聴、則（すなわち）、易（かえる）、位」
王、勃然（顔色を変えて怒る）、変、乎、色。
曰。
「王、勿（なかれ）、異（あやしむ）、也。
王、問、臣。
臣、不、敢、不、以、正、対（こたえる）」
王、色、定、然、後、請、問、異姓之卿。
曰。
「君、有、過（あやまち）、則（すなわち）、諫。
反覆（くり返す）、之（これ）、而、不、聴、則（すなわち）、去」

斉という国の宣王が孟子 先生へ高官について質問した。

孟子 先生は言った。

「宣王よ、どの高官について、質問しているのでしょうか？」

宣王が言った。

「高官は、同じではないのですか？」

孟子 先生は言った。

「同じでは、ありません。

君主の親戚の高官がいます。

また、君主の一族ではない高官がいます」

宣王が言った。

「請い願わくば、君主の親戚の高官について質問します」

孟子 先生は言った。

「君主に、大きな過（あやま）ちが有れば、忠告します。

忠告をくり返しても聴き入れなければ、君主の位の者を別の人に変えます」

宣王は、怒って顔色を変えた。

孟子 先生は言った。

「宣王よ、あやしむなかれ。
宣王が、私に質問したのです。
私は、あえて、正しく答えたのです」

宣王は、顔色を安定させた後で、請い願って、君主の一族ではない高官について孟子先生へ質問した。

孟子先生は言った。
「君主に過ち（あやま）が有れば、忠告します。
忠告をくり返しても聴き入れなければ、(高官を辞めて、その国を)去ります」

告子上

告子、曰。

「性、猶（ちょうど〜のよう）、杞柳（曲げて器にできるコリヤナギ）、也。

義、猶（ちょうど〜のよう）、桮棬（木を曲げて作った器）、也。

以、人、性、為（なす）、仁義、猶（ちょうど〜のよう）、以、杞柳、為（つくる）、桮棬」

孟子、曰。

「子、

能、順（したがう）、杞柳之性、而、以、為（つくる）、桮棬、乎?

将、戕賊（こわす）、杞柳、而、後、以、為（つくる）、桮棬、也?

如（もし）、将、戕賊（こわす）、杞柳、而、以、為（つくる）、桮棬、則（すなわち）、亦（また）、将、戕賊（こわす）、人、以、為（なす）、

仁義、与（か）?

率、天下之人、而、禍、仁義、者（もの）、必、子之言、夫」

告子が言った。

「人の性質は、ちょうど、曲げて器にできるコリヤナギのようなのである。

正義は、ちょうど、コリヤナギという木を曲げて作った器なのである。

人の性質によって思いやりや正義を為（な）すのは、ちょうど、コリヤナギという木を曲げて器を作る事なのである」

孟子 先生は言った。

「あなた、告子の説では、
コリヤナギの性質によって器を作るのか？
それとも、コリヤナギの性質を壊した後で、器を作るのか？
もしコリヤナギの性質を壊して器を作るのであれば、人の性質も壊して思いやりや正義を為(な)すのか？
天下の人々を(誤って)導いてしまい、思いやりや正義を妨害してしまう物は、
必ず、あなた、告子の言葉のような代物なのである」

告子、曰。
「性、猶(ちょうど〜のよう)、湍(回転して流れている水)水、也。
決、諸(これ)、東方、則(すなわち)、東、流。
決、諸(これ)、西方、則(すなわち)、西、流。
人、性、之(の)、無(ない)、分、於、善、不善、也、猶(ちょうど〜のよう)、水、之(の)、無(ない)、分、於、東西、也」

孟子、曰。
「水、信、無(ない)、分、於、東西、無(ない)、分、於、上下、乎？
人、性、之(の)、善、也、猶(ちょうど〜のよう)、水、之(の)、就(いく)、下、也。
人、無(ない)、有、不、善。
水、無(ない)、有、不(ない)、下。

今、夫(それ)、水、搏(うつ)、而、躍、之(これ)、可、使(させる)、過、顙(額)、激、而、行、之(これ)、可、使(させる)、在、山。
是(これ)、豈(どうして)、水之性、哉？
其(その)勢、則(すなわち)、然、也。
人、之(の)、可、使(させる)、為(なす)、不善、其(その)性、亦(また)、猶(ちょうど〜のよう)、是(この)、也」

告子が言った。
「人の性質は、ちょうど、回転して流れている水のような物なのです。
東の方向に流れるように決まれば、東に流れます。
西の方向に流れるように決まれば、西に流れます。
人の性質が善悪に分かれていないのは、ちょうど、水が東西に分かれていないような物なのです」

孟子 先生は言った。
「水が、東西に分かれていなければ、上下にも分かれていないのか？
人の性質のうち善性は、ちょうど、水が下へ低い所へ流れていくような物なのである。
人には善性が有る。
水には下へ低い所へ流れていく性質が有る。
今、水を打ち出して跳躍させれば、額を超越して通過させる事ができるし、
流れを激しくして逆行させれば山の上に流れて行かせる事もできる。
しかし、これが、どうして、(本来の)水の性質のままであろうか？　いいえ！

外部からの力の勢いが、そう（、水の性質ではないように）させているだけなのである。

人に悪事をさせる事ができる、という性質もまた、ちょうど、そのよう（に、人の性質ではないようにさせているだけ）なのである」

告子、曰。

「生、之（これ）、謂、『性』」

孟子、曰。

「生、之（これ）、謂、『性』、也、猶（ちょうど〜のよう）、白、之（これ）、謂、『白』、与（か）？」

曰。

「然」

「白羽之白、也、猶（ちょうど〜のよう）、白雪之白？
白雪之白、猶（ちょうど〜のよう）、白玉之白、歟（か）？」

曰。

「然」

「然、則（すなわち）、

犬之性、猶（ちょうど〜のよう）、牛之性？
牛之性、猶（ちょうど〜のよう）、人之性、歟（か）？」

告子が言った。
「先天性の物を『性質』と言うのである」

孟子 先生は言った。
「先天性の物を『性質』と言うのは、ちょうど、白いものを『白い』と言う
ような物ではないか？」

告子が言った。
「そうです」

（孟子 先生は言った。）
「白い羽が白いのは、ちょうど、白い雪が白いような物なのか？
白い雪が白いのは、ちょうど、白い宝玉が白いような物なのか？

告子が言った。
「そうです」

（孟子 先生は言った。）
「そうであるならば、
犬の性質は、ちょうど、牛の性質のような物なのか？

牛の性質は、ちょうど、人の性質のような物なのか？」

告子、曰。

「食色（食欲と色欲）、性、也。

仁、内、也。非、外、也。

義、外、也、非、内、也」

孟子、曰。

「何、以、謂、『仁、内。義、外』、也？」

曰。

「彼、長、而、我、長、之（これ）。

非、有、長、於、我、也。

猶（ちょうど～のよう）、彼、白、而、我、白、之（これ）。

従、其（その）白、於、外、也。

故、謂、之（これ）、『外』、也」

曰。

「白馬之白、也、無（ない）、以、異、於、白人之白、也。

不、識？

長、馬、之（の）、長、也、無（ない）、以、異、於、長、人、之（の）、長、歟（か）？

且、謂、長、者、義、乎？ 長、之、者、義、乎？」

曰。

「吾弟、則、愛、之、秦、人、之、弟、則、不、愛、也。
是、以、我、為、悦、者、也。
故、謂、之、『内』。
長、楚人之長、亦、長、吾之長。
是、以、長、為、悦、者、也。
故、謂、之、『外』、也」

曰。

「耆、秦人之炙、無、以、異、於、耆、吾炙。
夫、物、則、亦、有、然、者、也。
然、則、耆、炙、亦、有、外、歟？」

告子が言った。

「食欲と、『色欲』、『性欲』が、人の性質なのである。
思いやりは内である。外ではない。
正義は外である。内ではない」

孟子 先生は言った。

「なぜ、『思いやりは内である。正義は外である』と言ってしまっているのか？」

告子が言った。
「ある人が年長者であると、私は、その人を年長者として敬う。(それは正義である。)
しかし、私には年長者という性質は無い。
ちょうど、ある人が白いと、私は、その人を白いとするような物なのである。
(しかし、私には白いという性質は無い。)
したがって、その白いとは、外にある。
そのため、『正義は外である』と言ったのである」

孟子 先生は言った。
「白馬が白いのは、白い人が白いのと、同じに成ってしまう。
そうであるならば、どうであろうか?
年長者の馬を年長者として考慮して養うのは、年長者の人を年長者として敬うのと、同じに成ってしまうのか?
また、『年長者という性質は正義である』と思ってしまっているのか?
『年長者として敬うのは正義である』と思うのか?」

告子が言った。
「私の家族の弟は愛するが、秦という外国の他人の弟は愛さない。
これは、私が、(愛という)喜ばしい物を作っている者だからである。
そのため、『思いやり(、愛情、愛)は内である』と言ったのである。
楚という外国の他人の年長を年長者として敬うし、また、私の家族の年長者を年長者として敬う。

これは、(私には無い)年長者という性質が、(敬意という)喜ばしい物を作っている物だからである。

そのため、『(年長者として敬うという)正義は外である』と言ったのである」

孟子 先生は言った。

「秦という外国人の焼肉を好むのも、私の家族の焼肉を好むのも、同じである。

どんな物でもまた、同様な物なのである。

それでは、焼肉を好む事の中にもまた、外が有るのか?」

孟季子、問、公都子、曰。

「何、以、謂、『義、内』、也?」

曰。

「行、吾(わが)敬。

故、謂、之(これ)、『内』、也」

「郷人、長、於(よりも)、伯兄(長兄)、一歳、則(すなわち)、誰、敬?」

曰。

「敬、兄」

「酌、則(すなわち)、誰、先?」

曰。

「先、酌、郷人」

「所、敬、在、此(ここ)。

所、長、在、彼。

果、在、外。

非、由(より)、内、也」

公都子、不能、答。

以、告、孟子。

孟子、曰。

「『敬、叔父、乎? 敬、弟、乎?』。

彼、将、曰、『敬、叔父』。

曰、『弟、為(なる)、尸(先祖の霊の代わりをする形代の役)、則(すなわち)、誰、敬?』

彼、将、曰、『敬、弟』。

子、曰、『悪(どこに)、在、其(その)、敬、叔父、也?』。

彼、将、曰、『在、位、故、也』。

子、亦、曰、『在、位、故、也、庸(常)、敬、在、兄、斯須(少しの間)之敬、在、郷人』」

季子(=孟季子)、聞、之(これ)、曰。
「敬、叔父、則(すなわち)、敬、弟、則(すなわち)、敬、果、在、外。
非、由(より)、内、也」

公都子、曰。
「冬、日、則(すなわち)、飲、湯、夏、日、則(すなわち)、飲、水。
然、則(すなわち)、飲食、亦、在、外、也?」

孟季子が公都子に質問して言った。
「なぜ、『正義は内である』と言っているのか?」

公都子が言った。
「私の敬意を実行するからである。(敬意を実行するのは正義である。)
そのため、『正義は内である』と言っているのである」

(孟季子が言った。)
「故郷の他人の年長者が、あなたの家族の長兄よりも一歳、年上であれば、
どちらをより敬うのか?」

公都子が言った。
「長兄を敬います」

（孟季子が言った。）
「酒を酌むのであれば、どちらを優先するのか？」

公都子が言った。
「故郷の他人の年長者に優先して酒を酌みます」

（孟季子が言った。）
「敬っているのは、自分の家族の長兄である。
しかし、年長者として優先するのは、故郷の他人の年長者である。
果たして、外に在る対象に左右されていますよね。
あなたの心の内からの物ではないですよね」

公都子は孟季子に答える事ができなかった。

そのため、公都子は、孟季子との話を、孟子 先生に告げ知らせた。

孟子 先生は言った。
「（あなた、公都子は、孟季子に、）『叔父を敬っているのか？　それとも、弟を敬っているのか？』と言いなさい。
彼、孟季子は、『叔父を敬っている』と言うであろう。
（あなた、公都子は、）『弟が先祖の霊の代わりをする形代の役に成ったら、どちらを敬うのか？』と言いなさい。
彼、孟季子は、『弟を敬う』と言うであろう。

あなた、公都子は、『あなたが、叔父を敬っている、という話は、どこに、行ってしまったのか？』と言いなさい。

彼、孟季子は、『弟を敬うのは、形代（かたしろ）という地位が在るからです』と言うであろう。

あなた、公都子もまた、『私、公都子も、地位が在るから、常日頃の敬意は長兄に在り、少しの間だけの敬意は故郷の他人の年長者に在るのです』と言いなさい」

（後に、孟子 先生が教えた通りに、公都子は、孟季子と話した。）

孟季子が、この公都子の言葉を聞いて、言った。

「叔父を敬うべき場合は叔父を敬い、弟を敬うべき場合は弟を敬うならば、

外に在る対象に左右されていますよね。

心の内からの物ではないですよね」

公都子が言った。

「冬の日は湯を飲み、夏の日は水を飲みます。（これらは、外に在る対象に左右されています。）

そうであるならば、『飲食したい』という食欲もまた、外に在るのでしょうか？（『食欲は内である』という告子や、あなた、孟季子の言葉と矛盾してしまいますよね）」

公都子、曰。

「告子、曰。

『性、無、善、無、不善、也』。

或、曰。

『性、可、以、為、善、可、以、為、不善。

是故、文、武、興、則、民、好、善、幽、厲、興、則、民、好、暴』。

或、曰。

『有、性、善。

有、性、不善。

是故、以、堯、為、君、而、有、象。

以、瞽瞍、為、父、而、有、舜。

以、紂、為、兄之子、且、以、為、君、而、有、微子啓、王子、比干』。

今、曰。

『性、善』。

然、則、彼、皆、非、歟？」

孟子、曰。

「乃、若、其情、則、可、以、為、善、矣。

乃、所謂、善、也。

若、夫、為、不善、非、才之罪、也。

惻隠之心、人、皆、有、之。

羞悪之心、人、皆、有、之。

恭敬之心、人、皆、有、之。

是非之心、人、皆、有、之。
惻隠之心、仁、也。
羞悪之心、義、也。
恭敬之心、礼、也。
是非之心、智、也。
仁義礼智、非、由、外、鑠、我、也。
我、固、有、之、也。
弗、思、耳、矣。
故、曰。
『求、則、得、之。
舎、則、失、之。
或、相、倍蓰、而、無、算、者、不能、尽、其才、者、也』。
『詩』、曰。
『天、生、蒸民。
有、物、有、則。
民、之、秉、夷、好、是懿徳』。
孔子、曰。
『為、此詩、者、其、知、道、乎』。
故、有、物、必、有、則。
民、之、秉、夷、也、故、好、是懿徳」

公都子が孟子 先生に言った。
「告子は言いました。

『人の性質には善悪は無いのである』と。
ある人は言いました。
『人の性質は、善行を為す事もできるし、悪行を為す事もできる。
このため、文王や武王が盛んに成れば人々も善を好むし、幽や厲という暴君が盛んに成れば人々も乱暴な悪を好む』と。
別の、ある人は言いました。
『性質が善である人もいる。
性質が悪である人もいる。
このため、善人である堯が君主に成っていても、舜の弟である悪人である象がいた。
舜の父である悪人である瞽瞍が父であっても、善人である舜がいた。
悪人である紂王が兄の子であっても、かつ、暴君に成っていても、善人である微子や、王子である善人である比干がいた』と。
今、孟子 先生は言っています。
『人の性質には、善(く成るための種のような性質)が有る』と。
孟子 先生の言葉通りであるならば、彼らは皆、正しくないのか?」

孟子 先生は言った。
「人情のような物は、善行を為す事ができるのである。
人情、人の性質には、いわゆる、善(く成るための種のような性質)が有るのである。
悪行を為してしまうような事は、(自由意思による物であり、天の神が与えた)才能の罪、素質の問題ではないのである。
他人を思いやる心が、人には皆、有るのである。

悪を恥じる心が、人には皆、有るのである。

他人を恭しく敬う心、他人に謙遜して譲る心が、人には皆、有るのである。

善悪の是非を判断できる知的な心が、人には皆、有るのである。

他人を思いやる心が、思いやりなのである。

悪を恥じる心が、正義なのである。

他人を恭しく敬う心、他人に謙遜して譲る心が、礼儀なのである。

善悪の是非を判断できる知的な心が、智慧なのである。

思いやり、正義、礼儀、智慧は、外から、光輝いて、私達を照らしている訳ではないのである。

私達には、本(もと)より、思いやり、正義、礼儀、智慧が有るのである。

(自由意思によって、思いやり、正義、礼儀、智慧について)思考していないだけなのである。

そのため、言われています。

『求めれば、得られる。

捨ててしまえば、失くしてしまう。

あるいは、人同士の相互の善良さや智慧の差が数倍に成って計算できないほどの物に成るのは、自分の才能、素質、力を尽くす事ができていない事による物なのである』と。

『詩経』で言われています。

『天の神が人々(などの万物)を生じている。

(そのため、)万物には、法則が有るのである。

人々は、平安を選び取れば、そのような美徳を好むであろう』と。

孔子先生は言いました。

『この詩経の詩の作者は、道理、真理を知っている』と。

そのため、万物には、法則が有るのである。
人々は、平安を選び取れば、このため、そのような美徳を好むのである」

孟子、曰。
「富歳、子弟、多、頼。
凶歳、子弟、多、暴。
非、天、之、降、才、爾、殊、也。
其、所以、陥溺、其心、者、然、也。
今、夫、麰、麦、播、種、而、耰、之。
其地、同、樹、之、時、又、同。
浡然、而、生、至、於、日至之時、皆、熟、矣。
雖、有、不同、則、地、有、肥磽、雨露之養、人事、之、不、斉、也。
故、凡、同類、者、挙、相、似、也。
何、独、至、於、人、而、疑、之？
聖人、与、我、同類、者。
故、龍子、曰。
『不、知、足、而、為、屨、我、知、其、不、為、蕢、也』。
屨、之、相、似、天下之足、同、也。
口、之、於、味、有、同、耆、也。
易牙、先、得、我口、之、所、耆、者、也。

如(もし)使(させる)、口、之(の)、於、味、也、其(その)性、与(と)、人、殊(ことなる)、若(のよう)、犬、馬、之(の)、与(と)、

我、不、同類、也、則(すなわち)、天下、何、耆(このむ)、皆、従、易牙、之(の)、於、味、也?

至、於、味、天下、期、於、易牙。

是(これ)、天下之口、相、似(にている)、也。

惟(ただ)、耳、亦(また)、然。

至、於、声、天下、期、於、師曠(有名な音楽家)。

是(これ)、天下之耳、相、似(にている)、也。

惟(ただ)、目、亦(また)、然。

至、於、子都(有名な美形の男性)、天下、莫(いない)、不、知、其姣(その美しさ)、也。

不、知、子都(有名な美形の男性)之姣(美しさ)、者(もの)、無(ない)、目、者(もの)、也。

故、曰。

『口、之(の)、於、味、也、有、同、耆(このむ)、焉。

耳、之(の)、於、声、也、有、同、聴、焉。

目、之(の)、於、色、也、有、同、美、焉。

至、於、心、独、無(ない)、所、同、然(しかり)、乎?』。

心、之(の)、所、同、然(しかり)、者(もの)、何、也?

謂、理、也、義、也。

聖人、先、得、我心(わが)、之(の)、所、同、然(しかり)、耳(のみ)。

故、理、義、之(の)、悦(よろこばす)、我心(わが)、猶(ちょうど〜のよう)、芻豢(家畜)、之(の)、悦(よろこばす)、我口(わが)」

孟子先生は言った。

「豊作の年は、若者には、他人を頼ってしまう者が多い。

凶作の年は、若者には、乱暴な者が多い。

天の神からの才能が、そのように、異なっている訳ではないのである。
なぜなら、自分の心を肉欲に熱中させてしまう者が、そうなってしまうのである。
今、大麦などの麦の種を播(ま)いて土をかぶせたとします。
その土地も同じですし、種を植えた時もまた同じです。
種は、盛んに芽などを生じて、夏至の時に至ると、皆、熟します。
違いが有っても、土地には土地の肥沃さの違いが有りますし、雨や露(つゆ)による栄養の違いが有りますし、人による仕事の違いが有ります。
そのため、一般的に、同類のものは皆、相互に似ています。
どうして、人に至ってだけ、単独で、同類の者は似ているが、違いが生じるのを疑うのか？
聖人と、私達、人は同類の者達でした。
そのため、龍子は言いました。
『履く人を知らずに作られた靴でも、私は、それが土を運ぶ籠(かご)ではない（、靴である）のが分かる』と。
靴が相互に似ているのは、天下の人々の足が同類だからである。
口の味覚でも、同類の味を好みます。
有名な料理人である易牙は、誰よりも先んじて、私達、人の口の味覚が好む味を『会得』、『理解』しているのです。
もし、犬や馬の味覚と、私達、人の味覚が異なるように、口の味覚の、有名な料理人である易牙の性質と、他人の性質が異なるようにさせる事ができたら、天下の人々が皆、易牙の味を好む事は無いであろう！
味に至っては、天下の人々は、有名な料理人である易牙に期待できるのです。
これは、天下の人々の口の味覚が相互に似ているからなのです。

耳もまた同様なのです。
音声に至っては、天下の人々は、有名な音楽家である師曠に期待できるのです。
これは、天下の人々の耳の聴覚が相互に似ているからなのです。
目もまた同様なのです。
有名な美形の男性である子都に至っては、天下の人々で、その美しさを知らない人はいません。
有名な美形の男性である子都の美しさを知らない者は、目が無い者くらいであろう。
そのため、私、孟子は、言います。
『味に対する、口の味覚は、同じものを好む事が有ります。
音声に対する、耳の聴覚は、同じものを好んで聴く事が有ります。
色形に対する、目の視覚は、同じものを美しいとして好む事が有ります。
心に至ってだけ、単独で、同じものを正しいとして好まない事など有り得ようか？　いいえ！』と。
心が、同じものを正しいとして好むものとは、何か？
言ってみれば、理(ことわり)であるし、正義である。
聖人達は、私達よりも先んじて、私達、人の心が同じく正しいとして好むものを『会得』、『理解』しているだけなのです。
そのため、ちょうど、家畜の肉が私達、人の口の味覚を喜ばせるように、
理(ことわり)や正義は、私達、人の心を喜ばせるのです」

孟子、曰。
「牛山之木、嘗、美、矣。
以、其、郊、於、大国、也、斧斤、伐、之。
可、以、為、美、乎？
是、其日夜、之、所、息、雨露、之、所、潤、非、無、萌蘖之生、焉。
牛、羊、又、従、而、牧、之。
是、以、若、彼、濯濯、也。
人、見、其濯濯、也、以、為、未、嘗、有、材、焉。
此、豈、山之性、也、哉？
雖、存、乎、人、者、豈、無、仁義之心、哉？
其、所以、放、其良心、者、亦、猶、斧斤、之、於、木、也。
旦旦、而、伐、之、可、以、為、美、乎？
其日夜、之、所、息、平旦之気。
其好悪、与、人、相、近、也、者、幾、希、則、其旦、昼、之、所、為、
有、梏亡、之、矣。
梏、之、反覆、則、其夜気、不足、以、存。
夜気、不足、以、存、則、其、違、禽獣、不、遠、矣。
人、見、其禽獣、也、而、以、為、未、嘗、有、才、焉、者。
是、豈、人之情、也、哉？
故、苟、得、其養、無、物、不、長。
苟、失、其養、無、物、不、消。
孔子、曰。
『操、則、存。

舎、則、亡。
出入、無、時。
莫、知、其郷。
惟、心、之、謂、与』」

孟子 先生は言った。

「牛山という山は、森が、かつて美しかった。

牛山は、大国の郊外であったので、(その大国の人々は、)斧で、牛山の森の木を伐採してしまいました。

そのせいで、牛山は、森を、美しいとする事ができなく成ってしまった！

牛山の森の木の、日夜の恒常的な生命力は、雨や露の潤いによって、木の芽を生じます。

しかし、牛や、羊を、この牛山に放牧してしまって(木の芽を食べさせてしまって)いるのです。

このため、かの牛山は、禿山なのである。

人は、牛山が禿山であるのを見ると、『未だかつて(木を生やす)才能、力が無いのである』と見なしてしまう。

しかし、これが、どうして山の性質であろうか？　いいえ！

人に存在する才能でも同様であり、思いやりや正義の心が無いのが、どうして人の性質であろうか？　いいえ！

思いやりや正義の心が無い理由は、ちょうど、斧で木を伐採してしまうように、自分の良心を放棄してしまうからなのである。

毎日、木を伐採してしまうように、自分の良心を放棄してしまったら、『自分の心は美しい』と見なせるであろうか？　いいえ！

人の心にも、日夜の恒常的な生命力である、『夜明けの気』、『知恵による気』が有る。

しかし、人の心の、善を好み悪を憎悪する、善悪の是非を判断できる知的な心が、聖人、真の人と相互に近い者が希少に近いのは、朝と昼という日中の行動が、この善悪の是非を判断できる知的な心を乱して失わせてしまうからなのである。

この善悪の是非を判断できる知的な心を乱してしまうのをくり返してしまえば、夜の気だけでは存在させるのに不足してしまうのである。

夜の気だけでは存在させるのに不足してしまえば、獣(けだもの)、動物的人間、人でなしに近づいてしまうのである。

人は、獣(けだもの)、動物的人間、人でなしの人を見ると、『未だかつて(思いやりや正義の心を生じる)才能、力が無いものなのである』と見なしてしまう。

しかし、これが、どうして、人情、人の性質であろうか？　いいえ！

そのため、仮に、栄養を得れば、成長しないものは無いのである。

仮に、栄養を失ってしまえば、消滅しないものは無いのである。

孔子先生は言いました。

『選び取れば、存在する。

捨ててしまえば、滅びてしまう。

出入りする時を知覚できない。

故郷、根源を知る事ができない。

これは、心について言っているのであろうか』と」

孟子、曰。

「無、或、乎、王之不智、也。
雖、有、天下、易、生、之、物、也、一日、暴、之、十日、寒、之、未、
有、能、生、者、也。
吾、見、亦、罕、矣。
吾、退、而、寒、之、者、至、矣。
吾、如、有、萌、焉、何、哉？
今、夫、奕、之、為、数、小数、也、不、専、心、致、志、則、不、得、
也。
奕、『秋』、通国、之、善、奕、者、也。
使、奕、『秋』、誨、二人、奕。
其一人、専、心、致、志、惟、奕、『秋』、之、為、聴。
一人、雖、聴、之、一心、以、為、『有、鴻鵠、将、至』、思、『援、
弓繳、而、射、之』、雖、与、之、倶、学、弗若、之、矣。
為、是、其智、弗若、与？
曰、非、然、也」

孟子先生は言った。

「王の愚かさをあやしむ事は無いのである。

天下一、生じやすいものが有っても、一日間しか日に当てて暖めず、十日間、寒さで冷やしてしまえば、生じる事ができるものは未だ無いのである。

私、孟子もまた、王に会えるのは稀(まれ)なのです。

私、孟子が王の所から退出すると、王の心や知恵を寒さで冷やしてしまう者どもが到来します。

私、孟子は、どうしたら、王の心や知恵の芽を生じさせる事ができるというのか？　いいえ！　できない！

今、囲碁をしてきた回数は少数ですが、専心して志さなければ、(囲碁を)会得できません。

囲碁の達人である秋は、国で一番の囲碁の達人の者です。

囲碁の達人である秋に、二人の人へ囲碁を教えさせたとします。

それらのうちの一方の一人は、専心して志して、ただ、ひたすら、囲碁の達人である秋の教えを聴き入れたとします。

他方の、もう一人は、囲碁の達人である秋の教えを聴いても、一心に『大きな鳥が到来しようとしている』と思ってしまい、『弓で糸をつけた矢を引いて、この大きな鳥を射止めたい』と思ってしまっていたら、一方の一人と共に学んでいても、一方の一人には及ばないのです。

これは、その他方の一人の知恵が、一方の一人に及ばないからでしょうか？

いいえ！

そうではない、と断言します」

孟子、曰。

「魚、我(わが)、所、欲、也。

熊、掌、亦(また)、我(わが)、所、欲、也。

二者、不、可、得、兼、舎(すてる)、魚、而、取、熊、掌、者(もの)、也。

生、亦(また)、我(わが)、所、欲、也。

義、亦(また)、我(わが)、所、欲、也。

二者、不、可、得、兼、舎(すてる)、生、而、取、義、者(もの)、也。

生、亦(また)、我(わが)、所、欲、所、欲、有、甚、於(よりも)、生、者(もの)。

故、不、為(なす)、苟(かりに)、得、也。

死、亦(また)、我(わが)、所、悪(ぞうおする)、所、悪(ぞうおする)、有、甚、於(よりも)、死、者(もの)。

故、患、有、所、不、辟(さける)、也。

如(もし)、使(させる)、人、之(の)、所、欲、莫(ない)、甚、於(よりも)、生、則(すなわち)、凡(およそ)、可、以、得、生、

者(ば)、何、不、用、也？

使(させる)、人、之(の)、所、悪(ぞうおする)、莫、甚、於(よりも)、死、者(もの)、則(すなわち)、凡(およそ)、可、以、辟(さける)、患、

者(ば)、何、不、為(なす)、也？

由(よる)、是(これ)、則(すなわち)、生、而、有、不、用、也。

由(よる)、是(これ)、則(すなわち)、可、以、辟(さける)、患、而、有、不、為(なす)、也。

是故(このため)、所、欲、有、甚、於(よりも)、生、者(もの)。

所、悪(ぞうおする)、有、甚、於(よりも)、死、者(もの)。

非、独、賢者、有、是(この)心、也。

人、皆、有、之(これ)。

賢者、能、勿(ない)、喪、耳(のみ)。

一、箪、食、一、豆、羹、得、之(これ)、則(すなわち)、生、弗(ない)、得、則(すなわち)、死、嘑(どなる)爾、而、

与(あたえる)、之(これ)、行、道、之(の)、人、弗(ない)、受。

蹴爾(ふみつける)、而、与(あたえる)、之(これ)、乞、人、不、屑(こころよくおもう)、也。
万鍾(大量)、則(すなわち)、不、弁、礼義、而、受、之(これ)。
万鍾(大量)、於、我、何、加、焉？
為(ため)、宮室之美、妻妾之奉、所、識、窮乏者、得、我、与(か)？
郷、為(ため)、身、死、而、不、受。
今、為(ため)、宮室之美、為(なす)、之(これ)。
郷、為(ため)、身、死、而、不、受。
今、為(ため)、妻妾之奉、為(なす)、之(これ)。
郷、為(ため)、身、死、而、不、受。
今、為(ため)、所、識、窮乏者、得、我、而、為(なす)、之(これ)。
是(これ)、亦(また)、不可以已(やむをえず)、乎？
此(これ)、之(これ)、謂、『失、其(その)本心』」

孟子先生は言った。
「魚は、私、孟子も欲しい物です。
熊の手もまた、私、孟子も欲しい物です。
これら二つの物を両方共に得る事ができないのであれば、魚を捨てて、熊の手を取る物なのです。
生命もまた、私、孟子も欲しい物です。
正義もまた、私、孟子も欲しい物です。
これら二つの物を両方共に得る事ができないのであれば、生命を捨てて、正義を取る物なのです。

生命もまた、私、孟子も欲しい物ですが、生命よりも、とても欲しい物が有るからなのです。

そのため、仮に、生命を得る事ができても、そうしないのです。

死もまた、私、孟子も嫌う物ですが、死よりも、とても嫌いな物が有るからなのです。

そのため、心配していても、死を避けない場合が有るのです。

もし、人から、生命よりも、とても欲しい物を無くせたら、一般的に、生命を得る事ができるならば、何でも使用してしまうであろう！

もし、人から、死よりも、とても嫌いな物を無くせたら、一般的に、死を心配して避ける事ができるならば、何でもしてしまうであろう！

このため、生命を得る事ができても、生命を得る手段を使用しない場合が有るのである。

このため、死を心配して避ける事ができても、死を避けない場合が有るのである。

そのため、生命よりも、とても欲しい物(である正義)が有るのである。

そのため、死よりも、とても嫌いな物(である悪)が有るのである。

独り、賢者だけが、このような心が有る、という訳ではないのである。

人には皆、このような心が有るのである。

賢者は、このような心をよく失わないだけなのである。

竹の容器一つ分の食べ物や、容器一つ分のスープを得れば生きる事ができ、得られなければ死ぬ場合でも、どなって与えようとすれば、道理、真理を行(おこな)っている人は受け取らないであろう。

踏みにじるようにして与えようとすれば、乞食をしている人も快く思わないであろう。

しかし、大量の金銭は、礼儀をわきまえずに、受け取ってしまう。
大量の金銭が、私達、人に、何を加える事ができるというのか？
美しい宮殿のためか？　妻へ捧げるためか？　知人の困窮している貧乏人に
与えるためか？
過去には、身体が死んでも、受け取らなかったのに。
今では、美しい宮殿のために、受け取ってしまう。
過去には、身体が死んでも、受け取らなかったのに。
今では、妻へ捧げるために、受け取ってしまう。
過去には、身体が死んでも、受け取らなかったのに。
今では、知人の困窮している貧乏人に与えるために、受け取ってしまう。
これもまた、やむを得ずなのか？　いいえ！
このようにしてしまうのを『自分の本心を失ってしまっている』と言うので
ある」

孟子、曰。
「仁、人、心、也。
義、人、路、也。
舎（すてる）、其（その）路、而、弗（ない）、由（よる）。
放、其（その）心、而、不、知、求。
哀、哉。
人、有、鶏、犬、放、則（すなわち）、知、求、之（これ）。

有、放、心、而、不、知、求。
学問之道、無(ない)、他、求、其(その)放心、而已(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。
「思いやりは、人の心なのである。
正義は、人の道なのである。
正義という道を捨ててしまって、正義という道によらずに悪行をしてしまう。
思いやりという心を放棄してしまって、求める事すら知らない。
悲しいかな。
人は、鶏や、犬を(誤って)解き放ってしまう事が有れば、これらを求める事を知っている。
思いやりという心を放棄してしまう事が有っても、求める事すら知らない。
学問という道は、他でもない、放棄してしまっている思いやりという心を求めているだけなのである」

孟子、曰。
「今、有、無名之指(薬指)、屈、而、不、信。
非、疾痛、害、事(こと)、也。
如(もし)、有、能、信、之(これ)、者(もの)、則(すなわち)、不、遠、秦、楚之路。
為(ため)、指、之(の)、不若(しかず)、人、也。

指、不若、人、則、知、悪、之。
心、不若、人、則、不、知、悪 。
此、之、謂、『不、知、類』、也」

孟子 先生は言った。

「今、薬指が曲がって伸びなく成ってしまったとします。
病気や痛みは無いので、仕事に支障は無いとします。
もし、この曲がったままの薬指を伸ばす事ができる者がいれば、秦という国
や、楚という国への道の距離を遠いとしないで、その者の所へ行くであろう。
自分の曲がったままの薬指が、他人の普通の薬指に及ばないためである。
自分の曲がったままの薬指が、他人の普通の薬指に及ばないのは、憎悪する
事を知っている。
しかし、自分のねじ曲がったままの心が、他人の善良な心に及ばないのは、
憎悪する事すら知らないのである。
このようであるのを『分類を知らない』と言うのである」

孟子、曰。

「拱把之桐、梓、人、苟、欲、生、之、皆、知、所以、養、之、者。
至、於、身、而、不知、所以、養、之、者。
豈、愛、身、不若、桐、梓、哉？

弗、思、甚、也」

孟子先生は言った。

「一握りの太さの桐や梓を、人が、仮に、生育したいと欲したら、皆、養う方法を知っている物なのである。

しかし、自身(の心)に至っては、修養する方法を知らない物なのである。

どうして、自身(の心)への愛着は、桐や梓に及ばないであろうか？　いいえ！

思考しない事が、はなはだし過ぎるのである」

孟子、曰。

「人、之、於、身、也、兼、所、愛。

兼、所、愛、則、兼、所、養、也。

無、尺寸之膚、不、愛、焉、則、無、尺寸之膚、不、養、也。

所以、考、其善、不善、者、豈、有、他、哉？　於、己、取、之、而已、矣。

体、有、貴賤、有、小大。

無、以、小、害、大。

無、以、賤、害、貴。

養、其小、者、為、小人。

養、其大、者、為、大人。
今、有、場師。
舍、其梧、檟、養、其樲、棘、則、為、賤、場師、焉。
養、其一指、而、失、其肩、背、而、不知、也、則、為、狼疾人、也。
飲食之人、則、人、賤、之、矣。
為、其、養、小、以、失、大、也。
飲食之人、無、有、失、也、則、口、腹、豈、適、為、尺寸之膚、
哉？」

孟子先生は言った。
「人は、自身に対しては、全てを兼ね合わせて愛する。
全てを兼ね合わせて愛せば、全てを兼ね合わせて養う。
わずかな皮膚でも愛せば、わずかな皮膚でも養う。
養う方法の良し悪しを考えれば、どうして責任が他人に有るであろうか？
いいえ！　責任は自身にしか無いのである。
体には貴賤が有るし、優劣が有る。
劣悪な部分で、優良な部分を損なう事はしない。
卑賤な部分で、高貴な部分を損なう事はしない。
それなのに、劣悪な部分を養ってしまう者が、矮小な人なのである。
優良な部分を養う者が、大いなる人なのである。
今、庭師がいるとします。
桐や檟を捨てて、樲やいばらを養ったら、劣悪な庭師と見なされるであろう。
一本の指を養って、肩や背中を失ったら、乱心した人と見なされるであろう。

飲食するだけの動物的人間を、人は劣悪であるとします。
飲食するだけの動物的人間は、劣悪な部分を養って、優良な部分を失ってしまうためです。
飲食するだけの動物的人間でも、優良な部分を失わない場合が有るが、口や腹を、わずかな皮膚のために犠牲にしないからである！」

公都子、問、曰。
「鈞、是、人、也。
或、為、大人。
或、為、小人。
何、也？」

孟子、曰。
「従、其大体、為、大人。
従、其小体、為、小人」

曰。
「鈞、是、人、也。
或、従、其大体。
或、従、其小体。
何、也？」

曰。

「耳、目之官、不、思、而、蔽、於（によって）、物。
物、交、物、則（すなわち）、引、之（これ）、而已（のみ）、矣。
心之官、則（すなわち）、思。
思、則（すなわち）、得、之（これ）。
不、思、則（すなわち）、不、得、也。
比（これ）、天、之（の）、所、与（あたえる）、我、者（もの）、先、立、乎、其（その）大者、則（すなわち）、其（その）小者、不、
能、奪、也。
此（これ）、為（なる）、大人、而已（のみ）、矣」

公都子が孟子 先生に質問して言った。
「等しかったのが人なのです。
それなのに、ある人は、大いなる人に成ります。
別の、ある人は、矮小な人に成ってしまいます。
なぜ、でしょうか？」

孟子 先生は言った。
「自分の体の優良な部分に従えば、大いなる人と成ります。
自分の体の劣悪な部分に従ってしまえば、矮小な人に成ってしまいます」

公都子が言った。
「等しかったのが人なのです。

それなのに、ある人は、自分の体の優良な部分に従います。
別の、ある人は、自分の体の劣悪な部分に従ってしまいます。
なぜ、でしょうか？」

　孟子 先生は言った。
「耳や目などの器官は、思考力が無いので、物によって覆われてしまう。
物である耳や目などの器官が、物と交流すると、物にひかれてしまうだけなのです。
心の器官は、思考力が有ります。
思考すれば、道理、真理を『会得』、『理解』できます。
思考しなければ、道理、真理を『会得』、『理解』できないのです。
この心は、天の神が私達、人に与えてくれている物で、先に、心という優良な部分を確立すれば、劣悪な部分は簒奪できなく成るのである。
このようにしているのが、大いなる人に成っているだけなのです」

　孟子、曰。
「有、天爵、者（もの）。
有、人爵、者（もの）。
仁義、忠信、楽（たのしむ）、善、不、倦（あきる）、此（これ）、天爵、也。
公、卿、大夫、此（これ）、人爵、也。
古之人、修、其（その）天爵、而、人爵、従、之（これ）。

今之人、修、其(その)天爵、以、要(もとめる)、人爵。
既、得、人爵、而、棄、其(その)天爵、則(すなわち)、惑之甚者、也。
終(ついに)、亦(また)、必、亡、而已(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。
「天爵という物が有ります。
人爵という物が有ります。
思いやりや、正義や、誠実さや、善行を楽しむ事や、善行に飽きない事、これらが天爵なのです。
公爵という地位や、卿という高官の地位や、大夫という上級の役人の地位、これらが人爵なのです。
古代人は、天爵を修行し、人爵は天爵に応じて与えられました。
今の人は、天爵を修行し、天爵によって人爵を求めます。
人爵を得て、天爵を放棄してしまったら、迷いの激しい者であろう。
そのような人は、終(つい)には必ず、滅びるだけである」

孟子、曰。
「欲、貴、者(は)、人、之(の)、同、心、也。
人人、有、貴、於、己、者(もの)。
弗(ない)、思、耳(のみ)、矣。

人、之(の)、所、貴、者(もの)、非、良、貴、也。
趙孟、之(の)、所、貴、趙孟、能、賤、之(これ)。
『詩』、云。
『既、酔、以、酒、既、飽、以、徳』。
言、飽、乎、仁義、也。
所以、不、願、人之　膏　梁(美味い物を食べる事ができる身分の高さ)　之味、也。
令聞(名声)広誉、施、於、身。
所以、不、願、人之文　繍(美しい模様の衣服)、也」

孟子先生は言った。
「高貴な物を欲(ほっ)するのは、人が、同じく持っている心なのである。
(実は、)人々は、自分の中に、高貴な物を所有していたのである。
思考してこなかっただけなのである。
人が(人為的に)高貴にしている物は、善い高貴な物ではない。
有名な権力者である趙孟が(人為的に)高貴にしている物は、趙孟が(人為的に)卑賤にできてしまう物なのである。
『詩経』で言われています。
『既に(徳、善行という)酒に酔っています。
既に徳、善行(という酒)に満足しています』と。
この言葉は、思いやりや正義を十分にしている事を言っているのである。
そうであれば、他人の高貴な地位を願わなく成ります。
そうであれば、(真の)名声を自身に与える事ができます。

そうであれば、他人の美しい模様の衣服である虚偽の名声を願わなく成ります」

孟子、曰。

「仁、之(の)、勝、不仁、也、猶(ちょうど〜のよう)、水、之(の)、勝、火。

今、之(の)、為(なす)、仁、者(もの)、猶(ちょうど〜のよう)、以、一杯、水、救、一車、薪之火、也。

不、熄、則(すなわち)、謂、之(これ)、『水、不、勝、火』。

此(これ)、又(また)、与(みかたする)、於、不仁、之(の)、甚、者(もの)、也。

亦(また)、終(ついに)、必、亡、而已(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。

「思いやりが、思いやりの無さに勝つのは、ちょうど、水が火に打ち勝って消すような物なのです。

今の慈善行為をしている者は、ちょうど、一杯の水で、車一台分の薪の火を消火しようとしているものなのです。

火がやまなければ、『水は火に打ち勝てない』、『思いやりは、思いやりの無さに勝てない』と言ってしまいます。

このように言ってしまう者どもは、また、思いやりの無さに味方してしまう者どものうち、ひどい者どもでもあります。

このように言ってしまう者どももまた、終（つい）には必ず、滅びてしまうだけなのです」

孟子、曰。
「五穀、者（は）、種之美者、也。
苟（かりに）、為（なす）、不、熟、不如（しかず）、荑（イヌビエ）、稗（ヒエ）。
夫（それ）、仁、亦（また）、在、乎、熟、之（これ）、而已（のみ）、矣」

孟子先生は言った。
「五穀は、穀物の種のうち優れている物なのです。
仮に、穀物が熟さなければ、イヌビエやヒエという穀物に及ばないのです。
思いやりもまた、熟させる必要が有るだけなのです」

孟子、曰。
「羿、之（の）、教、人、射、必、志、於、彀（標的）。
学者、亦（また）、必、志、於、彀（標的）。
大匠、誨（おしえる）、人、必、以、規矩。

学者、亦（また）、必、以、規矩」

　孟子 先生は言った。

「羿が、他人に、弓で矢を射る技術を教える時には必ず、的を目標として志させます。

学者もまた、目標を志させます。

大工が、他人に教える時には必ず、基準と成る、コンパスと、Ｌ字形の定規を利用します。

学者もまた、規則、規範、手本と成るものを利用します」

告子下

「任」、人、有、問、屋廬子、曰。

「礼、与(と)、食、孰(どちらが)、重？」

曰。

「礼、重」

「色、与(と)、礼、孰(どちらが)、重？」

曰。

「礼、重」

曰。

「以、礼、食、則(すなわち)、饑、而、死、不、以、礼、食、則(すなわち)、得、食、必、以、礼、乎？

親迎(新郎が新婦を迎えに行く)、則(すなわち)、不、得、妻、不、親迎(新郎が新婦を迎えに行く)、則(すなわち)、得、妻、必、親迎(新郎が新婦を迎えに行く)、乎？」

屋廬子、不能、対(こたえる)。

明日、之(いく)、鄒、以、告、孟子。

孟子、曰。

「於、答、是、也、何、有？

不、揣、其本、而、斉、其末、方寸之木、可、使、高、於、岑楼。

金、重、於、羽、者、豈、謂、一、鉤、金、与、一、輿、羽、之、謂、

哉？

取、食、之、重、者、与、礼、之、軽、者、而、比、之、奚、翅、食、

重？

取、色、之、重、者、与、礼、之、軽、者、而、比、之、奚、翅、色、

重？

往、応、之、曰。

『紾、兄、之、臂、而、奪、之、食、則、得、食、不、紾、則、不、

得、食、則、将、紾、之、乎？

踰、東、家、墻、而、摟、其処子、則、得、妻、不、摟、則、不、得、

妻、則、将、摟、之、乎？』」

任という国の人がいて、屋盧子に質問して言った。

「礼儀と、食欲では、どちらが重要ですか？」

屋盧子が言った。

「礼儀の方が重要です」

任の人が言った。

「色欲と、礼儀では、どちらが重要ですか？」

屋廬子が言った。
「礼儀の方（ほう）が重要です」

任の人が言った。
「礼儀によって食べようとすれば飢えて死んでしまいますが、無礼によって食べようとすれば食べ物を得られる場合でも、必ず礼儀によって行うべきでしょうか？
新郎が新婦を迎えに行く礼儀を行えば妻を得られず、新郎が新婦を迎えに行く礼儀を行わなければ妻を得られる場合でも、必ず新郎が新婦を迎えに行く礼儀を行うべきでしょうか？」

屋廬子は、答える事ができなかった。

翌日、鄒という所へ行って、孟子 先生に、この質問を告げ知らせた。

孟子 先生は言った。
「その質問に答える事について、何も問題は無い！
根本から測らずに、(一方の根本を他方の)末端にそろえてしまえば、わずかな長さの木を、高い建物よりも高くできてしまいます。
『黄金は羽よりも重い』と言いますが、『帯留め一つ分の黄金と、車一台分の羽』の事を言ってはいません！
食べ物が重大である場合を取り上げて、礼儀を軽視しても善い場合と比べても、全ての場合で食欲が重要には成らない！

色欲の対象が重大である場合を取り上げて、礼儀を軽視しても善い場合と比べても、全ての場合で色欲が重要には成らない！

その、任の人の所に行って、このように言ってみなさい。

『兄の腕をねじ曲げてしまって兄から食べ物を奪ってしまえば食べ物を得られるが、ねじ曲げなければ食べ物を得られない場合は、兄の腕をねじ曲げてしまおうとするのか？

東の家の壁を越えて、その東の家の処女をさらってしまえば妻を得られるが、さらわなければ妻を得られない場合は、さらおうとするのか？』と」

曹交、問、曰。

「『人、皆、可、以、為（なる）、堯、舜』。

有、諸（これ）？」

孟子、曰。

「然」

「交（＝曹交）、聞、文王、十尺、湯、九尺。

今、交（＝曹交）、九尺四寸、以、長。

食、粟、而已（のみ）。

如何（どうすれば）、則（すなわち）、可？」

曰。

「奚、有、於、是？

亦、為、之、而已、矣。

有、人、於、此。

力、不能、勝、一匹、雛、則、為、無力、人、矣。

今、曰、『挙、百鈞』、則、為、有、力、人、矣。

然、則、挙、『烏獲』之任、是、亦、為、『烏獲』、而已、矣。

夫、人、豈、以、不、勝、為、患、哉？

弗、為、耳。

徐行、後、長者、謂、之、『弟』。

疾、行、先、長者、謂、之、『不弟』。

夫、徐行、者、豈、人、所、不能、哉？

所、不、為、也。

堯、舜之道、孝弟、而已、矣。

子、服、堯之服、誦、堯之言、行、堯之行、是、堯、而已、矣。

子、服、桀之服、誦、桀之言、行、桀之行、是、桀、而已、矣」

曰。

「交(＝曹交)、得、見、於、鄒、君、可、以、仮、館。

願、留、而、受、業、於、門」

曰。

「夫、道、若、大路、然。

豈、難、知、哉？

人、病、不、求、耳（のみ）。
子、帰、而、求、之（これ）、有、余、師」

　曹交が孟子 先生に質問して言った。
「『人は皆、堯や、舜のように成る事ができる』と言われています。
これは実際に有り得る事でしょうか？」

　孟子 先生は言った。
「そうです」

（曹交が言った。）
「『文王の背の高さは十尺、約三メートルであった。殷の湯王の背の高さは九尺、約二・七メートルであった』と私、曹交は聞いた事が有ります。
今、私、曹交の背の高さは九尺四寸と高いです。
しかし、穀物などを食べる事しかできません。
どうすれば良いのでしょうか？」

　孟子 先生は言った。
「そこ、背の高さが問題ではないのです！
私達もまた、その堯、舜のような善行をするだけなのです。
ここに、ある人がいたとします。
その人が、鳥の雛（ひな）一羽分の重さにも勝てないのであれば、『無力な人である』と見なされてしまいます。

その人が、今、『百鈞ものの重いものを持ち上げられる』と言えば、『力が有る人である』と見なしてもらえます。
そうであるならば、力持ちで有名な人である烏獲ならば持ち上げられるような重いものを持ち上げれば、烏獲のような人に成っているだけなのである。
人は、自分には不可能な事について心配しなくても善いのです！
問題は、自分にも可能である善行をしない事だけなのです。
ゆっくりと歩いて年長者に遅れて歩く事を『目上の人を敬っている』と言います。
速く歩いて年長者よりも先行してしまう事を『目上の人を敬っていない』と言います。
『ゆっくりと歩く』事は、人には可能である事です！
問題は、自分にも可能である善行をしない事なのです。
『堯と、舜の道理、真理とは、目上の人を敬う事だけなのである』と言えます。
あなたが、堯のような質素な服装をして、堯のような善い言葉を話して、堯のような善行を行えば、堯のような人に成っているばかりなのである。
あなたが、暴君である桀のような豪華な服装をして、暴君である桀のような悪い言葉を話して、暴君である桀のような悪行を行えば、暴君である桀のような人に成っているばかりなのである」
曹交が言った。
「私、曹交は、鄒の君主に会う事ができ得たら、家を借りる事ができるはずです。

願わくば、孟子 先生の所に留まって、孟子 先生の門弟、弟子として、孟子 先生の善行の教えを受けたいです」

孟子 先生は言った。

「人の道である正義、善は、大きな道のように、明確なのです。善について知るのは簡単なのです！人は、善を求めすらしない事を気に病むだけで善いのです。あなた、曹交が帰郷しても、この善を求めれば、私、孟子以外にも師はいるのです」

公孫丑、問、曰。

「高子、曰。

『小弁、小人之詩、也』」

孟子、曰。

「何、以、言、之?」

曰。

「怨」

曰。

「固、哉、高叟(=高子)、之、為、詩、也。
有、人、於、此。
『越』、人、関、弓、而、射、之、則、己、談笑、而、道、之。
無、他、疏、之、也。
其兄、関、弓、而、射、之、則、己、垂、涕泣、而、道、之。
無、他、戚、之、也。
小弁之怨、親、親、也。
親、親、仁、也。
固、矣、夫、高叟(=高子)、之、為、詩、也」

曰。

「『凱風』、何、以、不、怨?」

曰。

「『凱風』、親之過、小、者、也。
『小弁』、親之過、大、者、也。
親之過、大、而、不、怨、是、愈、疏、也。
親之過、小、而、怨、是、不、可、磯、也。
愈、疏、不孝、也。
不、可、磯、亦、不孝、也。
孔子、曰。
『舜、其、至、孝、矣。
五十、而、慕』」

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。

「高子は言っています。

『詩経の小弁は、矮小な人による詩である』と」

孟子 先生は言った。

「なぜ、そのように言ってしまっているのでしょうか？」

公孫丑が言った。

「『詩経』の『小弁』が親を怨んでいるからです」

孟子 先生は言った。

「頑固な分かっていない人ですね、高子 先生とやらは。詩の論じ方からすると。

ここに人がいたとします。

越という外国の人が弓を引いて、その人を射ようとしたら、その人は談笑しながら、その越という外国の人に話しかけるであろう。

他でも無い、その越という外国の人と親しくないからです。

その人の兄が弓を引いて、その人を射ようとしたら、その人は涙を流しながら、その兄に話しかけるであろう。

他でも無い、その兄の凶行が悲しいからです。

『詩経』の『小弁』が親を怨んでいるのは、親と親しいからなのです。

親と親しいのは、思いやりからなのです。

頑固な分かっていない人ですね、高子 先生とやらは。詩の論じ方からすると」

公孫丑が言った。

「『詩経』の『凱風』は、なぜ、親を怨んでいないのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「『詩経』の『凱風』の親の過(あやま)ちは小さいからです。

『詩経』の『小弁』の親の過(あやま)ちは大きいのです。

親の過(あやま)ちが大きくても怨まないのは、ますます疎遠に成ってしまっているからなのです。

親の過(あやま)ちが小さくても怨むのは、慕う事ができないからなのです。

親と、ますます疎遠に成ってしまうのは、親不孝に成ってしまうのです。

慕う事ができていないのもまた、親不孝に成ってしまうのです。

孔子 先生は言いました。

『舜は、親孝行の至りなのである。

舜は、五十歳に成っても、親を慕っていた』と」

宋牼、将、之(いく)、楚。

孟子、遇、於、「石丘」、曰。

「先生、将、何(どこへ)、之(いく)?」

曰。

「吾、聞、『秦、楚、構(かまえる)、兵』。

我、将、見(あう)、楚王、説、而、罷(やめる)、之(これ)。

楚王、不、悦、我、将、見(あう)、秦王、説、而、罷(やめる)、之(これ)。

二王、我、将、有、所、遇、焉」

曰。

「軻(=孟子)、也、請、無(ない)、問、其(その)詳、願、聞、其(その)指。

説、之(これ)、将、何如(どのように)?」

曰。

「我、将、言、其(その)不利、也」

曰。

「先生之志、則(すなわち)、大、矣。

先生之号、則(すなわち)、不、可。

先生、以、利、説、秦、楚之王、秦、楚之王、悦、於、利、以、罷(やめる)、三軍(大軍)之師、是(これ)、三軍(大軍)之士、楽(たのしむ)、罷(やめる)、而、悦、於、利、也。

為(なる)、人、臣、者(もの)、懐(いだく)、利、以、事(つかえる)、其(その)君、為(なる)、人、子、者(もの)、懐(いだく)、利、以、事(つかえる)、其(その)父、為(なる)、人、弟、者(もの)、懐(いだく)、利、以、事(つかえる)、其(その)兄、是(これ)、君臣、父子、兄弟、終(ついには)、去、仁義、懐(いだく)、利、以、相、接。

然、而、不、亡(ほろびる)、者(もの)、未、之(これ)、有、也。

先生、以、仁義、説、秦、楚之王、秦、楚之王、悦、於、仁義、以、罷(やめる)、
三軍(大軍)之師、是(これ)、三軍(大軍)之士、楽(たのしむ)、罷(やめる)、而、悦、於、仁義、也。
為(なる)、人、臣、者(もの)、懐(いだく)、仁義、以、事(つかえる)、其(その)君、為(なる)、人、子、者(もの)、懐(いだく)、仁義、
以、事(つかえる)、其(その)父、為(なる)、人、弟、者(もの)、懐(いだく)、仁義、以、事(つかえる)、其(その)兄、是、君臣、
父子、兄弟、去、利、懐(いだく)、仁義、以、相、接、也。
然、而、不、王者、未、之(これ)、有、也。
何(どうして)、必、曰、利?」

宋牼が楚へ行こうとしていた。

孟子先生は、石丘という所で、宋牼と出会って、宋牼に言った。
「宋牼先生、どこへ行こうとしているのでしょうか?」

宋牼が言った。
「私、宋牼は、『秦と、楚が、軍隊を身構えさせて、にらみ合っている』と聞きました。
私、宋牼は、楚の王に会って、説得して、その戦争をやめさせようとしています。
楚の王が喜んで賛同してくれなかったら、私、宋牼は、秦の王に会って、説得して、その戦争をやめさせようと思っています。
二人の王のうち、どちらかとは、私、宋牼と意見が合いそうである、と思っています」

孟子 先生は言った。
「私、孟子は、請い願わくば、その詳細については質問しないので、願わくば、その指針を聞きたいです。
どのように説得しようとしているのでしょうか？」

宋牼が言った。
「私、宋牼は、その戦争の不利益について言おうと思っています」

孟子 先生は言った。
「宋牼 先生の志は、大いなる物です。
しかし、宋牼 先生の説得方針は、善くないです。
宋牼 先生が、利益によって、秦や、楚の王を説得して、秦や、楚の王が利益を喜んで大軍を率いるのをやめたら、大軍の兵士達も、戦争停止を喜んで、利益を喜んでしまいます。
臣下である者が利益を心に抱いて自分の君主に仕えてしまったら、子である者が利益を心に抱いて自分の父に仕えてしまったら、弟である者が利益を心に抱いて自分の兄に仕えてしまったら、君主も臣下も、父も子も、兄も弟も、思いやりや正義を捨て去ってしまって、利益を心に抱いて相互に接してしまう事に成ってしまいます。
そう成ってしまっても、滅びなかった者達は、未だいないのです。
宋牼 先生が、思いやりや正義によって、秦や、楚の王を説得して、秦や、楚の王が思いやりや正義を喜んで大軍を率いるのをやめたら、大軍の兵士達も、戦争停止を喜んで、思いやりや正義を喜びます。

臣下である者が思いやりや正義を心に抱いて自分の君主に仕えたら、子である者が思いやりや正義を心に抱いて自分の父に仕えたら、弟である者が思いやりや正義を心に抱いて自分の兄に仕えたら、君主も臣下も、父も子も、兄も弟も、利益を捨て去って、思いやりや正義を心に抱いて相互に接する事になります。

そう成っても、王者に成れなかった人達は、未だいないのです。

どうして、必ずしも、利益について話す必要が有るでしょうか？　いいえ！」

孟子、居、鄒、「季任」、為、「任」、処守、以、幣、交。

受、之、而、不、報。

処、於、平陸、儲子、為、「相」、以、幣、交。

受、之、而、不、報。

他日、由、鄒、之、「任」、見、季子(=季任)。

由、平陸、之、斉、不、見、儲子。

屋廬子、喜、曰。

「連(=屋廬子)、得、間、矣」

問、曰。
「夫子、之(いく)、任、見(あう)、季子(＝季任)、之(いく)、斉、不、見(あう)、儲子、為(ため)、其(その)、為(なる)、
『相』、与(か)？」
曰。
「非、也。
『書』、曰。
『享(捧げ物)、多、儀。
儀、不、及、物、曰、不享(捧げ物)。
惟(これ)、不、役、志、于、享(捧げ物)』。
為(ため)、其(その)、不、成、享(捧げ物)、也」

屋廬子、悦。

或(ある)、問、之(これ)。

屋廬子、曰。
「季子(＝季任)、不、得、之(いく)、鄒、儲子、得、之(いく)、平陸」

孟子 先生が鄒という所に居た時、季任が、任という国の留守番に成って、
孟子 先生に贈り物をして交際を求めた。

孟子 先生は、その贈り物を受けたが、（その時は、）報いる事ができなかった。

孟子 先生が平陸という所に居た時、儲子が、君主の補佐に成って、孟子 先生に贈り物をして交際を求めた。

孟子 先生は、その贈り物を受けたが、報いなかった。

孟子 先生は、後日、鄒から任という国へ行った時に、季任に会いに行った。

しかし、孟子 先生は、平陸から斉という国へ行ったが、儲子に会いに行かなかった。

屋廬子が喜んで言った。

「私、屋廬子は、孟子 先生の隙（すき）を得た」

屋廬子が孟子 先生に質問して言った。

「孟子 先生は、任という国へ行った時に、季任に会いに行きましたが、斉という国へ行った時に、儲子に会いに行かなかったのは、儲子が君主の補佐に成っているためでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「そうでは、ありません。

『書経』で言われています。

『贈り物をする時には、礼儀も多くする物なのである。

礼儀が、贈り物の価値に及んでいないのを、贈り物をしていないような物である、と言うのである。
これは、志、思いが、贈り物の価値に及んでいないからなのである』と。
儲子は、(無礼で、)贈り物をした事に成っていないためなのである」

屋廬子は、(理解して)喜んだ。

ある人が、この屋廬子に質問した。

屋廬子が言った。

「季任は、贈り物をしに、鄒にいた孟子先生に直接、会いに行けなかったが、
儲子は、贈り物をしに、平陸にいた孟子先生に直接、会いに行けたからである」
(儲子は、贈り物をしに孟子先生に直接、会いに行けたが、無礼にもせず、
贈り物だけを送りつけてきたからである。)

淳于髡、曰。

「先、名実、者(もの)、為(ため)、人、也。
後、名実、者(もの)、自(みずからの)、為(ため)、也。
夫子、在、三卿之中、名実、未、加、於、上下、而、去、之(これ)。
仁者、固(もとより)、如此(このよう)、乎?」

孟子、曰。

「居、下位、不、以、賢、事(つかえる)、不肖(愚か)、者(もの)、伯夷、也。

五、就(つく)、湯(=湯王)、五、就(つく)、桀、者(もの)、伊尹、也。

不、悪(ぞうおする)、汚君、不、辞、小官、者(もの)、柳下恵、也。

三子者、不同、道、其趨(その目的に向かって行く)、一、也」

「一、者(とは)、何、也?」

曰。

「仁、也。

君子、亦(また)、仁、而已(のみ)、矣。

何(どうして)、必、同?」

曰。

「魯、繆公之時、公儀子、為政、子柳、子思、為(なる)、臣。

魯、之(の)、削、也、滋(ますます)、甚。

若是(このよう)、乎、賢者之無益、於、国、也?」

曰。

「虞、不、用、百里奚、而、亡(ほろぶ)。

秦、繆公、用、之(これ)、而、覇。

不、用、賢、則(すなわち)、亡(ほろぶ)。

削、何、可、得、与(や)?」

曰。

「昔者、王豹、処、於、淇、而、『河西』、善、謳。

綿駒、処、於、高唐、而、斉、右（南を向いている時の右である西）、善、歌。

華周、杞梁之妻、善、哭、其夫、而、変、国、俗。

有、諸、内、必、形、諸、外。

為、其事、而、無、其功、者、髡(=淳于髡)、未、嘗、覩、之、也。

是故、無、賢者、也。

有、則、髡(=淳于髡)、必、識、之」

曰。

「孔子、為、魯、司寇、不、用。

従、而、祭、燔肉（祭儀後に参加者へ下賜された肉）、不、至、不、税、冕（冠）、而、行。

不、知、者、以、為、為、肉、也。

其、知、者、以、為、為、無礼、也。

乃、孔子、則、欲、以、微罪、行。

不、欲、為、苟、去。

君子、之、所、為、衆人、固、不、識、也」

淳于髡が孟子 先生に言った。

「名声と実績を優先する者は、他人のために行動しているのである。

名声と実績を後回しにする者は、自分のために行動しているのである。

あなた、孟子は、三人の高官の中にいながら、名声や実績を未だ上位者や下位者達に加える事ができていないのにもかかわらず、この国を去ろうとしています。

思いやり深い知者とやらは、本より、こんな者なのでしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「下位者に居て、自分が賢者でも、愚者である君主に仕えなかった者は、伯夷である。

五回、殷の湯王にも仕えたし、五回、暴君である桀にも仕えた者は、伊尹である。

汚れた君主を嫌わず、矮小な官位を辞退しなかった者は、柳下恵である。

これらの三者は、方法は違いましたが、目的は同一でした」

　淳于髠が言った。

「同一の目的とは、何でしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「思いやりです。

王者に有るのは、思いやりだけなのです。

どうして、必ずしも、思いやりによる方法が同一でしょうか？　いいえ！

多様である！」

　淳于髠が言った。

「魯という国の繆公の時代、公儀子が政治を行い、子柳と、子思が臣下に成っていました。
しかし、魯の領土は、ますます激しく、他国に削り取られてしまいました。
このように、賢者とやらは、国にとって無益なのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「虞という国は、百里奚を用いなかったので、滅んでしまいました。
秦という国の繆公は、百里奚を用いたので、覇者に成れました。
賢者を用いなければ、滅んでしまいます。
(賢者を用いなければ、)領土を他国に削り取られるだけでは、終わり得ないであろう！」

淳于髡が言った。
「昔、王豹が淇に居たので、河西という地域の人々は歌が巧みに成りました。
綿駒が高唐に居たので、『斉という国の南を向いている時の右』、『斉という国の西』の人々は歌が巧みに成りました。
華周の妻と、杞梁の妻は、その夫の死をよく嘆いたので、国の俗習を変革しました。
ある物が内心に有れば、その物は外に表れる物なのです。
自分の仕事をしても、その功績が表れない者を、私、淳于髡は未だかつて見た事がありません。
このため、(今、この国に、)賢者はいないのです。(だから、あなた、孟子は賢者ではありません。)
賢者がいれば、私、淳于髡は必ず認識できるはずです」

孟子 先生は言った。
「孔子 先生は、魯という国で、司寇という高官に成れたが、君主に用いられなかった。
君主に用いられなかったため、祭儀で、祭儀後に参加者へ下賜された肉が届かなかった時に、冠を取り外さずに、そのまま魯という国を去った。
孔子 先生について良く知らない者どもは、『肉のせいで、魯という国を去った』と見なしてしまった。
孔子 先生について良く知っている者達は、『君主が無礼なせいで、魯という国を去った』とした。
すなわち、孔子 先生は、軽微な過失を口実にして、魯という国を去りたいと欲したのである。(孔子 先生は、魯が父母の国なので、自身の評判を犠牲にして魯の名誉を守りたかった。)
(孔子 先生は、)『孔子 先生は、まことに、以前から、魯という国を去りたかった』と見なされたいと欲しなかったのである。
王者の行動の理由を、大衆どもは、本(もと)より、認識する事すらできないのである」

孟子、曰。
「五覇、者(は)、三王之罪人、也。
今之諸侯、五覇之罪人、也。

今之大夫、今之諸侯之罪人、也。
天子、適(いく)、諸侯、曰、『巡狩』。
諸侯、朝、於、天子、曰、『述職』。
春、省、耕、而、補、不足。
秋、省、斂、而、助、不、給(たりる)。
入、其疆(そのさかい)、土地、辟(ひらく)、田野、治、養、老、尊、賢、俊傑、在、位、則(すなわち)、有、
慶(賜物)。
慶(賜物)、以、地。
入、其疆(そのさかい)、土地、荒(荒れて雑草がはびこっている)　蕪、遺(すてる)、老、失、賢、掊克(重税で搾取する者)、在、位、則(すなわち)、
有、讓(責める)。
一、不、朝、則(すなわち)、貶(おとす)、其(その)爵。
再、不、朝、則(すなわち)、削、其(その)地。
三、不、朝、則(すなわち)、六師(天子の軍隊)、移、之(これ)。
是故(このため)、天子、討、而、不、伐。
諸侯、伐、而、不、討。
五覇、者(は)、摟(ひく)、諸侯、以、伐、諸侯、者(もの)、也。
故、曰、『五覇、者(は)、三王之罪人、也』。
五覇、桓公、為(なす)、盛。
葵丘之会、諸侯、束、牲、載、書、而、不、歃(すする)、血。
初命、曰。
『誅、不孝。
無(なかれ)、易(かえる)、樹子。
無(なかれ)、以、妾、為(なす)、妻』。
再命、曰。

『尊、賢、育、才、以、彰、有徳』。
三命、曰。
『敬、老、慈、幼、無、忘、賓旅』。
四命、曰。
『士、無、世、官。
官、事、無、摂。
取、士、必、得。
無、専、殺、大夫』。
五命、曰。
『無、曲、防。
無、遏、糴。
無、有、封、而、不、告』。
曰。
『凡、我同盟之人、既、盟之後、言、帰、于、好』。
今之諸侯、皆、犯、此五禁。
故、曰、『今之諸侯、五覇之罪人、也』。
長、君之悪、其罪、小。
逢、君之悪、其罪、大。
今之大夫、皆、逢、君之悪。
故、曰、『今之大夫、今之諸侯之罪人、也』」

孟子先生は言った。
「五人の覇者は、三人の聖王にとっては罪人なのである。

今の諸侯は、五人の覇者にとっては罪人なのである。
今の役人は、今の諸侯にとっては罪人なのである。
天子が、諸侯を見回りに行くのを、『巡狩』と呼びました。
諸侯が、天子の朝廷に出仕するのを、『述職』と呼びました。
(天子は、)春(から夏まで)は、農耕の状況に気を配って顧みて、不足しているものを(国民達に)補助してあげたのです。
(天子は、)秋(から冬まで)は、税収の状況に気を配って顧みて、不足しているものを(国民達に)補助してあげたのです。
(天子が、)ある国境から入って、土地が良く開拓されていて、田畑が良く統治されていて、老人が良く養われていて、賢者が尊重されていて、抜群に優れている人が上位に在れば、(天子からの)賜物が有った。
土地を賜物として、もらえたのである。
(天子が、)ある国境から入って、土地が荒れて雑草がはびこっていて、老人が捨てられていて、賢者が失踪していて、重税で搾取する者どもが上位に在れば、(天子からの)叱責が有った。
また、一回、諸侯が、天子の朝廷に出仕しなければ、その諸侯の爵位を下げた。
二回、諸侯が、天子の朝廷に出仕しなければ、その諸侯の領土を削った。
三回、諸侯が、天子の朝廷に出仕しなければ、天子の軍隊が、その諸侯を追放した。
このため、天子は、法を執行したのであって、戦争をしたのではないのである。
諸侯は、戦争はできても、法を執行する立場ではないのである。

五人の覇者は、（僭越にも法の執行者を騙って、）ある諸侯を率いて、別の諸侯と戦争をした者どもである。

そのため、『五人の覇者は、三人の聖王にとっては罪人なのである』と言っているのである。

五人の覇者は、桓公を盛りとする。

葵丘という所での会合で、諸侯達は、犠牲の家畜を束ねて、それら犠牲の家畜の上に同盟の盟約書を載せたが、犠牲の家畜の血はすすらなかった。

諸侯の同盟の盟約書の最初の命令で、言われています。

『親不孝者には天誅を下しなさい。

世継ぎを変更するなかれ。

正妻ではない妻を正妻にするなかれ』と。

第二の命令で、言われています。

『賢者を尊重し、英才教育し、徳、善行が有る人を表彰しなさい』と。

第三の命令で、言われています。

『老人を敬い、幼子を慈(いつく)しみ、賓客と旅人への礼儀を忘れるなかれ』と。

第四の命令で、言われています。

『役人は官位を世襲するなかれ。

官位や職務を兼任させるなかれ。

役人を採用する場合は必ず、善良な人を獲得しなさい。

上級の役人を勝手に殺すなかれ』と。

第五の命令で、言われています。

『河の土手を曲げるなかれ（。意図的に敵国に洪水を起こすなかれ）。

米を買い占めるなかれ（。意図的に敵国への兵糧攻めをしたり食料価格を高騰させたりするなかれ）。

土地を与えて封じたら、他国にも通告しなさい』と。
そして、言いました。
『一般的に、私達、同盟者達は、同盟後、友好的な関係を築くべきである』
と。
今の諸侯は皆、これらの禁止事項を犯してしまっている。
そのため、『今の諸侯は、五人の覇者にとっては罪人である』と言っている
のである。
君主の悪事を助長する形に成ってしまっても、役人の罪は小さいのである。
君主の悪事に便乗する役人の罪は大きいのである。
今の役人は皆、君主の悪事に便乗してしまっている。
そのため、『今の役人は、今の諸侯にとっては罪人である』と言っているの
である」

魯、欲、使(させる)、慎子、為(なる)、将軍。

孟子、曰。
「不、教、民、而、用、之(これ)、謂、之(これ)、『殃(わざわいする)、民』。
殃(わざわいする)、民、者(もの)、不、容、於、堯、舜之世。
一、戦、勝、斉、遂(ついに)、有、南陽、然、且(かつ)、不、可」

慎子、勃然(怒る)、不、悦、曰。

「此、則、滑釐(＝慎子)、所、不、識、也」

曰。

「吾、明、告、子。
天子之地、方、千里。
不、千里、不足、以、待、諸侯。
諸侯之地、方、百里。
不、百里、不足、以、守、宗廟之典籍。
周公、之、封、於、魯、為、方、百里、也。
地、非、不足。
而、倹、於、百里。
太公、之、封、於、斉、也、亦、為、方、百里、也。
地、非、不足、也。
而、倹、於、百里。
今、魯、方、百里、者、五。
子、以、為、『有、王者、作、則、魯、在、所、損、乎？在、所、益、乎？』
徒、取、諸、彼、以、与、此、然、且、仁者、不、為。
況、於、殺人、以、求、之、乎？
君子、之、事、君、也、務、引、其君、以、当、道、志、於、仁、而已」

魯という国が慎子を将軍に成らせたいと欲した。

孟子 先生は言った。
「国民を教育しないで利用するのを、『国民に災いをもたらす』と言う。『国民に災いをもたらす』者どもは、堯と、舜の治世では、許容されなかった。
一回、斉という国と戦って勝って、南陽という所を所有しても、善くない」

慎子は、勃然と怒って、不機嫌に成って言った。
「それは、私、慎子の知った事ではない」

孟子 先生は言った。
「私、孟子は、明確に、あなた、慎子に告げ知らせる。
天子の土地は、千里四方である。
千里四方でなければ、諸侯を接待するのに不足するからである。
諸侯の土地は、百里四方である。
百里四方でなければ、先祖の霊廟の書物を守るのに不足するからである。
周公が魯という国を与えられて封じられた時は、百里四方であった。
土地が不足していた訳ではないのである。
百里四方に控えたのである。
太公望が斉という国を与えられて封じられた時もまた、百里四方であった。
土地が不足していた訳ではないのである。
百里四方に控えたのである。
今、魯には、百里四方の者達が五人いる。
あなた、慎子は、どう思うのか？　王者が立ち上がる事が有ったら、魯は土地を減らされるであろうか？　増やされるであろうか？

ただ土地を奪い取って他人に与えるだけでも、思いやり深い知者はしない。
思いやり深い知者は、まして、殺人によって土地を奪い取ったりしない！
王者が、君主に仕える時は、努めて、その君主を導いて、その君主に道理、
真理に取り組ませて、思いやりを志させるばかりなのである」

孟子、曰。
「今、之、事、君、者、曰。
『我、能、為、君、辟、土地、充、府庫』。
今、之、所謂、良臣、古、之、所謂、民、賊、也。
君、不、郷、道、不、志、於、仁、而、求、富、之。
是、富、桀、也。
『我、能、為、君、約、与国、戦、必、克』。
今、之、所謂、良臣、古、之、所謂、民、賊、也。
君、不、郷、道、不、志、於、仁、而、求、為、之、強戦。
是、輔、桀、也。
由、今之道、無、変、今之俗、雖、与、之、天下、不能、一朝、居、
也」

孟子 先生は言った。
「今の君主に仕える者どもは言います。

『私は、君主の為(ため)に、土地を開拓して、金銭の倉を満たします』と。
今の、いわゆる、良い臣下は、古代の、いわゆる、国民にとっての賊である。
君主が、道理、真理に向かわず、思いやりを志さないのに、その君主を富ませる事を求めるからである。
これでは、暴君である桀を富ませるような物なのである。
(今の君主に仕える者どもは言います。)
『私は、君主の為(ため)に、味方の国をまとめて、戦えば必ず勝ちます』と。
今の、いわゆる、良い臣下は、古代の、いわゆる、国民にとっての賊である。
君主が、道理、真理に向かわず、思いやりを志さないのに、その君主の為(ため)に強引に戦争しようと求めるからである。
これでは、暴君である桀を助けるような物なのである。
今の方法によって、今の俗習を改めないで、この桀のような暴君に天下を与えても、一日も真の王の位に居る事ができないのである」

白圭、曰。
「吾、欲、二十、而、取、一。
何如(どうでしょう)?」

孟子、曰。
「子之道、貉(北の未開な外国)、道、也。
万室之国、一人、陶、則(すなわち)、可、乎?」

曰。

「不可。

器、不足、用、也」

曰。

「夫（それ）、貉（北の未開な外国）、五穀、不、生、惟（ただ）、黍（キビ）、生、之（これ）。

無（ない）、城郭、宮室、宗廟、祭祀之礼、無（ない）、諸侯、幣帛（神への捧げ物）、饔飧（食事）、無（いない）、百官、有司。

故、二十、取、一、而、足（たりる）、也。

今、居、中国、去、人倫、無（いない）、君子、如之何、其（それ）、可、也？

陶、以、寡、且、不、可、以、為、国。

況（まして）、無（いない）、君子、乎？

欲、軽、之（これ）、於（よりも）、堯、舜之道、者（もの）、大貉（北の未開な外国）、小貉（北の未開な外国）、也。

欲、重、之（これ）、於（よりも）、堯、舜之道、者（もの）、大桀、小桀、也」

白圭が孟子 先生に言った。

「私、白圭は収穫の二十分の一を税としたいと欲（ほっ）します。

どうでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「あなた、白圭の方法は、北の未開な外国の方法なのです。

一万の家庭の国のうち、陶工が一人しかいないないのは、可能でしょうか？」

白圭が言った。

「不可能です。
器を使用しようとしても不足してしまいます」

孟子 先生は言った。

「北の未開な外国では、五穀を生産できず、黍(キビ)だけが生産できます。
(北の未開な外国では、)城も壁も、宮殿も、先祖の霊廟も、祭儀の礼儀も無いし、諸侯から神への捧げ物も、諸侯の宴も無いし、多数の役人もいません。
そのため、収穫の二十分の一を税として取っても不足しません。
今、国の中央の都市に居ながら、人の倫理、道理を捨て去ってしまって、王者もいなくて、それで、どうして、善いでしょうか？ いいえ！
陶工が少なくても、国を統治できません。
まして王者がいなかったら、国を統治できません！
税率を、堯や、舜の道理よりも、軽くしたいと欲(ほっ)する者は、多かれ少なかれ、北の未開な外国人のような者なのです。
税率を、堯や、舜の道理よりも、重くしたいと欲(ほっ)する者は、多かれ少なかれ、暴君である桀のような者なのです」

白圭、曰。

「丹(=白圭)之治水、也、愈(すぐれている)、於(よりも)、禹」

孟子、曰。

「子、過（あやまちをおかす）、矣。
禹之治水、水之道、也。
是故（このため）、禹、以、四海、為（なす）、壑（みぞ）。
今、吾子（あなた）、以、隣国、為（なす）、壑（みぞ）。
水、逆行、謂、之（これ）、『洚水（洪水）』。
洚水（洪水）、者（とは）、洪水、也。
仁人、之（の）、所、悪（ぞうおする）、也。
吾子（あなた）、過（あやまちをおかす）、矣」

白圭が言った。

「私、白圭の治水は、禹よりも優れています」

孟子先生は言った。

「あなた、白圭は、過（あやま）ちを犯しています。
禹の治水は、水の道理、真理なのです。
このため、禹は、四海を溝（みぞ）としました。
今、あなた、白圭は、隣国を溝（みぞ）としてしまっています。
河の水が逆行するのを『洪水』と言います。
原文の『洚水』とは、『洪水』なのです。
洪水を、思いやり深い知者は憎悪します。
あなた、白圭は、過（あやま）ちを犯しています」

孟子、曰。
「君子、不、亮。
悪(ぞうおする)、乎、執」

孟子先生は言った。
「王者は、明確に固定しない。
執着を憎悪するからである」

魯、欲、使(させる)、楽正子、為政。

孟子、曰。
「吾、聞、之(これ)、喜、而、不、寐(ねる)」

公孫丑、曰。
「楽正子、強、乎?」

曰。

「否」

「有、知慮、乎？」

曰。

「否」

「多、聞、識、乎？」

曰。

「否」

「然、則（すなわち）、奚為（どうして）、喜、而、不、寐（ねる）」

曰。

「其為人（そのひととなり）、也、好、善」

「好、善、足（たりる）、乎？」

曰。

「好、善、優、於、天下。

而、況（まして）、魯、国、乎？

夫(それ)、苟(かりに)、好、善、則(すなわち)、四海之内、皆、将、軽、千里、而、来、告、之(これ)、以、善。

夫(それ)、苟(かりに)、不、好、善、則(すなわち)、人、将、曰、『訑訑(うぬぼれて他人の言葉を聞き入れない)。予、既(すでに)、已、知、之(これ)、矣』。

訑訑(うぬぼれて他人の言葉を聞き入れない)之声音、顔色、距(こばむ)、人、於、千里之外。

士、止、於、千里之外、則(すなわち)、讒諂面諛(嘘の悪口で他人を陥れたり面前でこびへつらったりする)之人、至、矣。

与(と)、讒諂面諛(嘘の悪口で他人を陥れたり面前でこびへつらったりする)之人、居、国、欲、治、可、得、乎？」

魯という国は、楽正子に政治をさせたいと欲(ほっ)した。

孟子 先生は言った。

「私、孟子は、これを聞いて喜び過ぎて寝れないほどであった」

公孫丑が言った。

「楽正子は政治に強いのですか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ」

(公孫丑が言った。)

「(楽正子には、)知慮が有るのですか？」

孟子 先生は言った。

「いいえ」

(公孫丑が言った。)

「(楽正子は、)多くの知識を見聞きして知っているのですか?」

孟子 先生は言った。

「いいえ」

(公孫丑が言った。)

「そうであるならば、どうして、喜び過ぎて寝れなかったほどだったのですか?」

孟子 先生は言った。

「楽正子の人となりが、善を好んでいるからである」

(公孫丑が言った。)

「善を好んでいるだけで、(政治には)十分なのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「善を好んでいれば、豊かに天下を統治できます。

まして、魯という国を統治するのに十分過ぎるほどなのです。

仮に、善を好んでいれば、天下の人々は皆、千里でも軽快に越えて来て、その善を好んでいる人に善い言葉を告げ知らせようとしてくれます。

仮に、善を好まなければ、人々は『(あの善を好まない人は、)うぬぼれて他人の言葉を聴き入れない。自分は既に、それを分かっている、と言って』と悪口を言うであろう。

うぬぼれて他人の言葉を聞き入れない人の声色や顔色は、人々を、千里、離れた所へと拒んでしまうのです。

『一人前である者』を千里、離れた所で止めてしまえば、嘘の悪口で他人を陥れたり面前でこびへつらったりする人が到来してしまいます。

嘘の悪口で他人を陥れたり面前でこびへつらったりする人と居て、国を善く統治したいと欲(ほっ)しても、でき得るでしょうか？　いいえ！」

陳子、曰。

「古之君子、何如(どうすれば)、則(すなわち)、仕？」

孟子、曰。

「所、就、三。

所、去、三。

迎、之(これ)、致、敬、以、有、礼、言、将(しようとする)、行、其(その)言、也、則(すなわち)、就、之(これ)。

礼、貌、未、衰、言、弗(ない)、行、也、則(すなわち)、去、之(これ)。

其(その)、次、雖(いえども)、未、行、其(その)言、也、迎、之(これ)、致、敬、以、有、礼、則(すなわち)、就、之(これ)。

礼、貌、衰、則(すなわち)、去、之(これ)。

其下、
朝、不、食、夕、不、食、饑餓、不能、出、門戸。
君、聞、之、曰。
『吾、大、者、不能、行、其道。
又、不能、従、其言、也。
使、饑餓、於、我土地、吾、恥、之』。
周、之、亦、可、受、也。
免、死、而已、矣」

陳子が孟子先生に言った。
「古代の王者は、どうすれば、君主に仕えたのでしょうか？」

孟子先生は言った。
「仕える場合が三つ有ります。
それらに対して、去ってしまう場合も三つ有ります。
王者を迎え入れるために、礼儀によって敬い、王者が言えば、その言葉を実行しようとすれば、王者は仕えてくれました。
礼儀の態度が未だ衰えなくても、王者が言っても実行しなければ、王者は去ってしまいます。
その次は、王者の言葉を未だ実行できていなくても、王者を迎え入れるのに、礼儀によって敬えば、王者は仕えてくれます。
礼儀の態度が衰えれば、王者は去ってしまいます。

その下は、王者が、朝食も食べれず、夕食も食べれず、飢餓状態過ぎて、家の出入り口から出られなく成ったとします。
君主が、この王者の話を聞いて、言ったとします。
『私は、大体にして、王者の言葉を実行できません。
また、王者の言葉に従う事もできません。
しかし、私の土地で、王者を飢餓状態にさせるのを、私は恥じます』と。
この王者に対して、行き届かせれば、君主に仕える事を受け入れてくれるはずである。
ただし、王者は、死を免れるためだけに仕えてくれるのである(。より善い君主からの勧誘が有ったりすれば、去ってしまいます)」

孟子、曰。
「舜、発、於、畎畝(田畑)之中。
傅説(ふえつ)、挙、於、版築之間。
膠鬲、挙、於、魚塩之中。
管夷吾(=管仲)、挙、於、士。
孫叔敖、挙、於、海。
百里奚、挙、於、市。
故、天、将(しようとする)、降、大任、於、是(この)人、也、必、先、苦、其心志(その意思)、労、其(その)筋骨、餓、其(その)体膚、空乏、其(その)身、行、払乱(かきみだす)、其(その)、所、為(なす)。
所以、動、心、忍、性、曾(ます)、益、其(その)、所、不能。

人、恒(つねに)、過(あやまちをおかす)、然、後、能、改。
困、於、心、衡、於、慮、而、後、作(おこる)。
　徴(あらわれる)、於、色、発、於、声、而、後、喩(さとる)。
入、則(すなわち)、無(いない)、法家、払士(補佐)、出、則(すなわち)、無(ない)、敵国、外患、者(ば)、国、恒(つねに)、亡(ほろぶ)。
然、後、知、生、於、憂患、而、死、於、安楽、也」

孟子 先生は言った。

「舜は、田畑の中から立ち上がった。
傅説(ふえつ)は、土木作業員の間から高位に挙げられた。
膠鬲は、魚や塩の商人の中から高位に挙げられた。
管仲は、役人の囚われの身から高位に挙げられた。
孫叔敖は、海辺から高位に挙げられた。
百里奚は、市場から高位に挙げられた。
そのため、天の神が、大いなる任務を任せようとする時、その人の、必ず、まず、意思を苦しめるし、筋骨を労苦させるし、身体髪膚を飢えさせるし、身分を貧乏にさせるし、行動をかき乱すのである。
そのおかげで、心を揮(ふる)わせる事ができ、忍耐強い性質を獲得し、できなかった事をできるように成るのである。
人は、常に、過(あやま)ちを犯した後で、その過(あやま)ちを改める事ができるのである。
心を困惑させて、思慮と思慮を衝突させた後で、立ち上がる事ができるのである。
色形に表して、声に発した後で、理解するのである。

国内に立法者や、国政を助けられる人がいなくて、国外に仮想敵国や外国からの脅威が無ければ、国は常に滅ぶ物なのである。
そう成ってしまった後で、『心配が有ると生存できるが、安楽にふけると死んでしまう』事が分かるのである」

孟子、曰。
「教、亦(また)、多、術、矣。
予、不、屑(こころよくおもう)、之(この)教誨、也、者(もの)、是(これ)、亦(また)、教誨、之(これ)、而已(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。
「教えにもまた、多数の術(すべ)、方法が有るのである。
私、孟子が『(今、)教えるのは善くないであろう』として教えない者にもまた、実は、私、孟子は教えているばかりであるような物なのである」
(教えないのも、教える方法の一つなのである。)

尽心上

孟子、曰。
「尽、其心、者、知、其性、也。
知、其性、則、知、天、矣。
存、其心、養、其性、所以、事、天、也。
夭寿、不二、修、身、以、俟、之、所以、立、命、也」

孟子先生は言った。
「正しい心を尽くす者は、正しさ、善の性質を知る。
正しさ、善の性質を知れば、天の神を知る。
正しい心が在って、正しさ、善の性質を修養する事が、天の神に仕える事なのである。
早死にでも長生きでも、唯一無二に一心に、自身を修養して、天の神による運命を待つ事が、(正しい真の)命(、生き方)を確立する事に成るのである」

孟子、曰。
「莫、非、命、也。
順、受、其正。

是故（このため）、知、命、者（もの）、不、立、乎、巌墻（危険な高い壁）之下。
尽、其（その）道、而、死、者（は）、正（ただしい）、命、也。
桎梏（手かせと足かせに拘束されている）、死、者（は）、非、正（ただしい）、命、也」

孟子先生は言った。
「全ては、天の神による運命による物である。
ただし、そのうちの正しいものだけに従い受け入れるのである。
このため、天の神による運命を知る者は、(倒れそうな)危険な高い壁の下（もと）に立たないのである。
正しい道理、真理を尽くして死ぬのが、正しい命、生き方なのである。
罪を犯して拘束されたままや、肉欲に拘束されたまま死ぬのは、正しくない命、生き方なのである」

孟子、曰。
「『求、則（すなわち）、得、之（これ）。
舍（すてる）、則（すなわち）、失、之（これ）』。
是（これ）、求、有、益、於、得、也。
求、在、我（われに）、者（もの）、也。
求、之（これ）、有、道。
得、之（これ）、有、命、是（これ）、求、無益、於、得、也。

求、在、外《そとに》、者《もの》、也」

孟子先生は言った。

「『(思いやりなどは、)求めれば、得られる。
(思いやりなどは、)捨てれば、失ってしまう』と言われています。
これは、(思いやりなどは、)求めて、得れば、(真の)利益が有るからなのである。
(思いやりなどは、)自分の心の中に在る物を求めるだけなのです。
(思いやりなどを、)求めるには、道、方法が有るのである。
あるものを得るには、運命が必要であるものは、求めて得ても無益なのである。
自分の外に在るものを求めているからである」

孟子、曰。
「万物、皆、備、於、我、矣。
反、身、而、誠、楽《たのしみ》、莫《ない》、大、焉《これよりも》。
強恕《努力して思いやる》、而、行、求、仁、莫《ない》、近、焉《これよりも》」

孟子先生は言った。

「万物は皆、自分に備わっているのである。
自身を反省しても(自分が)誠実であるのは、最も大いに楽しいのである。
努力して思いやろうとして、行動して、思いやりを求めるのは、最も思いやりに近いのである」

孟子、曰。
「行、之(これ)、而、不、著(あきらかにする)、焉。
習、矣、而、不、察(あきらかにする)、焉。
終身、由(よる)、之(これ)、而、不、知、其(その)道、者(もの)、衆(多数)、也」

孟子先生は言った。
「行動していても、それ(、道理、真理)を明らかにしていない。
習っていても、それ(、道理、真理)を明らかにしていない。
一生、それ(、道理、真理)によって生きていても、その道理、真理を知らない者が多数なのである」

孟子、曰。

「人、不、可、以、無、恥。
無、恥、之、恥、無、恥、矣」

孟子 先生は言った。

「人には、(悪を)恥じる心が有るべきである。
(悪を)恥じる心の無さを恥じれば、恥辱を受ける事は無く成るのである」

孟子、曰。

「恥、之、於、人、大、矣。
為、機変之巧、者、無、所、用、恥、焉。
不、恥、不若、人、何、若、人、有?」

孟子 先生は言った。

「(悪を)恥じる心は、人にとって、大いなる重要な心なのである。
臨機応変に巧みにできてしまう者は、(悪を)恥じる心を用いる場面が無く成ってしまうのである。
また、他人に及ばないのを恥じなければ、他人に追いつき追い越す事が無く成ってしまうのである!」

孟子、曰。

「古之賢王、好、善、而、忘、勢。
古之賢士、何(どうして)、独、不、然?
楽(たのしむ)、其(その)道、而、忘、人之勢。
故、王、公、不、致、敬、尽、礼、則(すなわち)、不、得、亟(何度でも)、見(あう)、之(これ)。
見(あう)、且(かつ)、猶(なお)、不、得、亟(何度でも)、而、況(まして)、得、而、臣、之(これ)、乎?」

孟子 先生は言った。

「古代の賢王、聖王は、善を好んで、(自分の)権勢など忘れてしまったのである。

どうして、古代の賢者である『一人前である者』だけが、そうしてもらうべきであろうか?　いいえ!　現代の賢者に対しても同様にするべきである!　正しい道理、真理を楽しんで、(俗世の)人における権勢など忘れてしまうべきなのである。

そのため、王でも、公爵でも、敬って礼儀を尽くさなければ、何度でも、賢者に会う事はでき得ないのである。

何度でも、賢者に会う事すらでき得ないのであれば、まして、賢者を臣下には、でき得ないのである!」

孟子、謂、宋句践、曰。
「子、好、遊、乎？
吾、語、子、遊。
人、知、之（これ）、亦（また）、囂囂。
人、不、知、亦（また）、囂囂」
曰。
「何如（どうすれば）、斯（ここ）、可、以、囂囂、矣？」
曰。
「尊、徳、楽、義、則（すなわち）、可、以、囂囂、矣。
故、士、窮、不、失、義、達、不、離、道。
窮、不、失、義、故、士、得、己、焉。
達、不、離、道、故、民、不、失、望、焉。
古之人、得、志、沢（恩恵）、加、於、民。
不、得、志、修、身、見（あらわれる）、於、世。
窮、則（すなわち）、独、善、其（その）身。
達、則（すなわち）、兼、善、天下」

孟子先生は宋句践に言った。
「あなた、宋句践は、遊説を好みますか？

私、孟子は、あなた、宋句践に、遊説について話しましょう。
人々が、自分を知ってくれても、無心で囂囂と遊説するべきなのです。
人々が、(自分を)知ってくれなくても、無心で囂囂と遊説するべきなのです」

宋句践が言った。
「どうすれば、そのような場合でも、無心で囂囂と遊説できるのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「徳、善行を尊重して、正義を楽しめば、無心で囂囂と遊説できます。
そのため、『一人前である者』は、困窮しても正義の心を失わず、栄達しても道理、真理を離れません。
困窮しても正義の心を失わないので、『一人前である者』は自信を得る事ができます。
栄達しても道理、真理を離れなければ、(自身と)人々は希望を失わずに済みます。
古代人は、志を実行する好機を得れば、恩恵を人々にもたらしました。
(古代人は、)志を実行する好機を得られなければ、自身を修養してから、世に現れました。
困窮すれば、独りでも、自身を善くするのです。
栄達すれば、自身と兼ね合わせて天下の人々も善くするのです」

孟子、曰。

「待、文王、而、後、興、者(もの)、凡民、也。
若(のよう)、夫(かの)豪傑之士、雖(いえども)、無、文王、猶(なお)、興」

孟子 先生は言った。

「文王のような聖人を待った後で立ち上がる者達は、普通の人々なのである。かの古代の優れている勇敢な一人前である者達は、文王のような聖人がいなくてもなお立ち上がったのである」

孟子、曰。

「附、之(これ)、以、韓、魏之家、如(もし)、其(その)、自(みずから)、視、欲(満足していない)、然、則(すなわち)、過(すぎる)、人、遠、矣」

孟子 先生は言った。

「韓家や、魏家のような名家の富や高貴な地位を付属させても、もし『自身は(気高い高尚な者なので、富や高貴な地位では)満足していない』と見なす事ができるならば、他人を遠く超越している人なのである」

孟子、曰。

「以、佚（安らぎをもたらす）、道、使（つかう）、民、雖（いえども）、労、不、怨。
以、生、道、殺、民、雖（いえども）、死、不、怨、殺、者（もの）」

孟子先生は言った。

「最終的に人々に安らぎをもたらすための方法として、人々を使役すれば、人々は労苦しても怨まないであろう。
最終的に多数の人々を生かすための方法として、人々を死なせてしまっても、人々は死んでも、自分達を死なせてしまった者を怨まないであろう」

孟子、曰。

「覇者之民、驩虞（喜ぶ恐れる）如、也。
王者之民、皡皡（ゆったりとしている）如、也。
殺、之（これ）、而、不、怨。
利、之（これ）、而、不、庸（知らずに普段通りである）。
民、日、遷、善、而、不、知、為（なす）、之（これ）、者（もの）。

夫(それ)、君子、所、過(すぎる)、者(もの)、化、所、存、者(もの)、神。
上下、与(と)、天地、同、流。
豈(どうして)、曰、『小、補、之(これ)』、哉？」

　孟子先生は言った。
「覇者の国民達は、喜んだり恐れたりする。
(真の)王者の国民達は、皞皞と、ゆったりとしている。
王者が、(やむを得ず)国民を死なせてしまっても、国民達は王者を怨まないであろう。
王者が国民達に利益をもたらしても、国民達は知らずに普段どおりである。
王者の国民達は日々(悪から)善へ移り変わっていっても、王者が、そうさせていっている事を知らない。
王者は、通り過ぎた場所にいる者を教化するし、存在している場所にいる者を神聖化する。
上の天の神と同じく、下の地の人々に、善を流行させるのである。
王者は『人々を少し補助しているだけである』とは言えないのである！」

　孟子、曰。
「仁言、不如(しかず)、仁声、之(の)、入、人、深、也。
善政、不如(しかず)、善教、之(の)、得、民、也。

善政、民、畏、之。
善教、民、愛、之。
善政、得、民、財。
善教、得、民、心」

孟子先生は言った。
「思いやり深い言葉は、『思いやり深い』という名声が人々に深く染み入るのには、及ばない。
善い政治は、善についての教えが人々の関心を得るのには、及ばない。
善い政治を、国民達は畏敬する。
善についての教えを、国民達は愛する。
善い政治は、国民達に、財産を得させる。
善についての教えは、国民達に、正しい心を得させる」

孟子、曰。
「人、之、所、不、学、而、能、者、其良能、也。
所、不、慮、而、知、者、其良知、也。
孩提之童、無、不、知、愛、其親、者。
及、其、長、也、無、不、知、敬、其兄、也。
親、親、仁、也。

敬、長、義、也。
無他、達、之、天下、也」

孟子先生は言った。
「人には、学ばなくても、行う事ができる、『良能』という物が有る。
(人には、)思考しなくても、知る事ができる、『良知』という物が有る。
幼子で、自分の親を愛する事を知らない者はいない。
成長して、自分の兄を敬う事を知らない者はいない。
親に親しむのは、思いやりなのである。
年長者を敬うのは、正義なのである。
他でもない、これら思いやりと正義を、天下の人々に行き届かせるべきなのである」

孟子、曰。
「舜、之、居、深山之中、与、木、石、居、与、鹿、豕、遊。
其、所以、異、於、深山之野人、者、幾、希。
及、其、聞、一善言、見、一善行、若、決、江(=長江)、河(=黄河)、沛然、
莫、之、能、御、也」

孟子 先生は言った。

「舜が、山の奥深くの中にいた時は、木と石と共にいて、鹿や猪(イノシシ)と遊んでいた。
舜は、山の奥深くの中にいる粗野な人に近い生活をしていたのである。
しかし、舜の善い一言を聞き、舜の一つの善行を見ると、長江や黄河の向きが決まっている流れの勢いが盛んであるように、それら舜の善い言行を妨害できるものは無いほどなのである」

孟子、曰。

「無(ない)、為(なす)、其(その)、所、不、為(なす)。
無(ない)、欲、其(その)、所、不、欲。
如此(このよう)、而已(のみ)、矣」

孟子 先生は言った。

「為(な)すべきではない事は為(な)さない。
欲(ほっ)するべきではないものは欲(ほっ)しない。
このようにするだけなのである」

孟子、曰。

「人、之(の)、有、徳、慧、術知(才能が有る)、者(もの)、恒(つねに)、存、乎、疢疾(苦難)。

独、孤臣(孤立無援の臣下のような苦難)、孽子(正妻ではない妻の子のような苦難)。

其、操、心、也、危。

其、慮、患、也、深。

故、達」

孟子先生は言った。

「人々のうち、徳、善行、善と、知恵と、才能が有る者達は、常に、苦難の中にいたのである。

独りで、孤立無援の臣下のような苦難、正妻ではない妻の子のような苦難の中にいたのである。

正しい心を堅固に保持するのが、危うかったのである。

心配を考慮するのが、深かったのである。

しかし、そのために、道理へ到達できたのである」

孟子、曰。

「有、事(つかえる)、君、人、者(もの)。

事(つかえる)、是(この)君、則(すなわち)、為(なす)、容悦(こびへつらう)、者(もの)、也。

有、安、社稷、臣、者(もの)。
以、安、社稷、為(なす)、悦、者(もの)、也。
有、天、民、者(もの)。
達、可、行、於、天下、而、後、行、之(これ)、者(もの)、也。
有、大、人、者(もの)。
正(ただす)、己、而、物、正(ただす)、者(もの)、也」

孟子先生は言った。
「君主に仕えているだけの人という者どもがいる。
自分の君主に仕えても、こびへつらうだけの者どもである。
神の祭壇(と国家)に安らぎをもたらす臣下という者達がいる。
神の祭壇(と国家)に安らぎをもたらす事を喜びとする者達である。
天の神の国民と言える者達がいる。
道理、真理に到達して、天下の人々に対して行動できるよう(な地位)に成った後で、行動する者達である。
大いなる人である者達がいる。
自身を正して、他の人物達も正す者達である」

孟子、曰。
「君子、有、三楽。

而、王、天下、不、与（あずかる）、存、焉。
父母、倶（ともに）、存、兄弟、無（ない）、故（災いなどの悪い事）、一、楽、也。
仰、不、愧（はじる）、於、天、俯、不、怍（はじる）、於、人、二、楽、也。
得、天下、英才、而、教育、之（これ）、三、楽、也。
君子、有、三楽。
而、王、天下、不、与（あずかる）、存、焉」

孟子 先生は言った。
「王者には、三つの楽しみが有る。
ただし、天下の人々の王に成る事は、(王者は、)あずかり知らない事なのである。
父母と共にいて、兄弟が無事であるのが、(王者の)第一の楽しみである。
天の神を仰いで恥じるべき事が無いし、俯（ふ）して人を見て恥じるべき事が無いのが、(王者の)第二の楽しみである。
天下の英才を得て、英才教育できるのが、(王者の)第三の楽しみである。
王者には、これら三つの楽しみが有るのである。
ただし、天下の人々の王に成る事は、(王者は、)あずかり知らない事なのである」

孟子、曰。

「広土、衆民、君子、欲、之(これ)、所、楽、不、存、焉。
中、天下、而、立、定、四海之民、君子、楽、之(これ)、所、性、不、存、焉。
君子、所、性、雖(いえども)、大、行、不、加、焉。
雖(いえども)、窮居(貧窮)、不、損、焉。
分、定、故、也。
君子、所、性、仁義礼智、根、於、心。
其(その)、生、色、也、睟然(艶が有る)、見(あらわれる)、於、面、盎(あふれる)、於、背、施、於、四体、四体、
不、言、而、喩」

孟子先生は言った。
「広い土地や、多数の人々を、(真の)王者は、欲するが、楽しむ事は無いのである。
天下の中央に立って、天下の人々を安定させる事を、(真の)王者は、楽しむが、(真の)王者の性質ではないのである。
(真の王者が)大いに行動しても、(真の)王者の性質は、増やせないのである。
(真の王者が)貧窮しても、(真の)王者の性質は、減らないのである。
(真の王者の性質である)本分、本来からの務めは、(天の神によって)定められているからである。
(真の)王者の性質とは、正しい心の根本である、思いやりと、正義と、礼儀と、智慧である。
それら、思いやりと、正義と、礼儀と、智慧が、色形に生じて表れると、顔面に艶が表れるし、満ちあふれて背にも艶が表れるし、両手両足の四肢に行き渡って、言わなくても、他人には分かるように成るのである」

孟子、曰。

「伯夷、辟(さける)、紂、居、北海之浜。

聞、文王、作興(盛んである)、曰。

『盍(どうして)、帰、乎、来? 吾、聞、西伯(=文王)、善、養、老、者(もの)』。

太公、辟(さける)、紂、居、東海之浜。

聞、文王、作興(盛んである)、曰。

『盍(どうして)、帰、乎、来? 吾、聞、西伯(=文王)、善、養、老、者(もの)』。

天下、有、善、養、老、則(すなわち)、仁人、以、為(なす)、己、帰、矣。

五畝之宅、樹、墻下、以、桑、匹婦、蚕、之(これ)、則(すなわち)、老者、足(たりる)、以、衣(きる)、帛(絹)、矣。

五母鶏、二母彘(豚)、無(ない)、失、其(その)時、老者、足(たりる)、以、無(ない)、失、肉、矣。

百畝之田、匹夫、耕、之(これ)、八口之家、足(たりる)、以、無(ない)、饑、矣。

所謂(いわゆる)、『西伯(=文王)、善、養、老』、者(とは)、制、其(その)田里、教、之(これ)、樹、畜、

導、其(その)妻子、使(させる)、養、其(その)老。

五十、非、帛(絹)、不、暖。

七十、非、肉、不、飽。

不、暖、不、飽、謂、之(これ)、凍餒(凍え飢えて生活に苦しんでいる)。

『文王之民、無(いない)、凍餒(凍え飢えて生活に苦しんでいる)之老者』、此(これ)之謂、也」

孟子 先生は言った。
「伯夷は、紂王を避けて、北海のほとりに居た。
(伯夷は、)『文王の勢いが盛んである』と聞いて、言った。
『文王の所へ行って帰属しよう！ 私、伯夷は、文王は老人を善く養っている者である、と聞きました』と。
太公望は、紂王を避けて、東海のほとりに居た。
(太公望は、)『文王の勢いが盛んである』と聞いて、言った。
『文王の所へ行って帰属しよう！ 私、太公望は、文王は老人を善く養っている者である、と聞きました』と。
天下で、老人を善く養っている者がいれば、思いやり深い知者が帰属してくれるのである。
五畝の家の、塀の壁の下(もと)には、桑(クワ)を植えて、一人の女性が(桑の木の葉を食べて絹糸を出す)蚕(カイコ)を養蚕すれば、家族の老人が絹の衣服を着るのに足りるのである。
五羽の母鶏、二頭の母豚を飼って、適切な時機に繁殖させれば、家族の老人が肉を食べるのに足りるのである。
百畝の田畑を、一人の男が耕せば、八人家族が飢えずに生活するのに足りるのである。
いわゆる『文王は老人を善く養っている』とは、(文王が、)このように田畑の制度を実行し、このように農業や畜産を教え、女性達や幼子達を導いて家族の老人を養わせた事を言っているのである。
五十歳の老人は、絹の衣服ではないと、体が暖かく成らないのである。
七十歳の老人は、肉を食べないと、(健康に)十分ではないのである。

(家族の老人が)暖かい絹の衣服を着れず、(健康に)十分な肉を食べれない事を、『凍（こご）え飢えて生活に苦しんでいる』と言うのである。
『文王の国民には、凍（こご）え飢えて生活に苦しんでいる老人がいない』とは、このような事を言っているのである」

孟子、曰。
「易、其田疇（その田畑）、薄、其税斂（その税の取り立て）、民、可、使（させる）、富、也。
食、之（これ）、以、時、用、之（これ）、以、礼、財、不、可、勝、用、也。
民、非、水火、不、生活。
昏暮（黄昏）、叩、人之門戸、求、水火、無、弗、与（あたえる）、者（もの）、至（いたって）、足（たりる）、矣。
聖人、治、天下、使（させる）、有、菽粟（豆と穀物）、如（のよう）、水火。
菽粟（豆と穀物）、如（のよう）、水火、而、民、焉（どうして）、有、不仁者、乎？」

孟子先生は言った。
「田畑を統治して、税の取り立ては軽くすれば、国民を富ませる事ができます。
その時の旬の物を食べて、礼儀に合った物を使用していれば、財産は、使用量よりも勝るのである。
人々は、水と火(の燃料)が無ければ、生活できません。

黄昏(たそがれ)に、他人の家の戸を叩(たた)いて、水や火(の燃料)を(分けてくれるように)求めて、与えてくれる者がいるならば、いたって満ち足りているからである。
聖人は、天下の人々を統治して、水や火(の燃料)と同じように、(天下の人々に、)豆と穀物を所有させます。
水や火(の燃料)と同じように、(天下の人々に、)豆と穀物が満ち足りていれば、人々は思いやり深い知者ばかりに成る!」

孟子、曰。
「孔子、登、東山、而、小、魯。
登、太山(=泰山)、而、小、天下。
故、観、於、海、者(もの)、難、為(なす)、水(河)。
遊、於、聖人之門、者(もの)、難、為(なす)、言。
観、水(河)、有、術。
必、観、其瀾(その波)。
日、月、有、明。
容光(隙間から光が射す)、必、照、焉。
流水、之(の)、為(なる)、物、也、不、盈(みたす)、科(部分)、不、行。
君子、之(の)、志、於、道、也、不、成、章(段)、不、達」

孟子先生は言った。

「孔子 先生は、魯という国の東山に登って、魯という国を小さいとしました。
(孔子 先生は、)泰山に登って、天下を小さいとしました。
そのため、海を観た者は、河を大きいと見なし難く成るのである。
聖人の門下へ遊学した者は、矮小な言説を『大いなる言説である』と見なし難く成るのである。
河の大小を観察する術(すべ)、方法が有ります。
必ず、河の波を観察するのです。
太陽や、月には光明が有ります。
光が、隙間からでも、必ず射して、照らしてくれます。
流れていく水は、一部分、一部分を満たしていって流れて行く物なのです。
王者が、道理、真理を志したら、一段、一段を完成させていって、道理、真理へ到達する物なのです」

孟子、曰。
「鶏、鳴、而、起、孳孳(努力して)、為(なす)、善、者(もの)、舜之徒、也。
鶏、鳴、而、起、孳孳(努力して)、為(なす)、利、者(もの)、蹠之徒、也。
欲、知、舜、与(と)、蹠之分、無、他、利、与(と)、善之間、也」

孟子 先生は言った。

「(朝、)鶏が鳴いて起きたら、努力して善行を為す者達は、舜の道理、真理の学徒なのである。

(朝、)鶏が鳴いて起きたら、努力して利益を得る行動を為す者達は、跖の仲間なのである。

舜と、跖の違いを知りたいと欲するのであれば、他でも無い、利益と、善の違いなのである」

孟子、曰。

「楊子、取、為、我。

抜、一毛、而、利、天下、不、為、也。

墨子、　兼愛（無差別に平等に愛してしまう）。

摩（摩耗する）、頂、於、踵、利、天下、為、之。

子莫、執、中。

執、中、為、近、之、執、中、無、権、猶、執、一、也。

所、悪、執、一、者、為、其、賊、道、也。

挙、一、而、廃、百、也」

孟子先生は言った。

「楊子は、自分の為だけに利益を選び取って独占してしまうのである。

(楊子は、)自分の一つの毛を抜くことで天下の人々に利益をもたらす事ができても、しないのである。

墨子は、無差別に平等に愛してしまうのである。

(墨子は、)自分の頭頂部から踵(かかと)の先まで摩耗してしまっても他人である天下の人々に利益をもたらす事ができるのであれば、してしまうのである。

子莫は、楊子と墨子の中間を執り行うのである。

(子莫は、楊子と墨子の)中間を執り行うので、正しさに近いと見なす事もできるが、(楊子と墨子の)中間を執り行なおうとして仮にできなければ、(楊子と墨子の、どちらか)一方だけに偏って執り行ってしまうのである。

(楊子と墨子の、どちらか)一方だけに偏って執り行うのを憎悪する理由は、それが道理、真理を損なってしまう事に成るためである。

一つだけを挙げて、残りの百、残りの全てを捨ててしまうからである」

孟子、曰。

「飢、者(もの)、甘(うまい)、食。

渇、者(もの)、甘(うまい)、飲。

是(これ)、未、得、飲食之正、也。

飢渇、害、之(これ)、也。

豈(どうして)、惟(ただ)、口、腹、有、飢渇之害?

人、心、亦(また)、皆、有、害。

人、能、無(ない)、以、飢渇之害、為(なす)、心、害、則(すなわち)、不、及(およぶ)、人、不、為(なす)、憂、
矣」

孟子 先生は言った。

「飢えている者にとっては、食べ物は美味いのである。
渇いている者にとっては、飲み物は美味いのである。
しかし、これは、未だ飲食物を正しく『会得』、『理解』していないのである。
飢え渇きが、人を損なってしまっているのである。
飢え渇きの害が有るのは、口(くち)や腹だけではない。
人の心にも、飢え渇きの害が有るのである。
人が、自分の心を、飢え渇きの害に遭わないようにできれば、(富が)他人に及ばなくても、心配しなく成る」

孟子、曰。

「柳下恵、不、以、三公、易(かえる)、其介(その堅さ)」

孟子 先生は言った。

「柳下恵は、三公という高貴な地位によって、自分の心の堅固さを変えなかった」

孟子、曰。

「有、為(なす)、者(もの)、辟、若(のよう)、掘、井。

掘、井、九軔、而、不、及(およぶ)、泉、猶(なお)、為(なす)、『棄、井』、也」

孟子 先生は言った。

「為(な)すべき事が有る者は、例えば、井戸を掘っている者のようなのである。井戸を九軔という深さまで掘っても、源泉に及ばないうちに止めてしまったら、『井戸を掘るのを放棄してしまった者である』と見なされてしまうのである」

孟子、曰。

「堯、舜、性、之(これ)、也。

湯(=湯王)、武(=武王)、身、之(これ)、也。

五覇、仮(かりる)、之(これ)、也。

久、仮（かりる）、而、不、帰、悪（どうして）、知、其（その）、非、有、也？」

孟子先生は言った。

「堯と、舜は、正義などを、自分の性質にした。
殷の湯王と、周王朝の武王は、正義などを身につけた。
五人の覇者は、正義などを借りていただけなのである。
(五人の覇者が、)正義などを長期間、借りたまま、返さなかったせいで、(後世の人々は、五人の覇者が)『正義などの所有者ではない』と知らないままなのである！」

公孫丑、曰。
「伊尹、曰。
『予、不、狎（なれる）、于、不順』。
放、太甲、于、桐、民、大、悦。
太甲、賢。
又（また）、反（かえす）、之（これ）、民、大、悦。
賢者、之（の）、為（なる）、人、臣、也、其（その）君、不、賢、則（すなわち）、固（もとより）、可、放、与（か）？」

孟子、曰。
「有、伊尹之志、則（すなわち）、可。

無、伊尹之志、則（すなわち）、簒、也」

公孫丑が言った。

「伊尹は言いました。

『私、伊尹は、(太甲を、)道理、真理への不従順に慣れさせたくない』と。

(伊尹は、)太甲を桐という所へ追放したので、国民達は大いに喜びました。

太甲は、(改心して)賢者に成りました。

(伊尹は、)太甲を復帰させたので、国民達は大いに喜びました。

賢者は、他人の臣下でありながら、自分の上司である君主が賢者でなければ、

本（もと）より、君主を追放しても善いのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「伊尹のような志が有れば、善い。

伊尹のような志が無ければ、簒奪に成ってしまいます」

公孫丑、曰。

「『詩』、曰。

『不、素餐（給料泥棒）、兮』。

君子、之（の）、不、耕、而、食、何、也？」

孟子、曰。

「君子、居、是(この)国、也、其(その)君、用、之、則(すなわち)、安富、尊栄(尊重される地位に成って栄える)。
其(その)子弟、従、之(これ)、則(すなわち)、孝弟、忠信。
『不、素餐(給料泥棒)、兮』、孰(だれが)、大、於(よりも)、是(これ)？」

公孫丑が言った。

「『詩経』で言われています。
『給料泥棒をしないように』と。
(真の)王者が、農耕作業をしないで、養われてしまっているのは、なぜ、でしょうか？」

孟子 先生は言った。

「(真の)王者が、ある国に居て、その国の君主が、その王者を用いれば、(その真の王者は、)その国に安らぎと富をもたらすし、その国を尊重される地位にして栄えさせます。
その国の若者が、その(真の)王者に従えば、目上の人を敬うように成りますし、誠実に成ります。
『給料泥棒をしない』者のうち、(真の)王者は、最も大いなる者なのである！」

王子、墊、問、曰。

「士、何、事（こと）？」

孟子、曰。

「尚（たかくする）、志」

曰。

「何、謂、『尚（たかくする）、志』？」

曰。

「仁義、而已（のみ）、矣。
殺、一無罪、非、仁、也。
非、其（その）、有、而、取、之（これ）、非、義、也。
居、悪（どこに）、在？
仁、是（これ）、也
路、悪（どこに）、在？
義、是（これ）、也。
居、仁、由（よる）、義、大人之事、備、矣」

王子である墊が孟子 先生に質問して言った。

「『一人前である者』は、何を大事にしますか？」

孟子 先生は言った。

「志を高くする事を大事にします」

塾が言った。

「どのようにする事を『志を高くする』と言っているのですか？」

孟子先生は言った。

「思いやりと正義を志す事だけなのです。
無罪の人を一人でも殺してしまうのは、思いやりでは、ありません。
自分が所有していないものを取ってしまうのは、正義では、ありません。
どこに居場所が有るのか？
それ(、居場所)は、思いやりなのである。
どこに道が有るのか？
それ(、道)は、正義なのである。
思いやりに留まって、正義によって行動すれば、大いなる人が一大事にしている事が備わっているのである」

孟子、曰。

「仲子、不義、与、之(これ)、斉、国、而、弗(ない)、受。
人、皆、信、之(これ)。
是(これ)、舍(すてる)、簞食、豆羹、之(の)、義、也。
人、莫(ない)、大、焉(よりも)、亡、親戚、君臣、上下。

以、其、小、者、信、其、大、者、奚、可、哉？」

孟子先生は言った。

「仲子は、正しくなければ、斉という国を与えようとしても、受け取らないのである。

人々は皆、仲子の正しさを信じ込んでしまっている。

これは、竹の容器一つ分の食事や、容器一つ分のスープを捨てるような(小さな)正義なのである。

人にとって、血縁関係や、君主と臣下の関係や、上下関係を滅ぼしてしまうのは、最大の悪なのである。

小さな正義を行う者を信じ込んでしまうようでは、最も大いなる正義を行う者を信じる事ができるであろうか？」

桃応、問、曰。

「舜、為、天子、皋陶、為、士、瞽瞍、殺、人、則、如之何？」

孟子、曰。

「執、之、而已、矣」

「然、則、舜、不、禁、与？」

曰。

「夫(それ)、舜、悪(どうして)、得、而、禁、之(これ)？

夫(それ)、有、所、受、之(これ)、也」

「然、則(すなわち)、舜、如之何？」

曰。

「舜、視、棄、天下、猶(ちょうど〜のよう)、棄、敝蹝(破れた靴)、也。

竊(ひそかに)、負、而、逃、遵、海浜、而、処、終身、欣然(喜んで)、楽、而、忘、天下」

桃応が孟子 先生に質問して言った。

「(仮に、)舜が天子であって、皐陶が役人であって、(舜の父である)瞽瞍が人を殺してしまったら、(舜は、)どうするのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「正義を執行するだけである」

(桃応が言った。)

「それでは、舜は(瞽瞍の処刑を)禁止しないのですか？」

孟子 先生は言った。

「舜は、 瞽瞍の処刑を禁止でき得ない！

法は、(堯という、)受け継いできた元が有るのである」

「それでは、(舜は、)どうするのでしょうか? (何もしないのでしょうか?)」

(桃応が言った。)

孟子 先生は言った。

「舜は、天下の統治権を捨てる事を、破れた靴を捨てる程度に見なします。

(舜は、)ひそかに瞽瞍を背負って逃げて、海のほとりに一生いて、(親に仕えるのを)喜び楽しんで、天下の統治権など忘れてしまうであろう」

孟子、自(より)、范、之(いく)、斉、望見、斉王之子、喟然(嘆息して)、嘆、曰。

「居、移、気、養、移、体。

大、哉、居、乎。

夫(それ)、非、尽(ことごとく)、人之子、与(か)?」

孟子、曰。

「王子、宮室、車馬、衣服、多、与(と)、人、同。

而、王子、若(のよう)、彼、者(もの)、其(その)居、使(させる)、之(これ)、然、也。

況(まして)、居、天下之広居、者(もの)、乎?

魯、君、之(いく)、宋、呼、於、垤沢之門。

守、者(もの)、曰。
『此(これ)、非、吾君(わが)、也。
何(どうして)、其声(その)、之(の)、似、我君(わが)、也?』。
此(これ)、無他(ほかでもない)、居、相、似、也」

孟子 先生は、范という所から斉という国へ行き、斉の王の王子達を眺めて、嘆息して感嘆して言った。
「居る環境は気持ちに反映するし、栄養は体に反映する。
大いなるかな、(斉の王の王子達の)居る環境は。
ことごとく、人の子ではないようではないか?」

孟子 先生は言った。
「王子は、家、馬車、衣服の多くは、他人と同じである。
しかし、王子達が、あれらのような者達である理由は、居る環境が、そうさせているのである。
まして、天下の広大な居場所(に例えられる思いやり)に居る王者は、人の子ではないようなのである!
魯の君主が、宋という国へ行って、門番を呼んだ。
門番は言った。
『この方(かた)は、私達の君主ではない。
しかし、どうして、この方(かた)の声は、私達の君主に似ているのであろうか?』
と。
これは、他でも無い、居る環境が似ていたからなのである」

孟子、曰。

「食（やしなう）、而、弗（ない）、愛、豕交（豚扱い）、之（これ）、也。
愛、而、不、敬、獣畜（獣扱い）、之（これ）、也。
恭敬、者（もの）、幣（礼物）、之（の）、未、将（しようとしている）、者（もの）、也。
恭敬、而、無、実、君子、不、可、虚、拘」

孟子先生は言った。

「養っていても、愛さないのは、その人を豚扱いしているのである。
愛していても、敬わないのは、その人を(愛玩動物、ペットのように)動物扱いしているのである。
贈り物をしようとする前に、恭しく敬っているべきなのである。
恭しく敬っている実体が無い者に、(真の)王者は、虚しく拘束されているべきではない」

孟子、曰。

「形色、天性、也。

惟（ただ）、聖人、然、後、可、以、践（ふむ）、形」

孟子先生は言った。

「色形は、天の神による運命による性質なのである。
聖人だけが、しかるべき後に、色形を踏む事ができるのである」

斉、宣王、欲、短、喪。

公孫丑、曰。

「為（なす）、期之喪、猶（なお）、愈（すぐれている）、於（よりも）、已（やめる）、乎？」

孟子、曰。

「是（これ）、猶（ちょうど～のよう）、或、紾（ねじまげる）、其（その）兄之臂（腕）、子、謂、之（これ）、『姑（しばらく）、徐徐』、云、
爾（しかり）。
亦（また）、教、之（これ）、孝弟、而已（のみ）、矣」

王子、有、其（その）母、死、者（もの）。

其傅（教育係）、為（ため）、之（これ）、請、数月之喪。

公孫丑、曰。

「若此、者、何如、也？」

曰。

「是、欲、終、之、而、不、可、得、也。

雖、加、一日、愈、於、已。

謂、夫、莫、之、禁、而、弗、為、者、也」

斉という国の宣王は、三年間の喪を短縮したいと欲してしまった。

公孫丑が言った。

「一年間の喪をするのは、やめてしまうよりも優れていますよね？」

孟子先生は言った。

「それでは、ちょうど、ある人が自分の兄の腕をねじ曲げているのに、『しばらくの間だけ徐々にしてください』と言うような物なのである。

目上の人を敬う事を教えるだけなのである」

宣王の王子達のうち、自分の母が死んでしまった者がいた。

その王子の教育係が、その王子の為に、数か月間の喪を請い願った。

公孫丑が言った。

「このような場合は、どうなのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「これは、三年間の喪を終わらせたいと欲しても、でき得ないのである。

一日間でも喪に服すのは、やめてしまうよりも優れているのである。

あの、この数か月間の喪を禁止しないで、三年間の喪をしない者(である宣王)について言っているのである」

孟子、曰。

「君子、之、所以、教、者、五。

有、如、時雨、化、之、者。

有、成、徳、者。

有、達、財、者。

有、答、問、者。

有、私淑艾、者。

此五者、君子、之、所以、教、也」

孟子 先生は言った。

「(真の)王者が教える者には、五種類の場合が有ります。

適切な時機に降る雨が教化するような者がいた場合。

徳、善行、善を完成させようとする者がいた場合。
有能さに到達しようとする者がいた場合。
疑問への答えを必要としている者がいた場合。
(真の王者を)ひそかに手本としている者がいた場合。
これらの五種類の者達が、(真の)王者が教える場合の者達なのである」

公孫丑、曰。
「道、則(すなわち)、高、矣、美、矣。
宜、若(のよう)、登、天、然。
似、不、可、及(およぶ)、也。
何、不、使(させる)、彼、為(なる)、可、幾及(おいつく)、而、日、孳孳(努力する)、也?」

孟子、曰。
「大匠、不、為(ため)、拙工、改、廃、縄墨。
羿、不、為(ため)、拙射、変、其(その)彀率。
君子、引、而、不、発、躍如、也。
中道、而、立。
能、者、従、之(これ)」

公孫丑が言った。

「(真理への)道は、高いし、美しいです。
天へ登るような物なのです。
及ぶべきではないのに似ています。
なぜ、追いつく事ができるように成るようにさせるために日々努力させるのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「大工は、稚拙な大工のために、墨縄を改悪したり、やめたりしません。
羿は、稚拙な射手のために、弓を引く割合を改悪したりしません。
(真の)王者は、弓を引いたが、未だ発射せず、矢が今にも発射されそうに跳躍しそうに、活発にさせます。
(真の)王者は、『中道』、『中庸』、『節制』を確立しています。
可能な者は、それに従う事ができます」

孟子、曰。

「天下、有道、以、道、殉(したがう)、身。
天下、無道、以、身、殉(したがう)、道。
未、聞、以、道、殉(したがう)、乎、人、者(もの)、也」

孟子 先生は言った。

「天下が有道であれば、道理、真理を自身(の地位)に従って実行します。
天下が無道であれば、道理、真理に自身を従わせます。
道理、真理を他人に従わせた者について、未だ聞いた事が有りません」

公都子、曰。
「滕更、之、在、門、也、若、在、所、礼。
而、不、答、何、也?」

孟子、曰。
「挟、貴、而、問、挟、賢、而、問、挟、長、而、問、挟、有、勲労、而、
問、挟、故、而、問、皆、所、不、答、也。
滕更、有、二、焉」

公都子が言った。
「滕更が(孟子 先生の)門下に弟子として、いますが、礼遇するべきように思
います。
しかし、孟子 先生が(滕更からの質問に)答えないのは、なぜ、でしょう
か?」

孟子 先生は言った。

「高貴な地位である事を挟んで質問してきたり、賢明である事を挟んで質問してきたり、年長者である事を挟んで質問してきたり、君主への功績が有る事を挟んで質問してきたら、これらの質問には皆、答えません。
滕更からの質問には、これらのうち二つが有ったのです」

孟子、曰。
「於、不、可、已（やめる）、而、已（やめる）、者（もの）、無、所、不、已（やめる）。
於、所、厚、者（もの）、薄、無、所、不、薄、也。
其（その）、進、鋭、者（もの）、其（その）、退、速」

孟子 先生は言った。
「やめるべきではないのにやめてしまう者どもは、全てをやめてしまうように成ってしまうのである。
手厚くするべきものの手を抜く者どもは、全てに手を抜いてしまうように成ってしまうのである。
鋭く突き進む者は、後退してしまうのも速いのである」

孟子、曰。

「君子、之、於、物、也、愛、之、而、弗、仁。
於、民、也、仁、之、而、弗、親。
親、親、而、仁、民。
仁、民、而、愛、物」

孟子先生は言った。

「(真の)王者は、(土地といった)物に愛着する事は有っても、思いやらない。
(真の王者は、)人々を思いやる事が有っても、親しくしない。
(真の王者は、)親に親愛の情を抱くので、他人である人々を思いやるように成るのである。
(真の王者は、)人々を思いやるので、(土地といった)物に愛着するのである」

孟子、曰。

「知者、無、不、知、也。
当、務、之、為、急。
仁者、無、不、愛、也。
急、親、賢、之、為、務。
堯、舜、之、知、而、不、遍、物、急、先、務、也。

堯、舜、之（の）、仁、不、遍、愛、人、急、親（したしむ）、賢、也。
不、能、三年之喪、而、『緦（三か月間の喪）』、『小功（五か月間の喪）』、之（これ）、察、放飯流歠（下品な食べ方）、而、問、
『無（なかれ）、歯、決（無礼にも干し肉を歯で噛み切る）』、是（これ）、之（これ）、謂、『不、知、務』」

孟子 先生は言った。
「知者は、知らないものが無い。
(しかし、知者は、)賢者に親しむのを急務とする(ので、その代わり、知らないものが出て来る)。
思いやり深い知者は、愛さないものが無い。
(しかし、思いやり深い知者は、)賢者に親しむのを急務とする(ので、その代わり、愛さないものが出て来る)。
堯や、舜が、物についての知恵が普遍的ではないのは、(賢者に親しむという)急務を優先したからである。
堯や、舜が、人を愛する思いやりが普遍的ではないのは、賢者に親しむという急務を優先したからである。
三年間の喪もできないくせに三か月間の喪や五か月間の喪について考察したり、下品な食べ方をしながら『無礼にも干し肉を歯で噛み切るなかれ』と問い詰めるのを『賢者に親しむ急務を知らない』と言うのである」

尽心下

孟子、曰。

「不仁、哉、梁、恵王、也。
仁者、以、其(その)、所、愛、及(およぼす)、其、所、不、愛。
不仁者、以、其(その)、所、不、愛、及(およぼす)、其、所、愛」

公孫丑、問、曰。

「何、謂、也？」

「梁、恵王、以、土地之故、糜爛、其(その)民、而、戦、之(これ)、大敗。
将、復、之(これ)、恐、不、能、勝。
故、駆、其(その)、所、愛、子弟、以、殉、之(これ)。
是(これ)、之(これ)、謂、『以、其(その)、所、不、愛、及(およぼす)、其(その)、所、愛』、也」

孟子 先生は言った。

「思いやりが無いかな、梁という国の恵王は。
思いやり深い知者は、愛する者への思いやりを愛さない者へ及ぼしていく。
思いやりの無い者は、愛さない者への思いを愛する者へ及ぼしていってしまう」

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。

「どのような事を言っているのでしょうか？」

(孟子 先生は言った。)

「梁の恵王は、土地のために、自国民がただれて崩壊するまで戦わせてしまって大敗しました。

(恵王は、)また戦おうとしましたが、負けるのを恐れました。

そのため、(自分が軍隊を率いる代わりに、)自分が愛している子などを駆り出して(軍隊を率いさせて)、その子を死なせてしまいました。

こうしてしまう事を、『愛さない者への思いを愛する者へ及ぼしていってしまう』と言っているのです」

孟子、曰。

「『春秋』、無(ない)、義、戦。

彼、善、於(よりも)、此(これ)、則(すなわち)、有、之(これ)、矣。

征、者(とは)、上、伐、下、也。

敵国、不、相、征、也」

孟子 先生は言った。

「『春秋』には正義のための戦いは書かれていないのである。

一方が、他方よりも善い、というのは書かれている。

『征』とは、上位者が下位者を討伐する事である。
敵対国同士では、相互に『征』、『上位者が下位者を討伐する事』は有り得ないのである」

孟子、曰。
「尽(ことごとく)、信、書、則(すなわち)、不如(しかず)、無(ない)、書。
吾、於、『武成』、取、二、三策(札)、而已(のみ)、矣。
仁人、無(いない)、敵、於、天下。
以、至、仁、伐、至、不仁。
而、何(どうして)、其(その)血、之(これ)、流、杵(きね)、也?」

孟子先生は言った。
「ことごとく文書を信じ込んでしまう事は、文書が無い事には、及ばないのである。
私、孟子は、『書経』の『武成』では、二、三札(ふだ)分の文書しか取り入れていない。
思いやり深い知者は、天下に、敵がいないのである。
(武王が紂王を討伐したのは、)思いやりの至りである者が、思いやりの無さの至りである者を討伐したのである。

それなのに、どうして、流血が杵（きね）を流すほどであったのか？　虚偽である！」

孟子、曰。

「有、人、曰。

『我、善、為（なす）、陳（陣）。我、善、為（なす）、戦』。

大罪、也。

国、君、好、仁、天下、無（いない）、敵、焉。

南面、而、征、北狄、怨、東面、而、征、西夷、怨、曰。

『奚為（どうして）、後、我？』。

武王、之（の）、伐、殷、也、革車、三百両、虎賁（直属の兵士）、三千人。

王、曰。

『無、畏。

寧、爾（なんじ）、也。

非、敵、百姓、也』。

若（のよう）、崩、厥角（礼拝）、稽首（礼拝）。

征、之（の）、為（なる）、言、正、也。

各、欲、正、己、也、焉（どうして）、用、戦？」

孟子先生は言った。

「ある人がいて言ったとします。
『私は、戦陣、戦術を巧みにできます。私は、戦うのを巧みにできます』と。
その人は、大罪人なのである。
国の君主が思いやりを好めば、天下に敵はいないのである。
(殷の湯王が)南に向かって征伐していくと北の外国人達は怨み、東に向かって征伐していくと西の外国人達は怨んで言いました。
『どうして、私達を後回しにするのですか?』と。
武王が殷の紂王を征伐した時は、革で覆われた車、三百両に、直属の兵士が三千人だけであった。
武王は言いました。
『恐れるなかれ。
あなた達(、庶民達)に安らぎをもたらすつもりなのです。
庶民達を敵にするつもりはありません』と。
(庶民達は、)崩れるように、(武王を)礼拝しました。
『征』という言葉は、『正』、『正しい』なのである。
庶民達の各々が、自身の環境を正して欲しがったら、戦争を用いる必要は無いのである!」

孟子、曰。
「梓匠輪輿(大工や車の職人)、能、与(あたえる)、人、規矩、不能、使(させる)、人、巧」

孟子 先生は言った。

「大工や車の職人は、他人にコンパスやL字形の定規を与える事はできるが、
他人を巧みにさせる事はできないのである」

孟子、曰。

「舜、之(の)、飯(たべる)、糗(干し飯)、茹(たべる)、草、也、若(のよう)、将、終、身、焉。
及(およぶ)、其(その)、為(なる)、天子、也、被、袗衣(ぬいとりのある礼服)、鼓、琴、二女、果。
若(のよう)、固、有、之(これ)」

孟子 先生は言った。

「舜は、干し飯を食べ、野菜を食べていたが、身を終えようとしているかの
ようであった。
しかし、舜は、天子に成るに及んで、『袗衣』、『ぬいとりのある礼服』を
まとい、琴を演奏し、二人の女性と添い遂げた。
まるで、これらを本(もと)より所有しているかのようであった」

孟子、曰。

「吾、今、而、後、知、殺、人、親、之(の)、重、也。
殺、人之父、人、亦(また)、殺、其(その)父。
殺、人之兄、人、亦(また)、殺、其(その)兄。
然、則(すなわち)、非、自(みずから)、殺、之(これ)、也、一、間、耳(のみ)」

孟子先生は言った。

「私、孟子は、今にして、後に成って、他人の親を殺す罪の重さを知りました。
他人の父を殺せば、他人も自分の父を殺します。
他人の兄を殺せば、他人も自分の兄を殺します。
そう成ってしまうと、自分が直接、自分の父や兄を殺さなくても、一つ分、間接的に自分の父や兄を殺したに過ぎないのである」

孟子、曰。

「古、之(の)、為(つくる)、関、也、将(しようとする)、以、御(ふせぐ)、暴。
今、之(の)、為(つくる)、関、也、将(しようとする)、以、為(なす)、暴」

孟子先生は言った。

「古代は、関所を作ったのは、暴力を予防しようとしたからなのである。
今は、関所を作るのは、暴力を実行しようとするからなのである」

孟子、曰。

「身、不、行、道、不、行、於、妻子。
使（つかう）、人、不、以、道、不、能、行、於、妻子」

孟子 先生は言った。

「自身が道理、真理を行わなければ、妻子も道理、真理を行（おこな）ってくれないのである。
道理、真理によって他人を使役しないと、妻子も行（おこな）ってくれないのである」

孟子、曰。

「周、于、利、者（もの）、凶年、不能、殺。
周、於、徳、者（もの）、邪世、不能、乱」

孟子 先生は言った。

「利益を周知している者どもは、凶作の年でも、殺す事ができない。
徳、善行、善を周知している者達は、邪悪な世、邪悪な時代でも、乱す事ができない」

孟子、曰。

「好、名、之(の)、人、能、譲、千乗之国。
苟(かりに)、非、其(その)人、箪食、豆羹、見(あらわれる)、於、色」

孟子 先生は言った。

「名声を好む人は、千台の戦車がある大国を譲る事もできる。
しかし、仮に、正しい人でなければ、竹の容器一つ分の食べ物、容器一つ分のスープでも、(譲ったものへの執着心が)顔色に表れてしまう」

孟子、曰。

「不、信、仁、賢、則(すなわち)、国、空虚。
無(ない)、礼義、則(すなわち)、上下、乱。

無(ない)、政、事(こと)、則(すなわち)、財、用、不足」

孟子先生は言った。

「思いやり深い知者や、賢者を信じなければ、国は空虚に成ってしまいます。
礼儀が無ければ、上下関係が乱れてしまいます。
政治が正しく行われなければ、国の財産を使用しようとしても不足してしまいます」

孟子、曰。

「不仁、而、得、国、者(もの)、有、之(これ)、矣。
不仁、而、得、天下、者(もの)、未、之(これ)、有、也」

孟子先生は言った。

「思いやりが無くても、国を獲得する者は、いるかもしれない。
思いやりが無くても、天下を獲得する者は、未だいないのである」

孟子、曰。
「民、為(なす)、貴。
社稷、次、之(これ)。
君、為(なす)、軽。
是故(このため)、得、乎、丘民(民衆)、而、為(なる)、天子。
得、乎、天子、為(なる)、諸侯。
得、乎、諸侯、為(なる)、大夫。
諸侯、危、社稷、則(すなわち)、変置(別の人に変える)。
犠牲、既、成、粢盛(穀物などの神への捧げ物)、既、潔、祭祀、以、時。
然、而、旱乾、水溢、則(すなわち)、変置(別の人に変える)、社稷」

孟子 先生は言った。
「国民達を貴重であると見なします。
神への祭壇は、その次です。
君主は(最も)軽んじます。
このため、民衆の関心を得れば、天子に成れるのです。
天子の関心を得れば、諸侯に成れます。
諸侯の関心を得れば、役人に成れます。
諸侯が、神への祭壇を危うくしてしまえば、その諸侯の位の人を別の人に変えます。
犠牲の家畜を成長させて、穀物などの神への捧げ物を清浄にして、適切な時機に神を祭ります。

そうしたのに、旱魃（かんばつ）や、洪水が起きてしまったら、神への祭壇を別の祭壇に変えます」

孟子、曰。
「聖人、百世之師、也。
伯夷、柳下恵、是（これ）、也。
故、聞、伯夷之風、者（もの）、頑夫（頑迷な男）、廉、懦夫（臆病な男）、有、立、志。
聞、柳下恵之風、者（もの）、薄夫（軽薄な男）、敦、鄙夫（卑しい男）、寛。
奮、乎、百世之上、百世之下、聞、者（もの）、莫（ない）、不、興起、也。
非、聖人、而、能、若是（このよう）、乎？
而、況（まして）、於、親炙（直接的に親しく接して感化を受けた者）、之（これ）、者（もの）、乎？」

孟子先生は言った。
「聖人は、百世代の教師なのである。
伯夷や、柳下恵が、それである。
そのため、伯夷の話を聞いた者には、頑迷な人でも清廉潔白に成ったり、臆病な人でも高い志を立てたりする事が有った。
柳下恵の話を聞いた者には、軽薄な人でも情に厚く成ったり、卑しい人でも寛大に成ったりした者がいた。

このため、百世代前に奮(ふる)い立てば、百世代後の、その奮(ふる)い立った人の話を聞いた者も、奮(ふる)い立つのである。
聖人だけが、このような事をできるのである！
まして、聖人に直接的に親しく接して感化を受けた者は、奮(ふる)い立つのである！」

孟子、曰。
「仁、也、者(は)、人、也。
合、而、言、之(これ)、道、也」

孟子先生は言った。
「思いやりとは、（人性、）人なのである。
思いやりと、（人性、）人を合わせて言えば、道（、正義）なのである」

孟子、曰。
「孔子、之(の)、去、魯、曰。
『遅遅、吾、行、也』。

去、父母、国、之(の)、道、也。
去、斉、接、淅(といだ米)、而、行。
去、他国、之(の)、道、也」

孟子 先生は言った。
「孔子 先生は、魯という国を去る時に、言いました。
『遅々として、私、孔子の足は進まないのである』と。
父母の国の去り方だったのである。
(孔子 先生は、)斉という国を去る時は、といだ米を取り入れて(速やかに)
去って行った。
他国の去り方だったのである」

孟子、曰。
「君子、之(の)、戹(災難)、於、陳、蔡之間、無、上下之交、也」

孟子 先生は言った。
「王者である孔子 先生が陳と蔡の間で災難に遭ってしまったのは、(上位者
も下位者達も悪人で)上位者とも下位者達とも交際できなかったせいなのであ
る」

貉稽、曰。

「稽(＝貉稽)、大、不、理、於、口」

孟子、曰。

「無(なかれ)、傷、也。

士、憎、茲(ここ)、多口。

『詩』、云。

『憂、心、悄悄(元気を失くす)、慍(うらむ)、于(によって)、群小』。

孔子、也。

『肆、不、殄(断つ)、厥慍(そのうらみ)、亦(また)、不、殞(おとす)、厥問(その名声)』。

文王、也」

貉稽が孟子 先生に言った。

「私、貉稽は、大いに不条理な悪口を言われてしまいます」

孟子 先生は言った。

「気に病むなかれ。

『一人前である者』は、多数の悪口を言われてしまう物なのである。

『詩経』で言われています。

『心が憂鬱に成ってしまい元気を失くしてしまうのは、矮小な者どもの群れによって怨まれているからである』と。
孔子も、そうだったのです。
『自分への怨みを断ち切る事ができなかったが、自分の名声は落とさなかった』と。
文王も、そうだったのです」

孟子、曰。
「賢者、以、其昭昭（その明るく輝く）、使（させる）、人、昭昭（明るく輝く）。
今、以、其昏昏（その暗愚）、使（させる）、人、昭昭（明るく輝く）」

孟子先生は言った。
「賢者は、自分が明るく輝いて、他人を明るく輝かせる。
今の者どもは、自分は暗愚なのに、他人を明るく輝かせようとする」

孟子、謂、高子、曰。
「山径（山道）之蹊（小道）、間、介然（堅固に）、用、之（これ）、而、成、路。

為、間、不、用、則、茅、塞、之、矣。
今、茅、塞、子之心、矣」

孟子先生は高子に言った。
「山道の小道は、少しの間、その小道を利用していれば、介然と堅固に、道を成しています。
しかし、少しの間でも、利用しなければ、茅などの草で塞がれてしまいます。
今、あなた、高子の心も、茅などの草で塞がれてしまっているような物なのです」

高子、曰。
「禹之声、尚、文王之声」
孟子、曰。
「何、以、言、之?」
曰。
「以、追、蠡 」
曰。

「是（これ）、奚（どうして）、足（たりる）、哉？
城門之軌、両馬之力、与（や）」

高子が孟子 先生に言った。
「禹の音楽は、文王の音楽を超越しています」

孟子 先生は言った。
「どうして、そう言ってしまえるのか？」

高子が言った。
「鐘の取っ手に虫食いの跡のような物が有るからです」

孟子 先生は言った。
「それで、どうして、証拠、足り得るのか？
城門についた軌跡は、二頭の馬の力による物なのである」

斉、饑。

陳臻、曰。
「国、人、皆、以、夫子、将、復、為（なす）、発、『棠』。

殆、不、可、復？」

孟子、曰。

「是、為、馮婦、也。
晋、人、有、馮婦、者。
善、搏、虎。
卒、為、善士。
則、之、野。
有、衆、逐、虎。
虎、負、嵎。
莫、之、敢、攖。
望見、馮婦、趨、而、迎、之。
馮婦、攘臂、下車。
衆、皆、悦、之、其、為、士、者、笑、之」

斉という国で飢饉が有った。

陳臻が孟子 先生に言った。
「国の人々は皆、孟子 先生がまた『棠』という所の食糧を放出するように発言してくれる、と思っています。
また発言するのは難しいのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「それでは、馮婦を模倣するような物なのである。
晋という国の人に、馮婦という者がいた。
馮婦は、巧みに、虎をとらえました。
終には、馮婦は、善良な役人に成りました。
役人達が(車で)野原へ行きました。
すると、大衆が虎を追いかけていました。
虎は、山の折れ曲がった所を背にしました。
虎に、勇敢に近づく人はいませんでした。
大衆は、馮婦を遠くから見つけると、走って、この馮婦を迎えに行きました。
馮婦は腕まくりをして下車しました。
大衆は皆、それを喜びましたが、役人の者達は、それを笑いました」

孟子、曰。
「口、之、於、味、也、目、之、於、色、也、耳、之、於、声、也、鼻、之、於、臭、也、四肢、之、於、安佚、也、性、也。
有、命、焉。
君子、不、謂、『性』、也。
仁、之、於、父子、也、義、之、於、君臣、也、礼、之、於、賓主、也、知、之、於、賢者、也、聖人、之、於、天道、也、命、也。
有、性、焉。
君子、不、謂、『命』、也」

孟子先生は言った。

「口の味において、目の色形において、耳の音声において、鼻の臭いにおいて、四肢の安らぎにおいて、良いものを求めるのは、性質なのである。

しかし、良いものを得られるかは、天の神による運命次第なのである。

そのため、王者は、『性質』とは言わないのである。

思いやりの父子関係において、正義の君主と臣下の関係において、礼儀の賓客と主人の関係において、知恵の賢者において、聖人の天の神の道理、真理において、善いものを求めるのは、天の神からの使命なのである。

そして、善いものを得られるかは、人の性質次第なのである。

このため、王者は、『使命』、『運命』と言わないのである」

浩生不害、問、曰。

「楽正子、何、人、也？」

孟子、曰。

「善人、也。

信人、也」

「何、謂、善？

何、謂、信？」

曰。

「可、欲、之、謂、『善』。
有、諸、己、之、謂、『信』。
充実、之、謂、『美』。
充実、而、有、光輝、之、謂、『大』。
大、而、化、之、之、謂、『聖』。
聖、而、不、可、知、之、之、謂、『神』。
楽正子、二之中、四之下、也」

浩生不害が孟子 先生に質問して言った。
「楽正子とは、どんな人ですか？」

孟子 先生は言った。
「善人です。
誠実な人です」

浩生不害が言った。
「どのような事を『善』と言っているのでしょうか？
また、どのような事を『誠実』と言っているのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「善を欲する事ができれば、『善』と言います。
善、善良さが自分に有れば、『誠実』と言います。
善を充実させれば、『美』と言います。
善を充実させて、光輝が有れば、(他人を照らせば、)『偉大』と言います。
偉大で、他人を教化すれば、『聖』と言います。
神聖ですが、知る事ができない者を『神』と言います。
楽正子は、六つの中の二つが有り、神から四つ下なのです」

孟子、曰。
「逃、墨、必、帰、於、楊。
逃、楊、必、帰、於、儒。
帰、斯、受、之、而已、矣。
今、之、与、楊、墨、弁、者、如、追、放豚。
既、入、其苙、又、従、而、招、之」

孟子 先生は言った。
「(大衆は、)墨子の説を逃れたら、必ず、楊子の説に帰属してしまいます。
(大衆は、)楊子の説を逃れる事ができたら、必ず、孔子 先生の儒教に帰属してくれるはずです。
孔子 先生に帰属してくれたら、その人を受け入れるだけなのです。

今の、楊子や、墨子と、議論する者は、放牧されている豚を追い込もうとするかのようなのである。
既に檻（おり）に入れたのに、さらに、繋ぎ止めようとしてしまう」

孟子、曰。
「有、布縷（布と、より糸）之征、粟米之征、力役之征。
君子、用、其（その）一、緩、其（その）二。
用、其（その）二、而、民、有、殍（餓死）。
用、其（その）三、而、父子、離」

孟子先生は言った。
「布と、より糸の税と、米などの穀物の税と、労役の税が有ります。
(真の)王者は、それら三つのうち一つだけを利用し、残りの二つは緩めます。
三つのうち二つも利用してしまうと、国民から餓死者が出てしまいます。
三つのうち三つも利用してしまうと、(国民で、)父子などの一家が離散してしまいます」

孟子、曰。
「諸侯之宝、三。
土地、人民、政事。
宝、珠玉、者（もの）、殃（わざわい）、必、及（およぶ）、身」

孟子 先生は言った。
「諸侯が宝とするべきものは、三つです。
土地、国民達、政治です。
宝玉を宝としてしまう者どもには、必ず、その身に災いが及んでしまいます」

盆成括、仕、於、斉。
孟子、曰。
「死、矣、盆成括」
盆成括、見、殺。
門人、問、曰。
「夫子、何、以、知、其（その）、将、見、殺？」

曰。

「其(その)、為人(ひととなり)、也、小(すこし)、有、才。
未、聞、君子之大道、也。
則(すなわち)、足(たりる)、以、殺、其(その)軀、而已(のみ)、矣」

盆成括が斉という国に役人として仕えてしまった。

孟子 先生は言った。

「死んでしまうかもしれない、盆成括は」

盆成括は殺されてしまった。

ある弟子が孟子 先生に質問して言った。

「孟子 先生は、どうして、(盆成括が)殺されるであろうと分かったのですか？」

孟子 先生は言った。

「盆成括の人となりは、少し才能が有った。
しかし、盆成括は、(真の)王者の大いなる道理、真理について未だ聞いた事が無かったのである。
それでは、殺されるに足りてしまうのである」

孟子、之、滕、館、於、上宮。

有、業屨、於、牖上。

館、人、求、之、弗、得。

或、問、之、曰。

「若是、乎、従者、之、廋、也」

曰。

「子、以、是、為、竊、屨、来、与？」

曰。

「殆、非、也」

「夫、予、之、設、科、也、往、者、不、追、来、者、不、拒。

苟、以、是心、至、斯、受、之、而已、矣」

孟子 先生は滕という国へ行って上宮に泊まった。

製造中の靴が(孟子 先生の従者が泊まった部屋の)窓の上に有った。

上宮の使用人が、その製造中の靴を探し求めていたが、見つける事ができなかった。

ある人が、製造中の靴について、孟子 先生に質問して言った。

「このような事をするのですね、孟子 先生の従者が靴を隠すなんて」

孟子 先生は言った。

「あなたは、私、孟子と、孟子の従者達が、靴を盗む為(ため)に来たと思ってしまっているのですか?」

その、ある人が言った。

「そうではないと思うのですが」

(孟子 先生は言った。)

「私、孟子は、『去る者は追わず。来る者は拒まず』という規則を設けていますが。

しかし、仮にも、正しい心で、私、孟子の所に到来すれば、その人を受け入れるだけなのです」

孟子、曰。
「人、皆、有、所、不、忍。
達、之、於、其、所、忍、仁、也。
人、皆、有、所、不、為。
達、之、於、其、所、為、義、也。
人、能、充、無、欲、害、人、之、心、而、仁、不、可、勝、用、也。
人、能、充、無、穿踰、之、心、而、義、不、可、勝、用、也。
人、能、充、無、受、爾汝、之、実、無、所、往、而、不、為、義、也。
士、未、可、以、言、而、言、是、以、言、餂、之、也。
可、以、言、而、不、言、是、以、不、言、餂、之、也。
是、皆、穿踰之類、也」

孟子 先生は言った。
「人には皆、他人が苦しむのを忍耐できない心が有るのです。
その心を、苦しんでも忍耐できていた他人にまで行き届かせるのが、思いやりなのです。
人には皆、悪行を為さない心が有るのです。
その心を、為していた悪行にまで行き届かせるのが、正義なのです。
人が、他人に害を与えたいと欲しない心を拡充できれば、思いやりは、適用し切れないほどに成るのです。
人が、盗まない心を拡充できれば、正義は、適用し切れないほどに成るのです。

人が、呼び捨てを受けつけない実体を拡充できれば、全ての場所へ行っても、全ての事を為しても、正義を実行しているように成っているのです。

役人が、言うべきではない言葉を言うのは、言って相手を引っ掛けたいのです。

役人が、言うべき言葉を言わないのは、言わない事で相手を引っ掛けたいのです。

これらは皆、盗人の類なのである」

孟子、曰。

「言、近、而、指、遠、者、善言、也。
守、約、而、施、博、者、善道、也。
君子之言、也、不、下帯、而、道、存、焉。
君子之守、修、其身、而、天下、平。
人、病、舎、其田、而、芸、人之田。
所、求、於、人、者、重、而、所以、自任、者、軽」

孟子 先生は言った。

「言葉が身近なものによっても、意味が深遠である物が、善い言葉なのである。

守るのは簡単でも、広範囲に影響をもたらす物が、善い道、正義なのである。

(真の)王者の言葉は、帯を下らない身近であるが、深遠な道理が在るのである。

(真の)王者が守っている行動は、自身を修養して、天下を平安にする事なのである。

しかし、人々は、自分の田畑を捨てて他人の田畑の雑草を除草するのを気に病んでしまう。

他人に求める物を重くしてしまう理由は、自任している物が軽いからなのである」

孟子、曰。

「堯、舜、性、者(もの)、也。
湯(=湯王)、武(=武王)、反(かえる)、之(これ)、也。
動容周旋(ふるまい)、中(あたる)、礼、者(もの)、盛徳之至、也。
哭、死、而、哀、非、為(ため)、生者、也。
経徳(常徳)、不、回、非、以、干(もとめる)、禄、也。
言語、必、信、非、以、正(ただす)、行、也。
君子、行、法、以、俟(まつ)、命、而已(のみ)、矣」

孟子先生は言った。

「堯や、舜は、人の性質を用いた者なのである。

殷の湯王と、周王朝の武王は、その、人の性質に帰ったのである。
ふるまいが礼儀に適(かな)う者は、盛んな大いなる徳、善行、善の至りなのである。
死を泣いて悲しむのは、生者の為(ため)ではないのである。
徳、善行を常に行うのは、その善行によって給料を求めようとしている訳ではないのである。
言葉を必ず誠実にするのは、行動を正すためではないのである。
(真の)王者は、(天の神による)法を行(おこな)って、天の神による運命を待つだけなのである」

孟子、曰。
「説、大、人、則(すなわち)、藐(かろんじる)、之(これ)。
勿(なかれ)、視、其巍巍然(その大きさ)。
堂、高、数仞、榱題、数尺。
我、得、志、弗(ない)、為(なす)、也。
食、前、方丈、侍妾、数百人。
我、得、志、弗(ない)、為(なす)、也。
般楽(大いに遊び楽しむ)、飲酒、駆騁(馬を走らせ)、田猟(狩猟する)、後車、千乗。
我、得、志、弗(ない)、為(なす)、也。
在、彼、者(もの)、皆、我、所、不、為(なす)、也。
在、我、者、皆、古之制、也。
吾、何(どうして)、畏、彼、哉?」

孟子 先生は言った。

「偉人に説くのであれば、その偉人をあえて軽んじなさい。
その巍巍然とした偉大さを直視するなかれ。
家の高さが数仞であっても、たる木の先端の太さが数尺であっても。
自分が志を実行する好機を得ても、このような事はしないのだから。
目の前に一丈四方に食べ物が並べられても、侍女が数百人であっても。
自分が志を実行する好機を得ても、このような事はしないのだから。
大いに遊び楽しんでいても、飲酒していても、馬を走らせていても、狩猟をしていても、後続車が千台であっても。
自分が志を実行する好機を得ても、このような事はしないのだから。
偉人が所有しているものは皆、自分が所有しようとしないものなのである。
自分が所有しているものは皆、古代からの法なのである。
自分は、偉人など恐れない！」

孟子、曰。

「養、心、莫（ない）、善、於（よりも）、寡欲。
其（その）、為人（ひととなり）、也、寡欲、雖（いえども）、有、不、存、焉、者（もの）、寡、矣。
其（その）、為人（ひととなり）、也、多欲、雖（いえども）、有、存、焉、者（もの）、寡、矣」

孟子 先生は言った。

「心を修養するには、少欲が最も善いのである。
人となりが少欲であれば、所有していない(善い)物が有っても少ないのである。
人となりが貪欲であれば、所有している(善い)物が有っても少ないのである」

曾皙、嗜、羊棗。

而、曾子、不、忍、食、羊棗。

公孫丑、問、曰。

「膾(なますと、)炙(あぶり肉)、与(と)、羊棗、孰(どちらが)、美？」

孟子、曰。

「膾(なますと、)炙(あぶり肉)、哉」

公孫丑、曰。

「然、則(すなわち)、曾子、何為(どうして)、食、膾(なますと、)炙(あぶり肉)、而、不、食、羊棗？」

曰。

「膾(なますと、)炙(あぶり肉)、所、同、也。

羊棗、所、独、也。

諱(いむ)、名、不、諱(いむ)、姓、姓、所、同、也、名、所、独、也」

曾晳は羊棗を好んでいた。

そのため、曾子は羊棗を食べようとしても(悲しくて)忍耐できなかっ(たので食べる事ができなかっ)た。

公孫丑が孟子 先生に質問して言った。

「なますや、あぶり肉と、羊棗の、どちらが美味いでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「なますや、あぶり肉です」

公孫丑が言った。

「そうであるならば、曾子は、どうして、なますや、あぶり肉は食べる事ができて、羊棗は食べる事ができなかったのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「なますや、あぶり肉は、人々が皆、同じく好む物だからである。

羊棗は、独り、曾晳だけが好んでいた物だからである。

名前は避けるが、姓は避けないのは、姓は家族が皆、同じ物であるが、名前は独りだけの物だからである」

万章、問、曰。
「孔子、在、陳、曰。
『盍(どうして)、帰、乎、来？
吾(わが)党之士、狂、簡、進取(自発的に進んで取り組んでいく)。
不、忘、其(その)初』。
孔子、在、陳、何、思、魯之狂士？」

孟子、曰。
「孔子。
『不、得、中道、而、与(くみする)、之(これ)、必、也、狂、獧、乎。
狂、者、進取。
獧、者、有、所、不、為(なす)、也』。
孔子、豈(どうして)、不、欲、中道、哉？
不、可、必、得。
故、思、其(その)次、也」

「敢、問。
何如、斯(ここ)、可、謂、『狂』、矣？」

曰。
「如、琴張、曾晳、牧皮、者、孔子、之、所謂、『狂』、矣」
「何、以、謂、之、『狂』、也？」
曰。
「其志、嘐嘐然。
曰、『古之人。古之人』、夷考、其行、而、不、掩、焉、者、也。
狂者、又、不、可、得。
欲、得、不、屑、不潔、之、士、而、与、之。
是、『獧』、也。
是、又、其次、也。
孔子、曰。
『過、我門、而、不、入、我室、我、不、憾、焉、者、其、惟、郷原、
乎。
郷原、徳之賊、也』」
曰。
「何如、斯、可、謂、之、『郷原』、矣？」
曰。
「『何、以、是、嘐嘐、也？
言、不、顧、行。

行、不、顧、言。
則（すなわち）、曰。古之人。古之人。
行、何為（どうして）、踽踽（孤立している）、涼涼（よそよそしく他人に親しまない）？
生、斯世（この）、也、為（なす）、斯世（この）、也。
善、斯（ここ）、可、矣』。
閹然（本心を隠して）、媚、於、世、也、者（もの）、是（これ）、『郷原』、也」

万章、曰。
「一郷、皆、称、『原人』、焉、無（ない）、所、往、而、不、為（なる）、原人。
孔子、以、為（なす）、徳之賊、何、哉？」
曰。
「非（ひなんする）、之（これ）、無（ない）、挙、也、刺、之（これ）、無（ない）、刺、也。
同、乎、流俗（俗世の俗習）、合、乎、汚世。
居、之（これ）、似、忠信、行、之（これ）、似、廉潔。
衆、皆、悦、之（これ）、自（みずから）、以、為（なす）、是（ぜ）、而、不、可、与（ともに）、入、堯、舜之道。
故、曰。
『徳之賊、也』。
孔子、曰。
『悪（ぞうおする）、似、而、非、者（もの）。
悪（ぞうおする）、莠（雑草）、恐、其（その）、乱、苗、也。
悪（ぞうおする）、佞、恐、其（その）、乱、義、也。
悪（ぞうおする）、利口、恐、其（その）、乱、信、也。
悪（ぞうおする）、鄭声、恐、其（その）、乱、楽（がく）、也。

悪(ぞうおする)、紫、恐、其(その)、乱、朱、也。
悪(ぞうおする)、郷原、恐、其(その)、乱、徳、也』。
君子、反(かえる)、経(筋道)、而已(のみ)、矣。
経(筋)、正、則(すなわち)、庶民、興。
庶民、興、斯(ここ)、無(ない)、邪慝、矣」

万章が孟子 先生に質問して言った。
「孔子 先生は陳という国にいた時に言いました。
『帰ろうか！
私、孔子の仲間である一人前である者達は、熱狂的で、簡、大まかで、自発的に進んで取り組んでいく。
初心を忘れないのである』と。
孔子 先生は陳にいる時に、どうして、魯という国の熱狂的な一人前である者達の事について思ったのでしょうか？」

孟子 先生は言った。
「孔子 先生は言いました。
『両極端に偏(かたよ)らず正しい言行をする人を得て組めなかったら、必ず、(良い意味で)狂人的な人か、(良い意味で)頑固な人と組むであろう。
(良い意味で)狂人的な人は、自発的に進んで取り組んでいく。
(良い意味で)頑固な人は悪事をしない所が有る』と。
孔子 先生は、『両極端に偏(かたよ)らず正しい言行をする人』を欲(ほっ)していた！

しかし、『両極端に偏らず正しい言行をする人』は必ずしも得る事はできないのである。

そのため、(孔子 先生は、)その次の人達について、思ったのである」

(万章が言った。)

「あえて質問します。

どのようであれば、(良い意味で)狂人的な人と言えるのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「琴張や、曾皙や、牧皮のような者が、孔子 先生が言った、いわゆる、(良い意味で)狂人的な人である」

(万章が言った。)

「どうして、これらの者達を、(良い意味で)狂人的な人と言うのでしょうか?」

孟子 先生は言った。

「志が、嘐嘐然と大きいからである。

『古代人は。古代人は』と言うが、行動を公平に考えると、その言葉を履行できない者達だからである。

(良い意味で)狂人的な人もまた、必ずしも得る事はできないのである。

そのため、汚れたものを快く思わない一人前である者を得て、その者の味方をしたいと欲するのである。

これが、(良い意味で)頑固な人なのである。

この(良い意味で)頑固な人もまた、『両極端に偏(かたよ)らず正しい言行をする人』の次の人達なのである。

孔子 先生は言いました。

『私、孔子の門に入門して通り過ぎて、私、孔子の部屋に入室しない、私、孔子の奥義に入らないでも残念に思わない者どもは、郷原、郷愿、故郷の中などでの名声のために善人のふりをする矮小な者どもである。

郷原、郷愿、故郷の中などでの名声のために善人のふりをする矮小な者どもは、徳、善行に対する賊、盗人である』と」

　万章が言った。

「どのようであれば、『郷原』、『郷愿』、『故郷の中などでの名声のために善人のふりをする矮小な者ども』と言えるのでしょうか？」

　孟子 先生は言った。

「『(郷原、郷愿は、)どうして、嘐嘐と言う事は大きいのか？

言葉は、自分の行いを顧みていない。

行いも、自分の言葉を顧みていない。

古代人は。古代人は。と言う。

行動して、どうして、踽踽と孤立しているし、涼涼と、よそよそしく他人に親しまないのか？

この世に生まれたので、この世的な俗世的な行動を為(な)すのである。

良ければ、それで良いのである』と言われています。

闇然と本心を隠して、俗世の人々に媚びへつらう者が、『郷原』、『郷愿』、『故郷の中などでの名声のために善人のふりをする矮小な者ども』なのである」

万章が言った。

「一集落の人々が皆、『実直な人である』とほめるし、どの場所へ行っても、『実直な人』なのであろう。

孔子 先生は、どうして、『徳、善行に対する賊、盗人である』としたのでしょうか？」

孟子 先生は言った。

「非難しようにも、挙げるべき隙(すき)が無いからである。

俗世の俗習に賛同するし、汚れた俗世に合流するからである。

誠実さに似て非なる物に留まり、清廉潔白に似て非なる事を行うからである。

大衆は皆、喜んでしまい、自身も『自分は正しい』と見なしてしまうが、共に堯と、舜の道理、真理に入る事はできないのである。

そのため、孔子 先生は言いました。

『徳、善行に対する賊、盗人である』と。

さらに、孔子 先生は言いました。

『似て非なる者どもを憎悪する。

苗を乱すのを恐れて、雑草を憎悪する。

正義を乱すのを恐れて、口先だけの者どもを憎悪する。

誠実さを乱すのを恐れて、(悪い意味で)利口な者どもを憎悪する。

正しい音楽を乱すのを恐れて、鄭という国の音楽を憎悪する。

国の公式であった朱色の地位を乱すのを恐れて、国の公式ではない紫色を憎悪する。

徳、善行、善を乱すのを恐れて、郷原、郷愿、故郷の中などでの名声のために善人のふりをする矮小な者どもを憎悪する』と。

王者は、道である正義に筋を通して帰るだけなのである。

筋を通して正せば、人々は立ち上がってくれるのである。

人々が立ち上がってくれれば、そこに邪悪な者どもはいなく成るのである」

孟子、曰。

「由(より)、堯、舜、至、於、湯(＝湯王)、五百有余歳。

若(のよう)、禹、皐陶、則(すなわち)、見(みる)、而、知、之(これ)。

若(のよう)、湯(＝湯王)、則(すなわち)、聞、而、知、之(これ)。

由(より)、湯(＝湯王)、至、於、文王、五百有余歳。

若(のよう)、伊尹、莱朱、則(すなわち)、見(みる)、而、知、之(これ)。

若(のよう)、文王、則(すなわち)、聞、而、知、之(これ)。

由(より)、文王、至、於、孔子、五百有余歳。

若(のよう)、太公望、散宜生、則(すなわち)、見(みる)、而、知、之(これ)。

若(のよう)、孔子、則(すなわち)、聞、而、知、之(これ)。

由(より)、孔子、而来、至、於、今、百有余歳。

去、聖人、之(の)、世、若此(このよう)、其(それ)、未、遠、也。

近、聖人之居、若此(このよう)、其(それ)、甚、也。

然、而、無(ない)、有、乎、爾、則(すなわち)、亦(また)、無(ない)、有、乎、爾」

孟子 先生は言った。

「堯や、舜から、殷の湯王に至るまで、五百年余りなのである。

禹や、皐陶のような者達は、(堯や、舜を直接的に)見て知っていたのである。

殷の湯王のような者達は、(堯や、舜について間接的に)聞いて知ったのである。

殷の湯王から、周王朝の文王に至るまで、五百年余りなのである。

伊尹や、莱朱のような者達は、(殷の湯王を直接的に)見て知っていたのである。

周王朝の文王のような者達は、(殷の湯王について間接的に)聞いて知ったのである。

周王朝の文王から、孔子 先生に至るまで、五百年余りなのである。

太公望や、散宜生のような者達は、(周王朝の文王を直接的に)見て知っていたのである。

孔子 先生のような者達は、(周王朝の文王について間接的に)聞いて知ったのである。

孔子 先生から、今に至るまで、百年余りなのである。

聖人が、この世を去ってしまってから、このように、未だ遠い時代ではないのである。

聖人がいた場所は、このように、とても近いのである。

しかし、実際に有った事が『無かった』とされてしまえば、聖人の考えの復活もまた無くなってしまうのである」